



財団法人米子市教育文化事業団
文化財調査報告書 25

ME GU MI 目久美遺跡

V・VI

—都市計画道路車尾目久美町線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1998.3

財団法人 米子市教育文化事業団
米子市公園街路課

(財)米子市教育文化事業団文化財調査報告書 25『日久美遺跡V・VI』正誤表

頁	行	誤	正
6	34	cには	aには
20	7	外形接合	外傾接合
37	6	二枚貝復縁	二枚貝腹縁
42	18	胴部画面	胴部外面
96	10	越堤よる	越堤による
161	25	10) 9同じ	10) 9に同じ
図版 11	7	SD - 04 内土器 (W 9) 出土出状況 (東から)	7 SD - 07 内土器 (154) 出土状況 (東から)
	8	SD - 04 内土器 (154) 出土状況 (東から)	8 SD - 04 内木製品 (W 9) 出土状況 (東から)
図版 13	1	SD - 03 内足跡検出状況 (東から)	1 SD - 03 内足跡完掘状況 (東から)

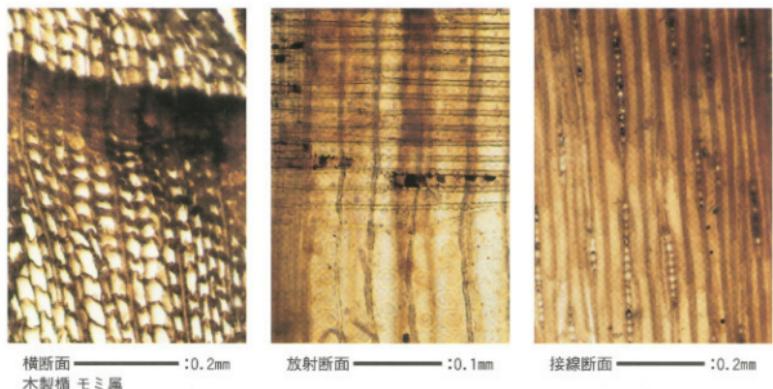


1. 目久美遺跡第6次調査出土木製櫛 (S=1:4)

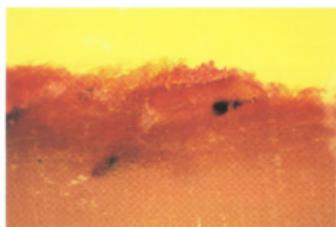


2. 木製櫛出土状況

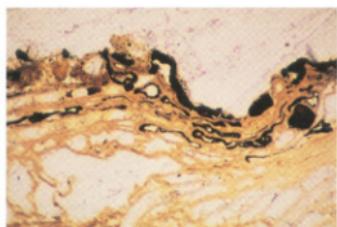
巻頭図版 2



1. 目久美遺跡第6次調査出土木製櫃の顕微鏡写真



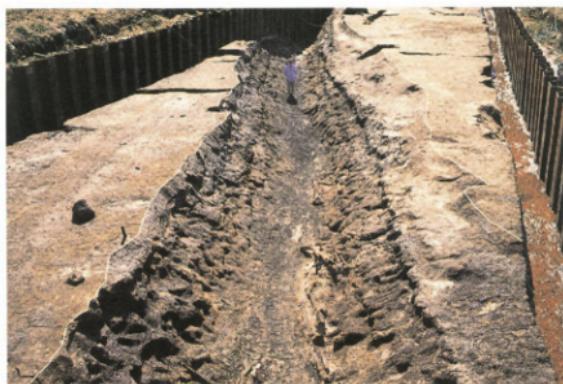
2. 木製櫃赤色顔料



3. 木製櫃黒色顔料



4. 木製櫃拡大写真



1. SD-04 (北東から)



2. SD-04 土層断面
(南西から)

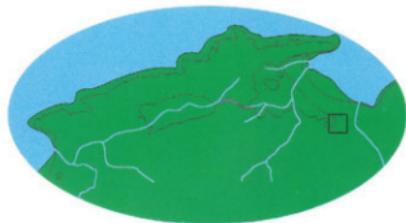


3. 弥生時代の堆積

巻頭図版 4

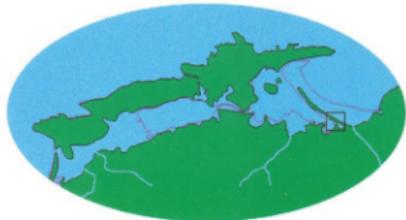
10000年前（縄文時代草創期）

この頃の気候は現在より涼涼で、日久美遺跡周辺の山地には冷温帯林が形成されていた。海面は現在より30~40m低い高さにあり、海岸線はずっと沖側にあった。その後、海面が上昇し、8300年前頃に日久美遺跡付近は内湾に変化していった。



6300年前（縄文時代早期）

この頃から5000年前頃にかけては世界的な温暖期で、海域が最も拡大していた。日久美遺跡付近には温暖な内湾が存在していた。この内湾は、内海から宍道湖、出雲平野にかけて続く大きな内湾の一部だった。

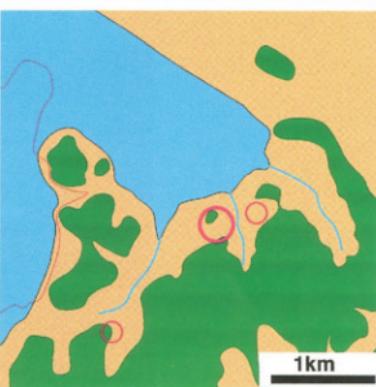
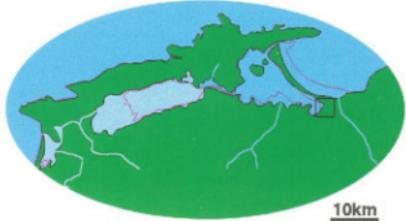


2300年前（弥生時代）

堆積作用によって沖積低地が拡大していった。

弥生時代前期になると日久美遺跡付近の沖積低地では水田が作られ、稲作が行われていた。

日野川や法勝寺川が大増水すると、洪水流が丘陵鞍部を乗り越えて日久美遺跡側へ流出し、水田はしばしば土砂に覆われた。



中海宍道湖地域および日久美遺跡周辺の古地理の変遷（第5章第1部参照）

序

米子市は、古来より山陰の商都と称される鳥取県西部地域の中核都市です。北は日本海に面し、背後には秀峰大山を控える自然環境にも恵まれ、今後さらなる発展が期待されています。近年は環日本海交流が提唱される中、米子市では道路等、交通網の整備が急速に進められ、これに伴う埋蔵文化財の発掘調査によって、この地域の歴史を考えるうえで重要な遺跡が数多く発見されています。

米子市目久美町に所在する目久美遺跡は、昭和8年、新加茂川開削工事中に発見された遺跡で、山陰地方を代表する縄文、弥生時代の低湿地遺跡あります。また、これまでの調査で、弥生時代の水田跡等、貴重な資料が多数確認されており、山陰地方における初期農耕文化を物語る遺跡として知られています。

当事業団では、この度、都市計画道路車尾目久美町線改良工事に伴い、平成8年度から平成9年にかけて目久美遺跡の発掘調査を行ってまいりました。調査の結果、弥生時代の水路や水田跡等が確認されました。さらに下層には貝層が厚く堆積しており、かつてこの地が海であったことが窺われ、考古学的資料のみならず、古代の自然環境を知るうえでも貴重な資料を提供するものと考えられます。

本発掘調査の成果が、今後の調査研究および教育のために広く活用され、一般の方々に埋蔵文化財に対する理解、関心を高めていただくうえの一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査に際し多大なご理解とご協力をいただきました地元の方々をはじめ、ご指導、ご支援を賜りました方々、関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

平成10年（1998年）3月

財團法人 米子市教育文化事業団

理事長 森田 隆朝

例　　言

1. 本報告書は、都市計画道路車尾目久美町線道路改良工事に伴い、平成8年から9年にかけて、米子市目久美町内で実施した、埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 本発掘調査は、財団法人米子市教育文化事業団が実施した。
3. 発掘調査は年次で区別し、平成8年度を第5次調査、平成9年度を第6次調査とする。
4. 本発掘調査の実施にあたっては、鳥根大学徳岡隆夫先生、同中山勝博先生、同高安克己先生、中村唯史氏、渡辺正巳氏、藤原真由美氏から現地で地質学的な指導をしていただいた。鳥根大学田中義昭先生、同竹広文明氏、同会下和宏氏には遺構、遺物について現地指導をしていただいた。鳥取大学井上貴央先生には出土した動物遺存体についての指導、石製品の石材鑑定をお願いし、多くの御教示をいただいた。また、徳岡隆夫先生、中山勝博先生、中村唯史氏、藤原真由美氏には、報告書にご寄稿いただいた。各先生方に深甚の謝意を表します。
5. 発掘調査によって作成された記録および出土遺物は、米子市教育委員会が保管している。
6. 本報告書の執筆は分担して行い、執筆担当者は目次に記した。また、調査員の協議に基づき、濱田がとりまとめを行った。
7. 発掘調査から報告書作成にいたるまで多くの方々からのご指導、ご助言、ご支援をいただいた。明記して、感謝いたします。(敬称略)
赤沢秀則 井上貴央 岩崎仁志 会下和宏 須崎由 岡崎正雄 角田徳幸 河瀬正利 三瓶良和 杉村和祐
杉本良巳 高安克己 竹広文明 田中弘道 田中義昭 谷口恭子 徳岡隆夫 中川寧 中村健二 中村唯史
中山勝博 横鈴輝雄 平川誠 藤原真由美 松木武彦 吉留秀敏 渡辺正巳
岡山県立古代吉備文化財センター 岡山市教育委員会 鳥根県埋蔵文化財調査センター 広島県埋蔵文化財センター
福岡市埋蔵文化財センター 山口県埋蔵文化財センター 鳥取県教育委員会 鳥取県埋蔵文化財センター
米子市史編さん事務局 米子市教育委員会

凡　　例

1. 本報告書における方位、座標値は、国土座標第V系の座標値である。
2. 遺物実測図のうち、須恵器は断面黒塗り、それ以外は断面白抜きで示した。
3. 本文中、挿図および写真図版中の遺物番号は一致する。
4. 遺物番号は、第5次調査(第3章)、第6次調査(第4章)ごとに、それぞれ通し番号を使用した。
5. 挿図番号は、第1章～第4章までを通し番号とし、第5章については各節ごとに挿図番号をあらためた。
6. 土器、木器、石器については、本文中での詳述をさけ、観察表を掲載した。
土器については、目久美遺跡の主体となる繩文、弥生土器について所見を記し、古墳時代以降の土器については割愛した。
7. 年度により調査員が異なるため、層序の観察や遺構面の捉え方に一部不整合が生じた。この点については、第6次調査で得た知見から、第5次調査との整合性を検討した。報告書中では、両調査の整合性に留意した。しかし、層序の観察については、無理な改変は矛盾を生むため、第3章第2節調査区内の堆積においては調査時の所見を重視して事実報告を行う。そのため、両調査間で層位名のつけかたが異なる場合もあるが、第4章第2節に対応関係を記した。

目 次

序

例言

凡例

目次

第1章 発掘調査の経緯	演田	1
第1節 発掘調査に至る経緯		1
第2節 調査の組織		1
第2章 目久美遺跡の位置と歴史的環境		3
第1節 目久美遺跡の位置	演田	3
第2節 目久美遺跡の歴史的環境		3
1. 原始・古代の目久美	演田	3
2. 中世以降の目久美	佐伯	4
第3節 目久美遺跡調査略史	演田	6
第3章 目久美遺跡第5次調査		13
第1節 調査の経過と方法	平木	13
第2節 調査区内の堆積	平木	13
第3節 弥生時代前期（第4遺構面）の調査		18
1. 概要	平木	18
2. 遺構と遺物	平木	18
3. 遺構外出土の遺物	演田	19
第4節 弥生時代後期（第3遺構面）の調査		35
1. 概要	平木	35
2. 遺構と遺物	平木 演田	35
3. 遺構外出土の遺物	演田	37
第5節 古墳時代～奈良時代（第2遺構面）の調査		37
1. 概要	平木	37
2. 遺構と遺物	平木	37
3. 遺構外出土の遺物	演田	42
第6節 中・近世（第1遺構面）の調査		50
1. 概要	平木	50
2. 遺構と遺物	平木	50
3. 遺構外出土の遺物	演田	52
第5次調査遺物観察表・一覧表		
第4章 目久美遺跡第6次調査		67

第1節 調査の経過と方法	演田	67
第2節 調査区内の堆積	演田	67
第3節 縄文時代の調査	演田	73
1. 概要		73
2. 第14層出土の遺物		73
第4節 弥生時代前期の調査	演田	76
1. 概要		76
2. 包含層出土の遺物		76
第5節 弥生時代中期（第4造構面）～弥生時代後期（第3造構面）の調査	演田	83
1. 概要		83
2. 弥生時代中期（第4造構面）の遺構と遺物		83
3. 弥生時代後期（第3造構面）の遺構と遺物		83
4. 遺構外出土の遺物		96
第6節 古墳時代～奈良時代（第2造構面）の調査	佐伯	101
1. 概要		101
2. 遺構と遺物		101
3. 遺構外出土の遺物		104
第7節 中・近世（第1造構面）の調査		104
1. 概要	演田	104
2. 遺構と遺物	佐伯	106
3. 遺構外出土の遺物	演田	106
第8節 小結	演田	113
第9節 目久美遺跡第6次調査におけるプラント・オパール分析	株式会社 古環境研究所	114
第10節 目久美遺跡第6次調査における種実同定	株式会社 古環境研究所	120
第11節 目久美遺跡第6次調査出土木製櫛の樹種同定	株式会社 古環境研究所	121
第12節 目久美遺跡第6次調査出土木製櫛の塗装技術について	株式会社 吉田生物研究所	122
第6次調査遺物観察表・一覧表		

第5章 考察

第1節 目久美遺跡の地質学的検討	徳岡隆夫・中村唯史・藤原真由美	131
第2節 米子市目久美遺跡にみられる弥生時代の堆積物の堆積環境	中山勝博	151
第3節 目久美遺跡における縄文時代晩期末から弥生時代前期の土器について—県内資料との比較から—		
	演田	153

おわりに

写真図版

報告書抄録

第1章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至る経緯

本発掘調査は、米子市により進められている都市計画道路車尾久美町線道路改良工事事業に伴う、米子市目久美町内における工事予定地内に所在する埋蔵文化財の保護を目的としたものである。目久美遺跡は周知の遺跡として広く知られる遺跡であり、同事業における埋蔵文化財の保護と事業計画の調整については、関係機関で協議されてきた。

今回の発掘調査地についても、埋蔵文化財の存在が十分に推定され、米子市教育委員会による事前の試掘調査が実施され、埋蔵文化財の存在が確認されたものである¹⁾。これを受け、米子市公園街路課は米子市教育委員会と協議し、発掘調査を財団法人米子市教育文化事業団に委託した。これにより米子市教育文化事業団埋蔵文化財調査室が調査を実施することとなった。

これまで、目久美遺跡については、米子市教育委員会による第1・2次調査、米子市教育文化事業団による第3・4次調査が行われており、今回の調査は第5次、第6次調査に相当し、調査は2ヶ年に分けて実施された。第5次調査は平成8年9月に着手し、平成9年2月に現地調査を終了した。第6次調査は平成9年4月に着手し、同年11月に現地調査を終了した。さらに平成10年3月まで第5次・6次調査の整理、まとめを行った。（濱田）

第2節 調査の組織

発掘調査は、下記の体制で行われた。

●平成8年度

調査主体 財団法人米子市教育文化事業団

理 事 長 森田 隆朝（米子市長）

埋蔵文化財調査室

室 長 戸田 文夫（米子市教育委員会教育文化課長）

次 長 松本 喬

調査担当 調査員 平木 裕子

高橋 浩樹

臨時職員 福鶴昌子、篠田明子、森田静香、高橋真由美、森井あづさ

調査協力 米子市教育委員会

●平成9年度調査体制

調査主体 財団法人米子市教育文化事業団

理 事 長 森田 隆朝（米子市長）

埋蔵文化財調査室

室 長 戸田 文夫（米子市教育委員会教育文化課長）

次 長 深田 政幸

調査担当 調査員 濱田 竜彦（鳥取県埋蔵文化財センター文化財主事）

佐伯 純也

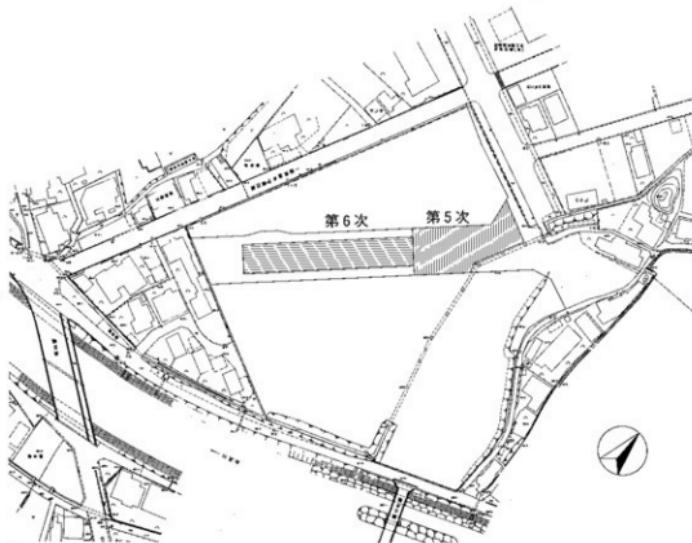
臨時職員 福鶴昌子、篠田明子、森田静香、高橋真由美、森井あづさ

調査協力 米子市教育委員会

*下記の方々が発掘調査作業、整理作業に従事した。

生田 充、池田和雅、池原啓志、石原廣和、伊田美紀、井上卓彦、入沢美智子、岩指 澄、梅林明子、遠崎礼子、
大江由美子、大江 怜、大下醇子、小川敬也、加川 都、健山貴光、加藤カホル、加藤正子、河村富士江、
吉川尚伸、木村達子、金山勢津子、小林美恵子、近藤智子、酒井 努、佐藤省三、佐藤徳子、柴田英理奈、
島本美奈子、下高満智子、地頭昭夫、陶山富子、仙田雄二、高木正之、高塚敬子、高橋真由美、竹中光世、
寺西 保、徳中繁野、徳中静枝、虎夫一明、仲田いづみ、西 淳夫、中森貴子、西山和郎、野口 稔、野津正連、
乗本重子、乗本年子、乗本八重子、長谷川節子、濱田博美、原 満留、平野昭子、福田 淳、藤原真由美、
古川節子、繼田恵美、前田光江、松岡吉雄、三浦郁子、宮田紀子、棕田喬生、森安 嘉、諸田美智恵、矢野早苗、
山根啓子、渡辺安子

註 1) 米子市教育委員会 1996 『米子市内遺跡発掘調査報告書』



第1図 目久美遺跡第5次・第6次調査地点

第2章 目久美遺跡の位置と歴史的環境

第1節 目久美遺跡の位置（第2・3図）

目久美遺跡は本州の西側、中国地方北東部に位置する鳥取県米子市目久美町に所在する縄文時代～近世にかけての複合遺跡である（第2図）。米子市は総面積99.46km²、人口約13万人を有する鳥取県西部の中核都市であり、古代の行政区分においては、西伯耆の会見郡、汎入郡に属す地域であった。

市北部を流れる日野川からの流出土砂による砂州・弓浜半島が発達することで形成された汽水湖・中海に面し、背後には秀峰大山をひかえ、豊かな自然環境に恵まれた町である。一方、古くから「山陰の商都」と称されてきたが、近年は、環日本海交流の推進が提唱されるなか、空港、港湾、道路等の交通網整備が急速に進められ、さらなる発展が期待されている。

目久美遺跡は、JR米子駅の南東側、市街地の南端に位置している（第3図）。古くより目久美町周辺では、丘陵裾部に小集落が形成されてきたが、駅裏という立地から、あまり市街化しておらず、低地部は水田が広がっていた。しかし、近年は、宅地化の波が徐々に押し寄せ、かつての景観は失われつつある。（濱田）

第2節 目久美遺跡の歴史的環境（第2・3・4図）

1. 原始・古代の目久美

目久美地区では、河川改修、下水道工事、交通網の整備等の開発に伴い、これまでに数次にわたる遺跡調査が実施してきた。その結果、行者山山塊北側の山裾、およびそこから派生する低丘陵や、独立小丘陵・足尾山に囲まれた範囲に遺跡が広がっているものと推測される。また、目久美周辺の地域でも、近年、急増する開発に伴い、各時代の様々な性格の遺跡が調査され、それにより、この地域の歴史を解明する上で貴重な資料が蓄積されできている。

かつて中海は、現米子市街地の奥深くまで入り込んでいた時期があり、縄文海進がピークに向かえた縄文時代前期には、米子の中海沿岸部には、目久美遺跡・陰田第9遺跡などに集落が営まれていたものと考えられる。中海沿岸地域は、山陰地方屈指の縄文遺跡の密集地であり、目久美遺跡もこの一角に位置づけられる。

中海周辺の縄文遺跡の分布は、境水道周辺・中海南東岸・中海南西および宍道湖東岸の3地域に集中する。さらに大きくみると立地環境により二分することができる。境水道周辺の遺跡は、サルガ鼻洞窟遺跡（前期～晚期）、権現山洞窟遺跡（後期～晚期）、小浜洞窟遺跡（後期～晚期）などのように海蝕洞窟や岩陰に立地することが特徴である。また、北灘遺跡（後期）、東灘遺跡（前期～晚期）、福浦海底遺跡などの海底遺跡も認められる。一方、中海南東岸・中海南西および宍道湖東岸の遺跡は、低湿地遺跡が多数を占める。代表的な遺跡に、目久美遺跡（早期末・前期初頭～晚期）、陰田第9遺跡（前期）、陰田第7遺跡（前期～中期）、タテチョウ遺跡（早期～前期・後期～晚期）、西川津遺跡（前期・後期～晚期）などがある。また、佐田講武遺跡（前期～中期）は



第2図 目久美遺跡の位置

山陰を代表する貝塚遺跡である。

中海周辺に立地する繩文遺跡の特徴は、早期末・前期に集落の形成が始まり、継続的に営まれた遺跡が多いことである。当該地域が、いりくんだ穏やかな内湾と背後の接する山地がもたらす豊富な資源を背景に、比較的安定した環境下にあったことが窺われる。当該地域の低湿地遺跡では、多量の動植物遺体が出土しており、当時の生活環境が偲ばれる。

繩文時代終末から弥生時代前期頃には、目久美遺跡周辺では、沖積が進む。水位の低下に伴い低湿地が形成されたころ、稻作を伴う新來文化が山陰地方にも波及する。目久美遺跡では、弥生時代前期の堆積層からブラントオバールや種科花粉が検出されており、比較的早い段階から、水稻耕作が行われていたことが判る。米子平野では、長砂第1・2遺跡、錦町第1遺跡、勝田人新場遺跡、米子城跡5でも当該期の土器が出土しており、現米子市街周辺に広がっていた低湿地をとりまくように弥生時代前期の集落が点在していたものと推測される。

日久美遺跡で、排水施設や畦畔による区画が確認できる水田遺構が検出されるのは弥生時代中期になってからである。最も広範囲に水田遺構が調査された第1次調査では、3面の水田面が検出され、それぞれ（弥生時代前期？～）中期中葉・中期中葉～中期後葉・中期後葉～中期末と把握されている。

しかし、弥生時代後期になると出土する遺物量がそれ以前と比べ減少する。第1次調査、今回の第5次・6次調査で一連のものと推測される大規模な水路が検出された。いずれも全て粗砂で埋没していた。粗砂中の遺物から遺構の埋没時期は弥生時代後期中葉～後葉と推定され、大規模な洪水災害にみまわれたものと思われる。そして、これ以後、しばらくの間、積極的な土地利用は認められない。

当該地域では、弥生時代中期になると周辺の丘陵部に新たな集落が出現するようになる。弥生時代後期になつても遺跡の分布は拡大するが、前期・中期から後期へ継続する遺跡は少なく、集落立地は丘陵上へと移行する傾向がある。また、これらは古墳時代へと継続することが多いようである。目久美遺跡では、弥生時代後期以降、土地利用が消極的になるが、隣接する池ノ内遺跡では弥生時代後期から古墳時代前期にかけて水田が検出されており、目久美遺跡から池ノ内遺跡への移行が窺われる。

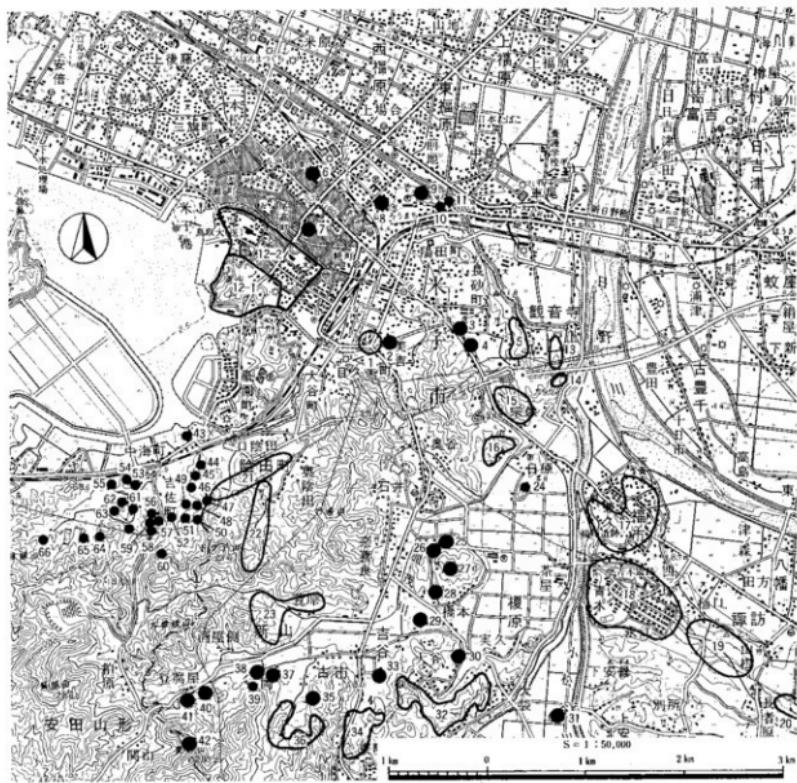
目久美遺跡の所在する中海沿岸地域は、古代において半生郷の推定域に相当する。当該地域における古墳時代～奈良時代にかけての遺跡は、陰田地域、目久美地域、長砂地域の3地域にまとまって分布している。いずれも3方を山に囲まれ、北側には渥潤な小平野が広がるという地形を呈す。

陰田地域では、古墳時代、丘陵部および斜面部に集落が形成され、60基以上の古墳が確認されている陰田古墳群、約50基におよぶ陰田横穴墓群が築かれる。さらに、律令期には、官衙的要素の強い集落へと変遷していく。口陰田から奥陰田地域の各遺跡で出土する多量の鉄滓、陰田子大田遺跡で出土している「鎧」と記された墨書き資料、陰田第6遺跡の石敷道路などは官衙的要素を裏付けている。長砂地域では、小平野部や通称・水道山から北西に延びる丘陵西斜面に分布する長砂遺跡群、谷奥には東宗像遺跡、東宗像古墳群、宗像古墳群がある。一方、目久美地域では、池の内遺跡で、古墳時代前期の水田が検出されている以外は、他の2地域に比べ遺跡の分布は希薄で、古墳などが顕在化する遺跡も現状では確認されていない。目久美周辺は、池ノ内の名が示すように低湿地であることから、当該期の遺跡も現水田下や山裾に広がる住宅地下に埋没している可能性は高い。（濱田）

2. 中世以降の目久美

中世の目久美については不明な点が多く、その実態はよく分かっていない。しかしながら、第4次調査では、山陰でも珍しい石鍋が出土し、他にも当該期の遺物が出土している。

伯耆の動向としては、元弘3年（1333年）、隠岐を脱出した後醍醐天皇を奉上して幕府軍と戦った土豪名和長年の船上山合戦以降、守護職を任じられた山名一族が山陰地方を代々支配することになる。そして、応仁元年（1467年）、京都で応仁の乱がおこると、東軍・西軍の争いは山陰にも飛び火し、出雲・伯耆の国境付近では、しばしば東西勢力が衝突した。その後、伯耆の地は、勢力を急速に拡大した尼子氏の支配下におかれ、さらには、毛利氏の山陰進出に伴い毛利・尼子による霸権争いが行われる。



第3図 周辺遺跡分布図

1. 目久美遺跡
2. 池ノ内遺跡
3. 長砂第1遺跡
4. 長砂第2遺跡
5. 長砂古墳群
6. 錦町第1遺跡
7. 四日市町遺跡
8. 勝田山横穴墓群
9. 勝田遺跡
10. 勝田人斬り場遺跡
11. 勝田土手遺跡
- 12-1. 史跡米子城
- 12-2. 米子城外郭
13. 観音寺古墳群
14. 大塔山横穴墓群
15. 東宗像古墳群
16. 宗像古墳群
17. 福市遺跡
18. 青木遺跡
19. 諏訪遺跡群
20. 長者原古墳群
21. 陰田遺跡群
22. 奥陰田遺跡群
23. 新山遺跡群
24. 日原6号墳
25. 奈喜良遺跡
26. 奈喜良1・2号墳
27. 橋本要害
28. 橋本遺跡
29. 古谷遺跡
30. 榎原第1遺跡
31. 大袋丸山遺跡
32. 境古墳群
33. 吉谷トコ遺跡
34. 吉谷古墳群
35. 古市横穴墓群
36. 古市古墳群
37. 新山類ノ下遺跡
38. 新山岡遺跡
39. 新山26号墳
40. 新山狩遺跡
41. 新山大谷原遺跡
42. 新山要害
43. 八幡山古墳群
44. 国吉山古墳群
45. 吉佐古墳
46. 六ノ坪遺跡
47. 国吉遺跡
48. カンボウ遺跡
49. 神代塚古墳
50. 神宝古墳群
51. さき貝姫古墳
52. 石田遺跡
53. 八幡山古墳群
54. 河原崎古墳群
55. 茶屋畠遺跡
56. 四方神遺跡
57. 油田・平古墳群
58. 平ラⅡ遺跡
59. 平横穴墓群
60. 平ラⅠ遺跡
61. 塚根山横穴墓群
62. 崇横穴
63. 屋敷庵寺
64. 山ノ神遺跡
65. 德津見遺跡
66. 目廻遺跡

結果、山陰地方支配は毛利氏により掌握され、天正19年（1591年）に吉川広家が西伯耆の領主となり、山陰地方の戦乱も沈静化した。関ヶ原の合戦後は、中村一忠（1600年）、加藤貞泰（1610年）が領主をつとめ、元和3年（1617年）以降、鳥取藩主池田氏の家臣の荒尾氏が代々この地を治めた。

近世、米子は鳥取藩の領地として家臣の荒尾氏が自分手政治を行ない、米子城は一国一城令発令後も存続を許された。近世の目久美は、米子の豪商・大寺屋（船越家）による開墾がなされ、この一帯（南は目久美神社下から北は勝田町まで、西は大工町、日野町、道笑町、糀町の町裏から、東は長砂、陽田の地域までの六十一町歩）には水田が広がっていたものと考えられる。このような新田開発は、尼子氏滅亡直後から活発で、富田流と呼ばれる浪人が出雲・伯耆各地に散らばり、空閑地の開発を行なっている。これらの開墾を行なった者を富田屋と通称し、あるいは出身地の名で呼んだといい、大寺屋の屋号も大寺村（現岸本町）からの移住によるものである。また異伝には、「伯耆志」に伊予の浪人、長井氏が目久美に来て開墾し、一村おおいに服わうとある。

明治維新以降も目久美一帯は広い水田地帯であった。土地利用の状況は「鳥取県米子市美吉地図」に詳しい。この地図によると、調査地には水田が多く見られ、住居は山沿いに集中している。付近の字名には溝尻、古堤、渡田など、水に関係するものが見られる。また1947（昭和22）年撮影の空中写真には、字天場と目久美神社の鎮座する足尾山の東に小丘陵がみられ、山の尾根筋が調査地一帯を開むように伸びていた状況を示している。おそらく調査地の字名「輪ノ内」は、周囲を山で囲まれた狭小な地勢に由来するのではないかと考えられる。

目久美町の名称は、1935（昭和10）年からの町名で、もとは米子市美吉の一部であった。これについては「往時目久美と称せし地にて現に目久美神社ある地なるが為め目久美町と為したり」とあり¹⁾、目久美的名が以前より使われていたことを示している。目久美という地名は、江戸期～明治10年の村名で、江戸期には目組村、目角村と書いていたようである。1877（明治10）年には、目組村と上飯生村、下飯村が合併し、美吉村となった。

1933年には、洪水対策として長砂から市内へ流れる加茂川を西に分流して、美吉・目久美地区を横断して中海に流す、全長2.2キロメートルに及ぶ新加茂川の開削が行なわれた。この工事中に土器が採集され、目久美遺跡発見の契機となつた。

戦後には、国鉄職員の教育を目的として、米子鉄道学園がこの地に開かれ、JRへ移管するまで鉄道の町・米子を象徴する施設となつた。この校地建設にあたって、その東側に所在した小丘が削平され、残土は学校敷地の埋め立てに使用された。今回の調査地点は、このグラウンド跡地にあたる。

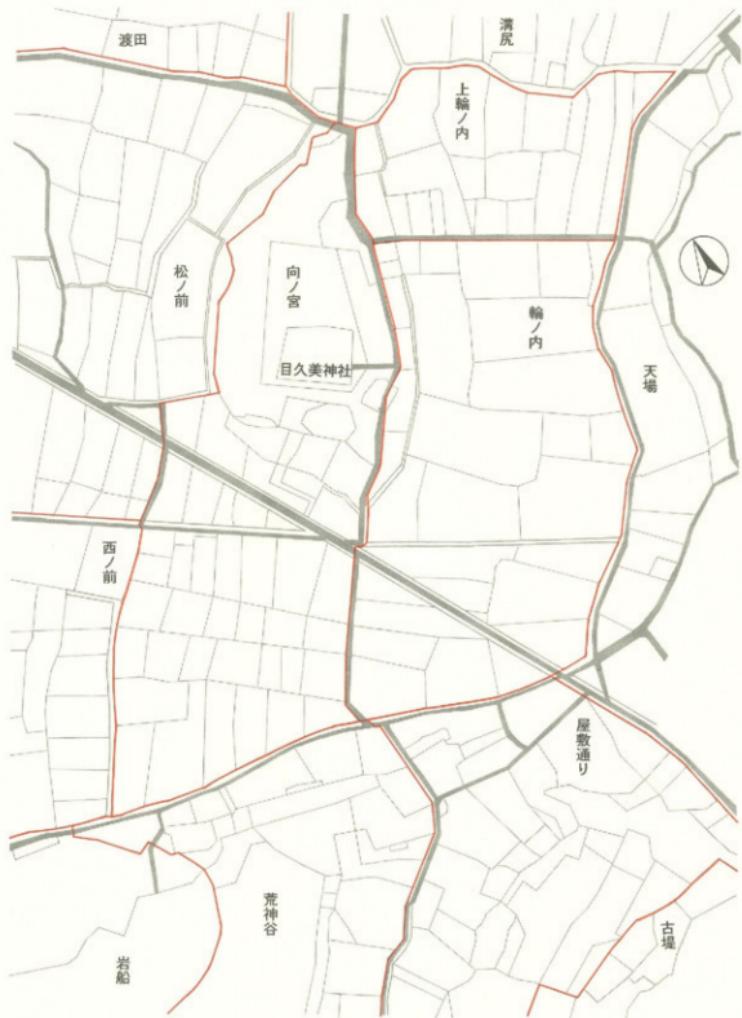
（佐伯）

第3節 目久美遺跡調査歴史（第5・6図）

目久美遺跡は1933（昭和8）年に行なわれた新加茂川開削時に地元の清水安造氏によって発見された遺跡である。第6図の弥生土器は、1933（昭和8）年3月に清水氏により採集され、目久美遺跡発見の契機となつた遺物である。aは「目組区新加茂川」、cには「目組地内○○・・」と記されており、これらが目久美遺跡出土であることを伝える。この2点については、佐々木1955において図化されているもので、目久美遺跡の調査史を語るうえで、重要な遺物である。一方、bには「成美村池内」と記されており、これは池ノ内遺跡出土のようである。この3点の弥生土器は、福市考古資料館に収蔵されていたものであるが、本来は山陰歴史館が所蔵していたものである。しかし、「出土品の多くは、就将小学校、山陰歴史館等にあって戦中戦後の混亂に行方を失っている」とある〔佐々木1955〕。また、cには「十七ヶ内」との記述があり、本来17点が採集ないし収蔵されていたものと思われる。

翌1934（昭和9）年には、京都大学教授・梅原末治氏によって早々に発掘調査が行われ、以後、山陰地方を代表する縄文・弥生時代の遺跡として広く知られてきた。調査の具体的な内容は不明であるが、京都大学博物館の所蔵品の中に、梅原氏採集とされる縄文晩期土器、弥生前期土器²⁾が散見できる〔横山・佐原1960〕。

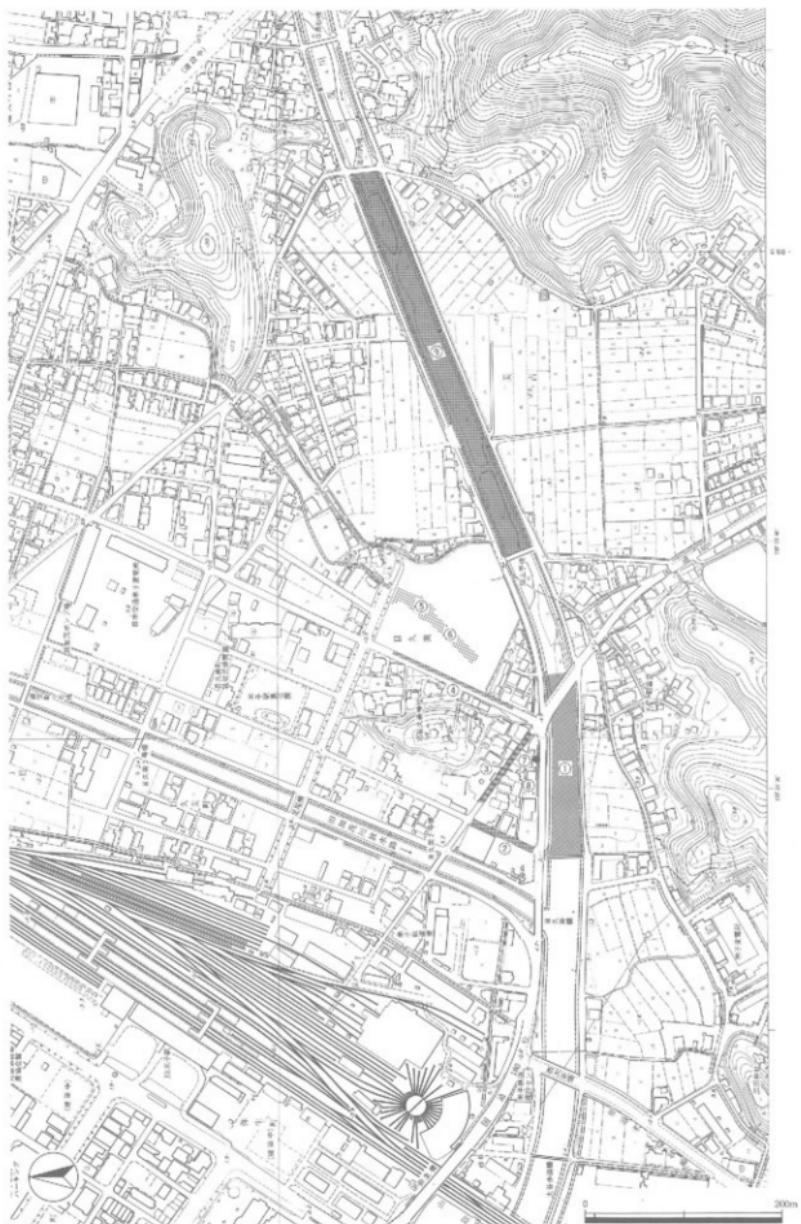
1953（昭和28）年、県道（現国道180号線）の路線変更と拡張工事の際、佐々木古代文化研究室により新加茂川右岸の一部が調査された〔佐々木1995〕。その結果、縄文時代前期の土器、弥生時代前期、中期の土器、石器、



第4図 目久美地区の小字（鳥取県米子市美吉地図を一部改変）

木器が多数出土した。そして、なにより、この調査によって遺跡の基本的な順序が明らかにされたことの意義は大きい。

1972（昭和47）年には、国道9号線米子バイパス建設に伴う遺跡分布調査が、鳥取県教育委員会によって実施された〔鳥取県教委1973〕。目久美遺跡、池ノ内遺跡の試掘調査が行われた結果、遺跡の重要性があらためて注



第5図 目久美遺跡発掘調査地点

NO	調査年度	発掘調査	調査に関する文献
7	1934	梅原氏による発掘調査	横山・佐原篇 1960 『京都大学文学部博物館考古学資料目録第1部日本先史時代』 京都大学文学部
8	1953	佐々木古代文化研究室による発掘調査	佐々木 謙 1955 『日久美』 佐々木古代文化研究室
-	1972	9号バイパスに伴う発掘調査	鳥取県教育委員会 1993 『国道9号線米子バイパスに伴う埋蔵文化財分布調査報告書』
-	1973	新加茂川放水路計画に伴う発掘調査	鳥取県遺跡調査会 1974 『中小河川加茂川放水路改修に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』
1	1982	日久美遺跡第1次調査	小原貴樹ほか 1986 『日久美遺跡』 米子市教育委員会
9	1984	池ノ内遺跡発掘調査	小原貴樹ほか 1986 『池ノ内遺跡』 米子市教育委員会
2	1988	日久美遺跡第2次調査	米子市教育委員会 1988 『米子市下水道祇園第一感染工事に伴う発掘調査報告書 日久美遺跡』
3	1992	日久美遺跡第3次調査	米子市教育文化事業団 1992 『日久美遺跡 下水道日久美町内枝線その4に伴う埋蔵文化財発掘調査』
4	1994	日久美遺跡第4次調査	米子市教育文化事業団 1995 『日久美遺跡Ⅳ』
5	1966	日久美遺跡第5次調査	本書
6	1997	日久美遺跡第6次調査	本書

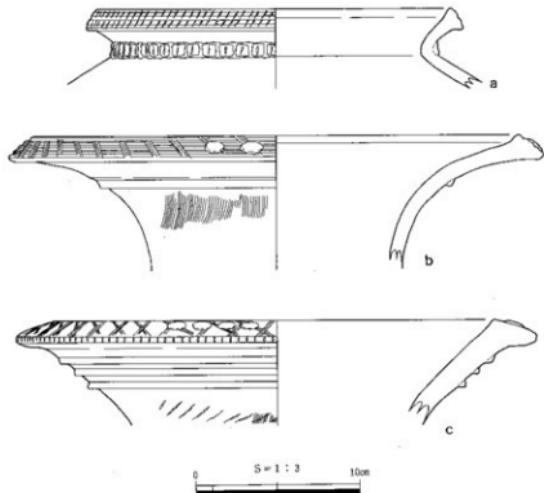
NOは第5回に対応する。

日久美遺跡発掘調査一覧

目され、豊島吉則氏により地形・地質に関する考察が行われた。

続く1973（昭和48）年には、鳥取県による新加茂川改良工事に伴う日久美遺跡（第1次調査）〔小原ほか1986a〕、1984（昭和59）年、池ノ内遺跡の調査が行われた〔小原ほか1986b〕。日久美遺跡第1次調査では、弥生時代中期の水田面、縄文時代の遺構面の調査が行われ、多数の土器、石器、木製品、動植物遺体が出土した。この調査により、これまでの調査結果が裏付けられるとともに、鳥取県下ではじめて水田跡を集落跡とともに検出し、下層では、縄文時代中期に相当する貯蔵穴群が調査され、日久美遺跡の実態がより鮮明にされた。また、池ノ内遺跡では、弥生時代後期～古墳時代前期の水田が調査され、多数の木製品が出土している。

1982（昭和57）年からは、鳥取県による新加茂川改良工事に伴う日久美遺跡（第1次調査）〔小原ほか1986a〕、1988（昭和63）年には下水道工事に伴う日久美遺跡第2次調査が米子市教育委員会によって行われた〔米子市1988〕。幅約1.6m程の調査で、詳細は不明であるが弥生時代の水田遺構と、縄文時代晩期末～弥生時代前期の土器片が少量出土している。また、1992（平成4）年に米子市教育文化事業団によって行われた下水道工事に伴う日久美遺跡第3次調査〔米子市教育文化事業団1992〕でも、詳細は不明ながら弥生時代の水田遺構と、縄文時代



目組他内	目組区新加茂川ヨリ発掘 昭和八年三月
○	成實村旧池内
○	新加茂川工事中
○	河川底ヨリ発掘ノモノ
○	干時昭和八年参月日
○	清水安造
：	十七ヶ内 清水安造

第6図 清水安造氏採集資料

晩期末～弥生時代前期の土器が出土している。1994（平成6）年には、同じく下水道工事に伴う目久美遺跡第4次調査が米子市教育文化事業団により実施されている[米子市教育文化事業団1995a]。目久美神社のある独立丘陵・足尾山の西側山裾部が調査され、包含層の二次的な堆積から縄文時代晩期末～弥生時代後期の土器が多量に出土している。また、地山面が高い調査区南側では、僅かではあるが弥生時代の土坑が検出されている。1次調査で検出された集落部と連続する可能性も考えられる。大谷からのがる丘陵から足尾山にかかる微高地に弥生時代の集落が展開していたものと推測される。

以上が、これまでの調査の概略である。詳細は各報告書を参照していただきたい。一連の調査により、縄文時代、弥生時代の豊富な遺物や、弥生時代の水田跡など目久美遺跡を考える上で極めて貴重な資料が蓄積されてきた。しかし、目久美で生活した縄文人、水田を営んだ弥生人の集落については、その縁辺部が断片的に調査されているにすぎず、この地に暮らす集団像は未だ明らかとはいいがたい。中海沿岸に生きた目久美の人々は、どのように自然環境の変化に適応し、土地を利用し、生業を行っていたのだろうか。今後は、周辺遺跡との関係も視野にいれながら、また、関連諸科学との連携により様々な問題を検討していく必要があろう。

（演田）

註 1) 米子市 1939 『米子自治史』

2) 資料目録には、採集地について、目久美ではなく美吉と記されている。

※参考文献

- 会下和宏 1995 『島根大学構内遺跡発掘調査概報Ⅱ（諸田地区1）』 島根大学埋蔵文化財調査研究センター
北浦弘人ほか 1996 『陰田遺跡群』 島根県教育文化財団
小原貴樹ほか 1986a 『目久美遺跡』 米子市教育委員会
1986b 『池ノ内遺跡』 米子市教育委員会
1990 『長砂第1・2遺跡』 米子市教育委員会
佐々木謙 1955 『目久美』 佐々木古代文化研究室
杉谷愛象ほか 1984 『陰田』 米子市教育委員会
1995 『荒原・奥陰田I』 米子市教育文化事業団
鳥取県遺跡調査会 1974 『中小河川真加茂川放水路改修に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』
鳥取県教育委員会 1973 『国道9号線バイパスに伴う埋蔵文化財分布調査報告書』
鳥取県埋蔵文化財センター 1988 『旧石器・縄文時代の鳥取県』
演田竜彦ほか 1997 『陰田第6遺跡 陰田宮の谷遺跡3区・4区』 米子市教育文化事業団
平木裕子 1996 『錦町第一遺跡』 米子市教育文化事業団
「角川日本地名大辞典」編纂委員会編纂 昭和57年『角川日本地名大辞典』31鳥取 角川書店
米子市 1939 『米子自治史』
1942 『米子市史』
横山浩一・佐原真編 1960『京都大学文学部博物館考古学資料目録 第1部 日本先史時代』 京都大学文学部
吉田茂樹 1981 『日本地名語源事典』 新人物往来社
米子市教育委員会 1988 『米子市下水道被災第一幹線工事に伴う発掘調査報告書 目久美遺跡』
1994 『米子市埋蔵文化財地図』
米子市教育文化事業団編 1992 『目久美遺跡－下水道目久美町地内枝線その4工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－』
1995a 『目久美遺跡IV』
1995b 『米子城跡5』

米子市史編纂協議会編 1996 『新修米子市史』第13巻資料編写真 米子市
1997 『新修米子市史』第12巻資料編絵図・地図 米子市

第3章 目久美遺跡第5次調査

第1節 調査の経過と方法 (第1・7図)

現地調査は、平成8年8月に開始し、平成9年2月まで行った。調査面積は758m²で、現地表面から約2.5mの深さまで掘り下げた。調査地は数年前まで旧鉄道学園の敷地内でグランドとして使用されており、現在は標高3.8mの平坦地で、約80cmは埋土であった。さらに以前は、調査地東側に小丘陵があったということで、調査区南東側では標高2.5mの位置で緩やかに傾斜する岩盤が確認された。調査区内の堆積は、南東側の岩盤上は僅かで、緩やかに傾斜しながら、調査区の西側や南側に層状に厚くなる。

調査は重機によって表土を除去した後、長さ5mの矢板を打ち込み、安全を確保してから行った。調査にあたり涌水が予想されたため、周囲に溝を掘り下げながら調査することにした。表土除去後、調査区内を精査したところ、東西方向に延びる畠の軸および木枠を備えた井戸、暗渠排水、木樺を施した用水路を確認した。関係者の話によると、いずれも終戦直後まで使用されていたものであったため、記録写真を撮影後、この面を除去した。この時点で、調査区北側隅に土層の観察も兼ねた南北方向のトレーナーを設定し、各層の土壤分析を行った。この後、調査地を山裾の境界で北側と南側に分け、土壙断面の観察を行いながら、層的に掘り下げていく方法をとった。

断面観察の結果、山裾の岩盤に近いところでは、地盤の傾斜や用水路の影響を受けて、層的に安定していない状況であった。このため、この付近では層的に掘り下げることは難しかったが、基本的に一層ずつ慎重に掘り下げるよう心がけた。また、遺物の取り上げ、遺構の実測については、トータルステーションを使用した。

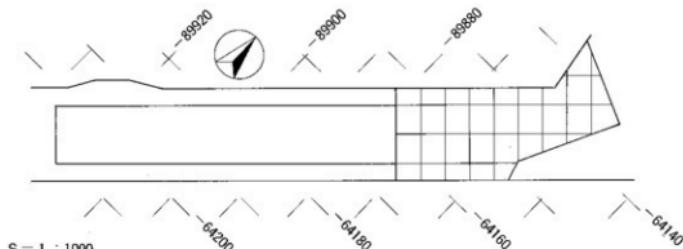
結果、弥生時代前期から近世に至る遺構面を調査し、土坑、水路、水田跡等を各遺構面で検出した。また、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、木製品、石器等の多量の遺物が出土した。

今回の調査では、細かい作業が要求されるなか、調査が地中深くに下がるのにあわせるように、寒い冬を迎えることとなった。厳冬に加え、悪天候の中、水はけの悪い足下の中、最後まで作業に従事してくださった作業員の皆様に、記して感謝する次第である。

(平木)

第2節 調査区内の堆積 (第8図)

本調査区は、かつて存在した低丘陵の山裾の位置しているため、山裾に近い調査区の北東部および調査区の北約1/3のところに山裾の稜線が西に向かって走っている。そのため、その稜線を挟んで北と南では堆積状況に若干の違いがみられる。

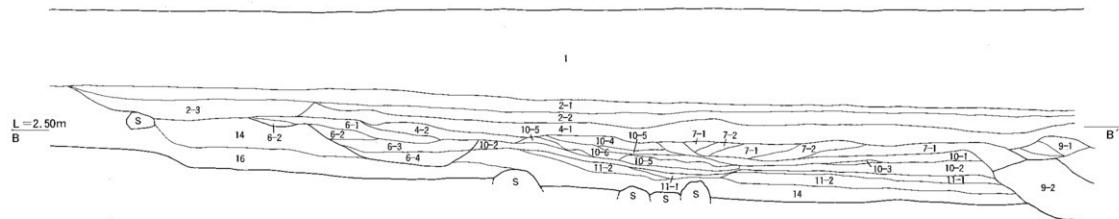
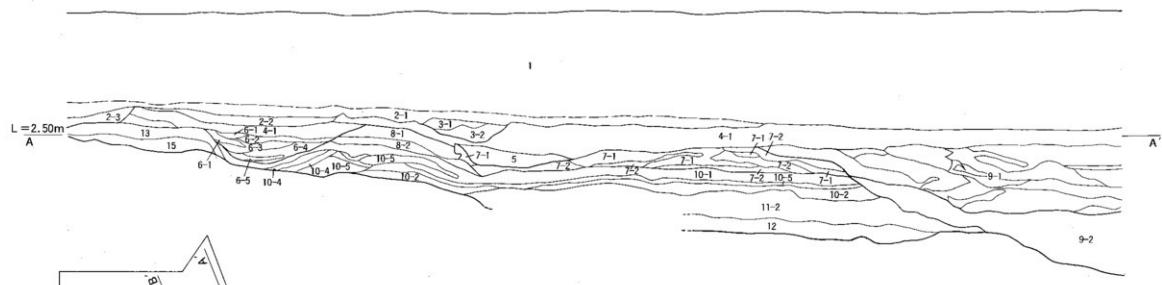


第7図 目久美遺跡第5次調査・調査区設定図

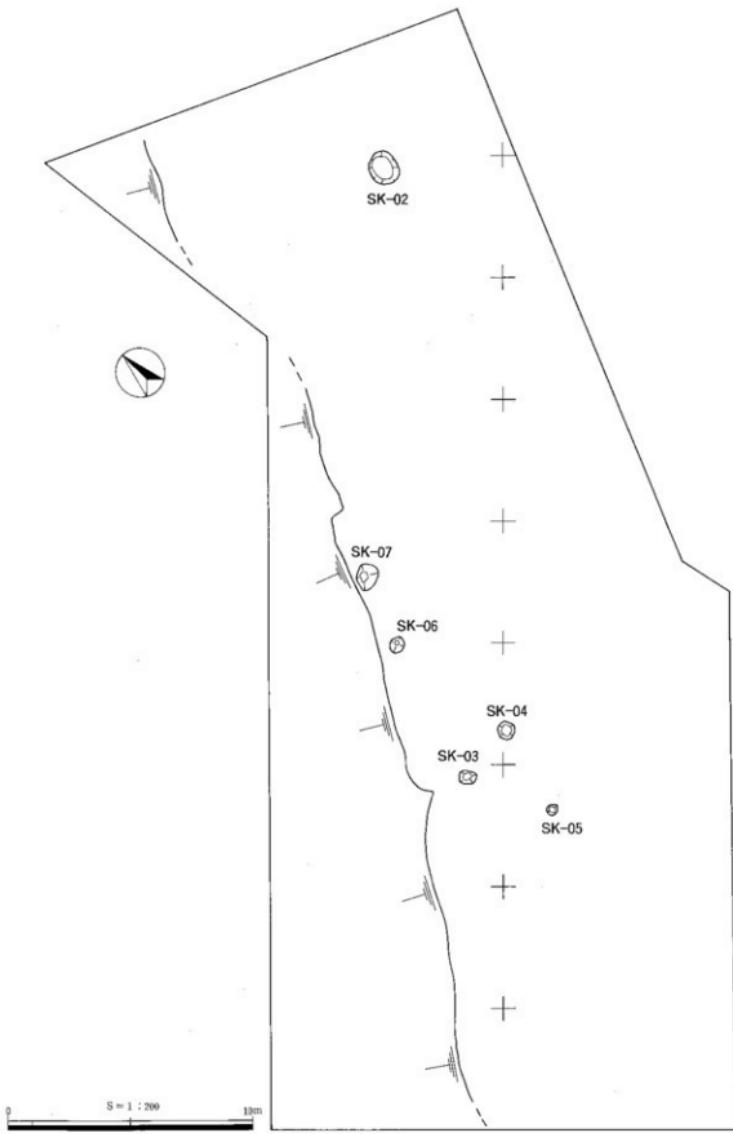
- 第 1 層 グランド造成時の埋立土。バラスが混ざる。黄色の真砂土。
- 第 2-1 層 近現代の堆積で、戦後までの耕作土である。黄褐色土。堅くしまる。
- 第 2-2 層 基本的には 2-1 層と同じだが砂粒が多い。
- 第 2-3 層 近現代の暗渠排水
- 第 3-1-2 層 SD-0 1 内埋土。灰色粘土で小砂粒を含む。
- 第 4-1 層 砂粒を含む黒色粘土層。
- 第 4-2 層 暗灰色粘土。
- 第 5 層 SK-0 1 内埋土。灰色粘土。
- 第 6-1-2 層 SD-0 2 埋土。灰色粘土・シルト、細砂、粗砂の互層。
- 第 6-3-4 層 SD-0 2 埋土。粗砂層
- 第 6-5 層 SD-0 2 埋土。暗灰色粘土
- 第 7-1 層 洪水堆積。灰色シルトと黄褐色粗砂の互層。上面に水田が形成されていた。
- 第 7-2 層 7-1 より灰色粘土の量が多い。
- 第 8-1 層 褐色細砂。
- 第 8-2 層 砂粒を多く含む褐色粘土。
- 第 9-1 層 SD-0 3 内埋土。褐色および灰色細砂・粗砂の互層。
- 第 9-2 層 SD-0 4 内埋土。黄灰色の粗砂層
- 第 10-1 層 暗褐色粘土。砂粒を少量含む。
- 第 10-2 層 暗褐色粘土。
- 第 10-3 層 暗褐色粘土。10-2 よりやや暗い。
- 第 10-4 層 褐色細砂
- 第 10-5 層 暗灰色細砂
- 第 10-6 層 灰色シルト
- 第 11-1-2 層 黒色粘土
- 第 12 層 灰色シルト
- 第 13 層 灰色細砂
- 第 14 層 黒色粘土。細砂粒を含む。
- 第 15 層 暗灰色粘土。
- 第 16 層 黄色礫層

第 2 層～第 4 層は調査区のほぼ全域で認められる古墳時代から現代に至る安定した堆積状況を示している。第 3 層は SD-0 1、第 5 層は SK-0 1 の埋土である。第 6-1 層は SD-0 2 を埋め、第 8 層は SD-0 2 に併設された土手を形成する盛り土である。第 7 層は弥生時代後期～古墳時代前期にわたる堆積で、洪水による堆積と考えられる。第 9-1 層は SD-0 3 を埋める堆積で、粘土、シルト、砂が幾層にも重なっていることから暫時に埋没したものと考えられる。一方、SD-0 4 を埋める第 9-2 層はほぼ一回の堆積と思われる。第 10 層は弥生時代中期を主体とする堆積で、第 10-1～3 層は粘性の強い堆積で水田利用の可能性を窺わせる。また、10-4～6 層は洪水堆積であろう。第 11～16 層は弥生時代前期の堆積層で、下層になるにつれ基盤と同質の礫が多く含まれる傾向にあった。

(平木)



第8図 目久美遺跡第5次調査土層断面図



第9図 弥生時代前期・第4遺構面全体図

第3節 弥生時代前期（第4遺構面）の調査

1. 概要（第9図）

第3遺構面調査後、第11～16層除去後に検出したのが第4遺構面である。第4遺構面では、6基の土坑を検出した。第4遺構面を埋める第11～16層に包含される遺物より、弥生時代前期の遺構面と考えらる。（平木）

2. 遺構と遺物（第9・10図）

各土坑の規模は表に示したとおりである。いずれも土坑内には、淡灰色シルトが入っており、第4遺構面を埋める第12～第16層とは異なる。そのため、弥生時代前期の遺物を包含する堆積に埋められているということから、時期を導き出すことに若干の問題もある。可能性としては縄文時代晚期の土坑群で、遺構面もしくはそれを埋める晚期の包含層が削平されているとも考えられる。ただ、SK-03から弥生時代前期の土器（第10図）が出土しており、前期の範疇で捉えるのが妥当である。

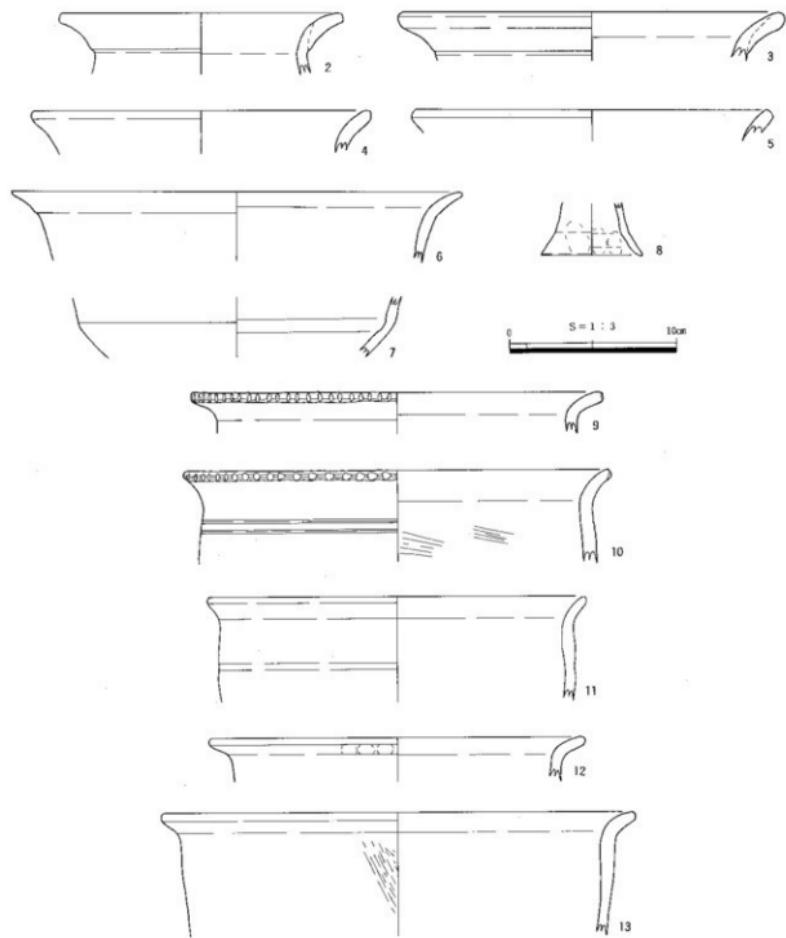
SK-02の平面形は梢円形を呈し、断面形は擂鉢状である。土坑内には岩盤と同様の礫が入り込んでいた。SK-03～07は黒色粘土中で、淡灰色粘土の落ち込みとして検出した。いずれも、平面形は円形ないしは梢円形を呈し、断面は浅い皿状もしくはU字状である。遺物は出土していない。柱穴の可能性もあるが、建物としての配置は認められなかった。また、SK-05からも底部小片が出土している。（平木）

遺構名	規模	
	径(cm)	深さ(cm)
SK-02	110×140	16
SK-03	70×43	12
SK-04	80×70	15
SK-05	50×50	7
SK-06	60×65	25
SK-07	110×80	14

目久美遺跡第5次調査第4遺構面土坑一覧



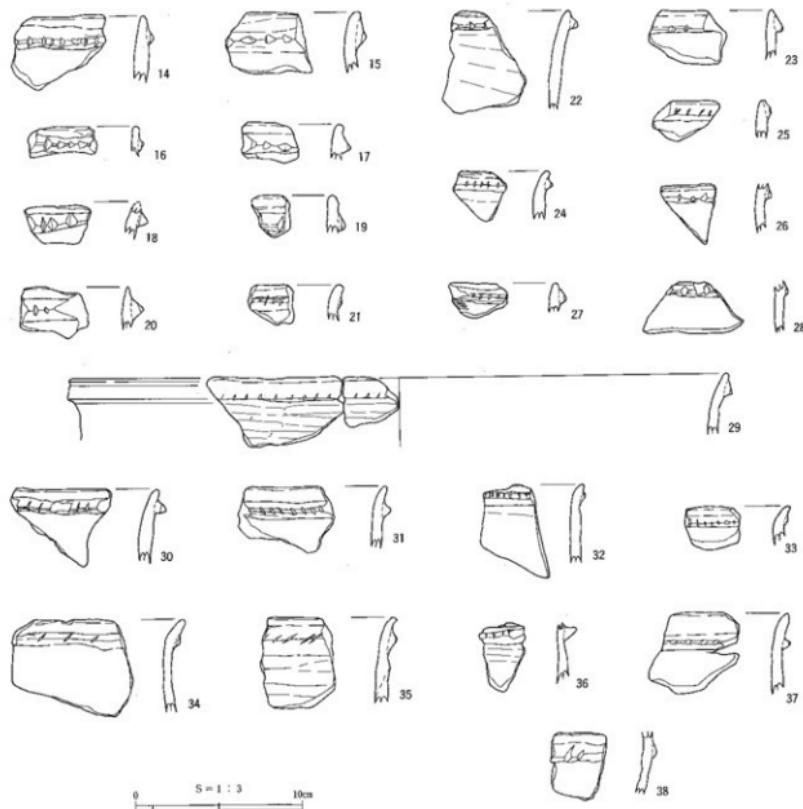
第10図 SK-03出土遺物



第11図 弥生時代前期遺物包含層出土遺物 1

3. 遺構外出土の遺物（第11～21図）

ここでは、第11～16層出土の遺物を一括して扱う。第11～16層からは、弥生時代前期土器、突帯文土器、粗製の深鉢ないしは壺形土器、石器および石核や剥片が多量に出土している。しかし、土器はほとんど接合関係なく、全形の窺える資料を欠く。以下、遠賀川系土器、突帯文土器、粗製土器、底部、石器の順で概観する。



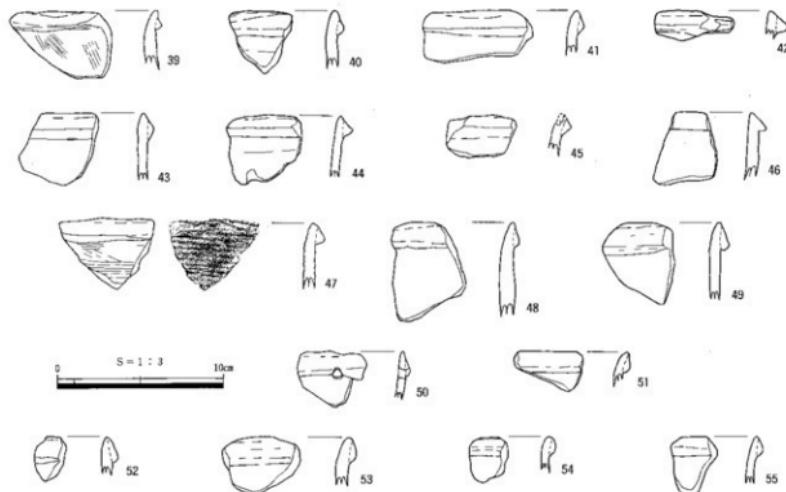
第12図 弥生時代前期遺物包含層出土遺物 2

遠賀川系土器（第11図）

第11図2～13は弥生時代前期の土器である。2、3は壺形土器の口頭部片である。前者は口頭部が段、後者は口頭部も段に近いが、意匠としては一条の沈線である。4、5も壺形土器の口縁部片と思われる。6、7は鉢形土器。前者は如意形口縁を呈す。後者は、肩部で屈曲する形態の鉢である。口縁部の形態は不明。8は高坏の脚部と思われる。9～13は如意形口縁の壺形土器である。9は口縁端部全面に刻目が施される。10も口縁端部全面に刻目が施される。ヘラ状工具によるD字状のしっかりとした刻目である。頭部直下には二条の沈線が施されている。11～13の口縁端部には刻目が施されていない。11は頭部下に段が施される。外形接合の段を利用したものではなく、沈線状の区画をした後、それをなだめて段状に仕上げる。

突帯文土器（第12～16図）

第12図14～38は刻目突帯文土器である。口縁端部に刻目の施される古相の突帯文土器は出土していない。また、口縁部小片ばかりで、胴部まで復元できたものはないが、二条突帯文土器と思われる胴部突帯片が1点認められ



第13図 弥生時代前期遺物包含層出土遺物 3

る。38が二条突帯文土器と思われる剣部片で、突帯の断面はやや下さがりの丸みのある三角形を呈し、比較的しっかりとしたV字状の刻目が施される。器面調整にはナデ調整である。

14~21は口縁端部から下がった位置に刻目突帯がつく類である。口縁端部断面形は、丸くおさめられ、割としっかりとしたD字やV字の刻目が施されるものが多い。突帯の断面形は三角形や、やや下さがり気味の三角形。このうち、20の口縁端部断面は尖形を呈す。また、21は小さめの突帯に、他に比べ軽めのV字の刻みが施される。

22~29は、刻目突帯が口縁端部に接するか、やや下がった位置につく類である。口縁端部の調整と突帯の貼り付けが同時処理された類である。突帯の断面形は下さがりの三角形や、三角形、刻目は軽めのものが多く、V字や小さめのD字である。器面調整、特に外面には、ナデ調整の他に、粗い擦痕の残るナデが施され、内面はナデ調整が主体を占める。27は外面に一部、二枚貝条痕が残る。

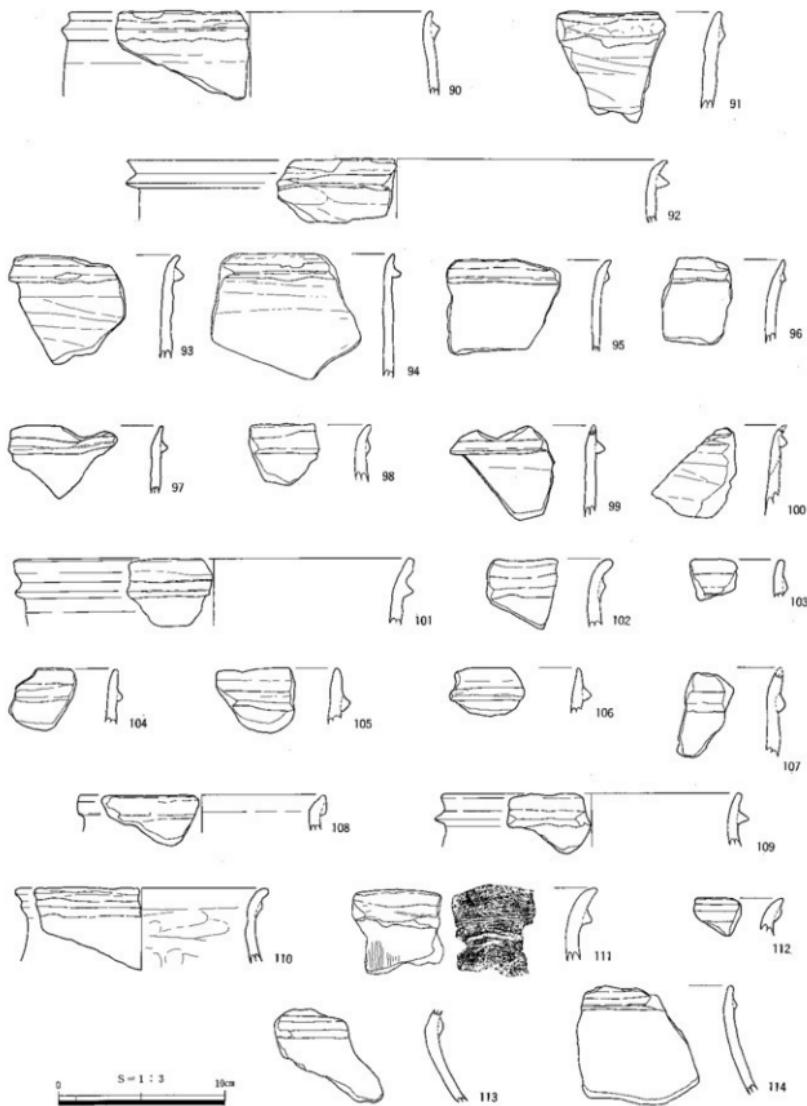
30~36は、再び口縁端部から下がった位置に刻目突帯がつく類である。先の一群と異なる点は、突帯のあたりから口縁端部に向かって口縁部が緩やかに外反、もしくは軽く屈曲することである。口縁端部は丸くおさめられたものや、やや尖形を呈すものがある。突帯は断面三角形、突帯の刻目はV字の刻目が主体的である(30~33、36)。また、斜め方向に切るような刻目もみられる(34、35)。外面ともにナデ調整が施されるもの、外面に擦痕が残る粗いナデ調整、内面ナデ調整が施されるものがある。37は他のものよりもさらに下に突帯がつく類で、突帯の刻目は小O字、内外面ともにナデ調整である。

第13図39~55は、無刻目突帯が口縁端部に接するないしはやや下がった位置につく類である。突帯の断面形には、三角形、下さがりの三角形、丸形のものがある。内外面ナデ調整が多くみられる。39~45は断面三角形の突帯がつく類で、39は外面の最終調整はナデながらも、先に二枚貝条痕が施されている。内面はナデ調整。46~51は断面下さがりの三角形を呈す類である。47は内面二枚貝条痕、外面は二枚貝条痕を施した後にナデ調整。50は突帯上に穿孔が施される。52~55は丸形の突帯がつく類である。

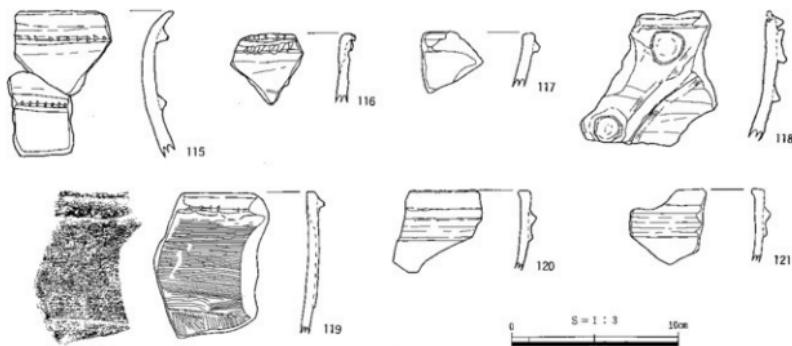
第14図56~89は、無刻目突帯が口縁端部から下がった位置につく類である。口縁端部は丸くおさめられるものが多い。このうち、56~79は断面三角形の突帯がつく。外面擦痕のつく粗いナデ、内面ナデ調整が施されるもの、



第14図 弥生時代前期遺物包含層出土遺物 4



第15図 弥生時代前期遺物包含層出土遺物 5



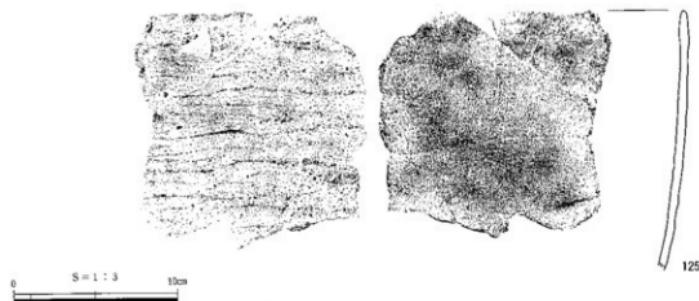
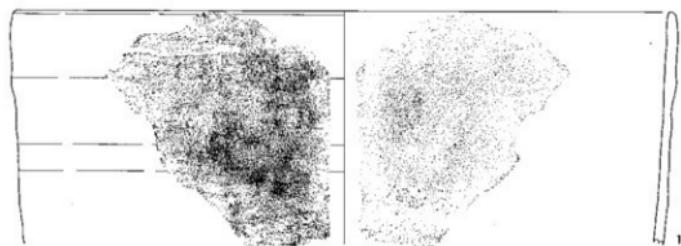
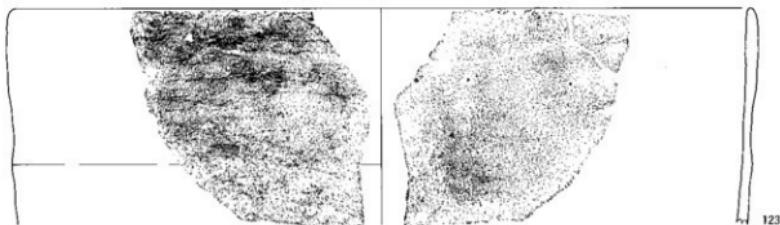
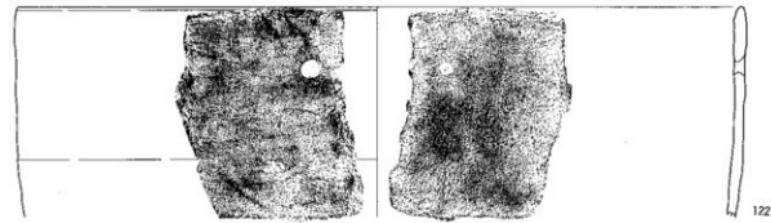
第16図 弥生時代前期遺物包含層出土遺物 6

内外面ナデ調整ものがある。80~86は断面下さがりの三角形がつく類、87~89は断面丸形の突帯がつく類である。いずれも内外面ナデ調整が多くみられる。また、56、60、67、73、77等は、口縁端部内面を強くナデつける傾向にある。

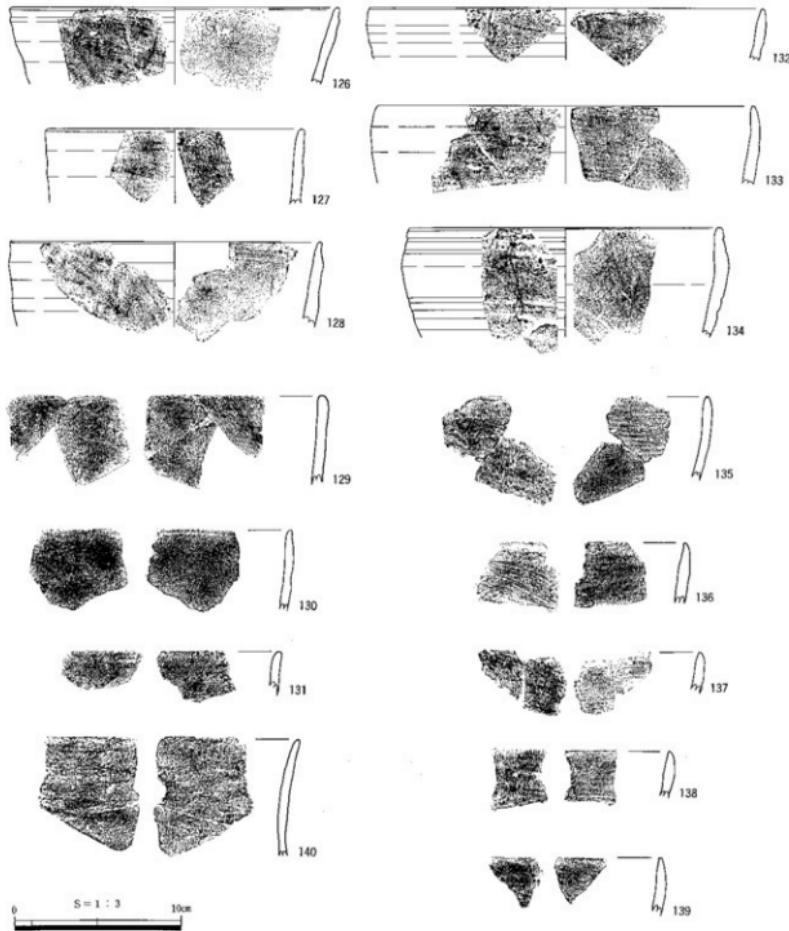
第15図90~100も、無刻目突帯が口縁端部から下がった位置につく類で、口縁端部は突帯の付近から縁部に向かってやや外反もしくは軽く屈曲する。いずれも口縁端部内面を強くナデすることによる。また、それにより、口縁端部がやや尖形を呈す傾向にある。突帯は断面三角形を呈すものが主体的である。外面擦痕を残すナデ調整で内外面ナデのものや、内外面ナデ調整のものがある。第15図101~107は、無刻目突帯がさらに下がった位置につく類である。口縁端部は基本的に丸くおさめる。突帯の断面形には、三角形を主体に、下さがりの三角形も認められる。

以上はいずれも壺形土器¹⁾であったが、次の108~114は壺形土器に相当しよう。108は口縁端部に接して突帯がめぐる。口縁端部内面は強くナデつけられる。復元径が小さいことから壺形土器と考えた。109~112は口縁端部から下がった位置に突帯がつく類で、口縁部はゆるやかに外反する。口縁端部は丸くおさめられる。突帯断面形には三角形、丸形がある。111は内面にひっかき傷のようなヘラによる数条の線が施されている。113、114は外反気味の口縁部が内傾するもので、ここでは壺形土器として扱ったが、壺や鉢の可能性は否定できない。113は断面丸形の突帯がつくが、口縁端部を欠損する。114は丸くおさめた口縁端部から下がった位置に断面三角形の突帯がつく。

第16図は、その他の突帯文土器を括した。115は二条の刻目突帯が外反する口縁につく。上位の突帯は口縁端部から下がった位置につく。下側の刻目突帯はやや左上がりに貼りつけられている。いずれも突帯の断面形は三角形、上の突帯には小D字、下の突帯にはV字の刻目が施される。内外面ともナデ調整、他に比べ丁寧な作りである。116は口縁端部から下がった位置に扁平な刻目突帯がつくが、口縁端部を押さえて折り曲げ、縁部を刻む。刻目は口縁端部、突帯とともにV字状。117は面取りされた口縁端部から下がった位置に台形状の突帯がつく。118は口縁端部を欠損するが、口縁端部には接する位置に無刻目突帯がめぐっているものと思われる。また、胴部に対し、左下がりの突帯がつく。また、口縁部突帯と斜行する突帯の間に円盤が貼りつけられている。鉢形土器であろうか。突帯を除けば、伯耆、出雲地域の晩期中葉に認められる貼付円盤が施された鉢とも考えられるが、これについて、管見の限り、他に類例を知らない²⁾。119は弥生前期の壺と突帯文土器の折衷土器である。胴部の段は、外頸接合時の段差を利用したもので、段より上位は横方向の刷毛目、下位は縱方向の刷毛目が施されている。面取りした口縁端部には接して刻目突帯がつく。刻目はごく小さなものである。120、121は、幅広



第17図 弥生時代前期遺物包含層出土遺物 7

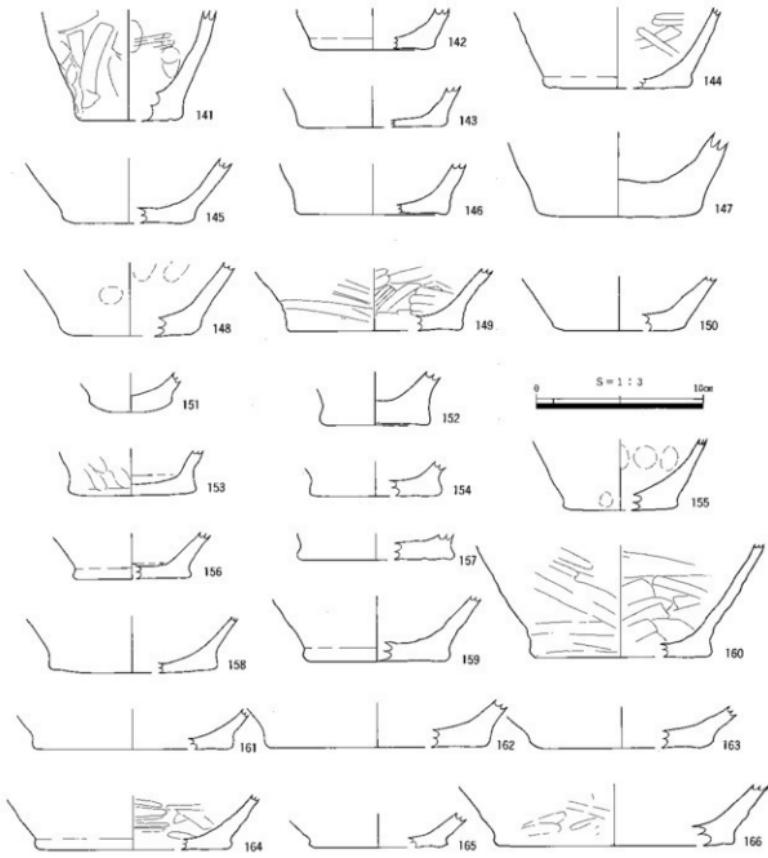


第18図 弥生時代前期遺物包含層出土遺物 8

な突帯の中央部をナデつけて平行する二条の突帯を表現している。口縁端部は面取りされ、それにより端部内面が僅かに突出する。内外面ともにナデ調整。これらは同一個体の可能性が高い。

粗製土器 (第17・18)

第17図122～第18図140は粗製の深鉢や鉢形土器である。比較的接合できたものもあるが、底部まで復元できるものはない。122～125は、直線的な形態の深鉢で、大型品である。122は口縁部に穿孔が施されている。126～131は直線的な形態をとる深鉢ないし鉢形土器の中・小型品である。132～139はやや内湾気味の形態を呈す中・小型の一群である。いずれも鉢形土器として考えて差し支えないであろう。140は口縁部が外反する深鉢である。



第19図 弥生時代前期遺物包含層出土遺物 9

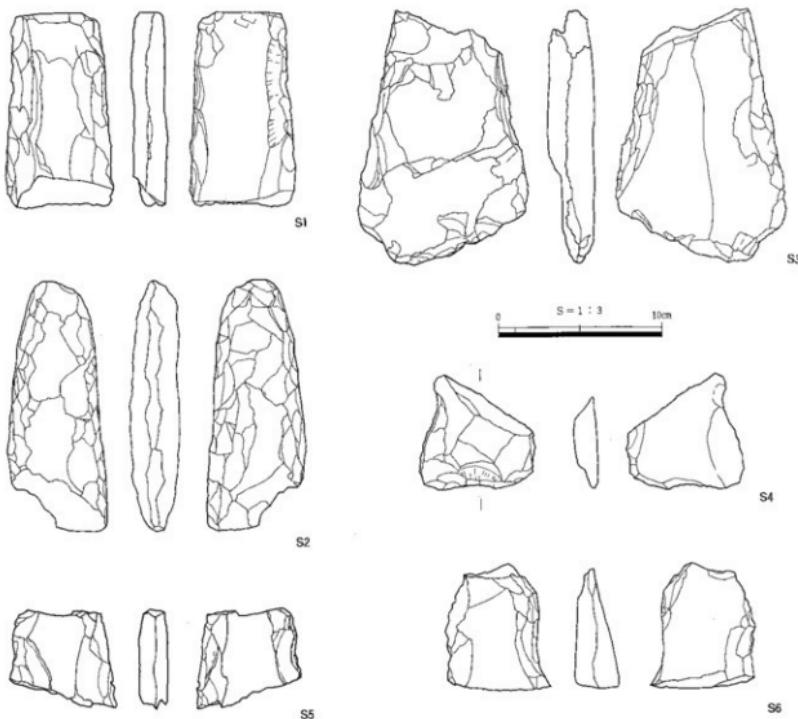
以上の粗製土器の調整には、ナデ調整や粗い擦痕の残るナデ調整が施される。突帯がないことを除けば、先にみた突帯文土器と同じ作りである。

底部（第19図）

第19図141～166は底部片である。いずれも底部直上でわずかに括れる形態を呈す。底部からの立ち上がりの角度で大別すると、141～160は窓ないし深鉢形土器、一方、161～166については壺形土器と考えられる。とりあえず、弥生土器の底部とするが、実際は遠賀川系土器、突帯文土器、粗製土器いずれの底部となるのかわからない。

石器（第20・21図）

第20図S 1～S 6は打製石斧である。短冊形（S 1・S 2）と撥形（S 3・S 4・S 6）が認められる。いずれもどこかを欠損している。石材の筋理が多く板状に剥がれやすいという性質を利用し、扁平な素材の縁辺部から打撃を加え、粗い剥離加工を施している。筋面や自然面をそのまま残すものもみられる。

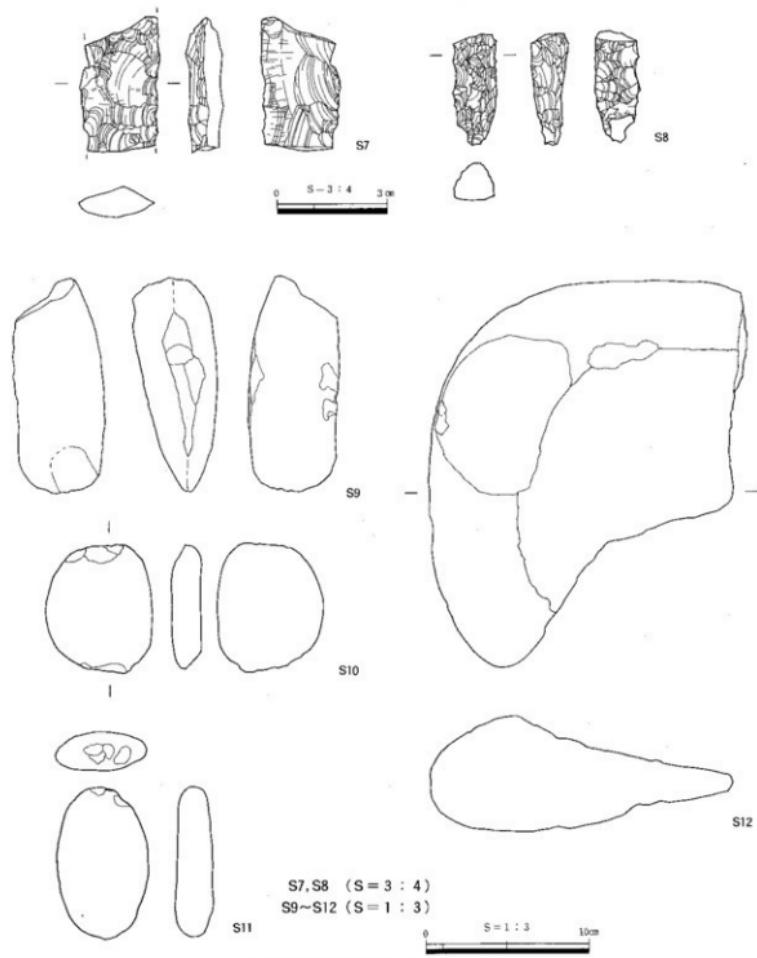


第20図 弥生時代前期遺物包含層出土遺物10

第21図 S 7、S 8 は剥片石器である。S 7 は上下を欠損するが、削器もしくは尖頭器と思われる。調整加工は両面ともやや粗く、特に裏面は粗雑である。S 8 は石錐であろう。断面は三角形を呈す。S 9 は磨製石斧で、基部を欠損する。形態も均整がとれておらず、作りもやや粗雑である。S 10 は礫石錐で、扁平な礫の両端を打ち欠く。S 11 は敲石である。扁平な礫が使用されており、片側の端部に敲打痕が残る。S 12 は石皿。全体の $1/3$ が残る程度であるが、中央に向かって摩滅した面が著しく窪んでいる。

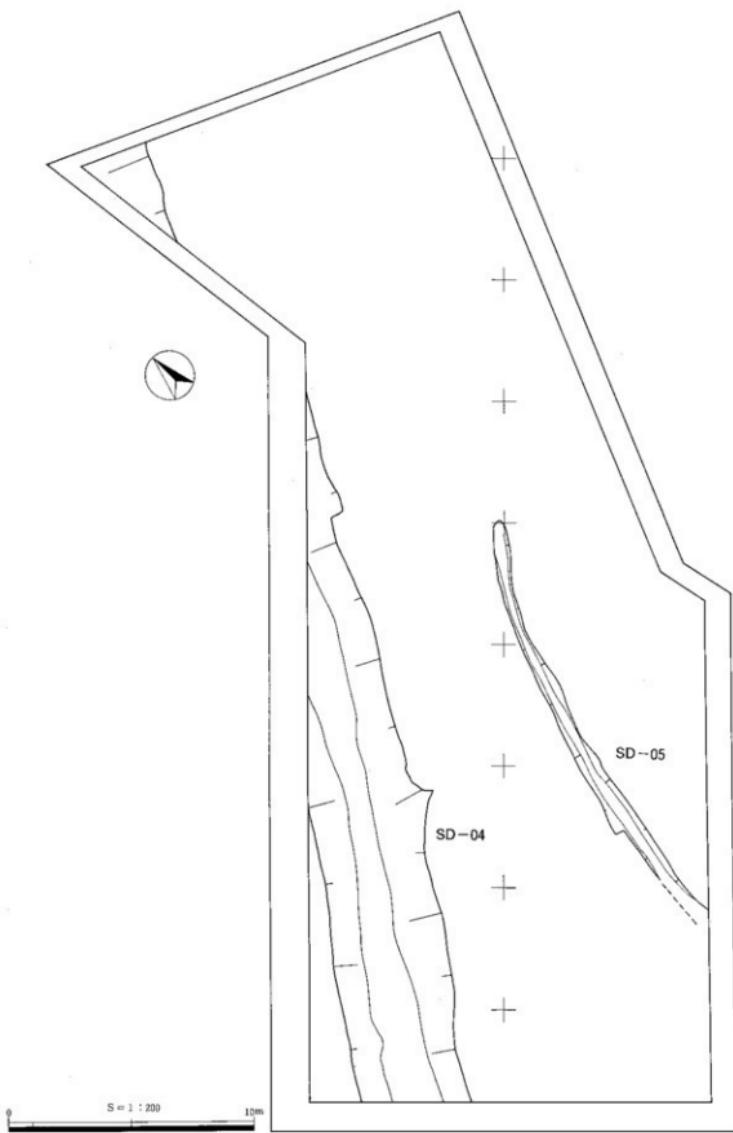
以上、弥生時代前期の遺物包含層出土遺物を概観した。土器については、その形態からいくつかの類に大別できた。それぞれの時間的位置づけについて簡単に触れておく。第11図 2～13の弥生時代前期の土器については、壺形土器の口頸部界に段、もしくは沈線的な段がみられること、壺の頸部下に段や、2条の沈線が認められるところから、弥生時代前期の中葉に位置づけられる。突帯文土器については、口縁端部や突帯などの諸属性から、第12図14～21は型式学的には、広義の船柄式、沢田式、22～29については長原式に相当すると思われる。ただし、今回の資料中で、これらが時間的に分離できるか否かは不明である。その他の刻目突帯文土器や無刻目突帯文土器、粗製土器の時間的位置づけについては、第5章第3節で若干の検討を試みたい。

(濱田)

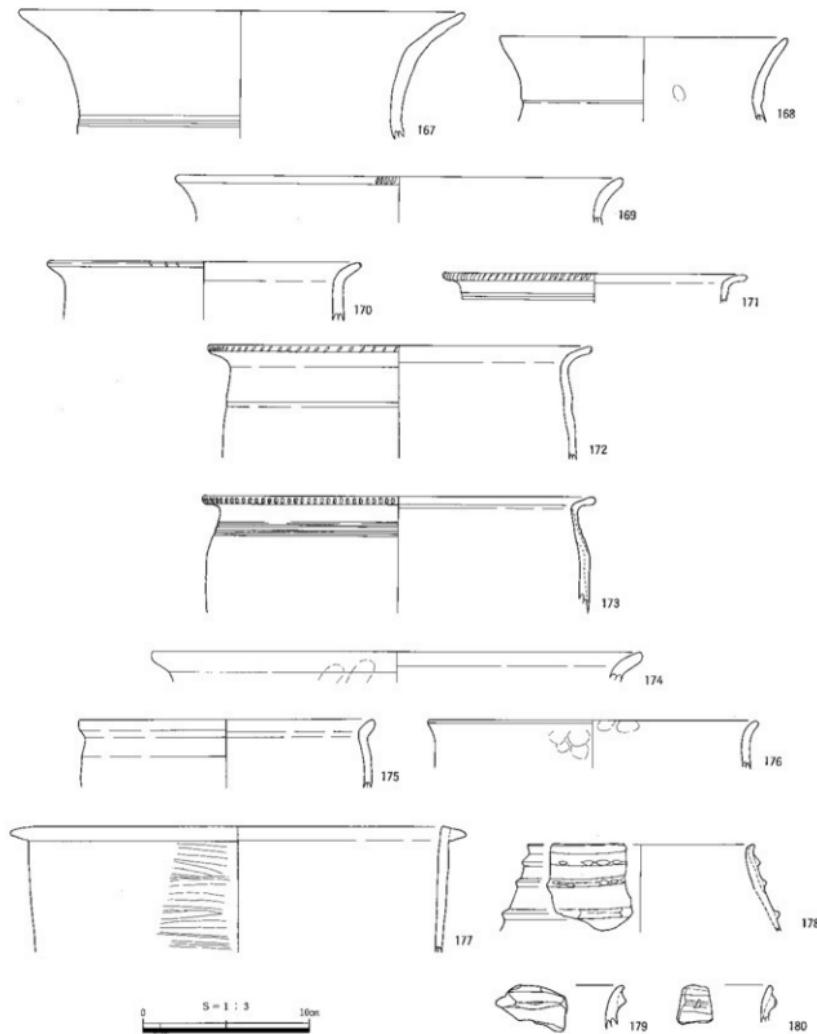


第21図 弥生時代前期層出土遺物11

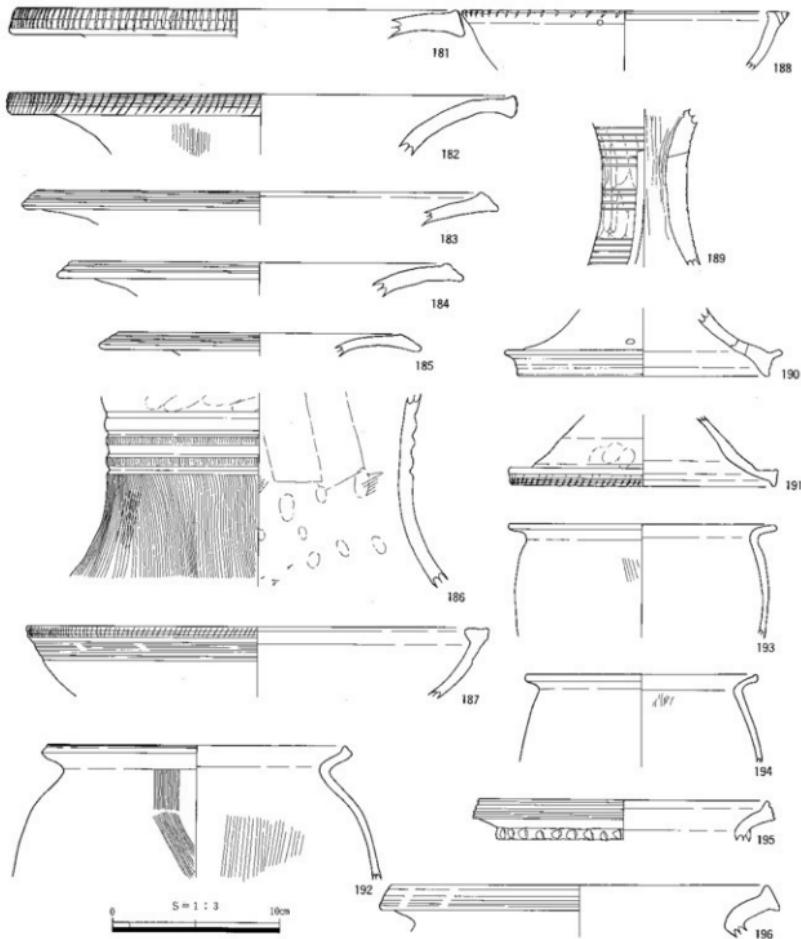
- 註 1) 一般的に縄文土器には深鉢、弥生土器に対しては甕を使用するが、本書では、煩雑さをさけるため、突帯文土器については、全て甕を使用する。
- 2) 粘付円盤は、当該地域の篠原式、舟津原・谷尻式併行期の土器にみられる地域性の強い文様である。鳥取県内では、倉吉松ヶ坪遺跡、西伯都会見町口朝金遺跡等に認められる。また、突帯文土器期と思われるものとして西伯郡淀江町井手町遺跡の深鉢がある。しかし、本例とはいざれも形態的な隔たりが大きく、突帯の形態によるなら本例は、後出的である。



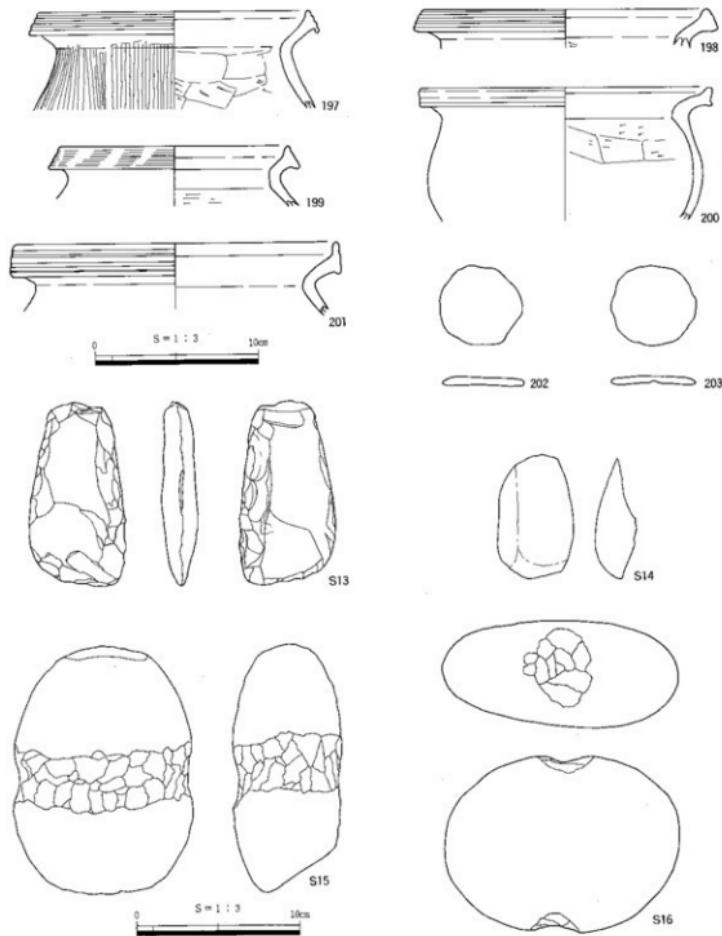
第22図 弥生時代後期・第3造構面全体図



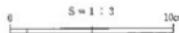
第23図 SD-04出土遺物 1



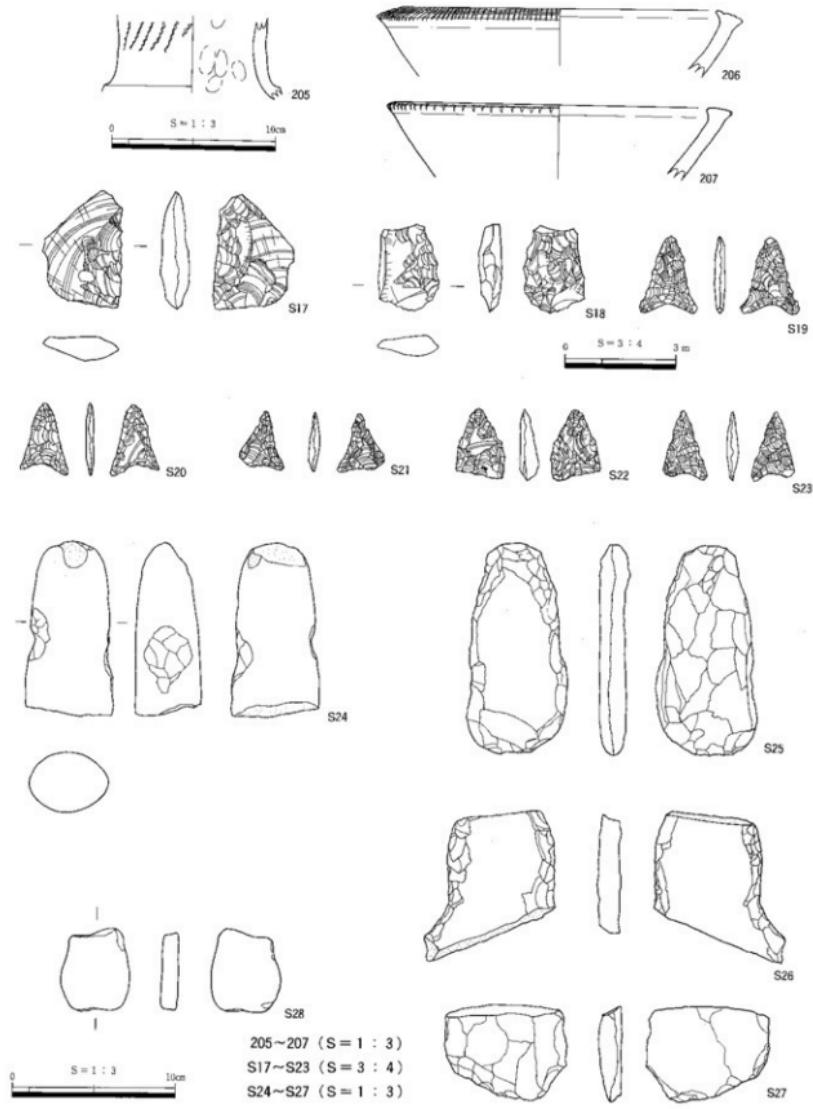
第24図 SD-04 出土遺物 2



第25図 SD-04 出土遺物 3



第26図 SD-05 出土遺物



第27図 第10層出土遺物

第4節 弥生時代後期（第3遺構面）の調査

1. 概要（第22図）

シルトと粘土の互層からなる洪水堆積層を除去後、検出したのが弥生時代後期の遺構面である。2本の水路を検出した。また、面的に捉えることはできなかったが、弥生時代後期の遺構面がのる第10層中で高密度のプランクトオパールが検出されており、水田が営まれていた可能性が考えられ、第6次調査を参考にすると、弥生時代後期の遺構面が形成される以前のものと思われる。

（平木）

2. 遺構と遺物（第22・23・24・25・26図）

SD-04（第22・23・24・25図）

調査区の西端で検出された水路で、N15°W方向に延びる。幅約5m、深さ約1mの大規模な水路である。流走方向は南方向と思われる。調査時には、自然河川的な性格を想定していたが、第6次調査の結果と考えあわせると、断面形が整然とした逆台形を呈すことからも人工的な水路と考えるのが妥当である。遺構内は、微細粒から中粒の砂のみが堆積しており、一時期に埋没したことが窺われる。遺物は堆積中に弥生時代前期から後期に至る土器が混在していた。このことから当遺構は後期中葉、遙くとも後期後葉には完全に埋没していたと思われる。出土した遺物は、次のとおりである。いずれも摩滅が著しい状態で、調整等の詳細が判らないものが多い。

第23図167、168は弥生時代前期の壺形土器である。167の口頭部界には二条の沈線が施される。一方、168の口頭部界は段である。169～176は弥生時代前期の壺形土器である。169、170には口縁端部に刻目、172は口縁端部に刻目と頸部下に段、171、173は口縁端部に刻目と頸部下に数条の沈線。174～176は無文の壺である。以上、167～176は弥生時代前期中葉～後葉に位置づけられる。

第23図177は口縁端部に接して貼付突帯があげられ、胴部上半は刷毛目状工具による横方向の調整がみられる。前期後葉から中期前葉の土器と思われる。178は胴部から口縁部にかけて三条の刻目突帯が貼りつけられる。無頸壺ないし浅鉢、前期に位置づけられるか。179、180は突帯文上器で、前者は外反する口縁端部から下がった位置に無刻目突帯がつく。後者は口縁端部から下がった位置に刻目突帯がつく。

第24図は弥生時代中期中葉から後葉の土器を一括した。181、182は中期中葉の壺形土器で、前者は口縁部に刻目、後者は二条の凹線施文後、刻目を施す。183～186は中期後葉の壺形土器で、183～185は口縁部、186は頸部に凹線文が施される。187～191は高杯。187、188は中期中葉の高杯で、前者は口縁部に凹線施文後、刻目、胴部上半に横描による平行線が施される。後者は口縁端部に刻目、口縁端部上面から斜め下に向かって穿孔が施されている。189は胴部で、4～5本単位の細い凹線文と透かしが施されている。190、191も胴部で、前者は脚裙部に凹線文、後者は四線施文後に刻目が施されている。192～196は甕形土器である。192～193は中期中葉、195、196は四線文が口縁部に施される中期後葉の土器である。195は頸部に貼付突帯があげられる。

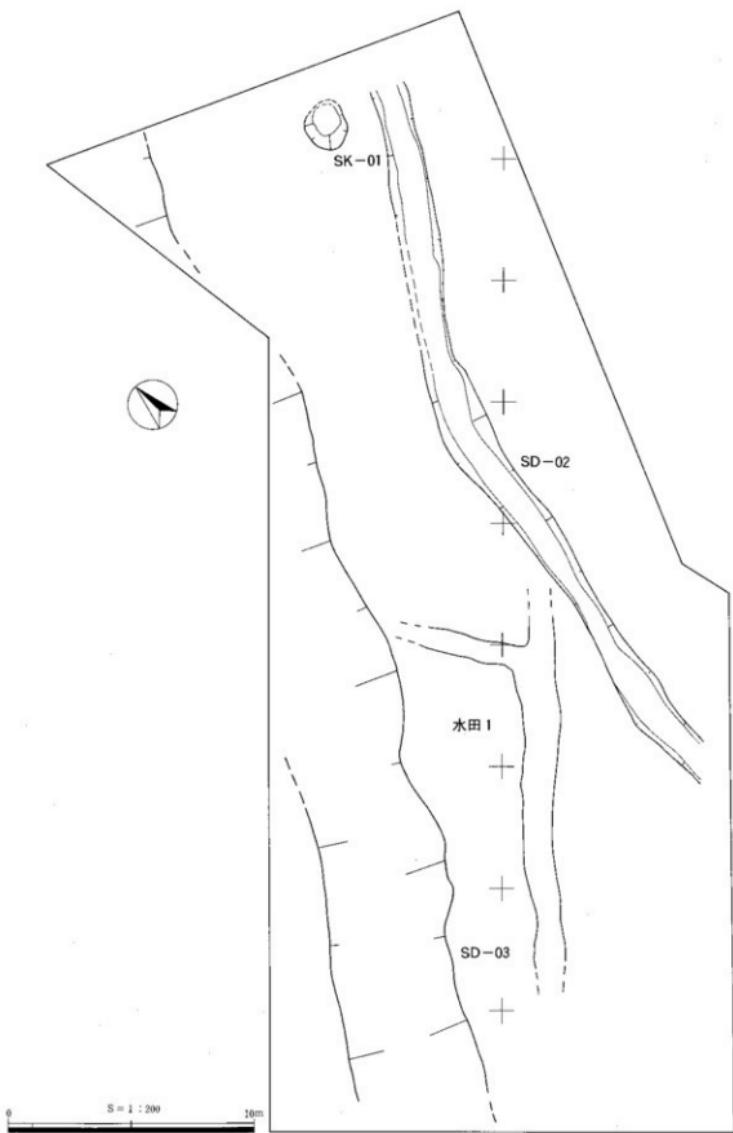
第25図は内面のケズリ調整が頸部もしくは頸部直下まで上がっているもので、弥生時代後期の土器を一括した。いずれも壺形土器である。197～200は後期前葉、201は中葉の範疇で捉えられる。

また、第25図202、203は土器片を加工した円盤形土製品である。S13は打製石斧、縁辺部から加えられた打撃により、粗い剥離加工を施している。S14は磨製石斧の刃部片である。S15、S16は石錘である。S15は大型でやや厚みのある縁の中央部を粗く打ち欠き、帯状の浅い溝を施している。S16も大型品で、やや厚みのある扁平な縁の短軸両端を粗く打ち欠いている。

（平木・濱田）

SD-05（第22・26図）

調査区の東側、山裾部分で検出した水路である。検出した規模は、幅約0.7m、深さは最も深いところで約0.1mを測る。この付近は調査区内でも高いところに位置しており、後世の擾乱を受けていることから、本来の規模はもう少しだけ大きただろう。用水路的な性格の水路と思われる。山裾から南方向に延び、調査区外に抜ける。遺構内埋土からは、弥生土器片ばかりが出土した。図下できたのは、第26図204で、弥生土器の底部である。時



第28図 古墳時代～奈良時代・第2構造全体図

期は特定しがたいが、他の土器片も含め弥生時代中期の範疇で捉えたい。遺構の埋没時期も弥生時代中期以降と考えておく。

(平木)

3. 遺構外出土の遺物（第27図）

ここでは、第3遺構面が形成される第10層から出土した遺物について概略する。また、当遺構を埋める堆積中には、ほとんど遺物が含まれていなかった。

205は中期中葉の壺形土器の頸部である。頸部に貼付突蒂、口縁部に二枚貝復縁による圧痕が連続的に施される。206、207は中期中葉の窓坏で、前者は四線施文後、刻目、後者は口縁端部に刻目が施される。

S17は台形状の剥片を加工した削器と思われる。剥片の長辺に粗い押圧剥離を加え刃部を作る。S18も削器と思われ、直線的なS19と異なり、湾曲する側に刃部が形成される。S19～S23は石鎚である。S24は磨製石斧かと思われる。刃部を欠損する。側面を粗く打ち欠いた抉りが認められる。柄に固定するための抉り、もしくは破損した磨製石斧を再利用した石錘であろうか。S25～S27は打製石斧である。S26は刃部、S27は基部を欠損する。いずれも縁辺部から粗い剥離加工が施される。S28は扁平な小砾の両端部を打ち欠いた石錘である。(演田)

第5節 古墳時代～奈良時代（第2遺構面）の調査

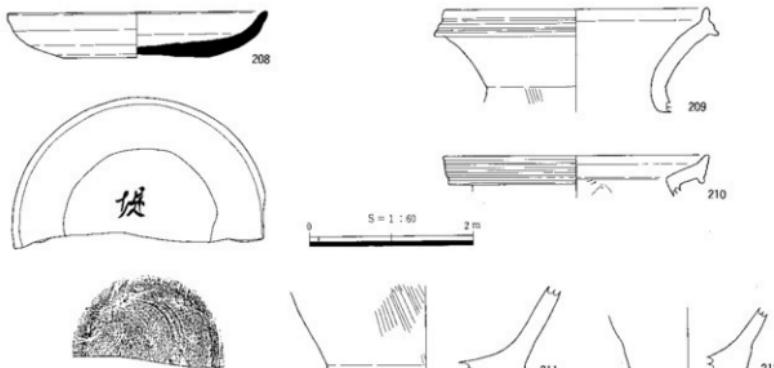
1. 概要（第28図）

弥生時代後期以降、しばらくの間、河川の氾濫による堆積が進んだようだ、弥生時代後期の第3遺構面上には、灰色シルト、細砂、灰色粘土が互層状に堆積している。第2遺構面はこの洪水堆積上に形成され、2本の水路と水田跡、土抗1基を検出した。最終的な埋没時期は、上層出土遺物より8世紀後半と考えられる。(平木)

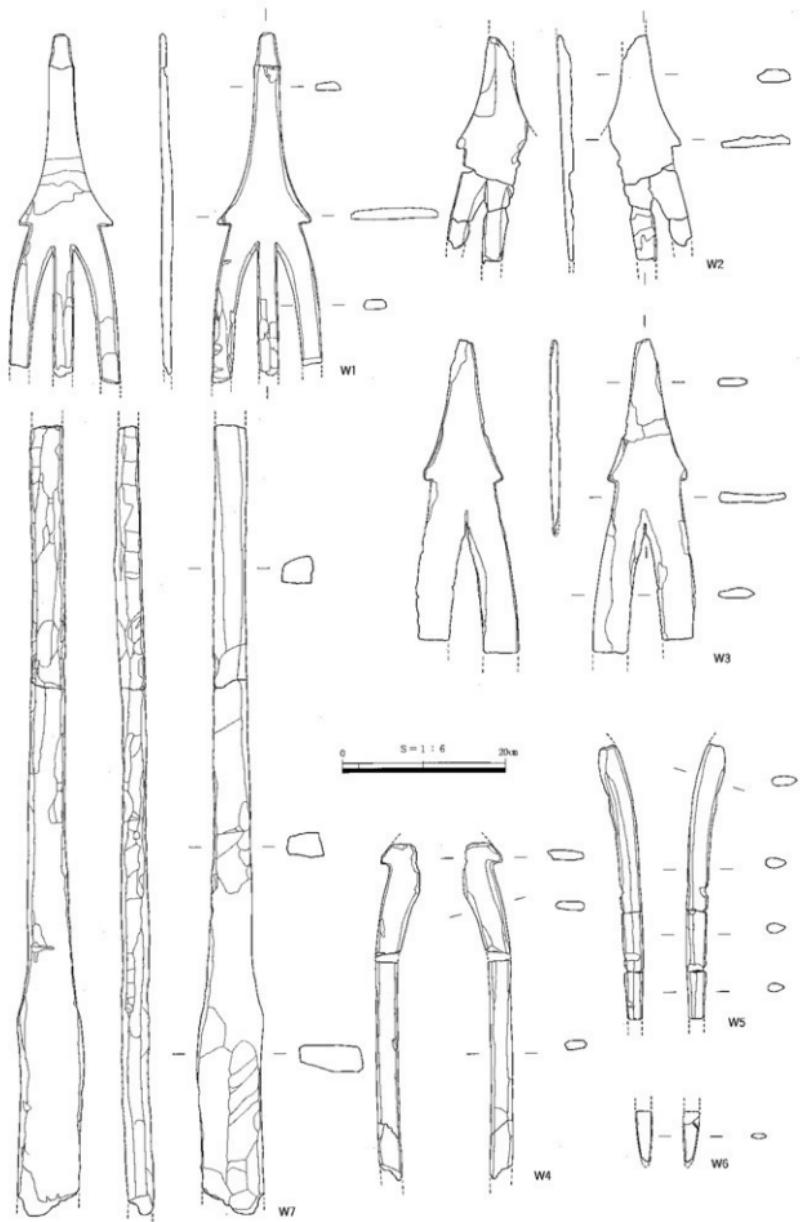
2. 遺構と遺物

水田1（第28図）

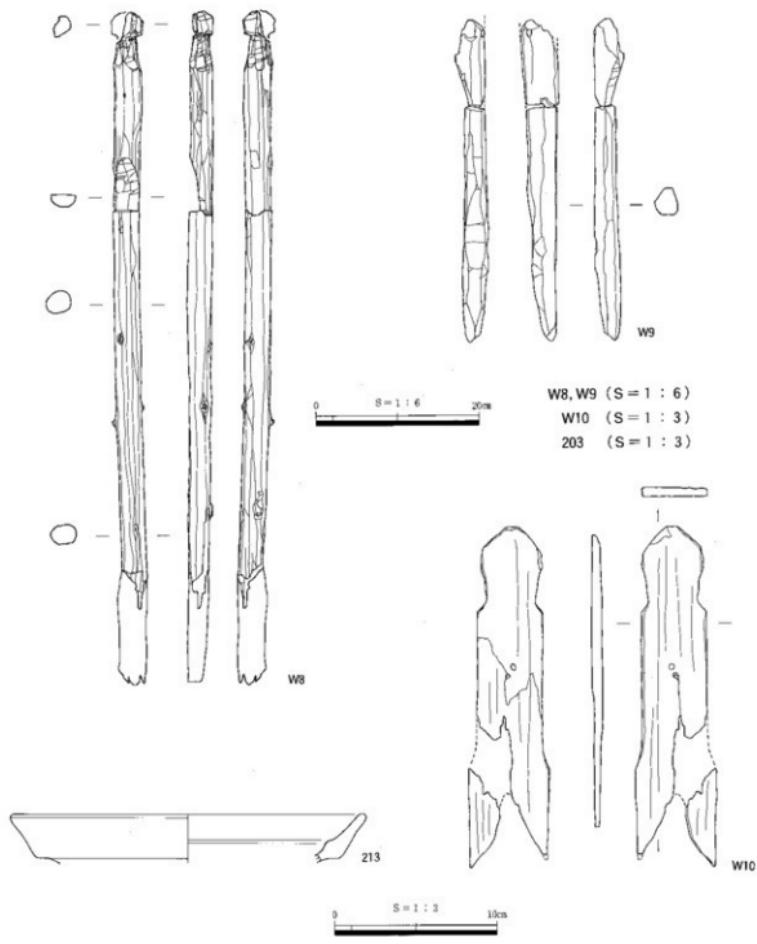
南北畔幅約1.5m、高さ約0.15m、残存長約12.0m、東西畔幅約1.0m、高さ約0.06m、残存長4.0mとやや南北畔の方がしっかりとしている。調査区全面に良好な状態で畦畔が依存しておらず、水田一区画の面積は不明である。水田面の平均標高は約2.15mで、調査区東の山裾側は若干高くなるが、ほぼ全面がフラットである。(平木)



第29図 SD-02出土遺物



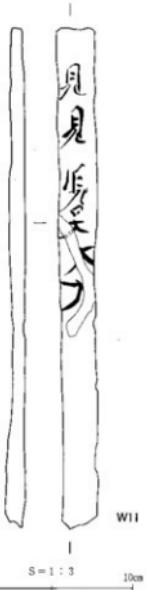
第30図 SD-03出土遺物1



第31図 SD-03出土遺物2

SD-02 (第8・28・29図)

幅約1.6m前後、深さ約0.2~0.3mで、山裾に沿うように南北に僅かに湾曲しながら延びる。断面はレンズ状で、黒灰色粘土と細砂が堆積していた。造構の西側には、造構に沿って土を盛っていた。土盛りは幅約0.85m、高さ約0.35mを測る（第8図）。当初はこの土手から畦畔が派生し、水田の区画を形成するのではないかと考えていたが、土盛りが残っていたのは一部に限られ、このことについては確認できなかった。造構の南側は、後世の削平を受け、かなり擾乱されていた。擾乱部では、新しい時代の土器も混在する状況にあるが、擾乱を受けていない北側には、弥生土器が混在する状況で須恵器が埋土中に包含されていた。出土遺物から判断すると、最終



第32図 SK-01出土遺物

的な埋没時期は8世紀後半と思われる。水田1との関連は明らかにできなかったが、両者の共時性を比定する要素もない。

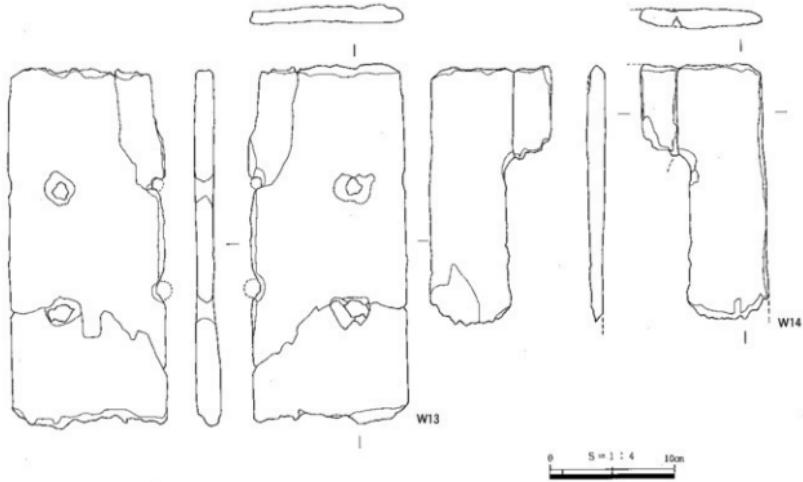
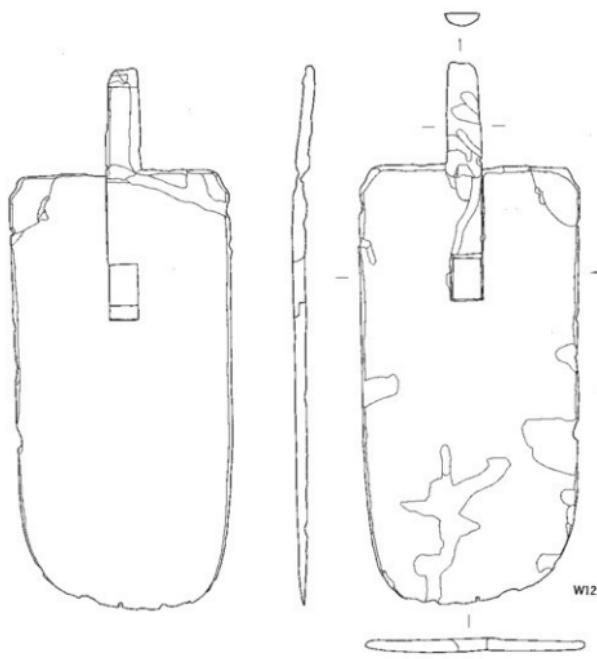
第29図が遺構内から出土した遺物である。208は須恵器の皿で、底部に墨書が確認された。判読しにくいが「堤」ないし「綻」と読める。また、底部には回転糸切り痕が残る。8世紀後半に比定できる。209は弥生時代中期、210は弥生時代後期の土器、211、212は弥生土器の底部である。
(平木)

SD-03 (第28・30・31図)

SD-04上に重複する水路である。西肩はほとんどが調査区外にかかるため不明である。規模はSD-04よりもやや大きく、幅約6.0m前後である。SD-04と重複するため正確な深さを把握しきれなかったが、約80cm程度と思われる。堆積は細砂と粗砂、粘土の互層で、レンズ状に堆積していた。底面直上付近と思われる堆積中には、多くの流木に混ざって木製品が溜まっていた。一方で、土器の出土は皆無に近い状況であった。

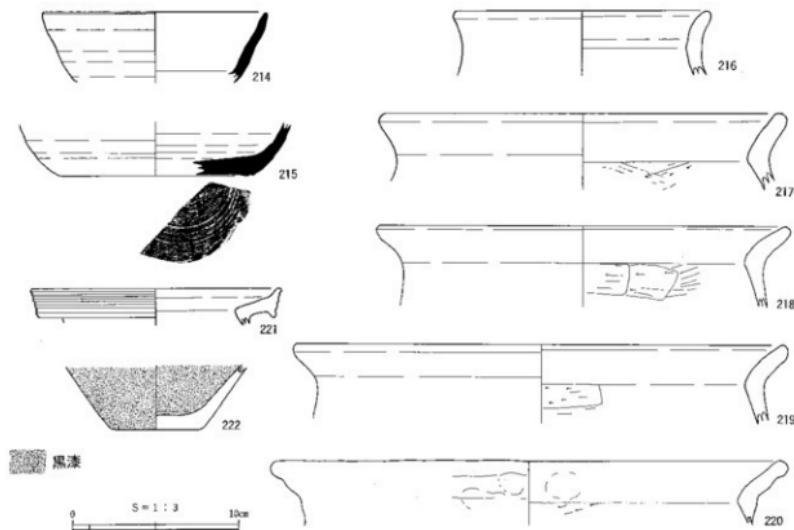
第30図W1～W6は所謂ナスピ形着柄鍤である。W7は櫛と思われる。第31図W8は有頭の木製品で、一部に抉りが施されている。W9は杭であろう。W10は人形木製品である。第31図213は弥生時代後期後業の変形土器口縁部片である。

遺構の埋没時期は、遺構内埋土の堆積状況、そして遺物の出土状況から、短時間で埋没したものとは考えがたい。遺構内埋土の上位から律令期のものと思われる人形(W10)が出土していること、当遺構面を埋める第4層に包含されている遺物が8世紀代に比定できることから、最終的に奈良時代には埋没していたものと考えられる。おそらく、レンズ状の互層堆積から判断すると、古墳時代前期から奈良時代にかけて徐々に堆積が進んだものと思われる。
(平木)



0 5 = 1 : 4 10cm

第33図 第2造構面出土遺物



第34図 第4-2層出土遺物1

SK-O1 (第28・32図)

南東側が削平され、全形は不明である。短軸約1.6m、深さ約0.25mを測る土坑である。土坑内からは、木片に混ざって木箇（第32図W11）が1点出土した。しかし、この周辺には、これに関連すると思われる遺構は認められず、当遺構の性格も不明である。
(平木)

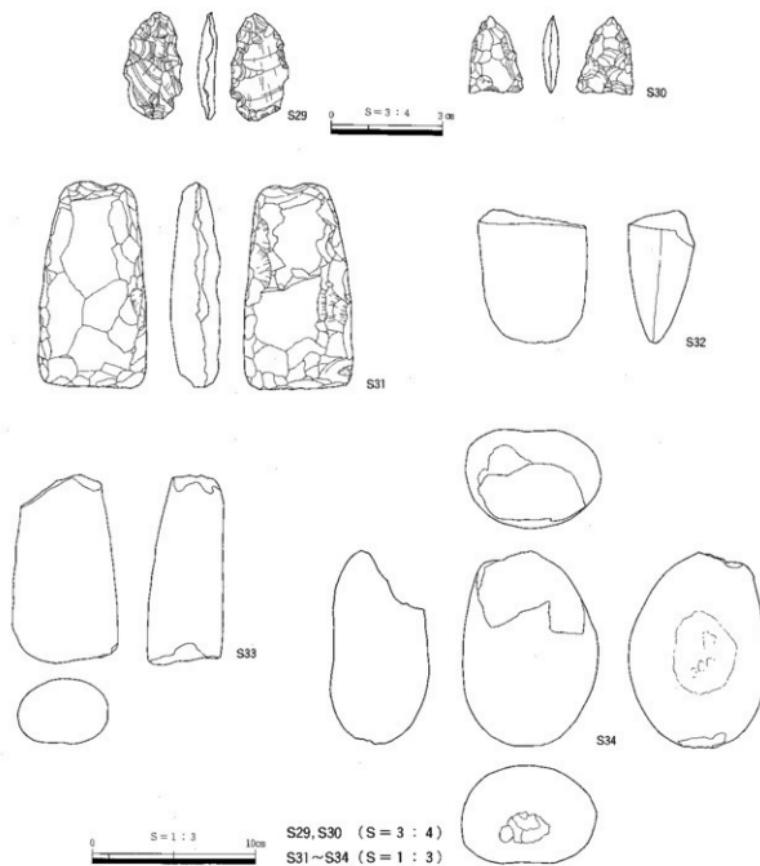
3. 遺構外出土の遺物 (第33・34・35・36・37図)

ここでは第2遺構面およびそれを埋める第4-1層、そして第4-2層から出土した遺物の概要について報告する。また、遺物は2次堆積と思われる状況を示していた。

第33図は、SD-O3検出時に出土した遺物である。W12は着柄軸と着柄穴があることから組合せ平鏡と思われる。W13は田下駄、W14は平鏡であろうか。

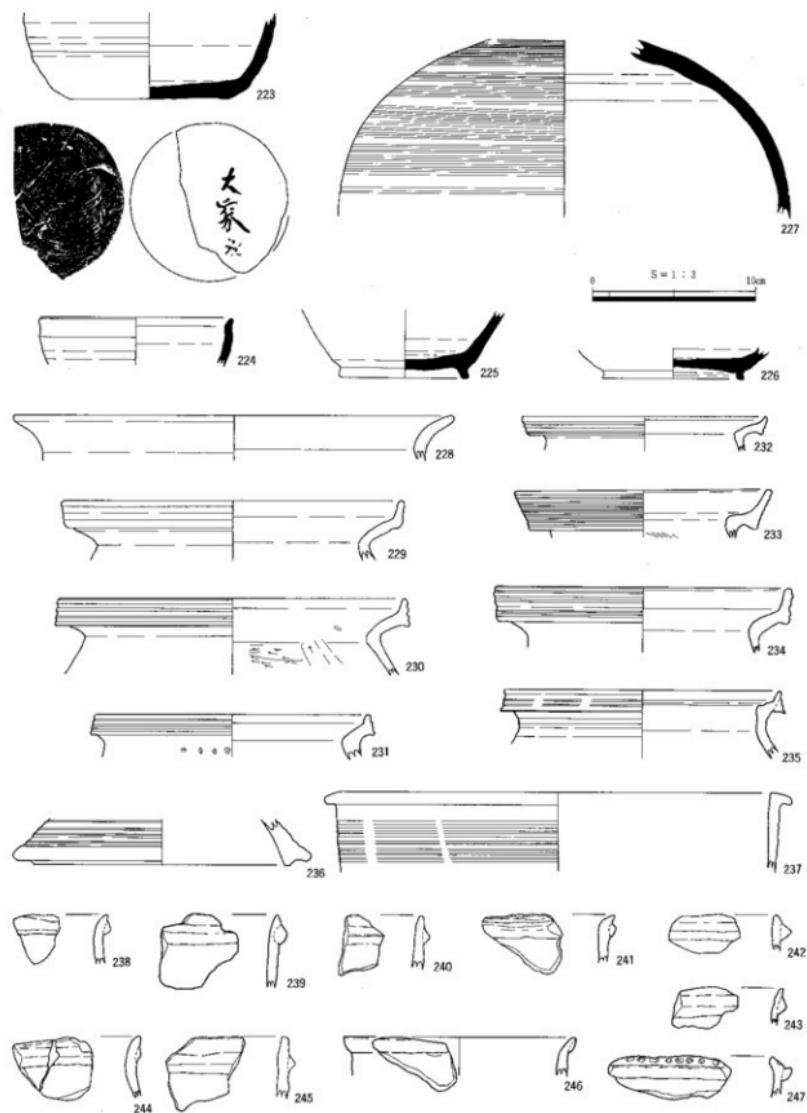
第34・35図は4-2層として取り上げた土器である。214、215は須恵器の杯で、後者は底部に糸切り痕が残る。215は8世紀後半に位置づけられる。216~220は土師器の壺、221は弥生時代後期の壺形土器口縁部片、222は弥生土器の底部片で、内外面に黒漆が塗布されている。第35図S29は石鎚とも思われるが、側面の片側に粗い加工を施し刃部を形成しており、削器であろう。S30は石鎚。S31は短冊形を呈す打製石斧で、縁辺部から粗い加工を施してある。S32は磨製石斧の刃部、S33は刃部を欠く磨製石斧、やや整形が難である。S34は敲石である。

第36・37図は調査時に第4-1層として一括で取り上げた遺物である。第36図223~227は須恵器である。223は杯身底部で、底面に回転糸切り痕を残す。また、底面には墨書が記されており、「大乘」ないし「大家」と読める。224は杯口縁部片。225、226は高台の付く杯底部である。いずれも8世紀後半に比定される。227は壺であろう。洞部画面にはカキ目が施される。228は土師器の壺である。229~235はいずれも弥生時代後期に比定される土器である。236は中期後葉の高壺の脚部、237は中期前葉の壺である。238~247は突帶文土器である。このう

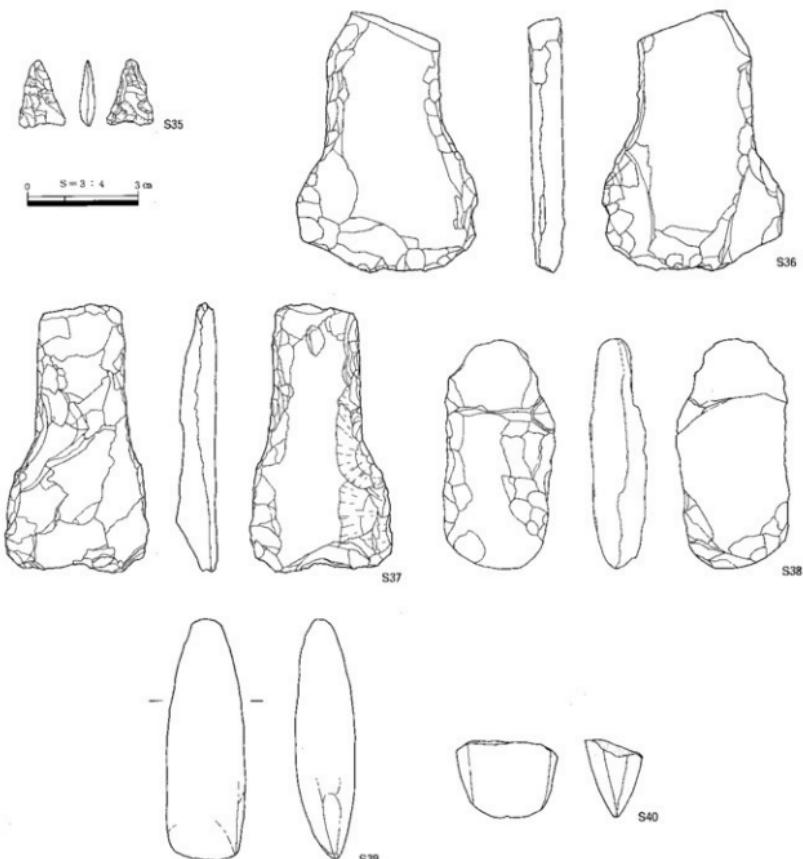


第35図 第4-2層出土遺物2

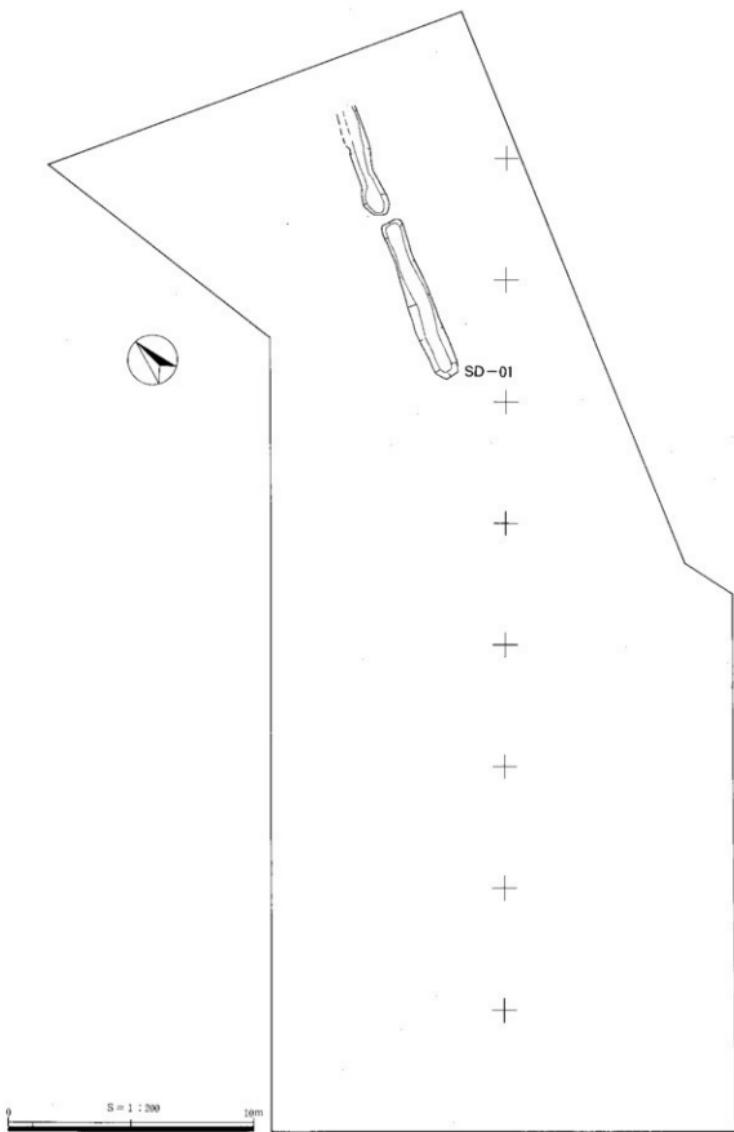
ち238-245は変形土器、246は壺形土器であろう。いずれも無刻目一条突帯文上器である。247は鉢と思われるが、無刻目突帯直上に円形の連続刺突文が並ぶ。第37図S35は石錐である。S36、S37は撥形を呈す打製石斧、S38は短冊形を呈す打製石斧である。S39は磨製石斧、S40は磨製石斧の刃部である。
(濱田)



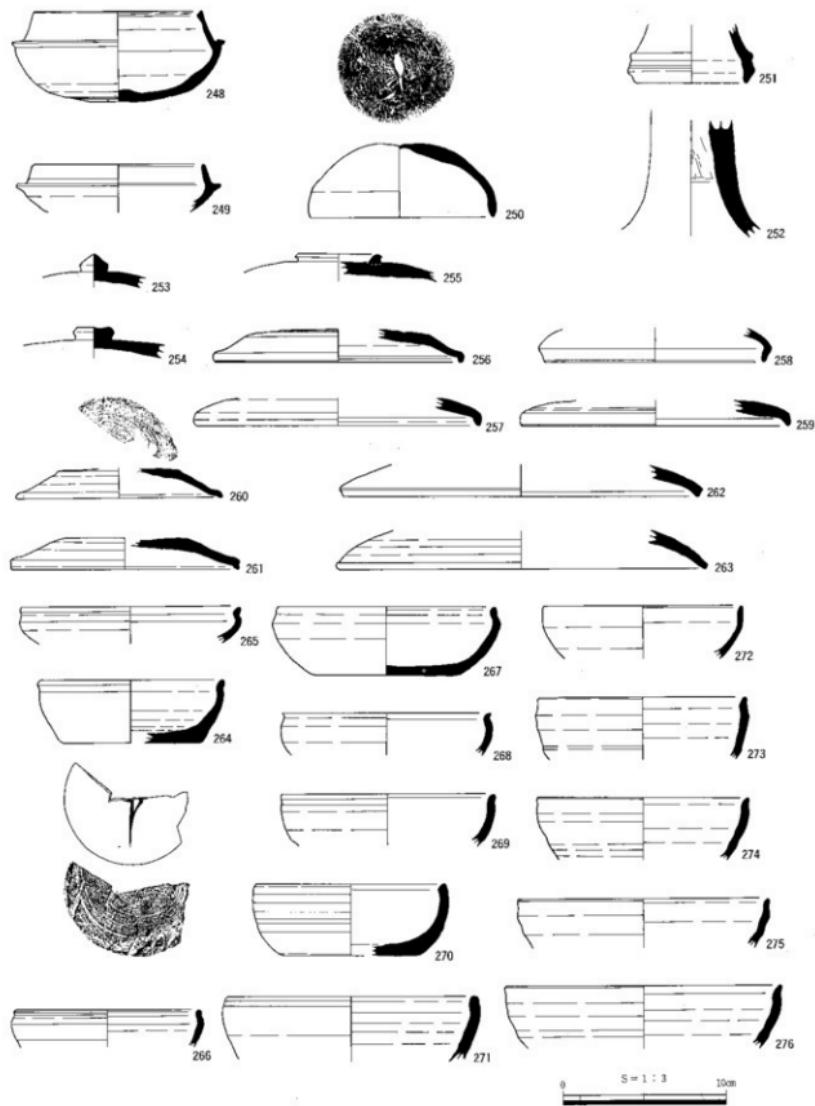
第36図 第4-1層出土遺物 1



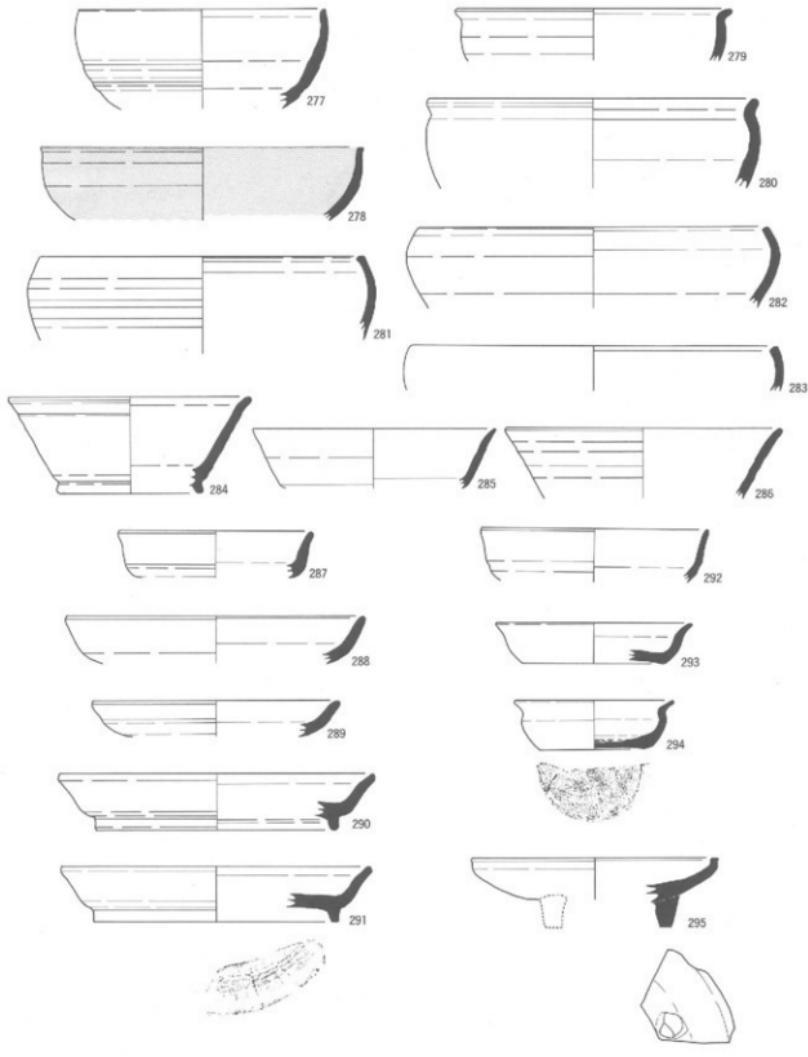
第37図 第4-1層出土遺物2



第38図 中近世・第1遺構面全体図

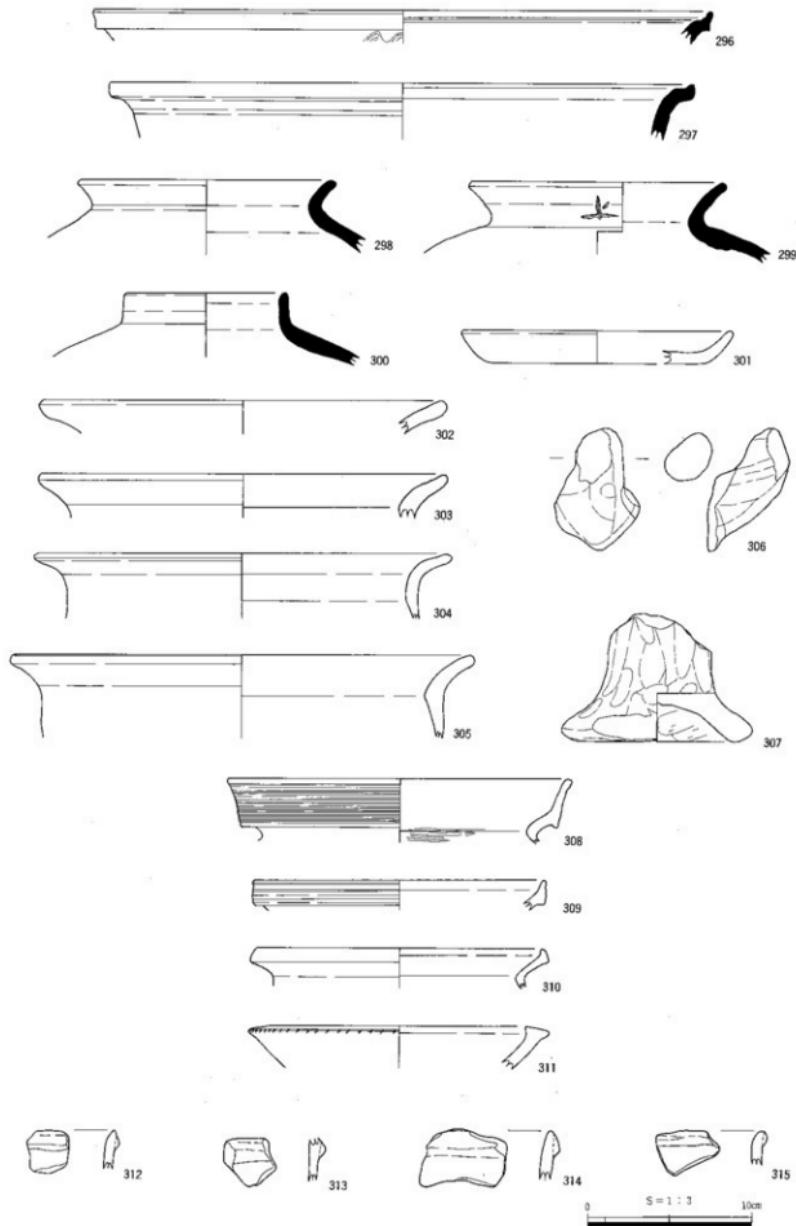


第39図 第2層出土遺物 1

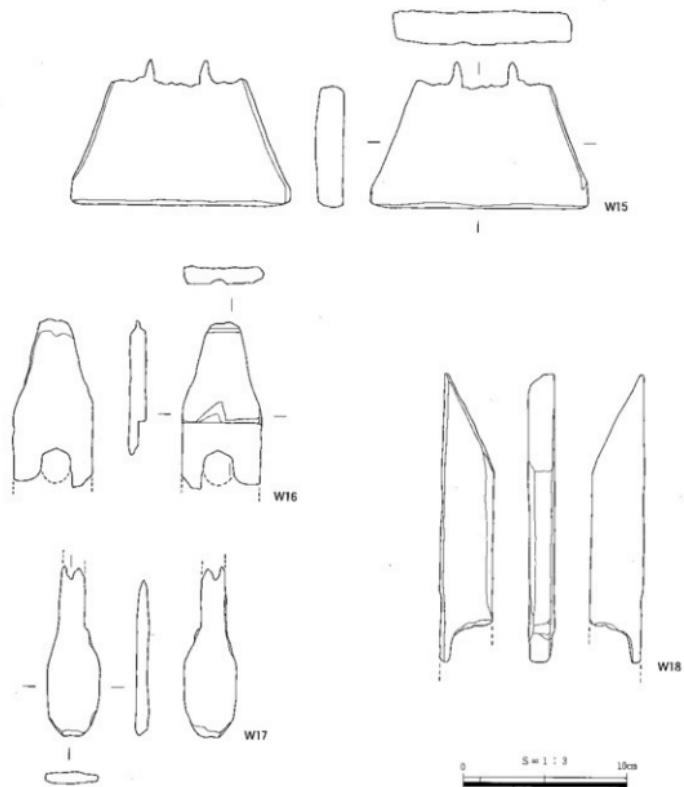


0 S = 1 : 3 16cm

第40図 第2層出土遺物2



第41図 第2層出土遺物 3



第42図 第2層出土遺物4

第6節 中・近世（第1遺構面）の調査

1. 概要（第38図）

第2層除去後に検出した面を第1遺構面とした。全体的にフラットで安定した面であった。馬の鍛鉄のような跡が遺構面で確認できることから、この面で何らかの耕作が行われていたものと考えられよう。（図版3-3・4）ただし、鉢、畦畔などを検出することはできなかった。

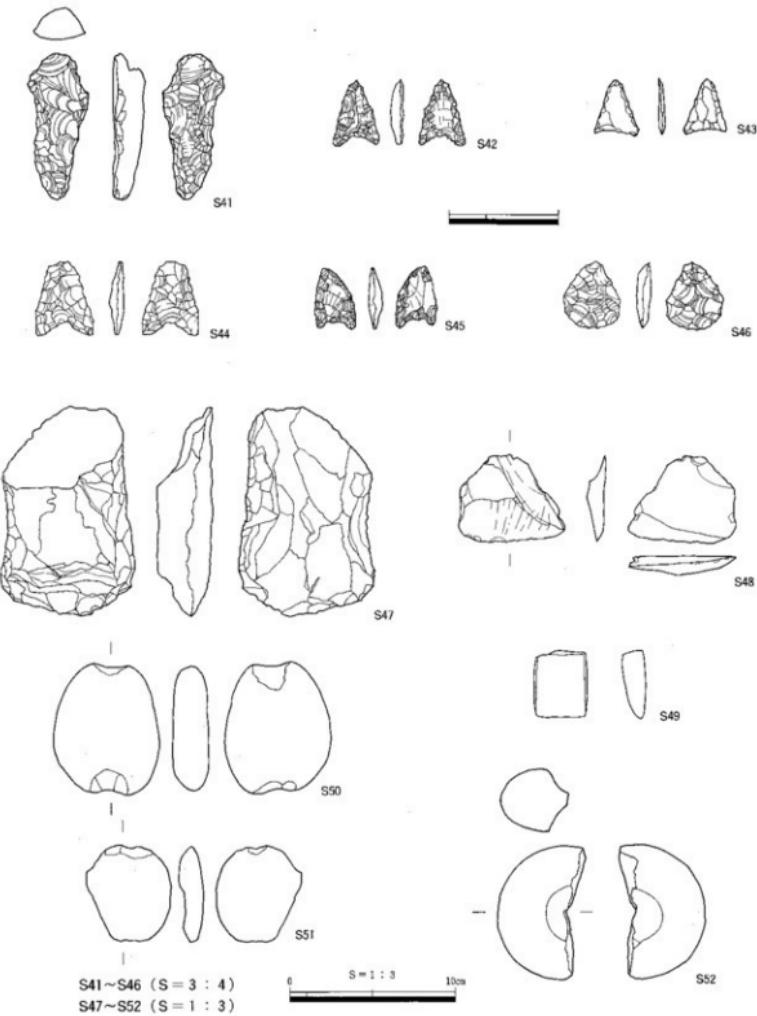
（平木）

2. 遺構と遺物

SD-01（第38図）

調査区の北東部で検出した溝で、幅約1m、深さ約0.2mで、南北方向に延びる。遺構は南に向かうにつれ上部が失われる。埋土中には岩盤と同質の礫が混在する状況であった。遺物は、弥生時代から近世に至る土器小片が少量含まれていた。遺構の時期は特定し難い。

（平木）



第43図 第2層出土遺物5

3. 遺構外出土の遺物（第39・40・41・42・43図）

ここでは、第1遺構面を埋める第2層から出土した遺物について概略する。第2層中には弥生時代から近に至る幅広い時期の遺物が包含されていた。ここでは、量的に最もも多い須恵器を中心に取り上げ、中・近世の土器については、第6次調査第1遺構面、第5層出土遺物と内容的に大差ないことから、紙数の都合上、割愛させていただく。

第39図248～第41図300は須恵器である。248、249は杯身、250は杯蓋、251、252は高壺の脚部である。248、251は6世紀前葉、249は6世紀後葉、250は7世紀前葉から中葉に比定されよう。253～263は杯蓋である。ほとんどのものに本来はつまみが付くものと思われるが、天井部まで残るものは少ない。擬宝珠つまみ、環状のつまみが認められる。260の天井部には糸切り痕が未調整のまま残る。258～259は7世紀末から8世紀前半、256、260～263は8世紀後半から9世紀に比定できる。253～255も8世紀代であろう。

264～276は杯である。264は底部に糸切り痕をとどめ、なおかつ墨書きも認められるが、欠損のため判読でない。284～286は高台の付く杯で、口縁部が直線的に聞く類である。277～280は碗ないし鉢であるが、杯と碗・鉢を厳密に区別するのはここでは困難である。278は外面ともに赤漆が塗布される。281～283は、口縁部が内湾し、端部が面取りされるもので、いわゆる鉄鉢形土器である。284は高台のつく椀、285、286も同様と思われる。287～294は皿である。293、294は口縁部が外反ないしく字状に屈曲する類で、294は底面に糸切り痕が残る。295は盤もしくは皿で、足がつく。おそらく3足を数えると思われる。周辺地域での類例は知らない。以上、鉢、碗、皿類の主体は8世紀後半にある。また、296～299は甕、300は壺である。299の口縁部には「上」とヘラ書きされている。

この他に、土師器、弥生土器が出土している。第41図301～306は土師器で、301は皿、302～305は甕。306は瓶の把手、307は十製支脚である。308、309は弥生時代後期、310、311は弥生時代中期の土器、312～315は無刻目突蒂文土器である。

第42図は第2層出土の木製品で、いずれも中・近世のものと考えられる。W15は台などの脚部と思われ、組合せのための軸が2本残る。W16～W18については、製品もしくは製品を成す一部分と思われるが、不明である。

第43図は第2層出土の石器である。S41は削器もしくは石錐か。S42～S46は石鎌で、凹基式（S43～S45）、と凸基式（S46）に大別できる。S47は打製石斧の刃部である。S48は打製の石包丁であろう。刃部はよく磨かれている。S49は扁平片刃石斧、S50、S51は石錐である。S52は円形の礫で、両面の中央部が擂鉢状に深く窪む。

（濱田）

日久美遺跡第5次調査 土器観察表

1. ここでは、縄文土器、弥生土器について観察を行った。
2. 法量については、口径、頸径、胴部径、底径、場合によっては脚部径を計測した。
3. 反転復元による推定値は()で示した。
4. 胎土、焼成については記号で、以下のように表記した。

胎土：密1 やや粗2 粗3 (砂粒の量 多く含む+ 含む土 少量含む-)

焼成：堅1 硬質2 良好3 やや軟質4 軟質5

遺物番号	挿図 図版	出土地区 遺構	出土層位	法量	特徴	胎土 焼成	色調	備考
1	10	SK03	埋土中	口径 (17.0)	弥生土器。壺形土器口縁部片。内外面ともにナデ調整。	2±3	黄灰褐色	
2	11 4	—	弥生前期	口径 (17.5) 頸径 (13.0)	弥生土器。壺形土器口縁部片。口縁端部は面取り、口縁部界に皮を形成する。内外面ナデ調整。	2±3	暗褐色	
3	11 4	—	弥生前期	口径 (23.5) 頸径 (19.0)	弥生土器。壺形土器口縁部片。口縁端部は丸くおさめる。口縁部界は辯錐状の段を形成する。内外面ナデ調整。	2±3	暗褐色	
4	11	—	弥生前期	口径 (21.0)	弥生土器。壺形土器口縁部片。口縁端部は丸くおさめる。内外面ナデ調整。	2±3	明褐色	
5	11	—	弥生前期	口径 (21.5)	弥生土器。壺形土器口縁部片。口縁端部は面取り気味に丸くおさめる。ナデ調整。	2±3	淡褐色	
6	11	—	弥生前期	口径 (28.0) 頸径 (24.0)	弥生土器。鉢形土器。緩やかに外反する口縁部をもつ。内外面ともナデ調整か。	2±3	暗褐色	
7	11	—	弥生前期	頸径 (19.5)	弥生土器。浅鉢形土器。肩部からやや外反気味に口縁が立ち上がる。外面胴部ミガキ、口縁部ナデ、内面ナデ調整。	2±3	淡褐色	
8	11	—	弥生前期	底径 (6.0)	弥生土器。高环形上腹脚部。内外面とともにナデ調整。	2±3	淡褐色	
9	11	—	弥生前期	口径 (25.0) 頸径 (22.0)	弥生土器。壺形土器。口縁端部は面取りされ、全面に刻目が施される。内外面ともナデ調整か。外面には煤が付着。	2±3	灰褐色	
10	11 4	—	弥生前期	口径 (26.0) 頸径 (24.0)	弥生土器。壺形土器口縁部片。口縁端部は丸くおさめ、端部のやや下によりにしつらうとした刻目を施す。肩部下には2条の辯錐が施される。内外面ともナデ調整、外面には炭化物が多量に付着。	2±3	淡褐色	
11	11	—	弥生前期	口径 (23.0) 頸径 (21.5)	弥生土器。壺形土器口縁部片。口縁端部は丸くおさめる。内外面ナデ調整。外側に少量煤が付着。	2±3	淡褐色	
12	11	—	弥生前期	口径 (23.0) 頸径 (20.5)	弥生土器。壺形土器口縁部片。口縁端部は丸くおさめる。内外面ナデ調整。	2±3	淡褐色	
13	11	—	弥生前期	口径 (29.0) 頸径 (27.0)	弥生土器。壺形土器口縁部片。口縁端部は丸くおさめる。内外面ナデ調整。外側に煤が付着有り。	2±2	淡褐色	
14	12 4	—	弥生前期	—	突帯文土器。壺形土器。や面取り気味に丸くおさめた口縁端部から、下がった位置に断面三角形の刻目突帯がめぐる。刻目は二字を呈す。内外面ナデ調整。	2±3	淡褐色	
15	12 4	—	弥生前期	—	突帯文土器。壺形土器。丸くおさめた口縁端部から下がった位置に断面三角形の刻目突帯がめぐる。刻目はV字に近いD字状。内外面ナデ調整。外面煤付着。	2±3	暗褐色	
16	12	—	弥生前期	—	突帯文土器。壺形土器。丸くおさめた口縁端部から下がった位置に断面三角形の刻目突帯がめぐる。刻目はD字状。内面ナデ調整。外面煤付着。	2±3	暗褐色	
17	12	—	弥生前期	—	突帯文土器。壺形土器。丸くおさめた口縁端部から下がった位置に断面下さがりの三角形を呈す刻目突帯がめぐる。ナデ調整。刻目はD字状。	2±3	淡褐色	
18	12	—	弥生前期	—	突帯文土器。壺形土器。口縁端部からやや下がった位置に刻目突帯がめぐる。刻目はしつらうとしたV字状。内外面ナデ調整。	2±3	淡褐色	
19	12	—	弥生前期	—	突帯文土器。壺形土器。丸くおさめた口縁端部から下がった位置に断面下さがりの三角形を呈す刻目突帯がめぐる。ナデ調整。刻目はD字状。	2±3	暗灰褐色	

遺物番号	攝取 図版	出土地区 遺構	出土層位	法量	特徴	胎土 焼成	色調	備考
20	12	—	弥生前期	—	突帯文土器。彌形土器。新面尖形を呈す口縁部から下がった位置に断面三角形の刻目突帯がめぐる。刻目はV字状。調整は不明。	2± 3	淡褐色	
21	12	—	弥生前期	—	突帯文土器。彌形土器。丸くおさめた口縁端部から下がった位置に断面三角形の刻目突帯がめぐる。刻目はV字状。調整はナデ調整。外面に煤付着。	2- 3	暗褐色	
22	12	—	弥生前期	—	突帯文土器。彌形土器。断面三角形の突帯が口縁端部にはば接してつく。刻目はD字状を呈す。外面は付し、擦痕の残るナデ、内面粗いナデ。外面に煤付着。	2- 3	暗褐色	
23	12	—	弥生前期	—	突帯文土器。彌形土器。口縁端部に接して断面下がりの刻目突帯がめぐる。刻目はV字状。内外面ナデ調整、外面に煤付着。	2± 3	淡褐色	
24	12 4	—	弥生前期	—	突帯文土器。彌形土器。口縁端部からやや下がった位置に断面三角形の刻目突帯がめぐる。刻目はV字を呈す。内外面ナデ調整。	2+ 3	暗褐色	
25	12	—	弥生前期	—	突帯文土器。彌形土器。口縁端部に接して断面丸形の刻目突帯がめぐる。刻目は切り込みのようなV字状。外側ナデ調整。	2+ 3	暗灰褐色	
26	12	—	弥生前期	—	突帯文土器。彌形土器。口縁端部にはば接して刻目突帯がめぐる。刻目は棒状工具で削突したような刻みである。内外面ナデ調整、外面に少量焦が付着。	2- 3	淡褐色	
27	12 4	—	弥生前期	—	突帯文土器。彌形土器。口縁端部からやや下がった位置に断面下がりの刻目突帯がめぐる。刻目は棒状工具による刻突か。外面一面に二枚貝条痕が認められる。内面ナデ調整。	2+ 3	暗灰褐色	
28	12	—	弥生前期	—	突帯文土器。彌形土器。口縁端部よりやや下がった位置に斜面突帯がめぐる。刻目は割としつかりしたD字状。外側ナデ、外面に煤付着。内面は条痕が認められる。	2- 3	淡褐色	
29	12 4	—	弥生前期	11種 (40.5)	突帯文土器。彌形土器。口縁端部にはば接して断面下がりの刻目突帯がめぐる。刻目はV字状。外面粗い擦痕の残るナデ、内面ナデ調整。外面に煤付着。	2+ 3	暗褐色	
30	12 4	—	弥生前期	—	突帯文土器。彌形土器。やや外反気味の口縁をもち、口縁端部から下がった位置に断面三角形の刻目突帯がめぐる。刻目は切り込みのようなV字状。外側粗い擦痕の残るナデ、内面丁寧なナデ調整。外面煤付着。	2- 3	暗灰褐色	
31	12 4	—	弥生前期	—	突帯文土器。彌形土器。やや外反気味の口縁をもち、口縁端部から下がった位置に断面三角形の刻目突帯がめぐる。刻目は切り込みのようなV字状。内外面ナデ調整。外面に煤が付着。	2± 3	暗褐色	
32	12	—	弥生前期	—	突帯文土器。彌形土器。やや外反気味の口縁をもち、口縁端部から下がった位置に斜面突帯がめぐる。刻目はV字状。内外面ナデ調整。外面に煤が付着。	2- 3	灰褐色	
33	12	—	弥生前期	—	突帯文土器。彌形土器。やや外反気味の口縁をもち、口縁端部から下がった位置に断面三角形の刻目突帯がめぐる。刻目はV字状。内外面ナデ調整。外面煤付着。	2± 3	淡褐色	
34	12	—	弥生前期	—	突帯文土器。彌形土器。やや外反気味の口縁をもち、口縁端部から下がった位置に断面一角形の刻目突帯がめぐる。刻目は切り込みのようなV字状。内外面ナデ調整。外面に多量の擦化物が付着。	2± 3	暗褐色	
35	12 4	—	弥生前期	—	突帯文土器。彌形土器。やや外反気味の口縁をもち、口縁端部から下がった位置に斜面突帯がめぐる。刻目は切り込みのようなV字状。外側粗い擦痕の残るナデ、内面ナデ調整。内焼接合が観察できる。	2± 3	暗褐色	
36	12	—	弥生前期	—	突帯文土器。彌形土器。口縁端部を欠損するが、端部よりや下がった位置に突帯がめぐると思われる。口縁は外反気味。刻目はV字状。内外面ナデ調整。外面煤付着。	2+ 3	暗褐色	
37	12	—	弥生前期	—	突帯文土器。彌形土器。外反気味の口縁をもち、口縁端部からなり下がった位置に突帯がめぐる。刻目は棒状工具による刻突か。内面ナデ調整。	2± 3	黄褐色	

遺物番号	辨認 図版	出土地区 遺構	出土層位	法量	特徴	胎土 焼成	色調	備考
38	12	—	弥生前期	—	二条突帯文土器の肩薄部。斜口突帯が肩部にめぐる。肩部はV字状。内外面ナデ調整。外側に縦付着。	2— 3	黄褐色	
39	13 4	—	弥生前期	—	弥生文土器。菱形土器。断面三角形の無刻目突帯が口縁端部にはば接して貼付られる。内面二枚貝条痕後ナデ、内面ナデ調整である。	2± 3	暗黄褐色	
40	13	—	弥生前期	—	弥生文土器。菱形土器。断面三角形の無刻目突帯が口縁端部にはば接して貼付される。内外面ナデ調整。	2— 3	灰灰褐色	
41	13	—	弥生前期	—	弥生文土器。菱形土器。断面三角形の無刻目突帯が口縁端部にはば接して貼付される。内外面ナデ調整。	2— 3	黄褐色	
42	13	—	弥生前期	—	弥生文土器。菱形土器。断面三角形の無刻目突帯が口縁端部にはば接して貼付される。内外面ナデ調整。縦付着。	2± 3	暗褐色	
43	13	—	弥生前期	—	弥生文土器。菱形土器。断面三角形の無刻目突帯が口縁端部にはば接して貼付される。内外面ナデ調整。	2± 3	黄褐色	
44	13	—	弥生前期	—	弥生文土器。菱形土器。断面三角形の無刻目突帯が口縁端部にはば接して貼付される。内外面ナデ調整。	2+ 3	淡褐色	
45	13	—	弥生前期	—	弥生文土器。菱形土器。断面三角形の無刻目突帯が口縁端部にはば接して貼付される。内外面ナデ調整。外側縦付着。	2± 3	暗褐色	
46	13 4	—	弥生前期	—	弥生文土器。菱形土器。断面下さがりを呈す無刻目突帯が口縁端部に接して貼付される。内外面ナデ調整。	2± 3	灰灰褐色	
47	13 4	—	弥生前期	—	弥生文土器。菱形土器。断面下さがりを呈す無刻目突帯が口縁端部に接して貼付される。内外面二枚貝条痕、外側縦付着。	2± 3	暗黄褐色	
48	13	—	弥生前期	—	弥生文土器。菱形土器。断面下さがりを呈す無刻目突帯が口縁端部に接して貼付される。内外面ナデ調整。外側縦付着。	2— 3	暗褐色	
49	13	—	弥生前期	—	弥生文土器。菱形土器。断面下さがりを呈す無刻目突帯が口縁端部に接して貼付される。内外面ナデ調整。外側縦付着。	2— 3	淡褐色	
50	13	—	弥生前期	—	弥生文土器。菱形土器。断面下さがりを呈す無刻目突帯が口縁端部に接して貼付される。内外面ナデ調整。穿孔有り。	2— 3	淡黄褐色	
51	13	—	弥生前期	—	弥生文土器。菱形土器。断面下さがりを呈す無刻目突帯が口縁端部に接して貼付される。内外面ナデ調整。	2± 3	淡褐色	
52	13	—	弥生前期	—	弥生文土器。菱形土器。断面下さがりを呈す無刻目突帯が口縁端部に接して貼付される。内外面ナデ調整。	2± 3	灰褐色	
53	13	—	弥生前期	—	弥生文土器。菱形土器。断面丸形の無刻目突帯が口縁端部に接して貼付される。内外面ナデ調整。	2± 3	暗黄褐色	
54	13	—	弥生前期	—	弥生文土器。菱形土器。断面丸形の無刻目突帯が口縁端部に接して貼付される。内外面ナデ調整。	2— 3	暗黄褐色	
55	13	—	弥生前期	—	弥生文土器。菱形土器。断面丸形の無刻目突帯が口縁端部にはば接して貼付される。内外面ナデ調整。	2— 3	黄褐色	
56	14 4	—	弥生前期	—	弥生文土器。菱形土器。断面三角形の無刻目突帯が口縁端部から下がった位置に貼付される。内外面ナデ調整。	2± 3	淡褐色	
57	15 4	—	弥生前期	—	弥生文土器。菱形土器。断面三角形の無刻目突帯が口縁端部から下がった位置に貼付される。外側粗い擦痕の残るナデ、内面ナデ調整。	2— 3	淡褐色	
58	14 4	—	弥生前期	—	弥生文土器。菱形土器。断面三角形の無刻目突帯が口縁端部から下がった位置に貼付される。内外面ナデ調整。	2± 3	青褐色	
59	14	—	弥生前期	—	弥生文土器。菱形土器。断面三角形の無刻目突帯が口縁端部から下がった位置に貼付される。内外面ナデ調整。	2— 3	灰灰褐色	
60	14	—	弥生前期	—	弥生文土器。菱形土器。断面三角形の無刻目突帯が口縁端部から下がった位置に貼付される。内外面ナデ調整。	2± 3	淡褐色	

遺物番号	種類 図版	出土地区 遺構	出土層位	法量	特徴	胎土 焼成	色調	備考
61	14	—	弥生前期	—	安帝文土器。壺形土器。断面三角形の無刻目 突帯が口縁端部から下がった位置に貼付られ る。内外面ナデ調整。	2— 3	淡褐色	
62	14	—	弥生前期	—	安帝文土器。壺形土器。断面三角形の無刻目 突帯が口縁端部から下がった位置に貼付られ る。外面ナデ調整。外面蝶付着。	2± 3	淡褐色	
63	14	—	弥生前期	—	安帝文土器。壺形土器。断面三角形の無刻目 突帯が口縁端部から下がった位置に貼付られ る。外面ナデ調整。	2± 3	淡褐色	
64	14	—	弥生前期	—	安帝文土器。壺形土器。断面三角形の無刻目 突帯が口縁端部から下がった位置に貼付られ る。内外面ナデ調整。	2— 3	灰褐色	
65	14 4	—	弥生前期	—	安帝文土器。壺形土器。断面三角形の無刻目 突帯が口縁端部から下がった位置に貼付られ る。外面は粗い擦れの残るナデ、内面ナデ調 整。内傾接合。外側に蝶付着。	2± 3	暗褐色	
66	14 5	—	弥生前期	—	安帝文土器。壺形土器。断面三角形の無刻目 突帯が口縁端部から下がった位置に貼付られ る。内外面ナデ調整。	2— 3	黄褐色	
67	14	—	弥生前期	—	安帝文土器。壺形土器。断面三角形の無刻目 突帯が口縁端部から下がった位置に貼付られ る。外面ナデ調整。外面蝶付着。	2± 3	黄褐色	
68	14 5	—	弥生前期	—	安帝文土器。壺形土器。断面三角形の無刻目 突帯が口縁端部から下がった位置に貼付られ る。内外面ナデ調整。	2± 3	淡灰褐色	
69	14	—	弥生前期	—	安帝文土器。壺形土器。断面三角形の無刻目 突帯が口縁端部から下がった位置に貼付られ る。内外面ナデ調整。	2± 3	黄褐色	
70	14	—	弥生前期	—	安帝文土器。壺形土器。断面三角形の無刻目 突帯が口縁端部から下がった位置に貼付られ る。内外面ナデ調整。	2— 3	灰褐色	
71	14	—	弥生前期	—	安帝文土器。壺形土器。断面三角形の無刻目 突帯が口縁端部から下がった位置に貼付られ る。内外面ナデ調整。	2± 3	暗褐色	
72	14	—	弥生前期	—	安帝文土器。壺形土器。断面三角形の無刻目 突帯が口縁端部から下がった位置に貼付られ る。内外面ナデ調整。外面蝶付着。	2— 3	黄褐色	
73	14	—	弥生前期	—	安帝文土器。壺形土器。断面二角形の無刻目 突帯が口縁端部から下がった位置に貼付られ る。内外面ナデ調整。	2± 3	淡褐色	
74	14	—	弥生前期	—	安帝文土器。壺形土器。断面三角形の無刻目 突帯が口縁端部から下がった位置に貼付られ る。内外面ナデ調整。	2± 3	暗褐色	
75	14	—	弥生前期	—	安帝文土器。壺形土器。断面三角形の無刻目 突帯が口縁端部から下がった位置に貼付られ る。内外面ナデ調整。	2— 3	淡褐色	
76	14	—	弥生前期	—	安帝文土器。壺形土器。断面三角形の無刻目 突帯が口縁端部から下がった位置に貼付られ る。内外面ナデ調整。外面蝶付着。	2— 3	黄褐色	
77	14	—	弥生前期	—	安帝文土器。壺形土器。断面三角形の無刻目 突帯が口縁端部から下がった位置に貼付られ る。内外面ナデ調整。	2± 3	黄褐色	
78	14 5	—	弥生前期	—	安帝文土器。壺形土器。断面三角形の無刻目 突帯が口縁端部から下がった位置に貼付られ る。内外面ナデ調整。	2— 3	淡灰褐色	
79	14	—	弥生前期	—	安帝文土器。壺形土器。断面三角形の無刻目 突帯が口縁端部から下がった位置に貼付られ る。内外面ナデ調整。	2± 3	淡褐色	
80	14	—	弥生前期	—	安帝文土器。壺形土器。断面下さがりの三角 形を呈す無刻目突帯が口縁端部から下がった 位置に貼付られる。内外面ナデ調整。	2— 3	淡褐色	
81	14	—	弥生前期	—	安帝文土器。壺形土器。断面下さがりの三角 形を呈す無刻目突帯が口縁端部から下がった 位置に貼付される。内外面ナデ調整。	2± 3	灰褐色 淡褐色	
82	14	—	弥生前期	—	安帝文土器。壺形土器。断面下さがりの三角 形を呈す無刻目突帯が口縁端部から下がった 位置に貼付される。外面二枚貝朱漬、内面ナ デ調整。外面蝶付着。	2± 3	淡灰褐色	

遺物番号	神國 区段	出土地区 遺構	出土層位	法量	特徴	胎土 焼成	色調	備考
83	14	—	弥生前期	—	安帝文土器。甕形土器。断面や下さがりの三角形を呈す無刻目突帯が口縁端部から下がった位置に貼付られる。内外面ナデ調整。内面煤、炭化物付着。	2± 3	灰褐色	
84	14	—	弥生前期	—	安帝文土器。甕形土器。断面下さがりの三角形を呈す無刻目突帯が口縁端部から下がった位置に貼付される。内外面ナデ調整。	2± 3	黄褐色	
85	14	—	弥生前期	—	安帝文土器。甕形土器。断面下さがりの三角形を呈す無刻目突帯が口縁端部から下がった位置に貼付される。内外面ナデ調整。	2± 3	淡褐色	
86	14	—	弥生前期	—	安帝文土器。甕形土器。断面丸みをもつ三角形を呈す無刻目突帯が口縁端部から下がった位置に貼付される。内外面ナデ調整。外面煤付着。	2± 3	暗黄褐色	
87	14	—	弥生前期	—	安帝文土器。甕形土器。断面丸形の無刻目突帯が口縁端部から下がった位置に貼付される。内外面ナデ調整。	2+ 3	暗褐色	
88	14	—	弥生前期	—	安帝文土器。甕形土器。断面丸形の無刻目突帯が口縁端部から下がった位置に貼付される。内外面ナデ調整。	2— 3	黄褐色	
89	14	—	弥生前期	—	安帝文土器。甕形土器。断面丸形の無刻目突帯が口縁端部から下がった位置に貼付される。内外面ナデ調整。	2+ 3	淡褐色	
90	15 5	—	弥生前期	口径 (22.5)	安帝文土器。甕形土器。短く粗歛する口縁端部から下がった位置に断面三角形の無刻目突帯がめぐる。内外面ナデ調整、外面に煤が付着。	2— 3	黄褐色	
91	15	—	弥生前期	—	安帝文土器。甕形土器。やや外反気味の口縁をもち、口縁端部から下がった位置に断面三角形の無刻目突帯がめぐる。外面粗い無孔の残るナデ、内面ナデ調整。外面上に煤が付着。	2— 3	暗黄褐色	
92	15 5	—	弥生前期	口径 (33.0)	安帝文土器。甕形土器。短く粗歛する口縁をもち、口縁端部から下がった位置に断面三角形の無刻目突帯がめぐる。内外面ともにナデ調整。	2+ 3	暗褐色	
93	15 5	—	弥生前期	—	安帝文土器。甕形土器。短く粗歛する口縁をもち、口縁端部から下がった位置に断面三角形の無刻目突帯がめぐる。外面粗い無孔の残るナデ調整。内面ナデ調整。外面上に煤が付着。	2± 3	暗黄褐色	
94	15 5	—	弥生前期	—	安帝文土器。甕形土器。やや外反気味の口縁をもち、口縁端部から下がった位置に断面三角形の無刻目突帯がめぐる。内外面ともにナデ調整。	2— 3	淡褐色	
95	15 5	—	弥生前期	—	安帝文土器。甕形土器。外反する口縁をもち、口縁端部から下がった位置に断面三角形の無刻目突帯がめぐる。内外面ナデ調整。外面上に煤が付着。	2— 3	黄褐色	
96	15	—	弥生前期	—	安帝文土器。甕形土器。やや外反気味の口縁をもち、口縁端部から下がった位置に断面三角形の無刻目突帯がめぐる。内外面ナデ、外面上に煤付着。	2— 3	黄褐色	
97	15 5	—	弥生前期	—	安帝文土器。甕形土器。やや外反する口縁をもち、口縁端部から下がった位置に断面三角形の無刻目突帯がめぐる。内外面ナデ調整。	2— 3	黄褐色	
98	15	—	弥生前期	—	安帝文土器。甕形土器。外反する口縁をもち、口縁端部から下がった位置に断面三角形の無刻目突帯がめぐる。内外面ナデ調整。外面上に煤付着。	2+ 3	暗黄褐色	
99	15	—	弥生前期	—	安帝文土器。甕形土器。やや外反する口縁をもち、口縁端部から下がった位置に断面三角形の無刻目突帯がめぐる。内外面ナデ調整。	2— 3	黄褐色 暗灰褐色	
100	15	—	弥生前期	—	安帝文土器。甕形土器。短く粗歛する口縁をもち、口縁端部から下がった位置に断面三角形の無刻目突帯がめぐる。外線粗い無孔の残るナデ調整。内面ナデ調整。外面上に煤付着。	2± 3	暗黄灰褐色	
101	15	—	弥生前期	—	安帝文土器。甕形土器。曲面する口縁をもち、口縁端部からかなり下がった位置に断面三角形の無刻目突帯がめぐる。安帝の上下を強くナデしている。内外面ナデ調整。	2+ 3	黄灰褐色	

遺物番号	持國 國版	出土地区 遺物	出土層位	法 量	特 徴	胎土 焼成	色 調	備 考
102	15	—	弥生前期	—	突帯文土器。壺形上器。外反する口縁をもち、口縁端部からかなり下がった位置に断面三角形の無刻目突帯がめぐる。内外面ともナデ調整。	2± 3	黄褐色	
103	15	—	弥生前期	—	突帯文土器。壺形上器。やや外反する口縁をもち、口縁端部からかなり下がった位置に断面三角形の無刻目突帯がめぐる。内外面ともナデ調整。	2± 3	黄褐色	
104	15	—	弥生前期	—	突帯文土器。壺形上器。口縁端部からかなり下がった位置に断面三角形の無刻目突帯がめぐる。内外面ともナデ調整。	2± 3	暗褐色	
105	15	—	弥生前期	—	突帯文土器。壺形上器。口縁部からかなり下がった位置に断面三角形の無刻目突帯がめぐる。内外面ともナデ調整。	2± 3	淡褐色	
106	15	—	弥生前期	—	突帯文土器。壺形上器。口縁部からかなり下がった位置に断面三角形の無刻目突帯がめぐる。内外面ともナデ調整。	2± 3	暗褐色	
107	15	—	弥生前期	口径 (24.5)	突帯文土器。壺形上器。屈曲する口縁をもち、口縁端部からかなり下がった位置に断面三角形の無刻目突帯がめぐる。内外面ともナデ調整。	2± 3	淡褐色	
108	15	—	弥生前期	口径 (15.0)	突帯文土器。壺形上器。口縁端部に接して無刻目突帯が貼付される。内外面ナデ調整。	2± 3	黄褐色	
109	15	—	弥生前期	口径 (18.0)	突帯文土器。壺形上器か? 屈曲する口縁をもち、口縁端部からかなり下がった位置に断面三角形の無刻目突帯がめぐる。外面ナデ、内面粗い痕跡の残るナデ調整。	2± 3	暗褐色	
110	15 5	—	弥生前期	口径 (16.5)	突帯文土器。壺形上器。外反する口縁部をもち、下がった位置に断面偏平な三角形を呈す無刻目突帯がめぐる。内外面ナデ調整。	3	黄褐色	
111	15 5	—	弥生前期	—	突帯文土器。壺形上器。外反する口縁部をもち、下がった位置に断面二角形を呈す無刻目突帯がめぐる。外面刷毛目調整。内面數条の継ぎなへラ描きが認められる。	2± 3	暗褐色	
112	15	—	弥生前期	—	突帯文土器。壺形上器。口縁からやや下がった位置に断面三角形の無刻目突帯がめぐる。内外面ナデ調整。	2± 3	灰褐色	
113	15	—	弥生前期	—	突帯文土器。壺形上器か? 内傾する反口縁をもち、口縁端部から下がった位置に無刻目突帯がめぐる。内外面ナデ調整。	2± 3	淡褐色	
114	15 5	—	弥生前期	—	突帯文土器。壺形上器か? 内傾する反口縁をもち、口縁端部から下がった位置に無刻目突帯がめぐる。内外面ナデ調整。煤付着。	2± 3	暗褐色	
115	16 5	—	弥生前期	—	突帯文土器。壺形上器か? 外反する口縁部を呈し、2条の刻目突帯がめぐる。刻目はV字状。内外面丁寧なナデ。外面に煤付着。	2± 3	黄褐色	
116	16 5	—	弥生前期	—	突帯文土器。壺形上器。逆し字状に屈曲する口縁部をもち、その直下に刻目突帯がめぐる。口縁端部にも刻目あり。刻目はY字状。内外面ナデ調整。外面付着。	2± 3	暗褐色	
117	16	—	弥生前期	—	突帯文土器。壺形上器。面取りされた口縁端部から下がった位置に無刻目突帯がめぐる。内外面ナデ調整。	2± 3	淡褐色	
118	16 5	—	弥生前期	—	突帯文土器。口縁部に1条の無刻目突帯。胴部に接する無刻目突帯が施される。さらに断面圓筒形状の貼付円盤が施される。外面粗い痕跡のつくナデ、内面ナデ調整。外面に煤付着。	2± 3	暗褐色	
119	16 5	—	弥生前期	—	突帯文土器。達賀川系土器の折衷土器。面取りされた口縁端部からやや下がった位置に刻目突帯がめぐる。胴部には外形接合を利用した段が施されている。外面刷毛目調整、内面ナデ調整。外面に煤付着。	2± 3	黄褐色	
120	16	—	弥生前期	—	突帯文土器? 箕形土器。面取りする口縁端部から下がった位置に2条の連続した無刻目突帯がめぐる。1条の幅広の突帯の中心をナデすることで2条突帯を作りだす。内外面ナデ調整。	2± 3	淡黄灰褐色	

遺物番号	押印 既版	出土地区 遺構	出土層位	法量	特徴	胎土 焼成	色調	備考
121	16	—	弥生前期	—	突帯文土器？ 深鉢形土器。面取りする口縁部から下がった位置に2条の連續した無刻目突帯がめぐる。1条の幅広の突帯の中心をナゲすることで2条突帯を作りだす。内外面ナデ調整。	2-3	淡黄灰褐色	
122	17	—	弥生前期	口径 (44.5)	粗製土器。深鉢形土器。外面部底の残るナデ調整。内面ナデ調整。口縁部に穿孔有り。外周付着。	2+3	暗黄褐色	
123	17	—	弥生前期	口径 (45.5)	粗製土器。深鉢形土器。外面部底の残るナデ調整。内面ナデ調整。外周に保付着。	2+3	暗褐色	
124	17	—	弥生前期	口径 (40.5)	粗製土器。深鉢形土器。外面部底の残るナデ調整。内面ナデ調整。外周に保付着。	2+3	暗褐色	
125	17	—	弥生前期	—	粗製土器。深鉢形土器。外面部底の残るナデ調整。内面ナデ調整。外周に保付着。	2+3	暗褐色	
126	18	—	弥生前期	口径 (20.0)	粗製土器。深鉢形土器。外面部底の残るナデ調整。内面ナデ調整。内面に櫛状痕付着。外周付着。	2±3	黄褐色	
127	18	—	弥生前期	口径 (15.5)	粗製土器。深鉢形土器。外面部底の残るナデ調整。内面ナデ調整。外周に保付着。	2-3	暗褐色	
128	18	—	弥生前期	口径 (19.0)	粗製土器。深鉢形土器。外面部底の残るナデ調整。内面ナデ調整。外周に保付着。	2-3	黄褐色	
129	18	—	弥生前期	—	粗製土器。深鉢形土器。外面部底の残るナデ調整。内面ナデ調整。	2+3	暗灰褐色	
130	18	—	弥生前期	—	粗製土器。深鉢形土器。内外面丁寧なナデ調整。外周に保付着。	2-3	暗褐色	
131	18	—	弥生前期	—	粗製土器。深鉢形土器。内外面ナデ調整。外周に灰化物付着。	2-3	暗褐色	
132	18	—	弥生前期	口径 (24.0)	粗製土器。深鉢形土器。外面部底の残るナデ調整。内面ナデ調整。外周に灰化物付着。	2-3	暗褐色	
133	18	—	弥生前期	口径 (23.0)	粗製土器。深鉢形土器。外面部ケメリ後ナデ。内面二枚具？ 外周に灰化物付着。	2-3	暗褐色	
134	18	—	弥生前期	口径 (19.0)	粗製土器。深鉢形土器。外面部ケメリ後ナデ。内面ナデ。外面部底状のものが施される。外周に灰化物付着。	2±3	暗褐色	
135	18	—	弥生前期	—	粗製土器。深鉢形土器。外面部ケメリ後ナデ。内面二枚具条痕。外周に灰化物付着。	2-3	暗褐色	
136	18	—	弥生前期	—	粗製土器。深鉢形土器。外面部ケメリ、内面ナデ調整。外周付着。	2-3	暗黄褐色	
137	18	—	弥生前期	—	粗製土器。深鉢形土器。内外面ナデ調整。外周に灰化物付着。	2-3	暗褐色	
138	18	—	弥生前期	—	粗製土器。深鉢形土器。外面部ケメリ後ナデ。内面二枚具条痕後ナデ。外周に灰化物付着。	2-3	暗灰褐色	
139	18	—	弥生前期	—	粗製土器。深鉢形土器。外面部ケメリ後ナデ。内面二枚具条痕後ナデ。外周に灰化物付着。	2-3	暗褐色	
140	18	—	弥生前期	—	粗製土器。深鉢形土器。外面部ミガキ、内面ケメリ後ナデ調整。外周付着。	2±3	暗黄褐色	
141	19	—	弥生前期	底径 (6.5)	底部。甕の底部と思われる。外面部丁寧なナデ、内面難なナデ調整。	2-3	黄褐色	
142	19	—	弥生前期	底径 (7.5)	底部。甕の底部と思われる。内外面ともにナデ調整。	2-3	黄褐色	
143	19	—	弥生前期	底径 (9.0)	底部。甕の底部と思われる。内外面ともにナデ調整。内面灰化物付着。	2±3	暗灰褐色	
144	19	—	弥生前期	底径 (9.0)	底部。甕の底部と思われる。内外面ともにナデ調整。内面灰化物付着。	2±3	黄褐色	
145	19	—	弥生前期	底径 (8.0)	底部。甕の底部と思われる。内外面ともにナデ調整。	2-3	暗褐色	
146	19	—	弥生前期	底径 (9.5)	底部。甕の底部と思われる。内外面ともにナデ調整。	2±3	黄褐色	
147	19	—	弥生前期	底径 (10.0)	底部。甕の底部と思われる。内外面ともにナデ調整。	2+3	黄褐色	
148	19	—	弥生前期	底径 (8.5)	底部。甕の底部と思われる。内外面ともにナデ調整。	2-3	暗褐色	
149	19	—	弥生前期	底径 (10.5)	底部。甕の底部と思われる。外面部粗い痕の残るナデ、内面も工具によるナデ。	2±3	暗灰褐色	
150	19	—	弥生前期	底径 (8.0)	底部。甕の底部と思われる。内外面ともにナデ調整。	2+3	暗黄褐色	

遺物番号	坪区 図版	出土地区 遺構	出土層位	法量	特徴	胎土 焼成	色調	備考
151	19	——	弥生前期	底径 (5.0)	底部。壺の底部と思われる。内外面ともにナデ調整。	2 ± 3	暗褐色	
152	19	——	弥生前期	底径 (6.5)	底部。壺の底部と思われる。内外面ともにナデ調整。	2 ± 3	淡黄褐色	
153	19	——	弥生前期	底径 (8.0)	底部。壺の底部と思われる。外面ナデ、内面純なナデ調整。	2 ± 3	黄褐色	
154	19	——	弥生前期	底径 (8.0)	底部。壺の底部と思われる。内外面ともにナデ調整。	2 ± 3	淡黄褐色	
155	19	——	弥生前期	底径 (7.0)	底部。壺の底部と思われる。内外面ともにナデ調整。内外面黒、炭化物付着。	2 ± 3	暗灰褐色	
156	19	——	弥生前期	底径 (7.0)	底部。壺の底部と思われる。内外面ともにナデ調整。外面灰付着。	2 ± 3	暗黄灰褐色	
157	19	——	弥生前期	底径 (9.5)	底部。壺の底部と思われる。内外面ともにナデ調整。	2 ± 3	黄褐色	
158	19	——	弥生前期	底径 (10.5)	底部。壺の底部と思われる。内外面ともにナデ調整。	2 ± 3	淡黄褐色	
159	19	——	弥生前期	底径 (8.5)	底部。壺の底部と思われる。外面ナデ調整、内面純なナデ調整。	2 ± 3	褐色	
160	19	——	弥生前期	底径 (11.0)	底部。壺の底部と思われる。外面粗い擦痕の残るナデ、内面も工具による雑なナデ。内窓、炭化物付着。	2 ± 3	暗灰褐色	
161	19	——	弥生前期	底径 (12.0)	底部。壺の底部と思われる。内外面ともにナデ調整。	2 ± 3	灰褐色	
162	19	——	弥生前期	底径 (13.5)	底部。壺の底部と思われる。外面に傷が付着することから壺の可能性も高い。内外面ともにナデ調整。	2 ± 3	暗灰褐色	
163	19	——	弥生前期	底径 (11.0)	底部。壺の底部と思われる。内外面ともにナデ調整。	2 ± 3	暗褐色	
164	19	——	弥生前期	底径 (12.0)	底部。壺ないし壺の底部と思われる。外面ナデ、内面二枚貝条痕か?	2 ± 3	暗黄灰褐色	
165	19	——	弥生前期	底径 (8.5)	底部。壺の底部と思われる。内外面ともにナデ調整。	2 ± 3	暗褐色	
166	19	——	弥生前期	底径 (14.5)	底部。壺の底部と思われる。内外面ともにナデ調整。	2 ± 3	暗黄褐色	
167	23	SD04	埋土	口径 (27.5) 底径 (20.0)	弥生土器。壺形土器口縁部片。口縁部界に2条の沈線。磨滅により調整不明。	2 ± 2	暗褐色	
168	23	SD04	埋土	口径 (17.5) 底径 (14.5)	弥生土器。壺形土器口縁部片。口縁部界に段が施される。	2 ± 3	褐色	
169	23	SD04	埋土	口径 (27.5) 底径 (25.0)	弥生土器。壺形土器口縁部片。口縁端部に刻目が施される。調整不明。	2 ± 3	灰褐色	
170	23	SD04	埋土	口径 (19.5) 底径 (17.0)	弥生土器。壺形土器口縁部片。口縁端部に刻目が施される。調整不明。	2 ± 3	暗褐色	
171	23	SD04	埋土	口径 (19.5) 底径 (16.5)	弥生土器。壺形土器口縁部片。口縁端部に刻目が施される。頭部界に2条の沈線? 磨滅により調整不明。	2 ± 3	暗褐色	
172	23	SD04	埋土	口径 (23.5) 底径 (20.5)	弥生土器。壺形土器口縁部片。口縁端部に刻目が施される。頭部界に段。磨滅により調整不明。	2 ± 3	暗褐色	
173	23	SD04	埋土	口径 (24.0) 底径 (22.0)	弥生土器。壺形土器口縁部片。口縁端部に刻目が施される。頭部界に2条の沈線? 磨滅により調整不明。	2 ± 3	暗褐色	
174	23	SD04	埋土	口径 (30.0) 底径 (27.5)	弥生土器。壺形土器口縁部片。磨滅により調整不明。	2 ± 3	暗褐色	
175	23	SD04	埋土	口径 (18.0) 底径 (17.0)	弥生土器。壺形土器口縁部片。磨滅により調整不明。	2 ± 3	暗褐色	
176	23	SD04	埋土	口径 (20.0) 底径 (19.5)	弥生土器。壺形土器口縁部片。磨滅により調整不明。	2 ± 3	暗灰褐色	
177	23	SD04	埋土	口径 (25.0)	弥生土器。壺形土器。口縁部に接して突帯がめぐらる。外面削り目調整、内面ナデ調整。	2 ± 3	暗褐色	
178	23	SD04	埋土	口径 (14.0)	口縁部に3条の刻目突部が施されている。2本目の突部はやや右上がりとも思われる。調整は不明。	2 ± 3	暗褐色	
179	23	SD04	埋土	——	突帯土器。壺形土器。口縁端部から下がった位置に無刻目突部がめぐらる。調整不明。	2 ± 3	灰褐色	
180	23	SD04	埋土	——	突帯土器。壺形土器。口縁端部からやや下がった位置に断面三角形の刻目突部がめぐらる。調整は不明。	2 ± 3	暗灰褐色	

遺物番号	種別 図版	出土地区 遺構	出土層位	法量	特徴	胎土 焼成	色調	備考
181	24	SD04	埋土	口径 (27.5)	弥生土器。壺形土器。口縁部に凹線施文後、刺みを施す。調整不明。	2±2	黄褐色	
182	24	SD04	埋土	口径 (31.0)	弥生土器。壺形土器。口縁部に2条の凹線施文後、刺みを施す。外面削毛目調整。内面ナデか。	2±3	黄灰褐色	
183	24	SD04	埋土	口径 (27.5)	弥生土器。壺形土器。口縁部に3条の凹線文が施される。調整は不明。	2±2	暗褐色	
184	24	SD04	埋土	口径 (23.0)	弥生土器。壺形土器。口縁部に2条の凹線文が施される。調整は不明。	2±2	暗灰褐色	
185	24	SD04	埋土	口径 (17.5)	弥生土器。壺形土器。口縁部に4条の凹線文が施される。調整不明。	2±2	黄灰褐色	
186	24	SD04	埋土	直径 (19.0)	弥生土器。壺形土器。頭部に4条の凹線文が施される。外側は削毛目調整。内面ナデとナデ調整。	2±2	暗灰褐色	
187	24	SD04	埋土	口径 (28.5)	弥生土器。高杯。口縁部に数条の凹線文が施され、頭部側面に刺目が施される。調整は不明だが、内面ミガキか。	2±2	暗灰褐色	
188	24	SD04	埋土	口径 (20.0)	弥生土器。高杯。口縁部に刺目。穿孔有り。調整は不明。	2±3	黄灰褐色	
189	24	SD04	埋土	脚部径 (5.0)	弥生土器。高杯脚部。3段にわたって沈線が施される。透かし有り。外側ミガキ調整。	2±2	暗黄灰褐色	
190	24	SD04	埋土	底径 (15.5)	弥生土器。高杯脚部。凹線と穿孔が施されている。外側ナデ、内面ケズリ後、難なげ。	2±3	明褐色	
191	24	SD04	埋土	底径 (16.0)	弥生土器。高杯脚部。凹線施文後、刺みを施す。内面ナデ調整。	2±2	暗灰褐色	
192	24	SD04	埋土	口径 (18.0) 脚径 (16.0) 脚部径 (22.0)	弥生土器。壺形土器。口縁部に強いナデないし1条の凹線。内外正削毛調整。	2±3	暗灰褐色	
193	24	SD04	埋土	口径 (16.5) 脚径 (14.0) 脚部径 (15.5)	弥生土器。壺形土器。外面一部に削毛目を残す。内面ナデ調整。外面には煤が付着している。	2±3	黄灰褐色	
194	24	SD04	埋土	口径 (14.0) 脚径 (12.5) 脚部径 (15.0)	弥生土器。壺形土器。内外面ナデ調整が施される。	2±2	暗褐色	
195	24	SD04	埋土	口径 (17.5) 脚径 (15.5)	弥生土器。壺形土器。口縁部に3条の凹線文が施される。頭部には刺目突帯が貼付られている。調整不明。	2±2	暗灰褐色	
196	24	SD04	埋土	口径 (23.0) 直径 (20.0)	弥生土器。壺形土器。口縁部は凹線文施文後ナデ消し、内外面ナデ調整。	2±2	灰褐色	
197	25	SD04	埋土	口径 (16.5) 脚径 (14.5)	弥生土器。壺形土器。口縁部に3条の平行沈線が施される。外側削毛目、口縁部内ナデ、脚部内面ケズリ調整。	2±3	黄灰褐色	
198	25	SD04	埋土	口径 (17.5) 脚径 (15.5)	弥生土器。壺形土器。口縁部に3条の平行沈線が施される。外面ナデ、口縁部内ナデ、脚部内面ケズリ調整。	2±2	暗黄褐色	
199	25	SD04	埋土	口径 (14.0) 脚径 (13.0)	弥生土器。壺形土器。口縁部に4条の平行沈線が施される。外面ナデ、口縁部内ナデ、脚部内面ケズリ調整。	2±3	淡黄褐色	
200	25	SD04	埋土	口径 (17.5) 脚径 (15.0) 脚部径 (17.0)	弥生土器。壺形土器。外面ナデ、口縁部内ナデ、脚部内面ケズリ調整。外面擦付層。	2±2	暗褐色	
201	25	SD04	埋土	口径 (20.0) 脚径 (17.0)	弥生土器。壺形土器。口縁部に4条の平行沈線が施される。外面ナデ、口縁部内ナデ、脚部内面ケズリ調整。	2±3	暗黄褐色	
202	25	SD04	埋土	径 5.0	土盤円盤。土器片を打ち欠き、円盤状に加工する。	2±2	灰褐色	
203	25	SD04	埋土	径 5.0	土盤円盤。土器片を打ち欠き、円盤状に加工する。	2±2	灰褐色	
204	26	SD06	埋土	底径 (6.0)	弥生土器。底部片。磨滅により調整は不明。	2±3	淡黄灰褐色	
205	27	—	第10層	脚径 (9.5)	弥生土器。壺形土器脚部。頭部に削毛目工具による刺突か？ 突起部界には貼付突起。	2±3	暗灰褐色	
206	27	—	第10層	口径 (19.5)	弥生土器。高杯。口縁端部に3条の凹線施文後、刺みを施す。	2±3	暗灰褐色	
207	27	—	第10層	口径 (19.0)	弥生土器。口縁端部に刺み。内外面ともナデ調整。	2±3	暗黄褐色	
209	29	SD02	埋土	口径 (16.0) 脚径 (11.0)	弥生土器。壺形土器。口縁部に凹線文が施される。内外面ともナデ調整。	2±2	灰褐色	

遺物番号	掲図 図版	出土地区 遺構	出土層位	法 量	特 識	胎土 焼成	色 調	備考
210	29	SD02	埋上	口径 (16.5) 頸径 (12.5)	弥生土器。變形土器。口縁部に擬円線文が施される。外面に貼付着。	2± 3	暗褐色	
211	29	SD02	埋土	底径 (12.0)	弥生土器。底部。外面一部に刷毛目調整か? 内面ナデ調整と思われる。	2± 3	淡黄褐色	
212	29	SD02	埋土	底径 (7.0)	弥生土器。底部。内外面ナデ調整。	2± 3	灰褐色	
213	31	SD03	埋土	口径 (21.5) 頸径 (16.0)	弥生土器。變形土器。口縁部内外面ともナデ調整。	2± 2	黃褐色	
221	34	—	第4-2 層	口径 (15.5) 頸径 (11.5)	弥生土器。變形土器。口縁部に4条の平行沈線が施される。外面貼付着。	2± 3	黄褐色	
222	34	—	第4-2 層	底径 (5.59)	弥生土器。底部片。外面に黒漆が塗布される。	2± 3	暗褐色	
229	36	—	第4-1 層	口径 (21.0) 頸径 (16.5)	弥生土器。變形土器。磨減により調整等不明。	2± 3	黃褐色	
230	36	—	第4-1 層	口径 (21.0) 頸径 (18.0)	弥生土器。變形土器。口縁部に4条の平行沈線。外面ナデ、口縁部内面ナデ、腹部内面ケズリ調整。外面に貼付着。	2± 3	暗褐色	
231	36	—	第4-1 層	口径 (16.5) 頸径 (15.5)	弥生土器。變形土器。口縁部に3条の平行沈線。頭部直下に連續刻突文。調整不明。	2± 2	黃褐色	
232	36	—	第4-1 層	口径 (15.0) 頸径 (12.0)	弥生土器。變形土器。口縁部に2条の平行沈線。調整不明。	2± 3	暗褐色	
233	36	—	第4-1 層	口径 (14.5) 頸径 (11.0)	弥生土器。變形土器。口縁部に数条の平行沈線。口縁部内面ナデ、内面頭部下ケズリ調整。外面に貼付着。	2± 3	暗褐色	
234	36	—	第4-1 層	口径 (18.0) 頸径 (14.0)	弥生土器。變形土器。口縁部に4条の平行沈線。外面ナデ、口縁部内面ナデ、頸部下ケズリ調整。外面に貼付着。	2± 2	暗褐色	
235	36	—	第4-1 層	口径 (17.0) 頸径 (15.0)	弥生土器。変形土器。内外面ナデ調整。	2± 3	黃褐色	
236	36	—	第4-1 層	底径 (15.5)	弥生土器。高杯。外面に数条の凹縞文。内外面ナデ調整。	2± 2	淡黄褐色	
237	36	—	第4-1 層	口径 (26.5)	突帯文土器。變形土器。口縁部に施して貼付突帯が施される。磨滅しているが、頭部上半には擦擦文が施されていると思われる。	2± 3	暗褐色	
238	36	—	第4-1 層	—	突帯文土器。位置に無刻目突帯がめぐる。調整は不明。	2± 3	暗褐色	
239	36	—	第4-1 層	—	突帯文土器。變形土器。口縁部から下がった位置に無刻目突帯がめぐる。調整不明。	2± 3	暗褐色	
240	36	—	第4-1 層	—	突帯文土器。變形土器。口縁部から下がった位置に無刻目突帯がめぐる。調整不明。	2± 3	暗褐色	
241	36	—	第4-1 層	—	突帯文土器。變形土器。短く凹曲する口縁部をもち、下がった位置に無刻目突帯がつく。調整は不明。	2± 3	黄褐色	
242	36	—	第4-2 層	—	突帯文土器。變形土器。口縁部からやや下がった位置に無刻目突帯がめぐる。調整は不明。	2± 3	黄褐色	
243	36	—	第4-2 層	—	突帯文土器。變形土器。口縁部からやや下がった位置に無刻目突帯がめぐる。調整は不明。	2± 3	暗褐色	
244	36	—	第4-2 層	—	突帯文土器。變形土器。口縁部からやや下がった位置に無刻目突帯がめぐる。調整は不明。	2± 3	黄褐色	
245	36	—	第4-2 層	—	突帯文土器。變形土器。頭取りされた口縁部から下がった位置に無刻目突帯がめぐる。調整は不明。	2± 3	暗褐色	
246	36	—	第4-2 層	—	突帯文土器。變形土器。口縁端部に接して低い突帯が貼付される。調整は不明。	2± 3	暗褐色	
247	36	—	第4-2 層	—	突帯文土器。鉢形土器。口縁端部から下がった位置に無刻目突帯がめぐる。突帯直上には連續刻突帯が施されている。調整は不明。	2± 2	暗褐色	
308	41	—	第2層	口径 (21.0) 頸径 (16.5)	弥生土器。變形土器。口縁部に多条の平行沈線が施される。口縁部内面ナデ調整。内面頭部下ケズリ調整。外面貼付着。	2± 2	黄褐色	
309	41	—	第2層	口径 (18.0)	弥生土器。変形土器。口縁部に平行沈線。内面ナデ調整。	2± 3	黄褐色	
310	41	—	第2層	口径 (17.5) 頸径 (15.5)	弥生土器。変形土器。調整不明。	2± 3	灰褐色	

遺物番号	種別 國版	出土地区 遺構	出土層位	法量	特徴	胎土 焼成	色調	備考
311	41	—	第2層	口径 (16.0)	弥生土器。高杯、口縁端部外面に刻目が施される。調整は不明。	2— 2	淡黄褐色	
312	41	—	第2層	—	突奇文土器。變形土器。口縁端部にはぼぼして突奇がつく。調整不明。	2± 3	暗褐色	
313	41	—	第2層	—	突奇文土器。變形土器。口縁端部にはぼぼして突奇がつく。調整不明。	2— 3	淡灰褐色	
314	41	—	第2層	—	突奇文土器。口縁端部に接して突奇がつく。調整不明。	2± 3	淡灰褐色	
315	41	—	第2層	—	突奇文土器。口縁端部に接して突奇がつく。調整不明。	2± 3	明褐色	

日久美遺跡第5次調査石器一覧表

打製石斧一覧表

(単位はcm、g、カッコ内は現存値を示す)

遺物番号	種別 國版	出土地区 遺構	出土層位	形態	石 材	長さ	幅	厚さ	重さ	
S 1	20 6	包含層	弥生前期	短圓形	サヌカイト?	(12.0)	6.3	1.0	(232)	
S 2	20 6	包含層	弥生前期	短圓形	流紋岩	(15.4)	5.8	3.0	(365)	
S 3	20 6	包含層	弥生前期	圓形	流紋岩	(15.6)	10.0	1.8	(440)	
S 4	20	包含層	弥生前期	圓形	ガラス質流紋岩	(7.2)	7.0	1.3	(73)	
S 5	20	包含層	弥生前期	圓形?	サヌカイト?	(6.3)	6.1	1.8	(87)	
S 6	20	包含層	弥生前期	圓形	ガラス質流紋岩	(7.6)	5.8	2.7	(155)	
S13	25 SD04	埋土中	短冊形	ガラス質流紋岩	10.2	6.0	2.1	190		
S25	27	包含層	第10層	短冊形	ガラス質流紋岩	13.0	6.0	1.7	162	
S26	27	包含層	第10層	圓形	安山岩	(9.3)	8.1	1.5	(130)	
S27	27	包含層	第10層	不明	安山岩	(5.8)	7.5	1.4	(66)	
S31	35 6	包含層	第4—2 層	短圓形	安山岩	(12.6)	6.7	3.1	(358)	
S36	37 6	包含層	第4—1 層	圓形	安山岩(板状構造)	(16.0)	11.2	2.9	(432)	
S37	37 6	包含層	第4—1 層	圓形	流紋岩	(16.4)	8.9	2.5	(350)	
S38	37 6	包含層	第4—1 層	短圓形	砂岩	14.2	6.8	3.2	388	
S47	43	包含層	第2層	圓形?	流紋岩	(12.9)	8.4	3.3	(383)	

石礫一覧表

(単位はcm、g、カッコ内は現存値を示す)

遺物番号	持國 図版	出土地区 遺構	出土層位	形態	石 材	長さ	幅	厚さ	重さ
S 19	27	包含層	第10層	凹基	黒曜石	2.1	1.6	0.3	0.6
S 20	27	包含層	第10層	凹基	黒曜石	2.0	1.3	0.2	0.3
S 21	27	包含層	第10層	平基	黒曜石	1.6	1.3	0.3	0.4
S 22	27	包含層	第10層	凹基	黒曜石	2.0	1.4	0.5	0.9
S 23	27	包含層	第10層	凹基	黒曜石	2.0	1.3	0.2	0.3
S 30	35	包含層	第4-2 層	平基	ガラス質流紋岩	2.1	1.5	0.4	1.1
S 35	37	包含層	第4-1 層	凹基	ガラス質流紋岩	1.8	1.3	0.4	0.6
S 42	43	包含層	第2層	凹基	黒曜石	1.8	1.3	0.4	0.6
S 43	43	包含層	第2層	凹基	ガラス質流紋岩	1.5	1.2	0.2	0.3
S 44	43	包含層	第2層	凹基	サヌカイト?	2.2	1.1	0.4	0.5
S 45	43	包含層	第2層	凹基	黒曜石	(2.0)	1.6	0.4	(0.8)
S 46	43	包含層	第2層	凹基	黒曜石	1.9	1.5	0.4	0.9

石器・石製品一覧表

(単位はcm、g、カッコ内は現存値を示す)

遺物番号	持國 図版	出土地区 遺構	出土層位	種別 形態	石 材	長さ	幅	厚さ	重さ
S 7	21	包含層	弥生前期	尖頭器	ガラス質流紋岩	(3.7)	2.2	1.0	(7.6)
S 8	21	包含層	弥生前前期	石鎌	無縫石	(3.0)	(1.1)	(1.0)	(3.5)
S 9	21	包含層	弥生前中期	磨製石斧	閃綠岩	(13.1)	5.3	4.7	(482)
S 10	21 6	包含層	弥生前中期	石鎌	黒雲母角閃石安山岩	7.9	6.5	1.8	126
S 11	21	包含層	弥生前中期	敲石	黒雲母角閃石安山岩	8.2	5.6	2.4	158
S 12	21 6	包含層	弥生前中期	石皿	-	(24.7)	(19.5)	7.1 1.1	(2120)
S 14	25 SD04	埋土中 SD04	磨製石斧	斑助岩	(7.6)	(4.6)	(2.2)	(82)	
S 15	25 SD04	埋土中 SD04	石錐	石英安山岩	(15.3)	11.0	6.6	(1460)	
S 16	25 SD04	埋土中 SD04	石錐	黒雲母角閃石安山岩	10.8	14.4	6.6	1280	
S 17	27	包含層	第10層	削器	黒曜石	3.2	2.1	0.8	4.5
S 18	27	包含層	第10層	削器	黒曜石	(2.4)	1.7	0.6	(2.5)
S 24	27 6	包含層	第10層	磨製石斧	閃綠岩	(10.7)	5.4	4.0	(320)
S 28	27	包含層	第10層	石錐	流紋岩	(5.1)	4.2	1.0	(33)
S 29	35	包含層	第4-2 層	削器?	黒曜石	1.9	1.6	0.4	1.8
S 32	35	包含層	第4-2 層	磨製石斧	閃綠岩	(8.1)	6.6	(4.1)	(285)
S 33	35	包含層	第4-2 層	磨製石斧	閃綠岩	(17.6)	6.5	(4.6)	(500)

遺物番号	挿図 図版	出土地区 遺構	出土層位	種別 形態	石 材	長さ	幅	厚さ	重さ
S34	35	包含層	第4-2層	霰石	半花崗岩	11.8	9.2	6.0	730
S39	37 6	包含層	第4-1層	磨製石斧	閃母岩	14.7	4.9	3.3	378
S40	37	包含層	第4-1層	磨製石斧	閃母岩	(4.7)	(6.2)	(3.4)	(110)
S41	43	包含層	第2層	石錐または削器	黑耀石	(4.0)	1.7	0.9	(5.0)
S48	43	包含層	第2層	石包丁	サスカイト?	(5.4)	(7.6)	(1.2)	(33)
S49	43	包含層	第2層	偏平片刃石斧	流紋岩	(4.1)	3.3	0.9	(37)
S50	43	包含層	第2層	石錐	燧石	8.0	6.5	2.2	116
S51	43	包含層	第2層	石錐	流紋岩?	5.9	5.1	1.4	50
S52	43 5	包含層	第2層	凹石?	黒雲母角閃石安山岩	(10.1)	(4.2)	3.8	(182)

日久美遺跡第5次調査木製品観察表

遺物番号	挿図番号	出土地区	出土遺構	出土層位	器種・種類	残存長	残存幅	厚さ	特徴	備考
W1	30	—	SD03	—	ナスピ形着柄櫛	43.1cm	11.5cm	1.3cm	刃先欠損。加工痕有り。	
W2	30	—	SD03	—	ナスピ形着柄櫛	28.2cm	8.2cm	1.6cm	刃先欠損。刃部は鋸く研る。	
W3	30	—	SD03	—	ナスピ形着柄櫛	38.3cm	9.7cm	1.3cm	刃先、上部欠損。刃部幅広の2 又耕作具。加工痕有り。	
W4	30	—	SD03	—	ナスピ形着柄櫛	41.0cm	4.1cm	1.3cm	大半欠損。加工痕有り。	
W5	30	—	SD03	—	ナスピ形着柄櫛	33.6cm	3.0cm	1.3cm	刃部のみ遺存。加工痕有り。	
W6	30	—	SD03	—	ナスピ形着柄櫛	6.1cm	2.1cm	0.6cm	刃先のみ遺存。加工痕有り。	
W7	30	—	SD03	—	櫛	97.4cm	5.0cm	3.4cm	先端部欠損。櫛歯を量するが全 体的に不整形。未完成品か。	
W8	31	—	SD03	—	有縁状棒	138.3cm	6.7cm	4.9cm	頭部・頸部半分欠損。片端を有 頭状に研る。頭部寄りに1ヶ所 削りこみを作る。頭部に一部焼 成痕有り。	
W9	31	—	SD03	—	杭	39.2cm	4.4cm	3.0cm	上部欠損。2分割して組合せず。 先端は削り尖らす。	
W10	31	—	SD03	—	人形	20.2cm	4.0cm	0.7cm	頭部を欠損。板村を削って頭、 足を表現する。胸部分に2ヶ所穿 孔有り。	
W11	32	—	SK01	埋土	木簡	30.8cm	2.4cm	1.3cm	頭部欠損。厚みのある板材に 「見」「火」等の文字を書き。	
W12	33	—	第2遺構面	—	組合せ平鉢	44.0cm	17.9cm	1.1cm	ほぼ完存。長方形のほぞ穴を開 け、着柄軸は断面半円形を呈す る。	
W13	33	—	第2遺構面	—	田ド駄	29.7cm	12.7cm	2.6cm	側部欠損。板材に4ヶ所不整形 な穿孔を施す。	
W14	33	—	第2遺構面	—	不明	21.2cm	9.7cm	1.5cm	大半欠損。明瞭な加工痕無し。	
W15	42	—	—	第2層	不明	8.9cm	13.4cm	2.1cm	ほぼ完存。板材を台形に加工す る。脚か。	
W16	42	—	—	第2層	不明	10.2cm	4.8cm	1.1cm	大半欠損。中央に穴を開けた加 工痕有り。	
W17	42	—	—	第2層	不明	10.4cm	3.2cm	0.8cm	大半欠損。板材を菱形に削る。	
W18	42	—	—	第2層	不明	17.8cm	3.2cm	1.6cm	ほぼ完存。板材の一端を削り尖 らせ、もう一端をカーブするよ うに削る。	

第4章 目久美遺跡6次調査

第1節 調査の経過と方法 (第1・44図)

調査は、平成9年4月に着手し、11月に現地作業を終了した。遺構面が深いところにあること、軟弱地盤であることから調査区内に8.5mの矢板を打ち込み調査区を囲った。調査面積は840m²であった。

調査区内は、かつて国鉄鉄道学園跡地であり、それ以前は水田であった。調査区西側にあった小丘陵を開削したのち、水田であったこの地を造成したものである。造成時の盛土は約1mにおよぶ。そのため、5次調査の調査結果をふまえて、盛土と、その下、約50cmほど認められた造成以前の水田床土を重機で除去し、調査にとりかかることにした。

重機による掘削が終了後、調査区内に基準杭を設定した。6次調査ではトータルステーションを使用せず、方位を無視して、70×12mの調査範囲に、建設される道路のセンターラインを主軸とした5×6mのグリッドを設定した(第44図)。土層断面の観察は、調査区が矢板で囲まれているため苦慮したが、湧水の排出のため矢板に沿って巡らせた排水溝を利用した。また、B1グリッドの一部に排水坑を設置し、調査区外に水を排出した。

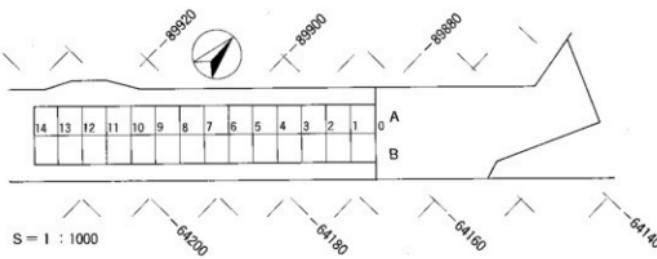
中近世・古墳時代・弥生時代後期・弥生時代中期の遺構面を調査後、工事の影響がそれより下には及ばないA・B-1~10については、SD-4の重要性も考慮し、下層の調査は行わずに埋め戻すことで現状を保存することにした。一方で、下層も工事影響範囲に含まれるA・B-1~10については調査を継続し、弥生時代中期の洪水堆積、水田跡、弥生時代前期の包含層、縄文時代の堆積層を調査した。検出された遺構・遺物は、それぞれ写真撮影、実測を行い、記録にとどめた。また、9月には現地説明会を実施し、遺跡と出土遺物を一般に公開し、多数の参加を得た。

(濱田)

第2節 調査区内の堆積 (第45図)

本調査区は足尾山西側に位置しており、本来は谷地形を呈していたものと考えられる。また、これまでの調査から、湿地性の堆積が予想された。土層の観察は、0ラインと、調査区のセンターラインにそってNo11~No14杭の範囲で行った。調査区内の堆積は基本的には水平堆積で、弥生時代中・後期に洪水堆積が認められる他は、比較的安定した堆積状況を示していた。

- 第1層 表土
- 第2層 黄褐色土。造成時の擾乱土。
- 第3層 搾乱坑、暗渠など。

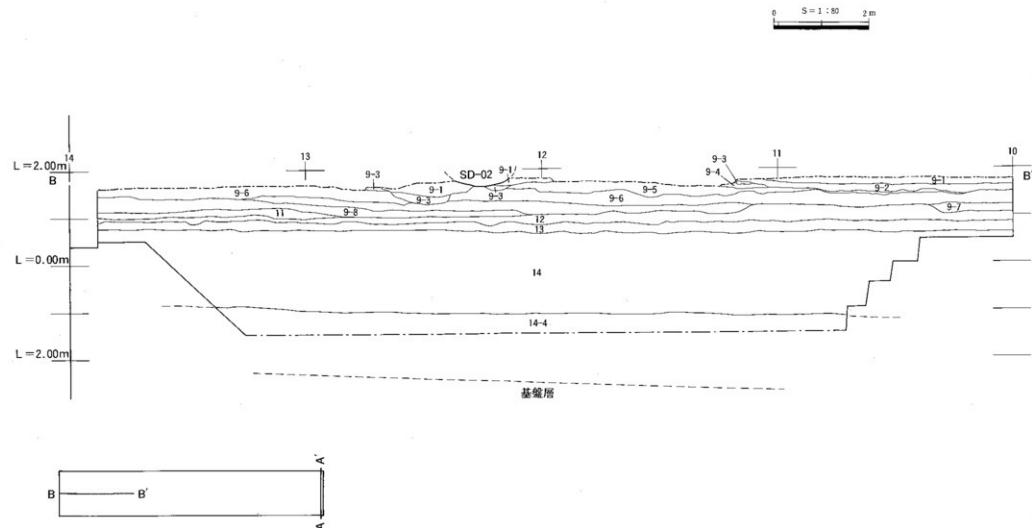
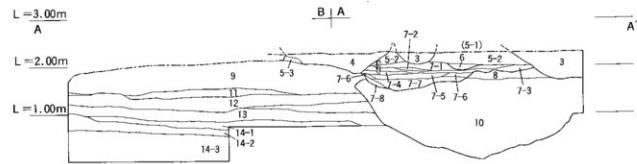


第44図 目久美遺跡第6次調査グリッド配置図

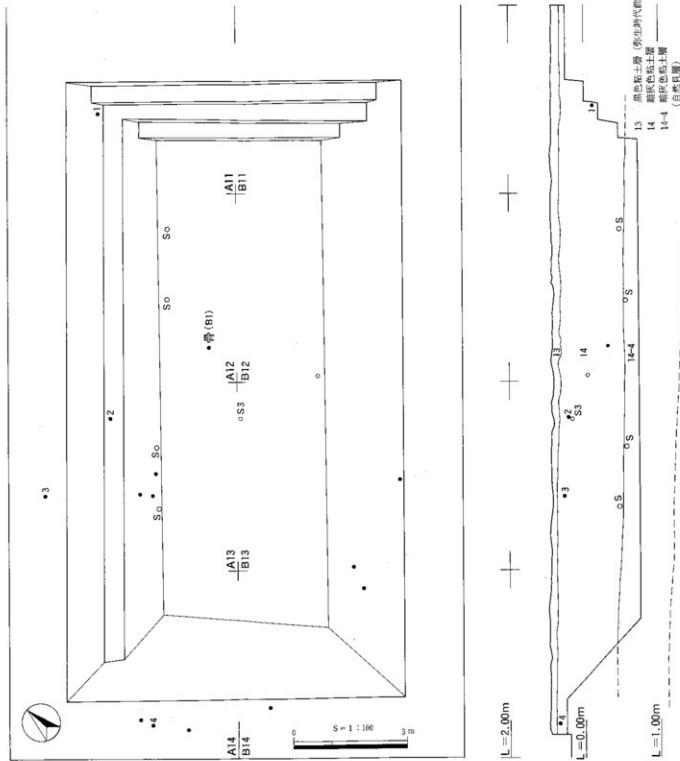
- 第 4 層 近現代の用水路
- 第 5 - 1 層 黄色粘土ブロックを含む暗灰色粘土。近世以降の水田床土。
- 第 5 - 2 層 暗灰色粘土。中性の水田層。
- 第 5 - 3 層 暗灰褐色粘土。古墳時代～奈良時代の遺物を包含。
- 第 6 層 SD - 0.1 埋土。暗灰色土。
- 第 7 層 SD - 0.3 埋土。以下のように細分される。
- 7 - 1 層 黄灰色細砂シルト
 - 7 - 2 層 暗黄灰色細砂シルト。粗砂を含む。
 - 7 - 3 層 黄灰色粗砂。細砂を互層状に含む。
 - 7 - 4 層 暗灰色細砂。粗砂を含む。
 - 7 - 5 層 灰色シルト。粗砂を含む。
 - 7 - 6 層 淡黄灰色粗砂
 - 7 - 7 層 灰色粗砂と細砂の互層。
 - 7 - 8 層 灰色シルト。
- 第 8 層 暗灰色粘土と黄灰色細砂・粗砂の互層。
- 第 9 層 洪水堆積。暗灰色粘土・シルトと黄灰色細砂の互層。以下のように細分される。
- 9 - 1 層 暗灰色粘土と黄灰色細砂の互層。
 - 9 - 2 層 暗灰色粘土
 - 9 - 3 層 黄灰色粗砂
 - 9 - 4 層 灰色粘土
 - 9 - 5 层 黄灰色粗砂
 - 9 - 6 層 暗灰色粘土と黄灰色細砂の互層。
 - 9 - 7 層 灰色粘土と灰色シルトの互層。
 - 9 - 8 層 暗灰色土。
- 第 11 層 黄褐色粗砂。
- 第 10 層 SD - 0.4 埋土。黄灰色粗砂。
- 第 12 層 暗灰色粘土。場所によっては以下のように細分できる。
- 12 - 1 層 暗灰色粘土。植物根を含む。
 - 12 - 2 層 12 - 1 より粘性があり、暗い。
- 第 13 層 黒色粘土。
- 第 14 層 暗灰色粘土。暫時的な変化で、分層がしがたい部分もあったが、場所によっては以下のように細分できた。
- 14 - 1 層 暗灰色粘土。マコモを多量に含む。
 - 14 - 2 層 暗灰色粘土。ややシルト質。
 - 14 - 3 層 暗灰色粘土。
 - 14 - 4 層 多量の貝を含む暗灰色粘土。

調査時には、以上のように堆積を区分した。次に、堆積の時期について概略し、第5次調査における堆積（第3章第2節）との対応関係を検討したい。これについては、基本的に第6次調査の側から対応関係を求めた。土層の色調など細部で表記が異なることもあるが、調査担当者の違いによる表現差ということで、無理な改変は行わなかった。

第6次調査第1層から第4層は近現代の堆積で、厚さ1.3m～1.5mにも及ぶ。第5次調査第1層、第2 - 1層、第2 - 3層に、大方、対応するものと思われる。



第45図 目久美遺跡第6次調査土層断面図



第46図 A・B-11~14区・縄文時代遺物包含層(第14層)遺物分布状況

第6次調査5-1層は中近世の遺物包含層、第5-2層上には水田1が形成されていた。第6次調査第5-2層は、第5次調査第3層に対応する。一方、第6次調査5-1層に相当する堆積は第5次調査では認められない。土色は異なるが、時期的には、第5次調査第2-2層に相当し、第6次調査第5-1層は、第5次調査第3層と第2-2層の間に位置づけられる可能性も考えられる。

第6次調査第7層はSD-03の埋土で、第5次調査では、第9-1層に相当する。第6次調査第9層は弥生時代中期以降の洪水堆積で、第5次調査においては第7層がこれに対応する。さらに第6次調査第10層はSD-04埋土で、第5次調査第9-2層に相当する。

第6次調査第11層の粗砂が堆積していた場所では、第12層上に形成された水田跡を検出した。第5次調査では、これらに対応する堆積が区分しにくい状況であったようだが、大方、第5次調査第10層とされるものが、第6次調査第12層に対応するものと考えられる。

第6次調査第13層は弥生時代前期の遺物を包含する堆積である。また、当堆積からはブラントオバール、稻穀花粉が検出されている。第5次調査第11-16層がこれに対応する。弥生前期の遺物を包含する堆積は、調査地周辺に広く分布するようで、日久美遺跡第1次調査、1953年の佐々木古代文化研究所による調査でも、弥生時代前期に比定される黒色粘土層が報告されている。

第14層は縄文時代の堆積で海成層である。第6次調査地点では、約2m付近に基盤層があり、その上には、厚さ1m強におよぶ自然貝層（第14-4層）が厚く堆積していた。
(濱田)

第3節 縄文時代の堆積と遺物

1. 概要（第46・47図）

本調査区、A・B-10~14区におよぶ範囲について、現地表面から約4mまで掘り下げ、縄文時代の堆積層（第14層）の調査を行った。矢板の安全上の問題で、基盤層まで完掘することはできなかった。しかし、A-14区にトレンチを設定したところ、-2.10m程のところで基盤層に達した。基盤層は、北から向かって次第に深くなっていくようである。

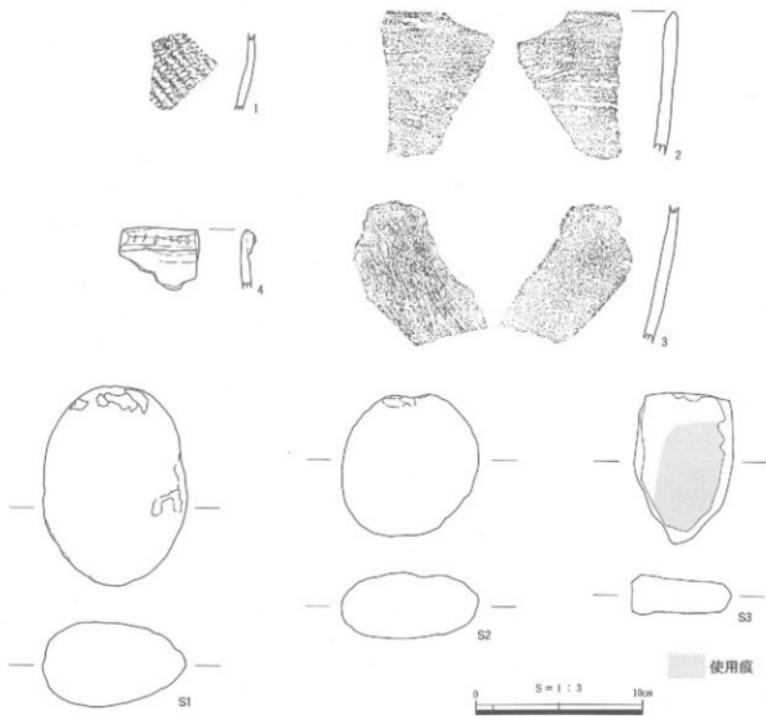
基盤層上には、多量の貝が混ざった粘土層（第14-4層）が約1m強堆積していた。自然の貝層で、人工的な遺物は確認できなかった。この堆積は、当調査地がかつて海であったことを示しており、当地域における中海の変遷を考える上で極めて重要な資料である。このことについては、第5章第1節で考察が行われている。ここでは概略にとどめるが、肉眼で観察できる貝類のうち、主体を占めるのは、サルボウガイ、ハイガイで、現在ではみることのできない大型のものが多数認められた。また、ハイガイは現在、中海に生息しない貝である。

人為的な可能性が考えられるものとしては、貝層上面に点在していた礫がある（第46図）。取り上げなかつたものも勘案するとおおよそ拳大から人頭大の大きさの礫が20点ほどあったと思われる。石材は、周辺に広く分布する流紋岩が主体を占めていた。これらの礫は、厚く堆積した泥土中に含まれていたこと、当調査区東側に位置する足尾山から約30mほど離れていることなどから、自然に転落した可能性は考えがたく、人為的にもたらされたものと思われ、同様の例に島根県松江市島根大学構内遺跡がある¹⁾。
(濱田)

2. 包含層出土の遺物（第46・47図）

先述の貝層上に堆積した第14層から縄文土器、石器が出土している（第46図）。堆積中に、肉眼では貝類を認めることはできなかったが、海成層である。遺物の出土点数は非常に少なく、実測可能なものはここに記した7点にすぎない。いずれもあまり磨滅を受けていないが、海中への転落遺物である。また、動物遺存体として、解体痕の認められる鹿の頭骨（図版15-B1）が1点出土した²⁾。しかし、これ以外には、肉眼で確認できる動植物遺存体は認められなかった。

第47図1は今回の調査で最も下層で出土した土器である。胴部片で、縦りの粗い縄文LRが施されている。時



第47図 繩文時代遺物包含層(第14層)出土遺物

期は特定しがたいが、縄文時代前期と考えておきたい。2は、無文粗製深鉢の口縁部片である。外面には粗雑な条痕が残る。3は無文粗製深鉢の胴部片で、2に似るが接合関係ではなく、外面にミガキ状の調整が施されていることから別固体と思われる。2、3とも時期は特定しがたい。4は縄文時代晩期末の刻目突帯文土器で、深鉢の口縁部片である。第14層中最上位で出土した。口縁端部に接して突帯が貼りつけられ、V字状の刻みが施されている。口縁部の形態的特徴は、近畿地方の長原式に類似する。S1、2は円窓である。いずれも自然縫の可能性があるが、側面などに敲打痕とも思われる痕跡が認められることから敲石として扱った。S3は石皿の破片で上面部に擦痕が認められる。

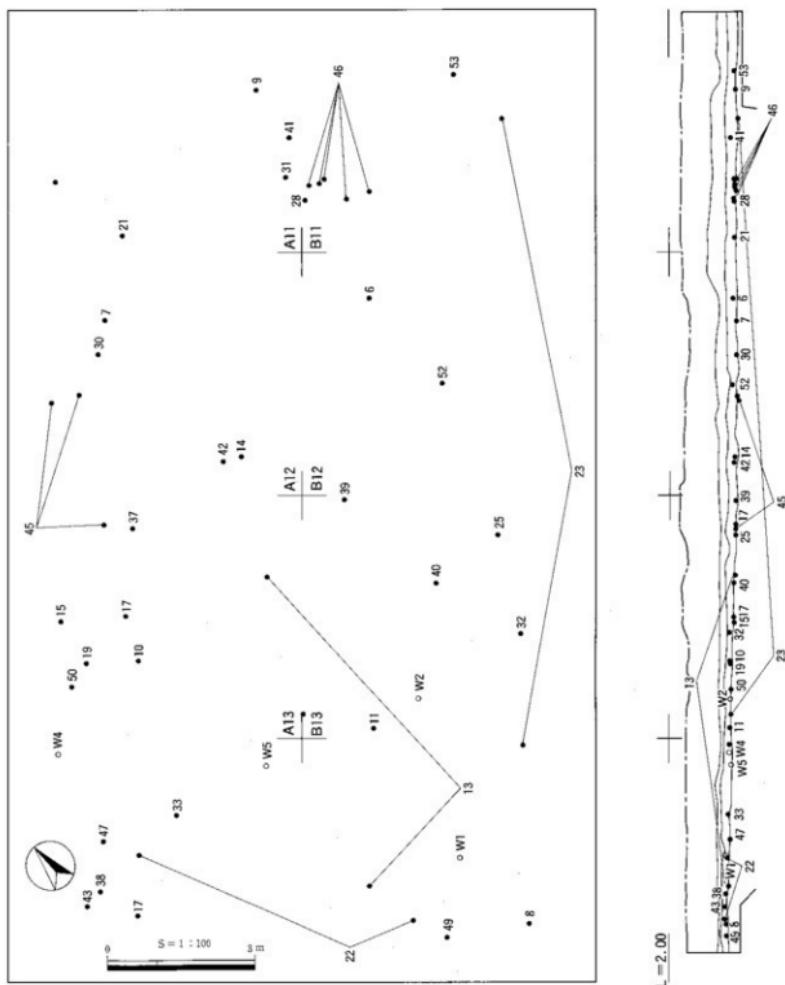
以上、少量の遺物から、当時の状況を窺うことは難しい。しかし、長原式に相当しそうな突帯文土器が第14層最上部から出土していることから、当調査区周辺の湿地化は、晩期後葉頃、本格化すると考えることができよう。

(濱田)

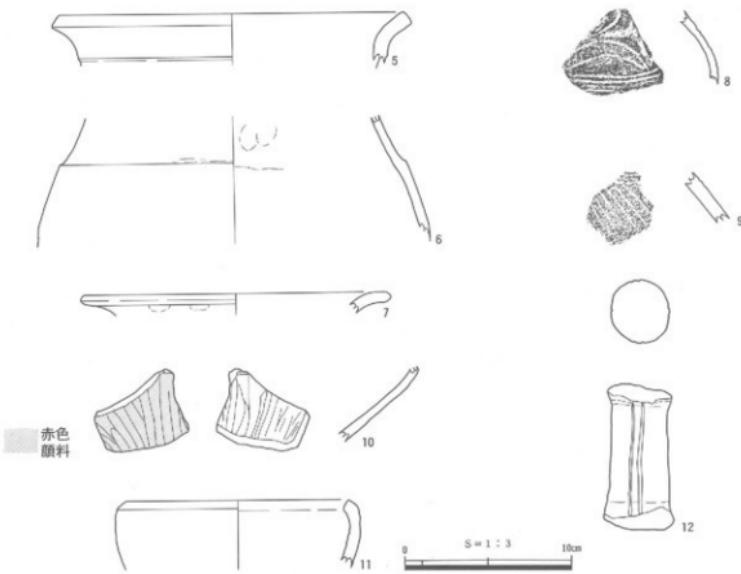
註 1) 中村唯史 1995 「第5章 地質学的調査による成果」『鳥根大学構内遺跡発掘調査概報Ⅱ (諸田地区Ⅰ)』

鳥根大学埋蔵文化財調査研究センター

2) 井上貴央先生のご教示による。



第48図 A・B-11~14区・弥生時代前期遺物包含層(第13層)遺物分布状況



第49図 弥生時代前期遺物包含層（第13層）出土遺物 1

第4節 弥生時代前期の調査

1. 概要（第48図）

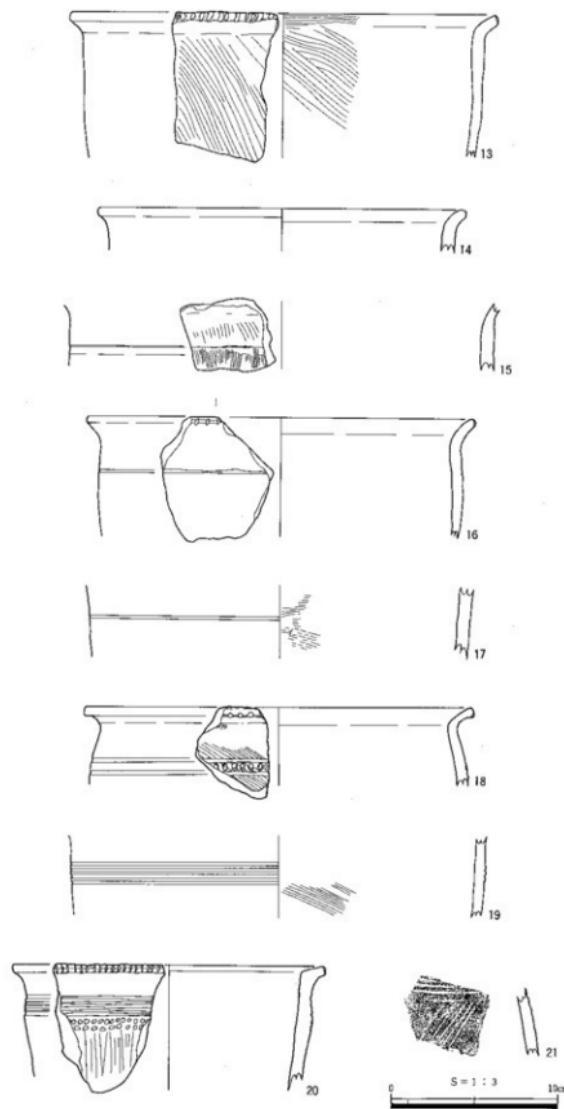
過去の調査記録から、調査区内およびその周辺一帯には、弥生時代前期の包含層が広がっていることが予想できた。第6次調査では、工事の影響を受けるA・B-11~14区の範囲について、第9層以下の調査を行ったが、その結果、弥生時代前期の遺物を包含する第13層を確認した。

しかし、今回の調査地点では、第4次調査地点や、第5次調査地点ほど多量の土器は出土していない。第4・5次調査地は丘陵の裾部および谷部に位置することから著しい土器の出土をみたが、本調査区が丘陵に挟まれた谷部にあたることがその理由であろう。また、第4・5次調査地では、弥生前期の包含層下から弥生時代前期と考えられるピットなどが検出されているが、谷部に位置する本調査区で、遺構を確認することはできなかった。

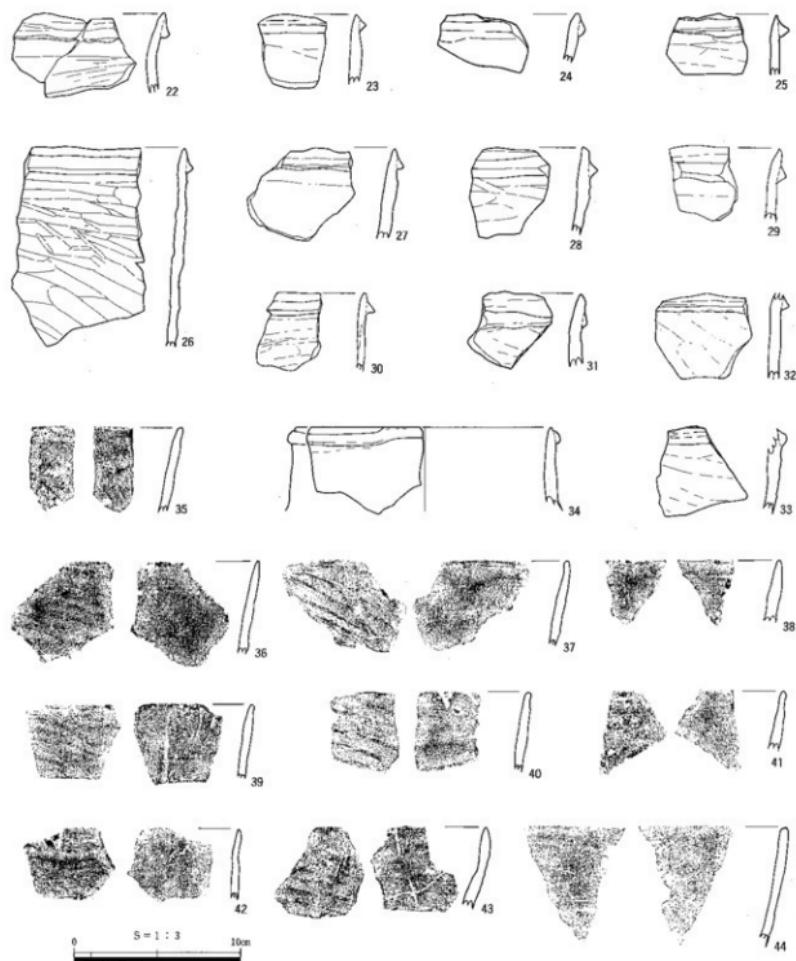
一方、花粉分析の結果は、第13層から稲科花粉が増加する傾向を示している（第5章第1節参照）。また、プラントオパールについても水田耕作が行われていた可能性を示唆する結果を得ている（第4章第9節）。水田を区画する畦畔や杭列は確認できなかったが、当調査区周辺の湿地では何らかの形で弥生時代前期には水稻耕作が行われていたものと思われる。
(濱田)

2. 包含層出土の遺物（第48・49・50・51・52・53図）

第13層からは、弥生時代前期の土器、木器、石器などが出土した。第48図が遺物の出土状況である。遺物は、第13層・黒色粘土層の下方に集中する傾向があり、特に第14層との境で、多くの遺物を検出した。土器については、約500点を取り上げたが、小片が多く、また、ほとんどが接合関係がないことから、全形を窺える資料は少ない。

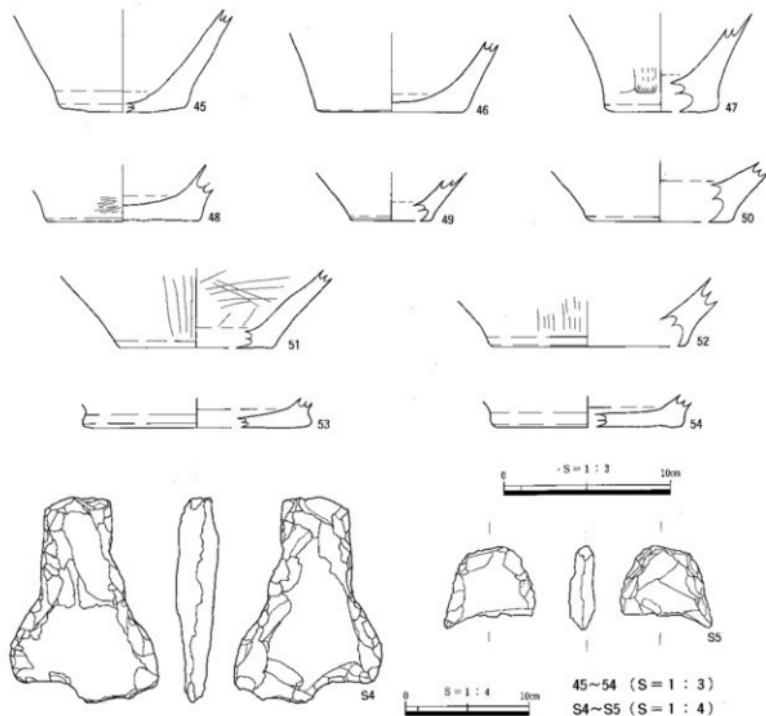


第50図 弥生時代前期遺物包含層（第13層）出土遺物 2



第51図 弥生時代前期遺物包含層（第13層）出土遺物 3

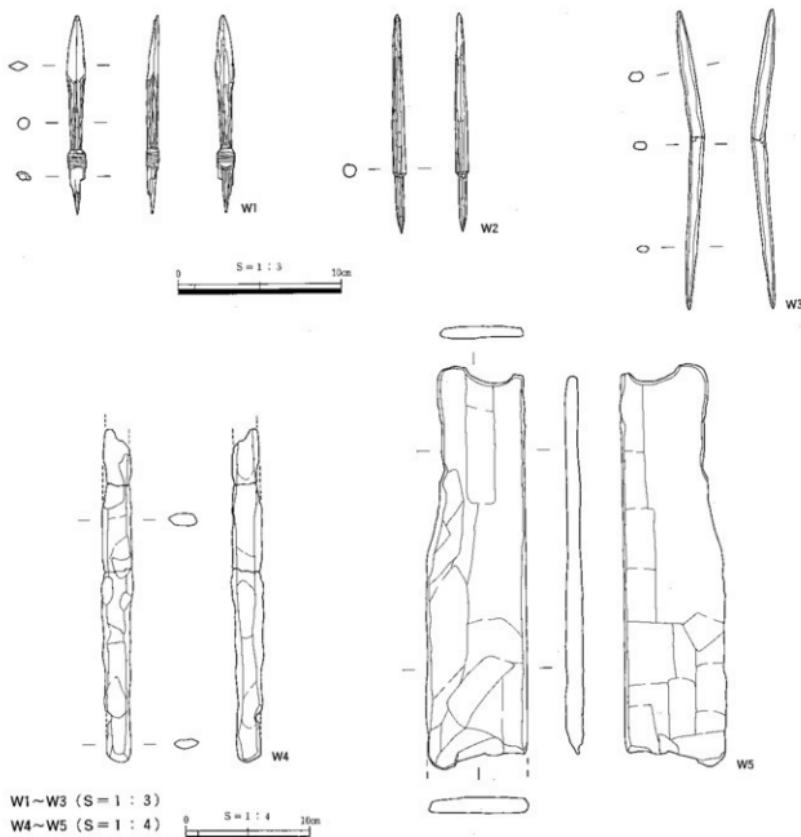
第49図5～9は壺形土器である。5は口頭部に、6は頸胴部に段をもつ壺である。5の口縁部は短く外反する。7は小型壺か。8は壺形土器の肩部で木葉文状の文様と三本の沈線が施されている。9も壺形土器の肩部で、二本の平行沈線と、斜光する6条の沈線による山形文が描かれる。10、11は浅鉢である。10は逆くノ字状に短く屈曲する浅鉢で、赤色顔料が塗布される。11は楕形を呈す粗製の浅鉢。胎土は第14層出土の純文土器に似る。12は高壠の脚部で、4方向に二本の沈線が施されている。また、この他に黒色顔料が施された壺もしくは浅鉢の胴部片がある。



第52図 弥生時代前期遺物包含層（第13層）出土遺物4

第50図13～21は菱形土器で、口縁部は短く外反するものが多い。13は面取りした端部に刻目、14の口縁端部は面取りも刻目も施されない。15は口縁部を欠くが、胴部に沈線状の段をもつ。16、17には段ではなく、一条の沈線が施され、16は口縁端部に刻目が施されている。18は胴部上半にやや丸みをもつ。口縁端部には刻目、肩部に二条の沈線と、沈線間に竹管状の刺突がめぐる。19は4条の平行沈線、20は口縁端部に刻目、肩部に4条の沈線、その下に椭円の刺突が二段にめぐる。口縁部は、短く屈曲するが、器壁は厚みがあり、やや逆し字状を呈す。21は甕の肩部片と思われ、4条の平行沈線と、山形文と思われる5条の斜行する沈線が施されている。

第51図22～33は突帯文土器の菱形土器で、突帯に刻目が施される類は認められない。22は、やや外反する器形を呈す。口縁端部の調整と突帯の貼り付けが同時に処理されており、無刻目突帯が端部に接したところにめぐる。また、突帯の断面形は下さがりの三角形を呈す。23～25は、砲弾形を呈し、ほぼ端部に接して断面三角形の無刻目突帯がめぐる。26～31も砲弾形を呈す甕で、突帯の幅ひとつ分程度、口縁端部から下がったところに断面三角形の無刻目突帯がめぐる類である。31は、他に比べやや下がった位置に突帯が付く。32、33は口縁端部を欠損するが、26～30と同じ類と思われる。34は口縁端部に接するか、やや下がったところに断面丸形の無刻目突帯がめぐる甕と思われる。突帯文土器は、いずれもナデもしくは粗い擦痕の残るナデ調整が施されている。炭化物が付着したものが多い。



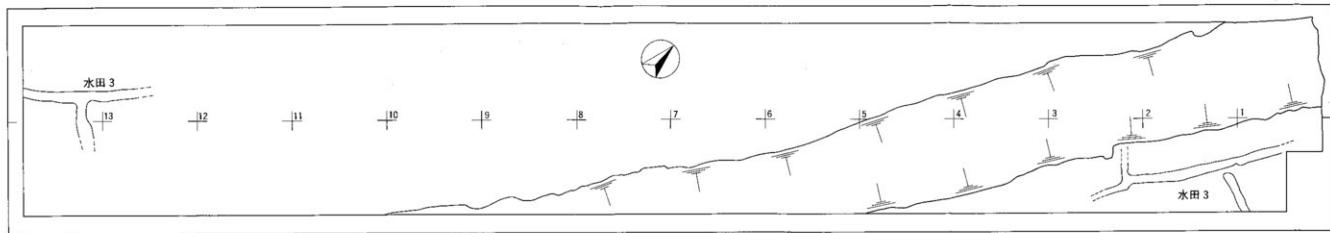
第53図 弥生時代前期遺物包含層(第13層)出土遺物5

第51図35~44は粗製の深鉢、もしくは鉢形土器である。単純な砲弾形を呈すと思われるものばかりで、外面の調整は粗い擦痕の残るナデ、内面は丁寧なナデ調整が施されるものが多い。また、炭化物の付着したものが多く認められる。35~43の口縁部断面形は、端部が丸みをもつ尖形を呈す。44については、口縁端部が内傾気味に面取りされ、胎土も他と異なり、第14層出土の繩文土器に似る。

第52図45~54は底部片で、底部から直線的に立ち上がる類(45~52)と、底面直上に軽いくびれをもつ類(53、54)がある。45~49、52~54は壺形土器の底部であろう。51は外に広がることから壺形土器の底部片と思われる。

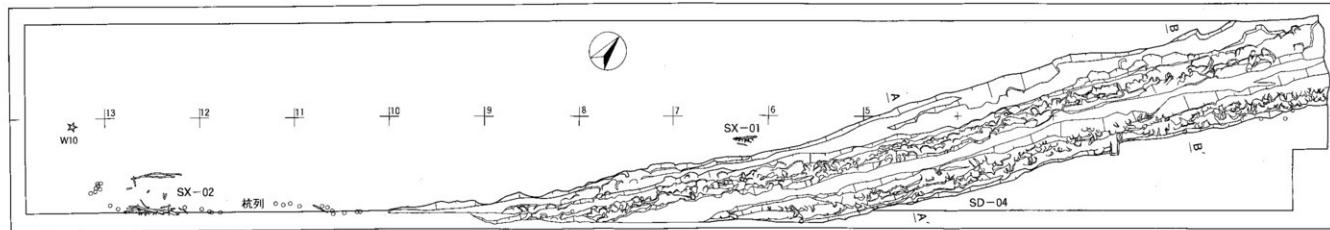
第52図S4、5は打製石斧である。S4は刃部の一部を欠損するがほぼ完形で擦痕を呈す。S5は刃部を欠損する。第53図W1~3はやすで、それぞれ形態が異なる。W1は、他の2点に比べ精巧に作られており、矢柄とそれに巻き付けた樹皮が残る。W4、5は不明木製品で、加工痕が認められる。

(演田)



第54図 弥生時代中期・第4遺構面全体図

0 S = 1 : 200 10m



第55図 弥生時代後期・第3遺構全体図

第5節 弥生時代中期（第4遺構面）～後期（第3遺構面）の調査

1. 概要（第54・55図）

工事の影響範囲外については第3遺構面以下を現状保存としたが、水道管設置等で工事の影響を受ける範囲（A・B-11～14区）については、下層の調査を継続した。

その結果、A・B-11～14区で調査した第4遺構面（第54図）では水田跡を検出し、また、全面を調査した第3遺構面（第55図）では、大規模な造成を伴ったと考えられる水路と、それに行隨すると考えられる杭列等を検出した。遺物は、第3遺構面SD-04以外からは、ほとんど出土していない。遺構外の遺物としては、第4遺構面・水田1下層で木製品、第4遺構面～第3遺構面の間の堆積（第9-3層）から土器や石器、第3遺構面上からは木製品が出土している。

（濱田）

2. 弥生時代中期（第4遺構面）の遺構と遺物（第54・57・58・59図）

第9層とした洪水平積層を掘り下げた結果、第12層・灰色粘土層上面で、第4遺構面を検出した。この面では、第9層との間に第11層とした粗砂層が堆積していたことから部分的に水田跡を検出することができた。しかし、間層に粗砂層を挟まない部分では、畦畔を連続的に把握することは困難で、結果的にB-1～3区、A・B-14区という限られた範囲での検出となった。

水田1（第57・58・59図）

B-1～3区、A・B-14区で、畦畔および足跡を検出した。いずれも狭い範囲で、水田一区画を確認することはできなかった。

B-1～3で検出した畦畔（第57図）はあまり良好な状態ではなく、B-1に集中的に分布する足跡がなければ検出は困難な状況であった。足跡が検出できる面まで、薄く堆積した砂層を除去することで、ほぼ北東～南西、北西～南東に延びる高さ約0.1m、幅約0.5mの僅かな盛り上がりを検出した。

B-1区において、畦畔と畦畔が交わるが、畦畔同士が完全には接していない（第57図A-A'断面）。遺存状況の悪さから、断定は難しいが、水口の可能性も考えられる。

また、遺物は、B-3区で、本来、楕円形を呈すると思われる不明木製品（第59図W8）が出土したにすぎない。

A・B-14区の範囲には、第12層上面に比較的厚い粗砂の堆積があり、今回の調査では、最も良好な状態で畦畔が検出できた（第58図）。しかし、粗砂層が薄くなるA・B-14区以外では、畦畔を連続的に捉えることはできなかった。

畦畔の規模は、幅約0.4～0.5m、高さ約0.15～0.2mで、北東～南西方向に約7m、北西～南東方向に約2m程、確認できた。水田面、および畦畔上には、足跡が密に分布しており、中には、歩行状況がたどれるものもある。足跡は、約0.2～0.3m前後のものが多く、最も深い痕跡で0.2mを測る。

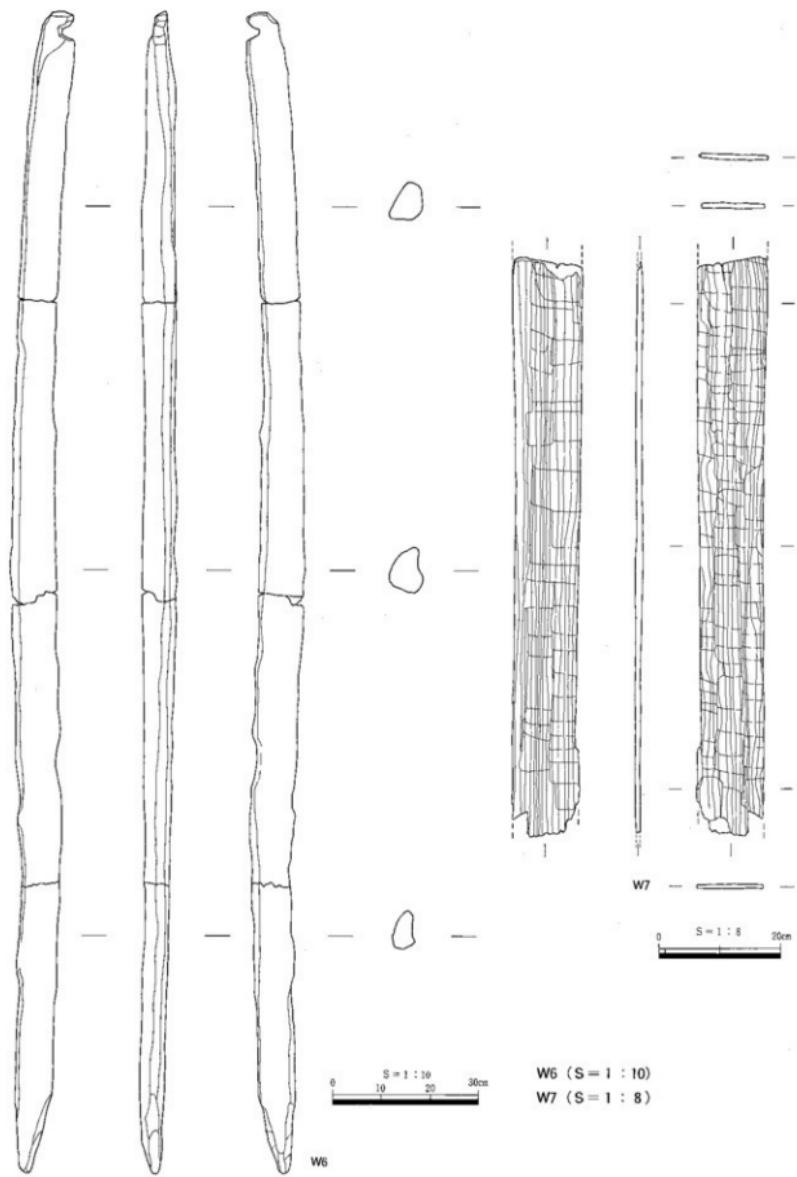
畦畔を断ち割ったところ、淡灰色粘土を盛ることで、畦畔がつくられていることが観察できた（第58図B-B'断面）。しかし、部分的には、盛土は明瞭に確認できない箇所もある。さらに、畦畔の一部で、板材が認められた。畦畔を補強するためのものとも考えられる。また、A・B-14の範囲では、遺物は出土しなかった。

以上、水田1は、粗砂に覆われていることから、洪水によって埋没したと考えられる。しかし、水田1からは、時期決定に有効な遺物が出土しておらず、埋没時期について問題を残す。ここでは、下層に弥生時代前期の包含層があること、第9層中で粗砂層中から、弥生時代中期中葉～後葉の土器が出土していることから、弥生時代中期前半に営まれた水田と理解しておく。

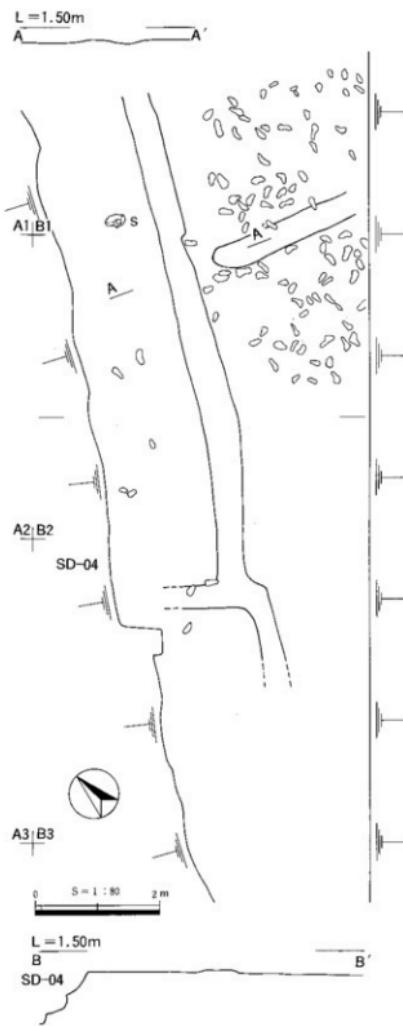
（濱田）

3. 弥生時代後期（第3遺構面）の遺構と遺物（第45・55図）

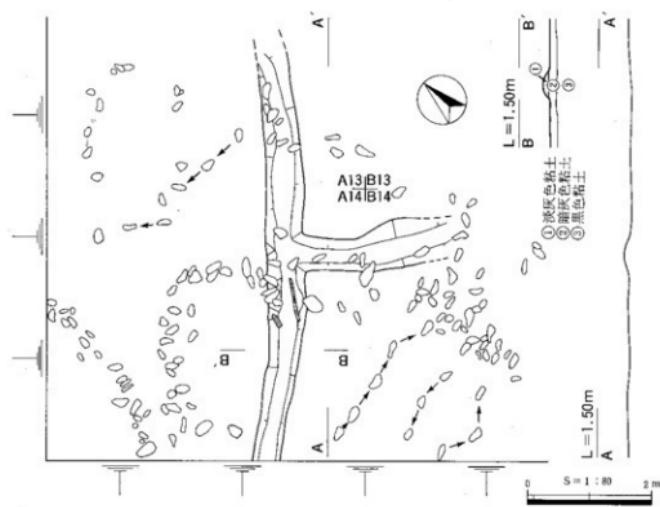
第4遺構面埋没以後は、頻繁に洪水にみまわれており、第9層は、シルトと粗砂が互層状に厚く堆積している。第45図A-A'断面において、第4遺構面上に厚く堆積した第9層・洪水平積層中からSD-04が堀り込まれ



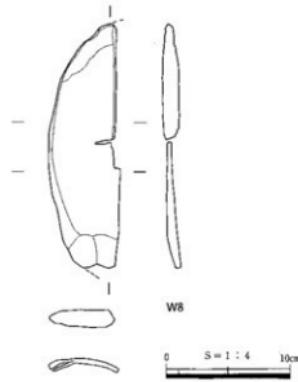
第56図 水田1下層(第12層)出土遺物



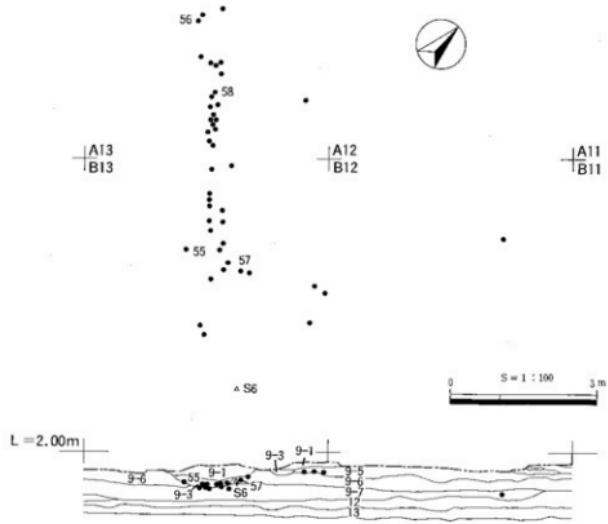
第57図 B-1～3区・水田3



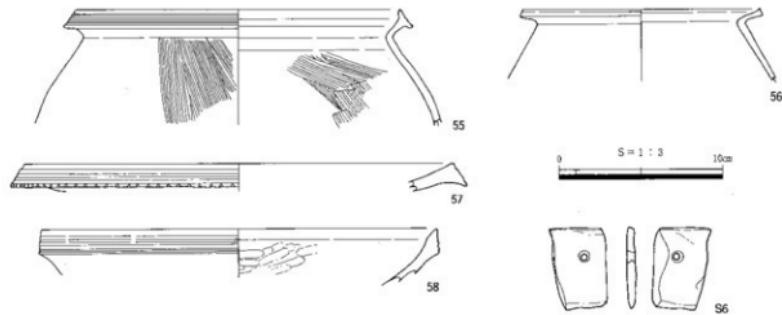
第58図 A・B-11~14区・水田3



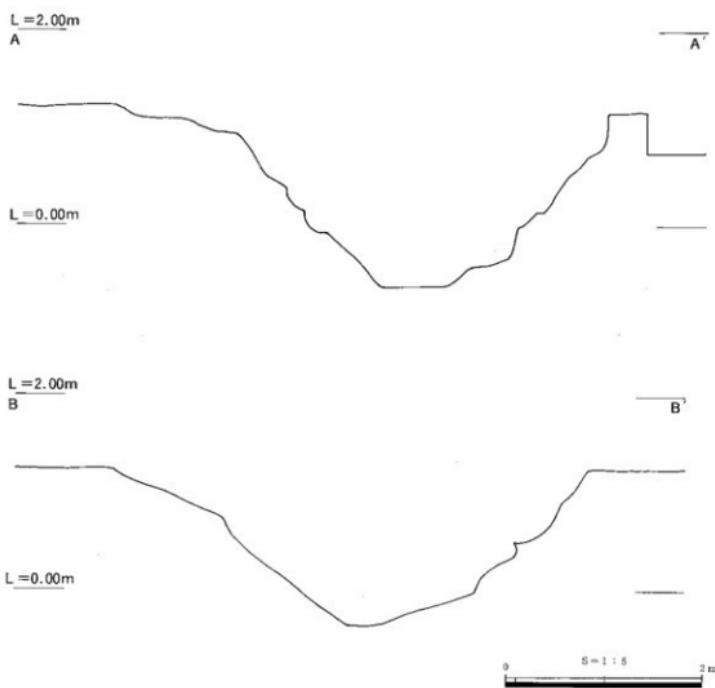
第59図 B-1~3区・水田3出土遺物



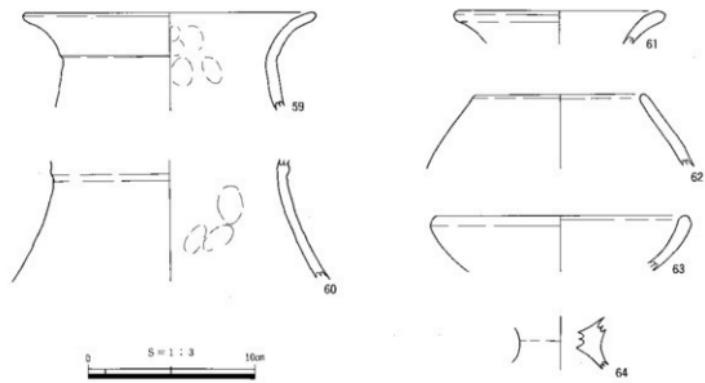
第60図 A・B-12~13区・洪水堆積(第9-3層)遺物分布状況



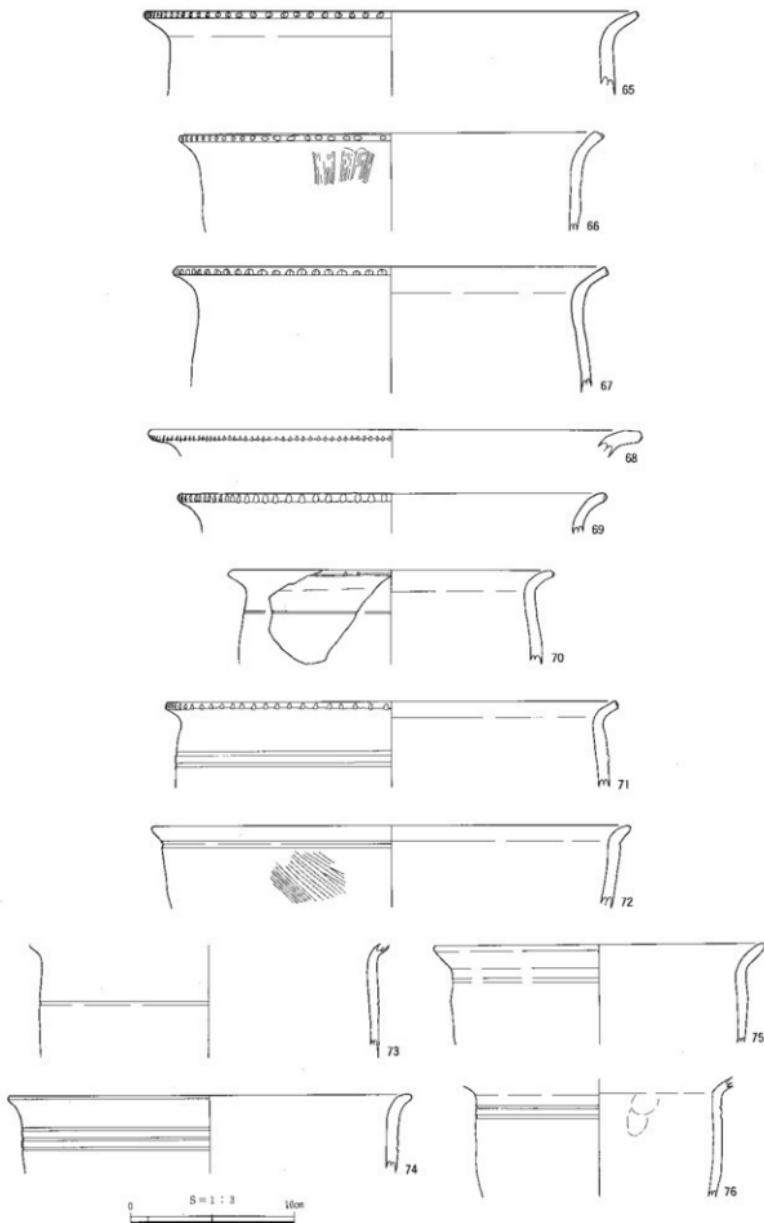
第61図 A・B-12~13区・洪水堆積(第9-3層)出土遺物



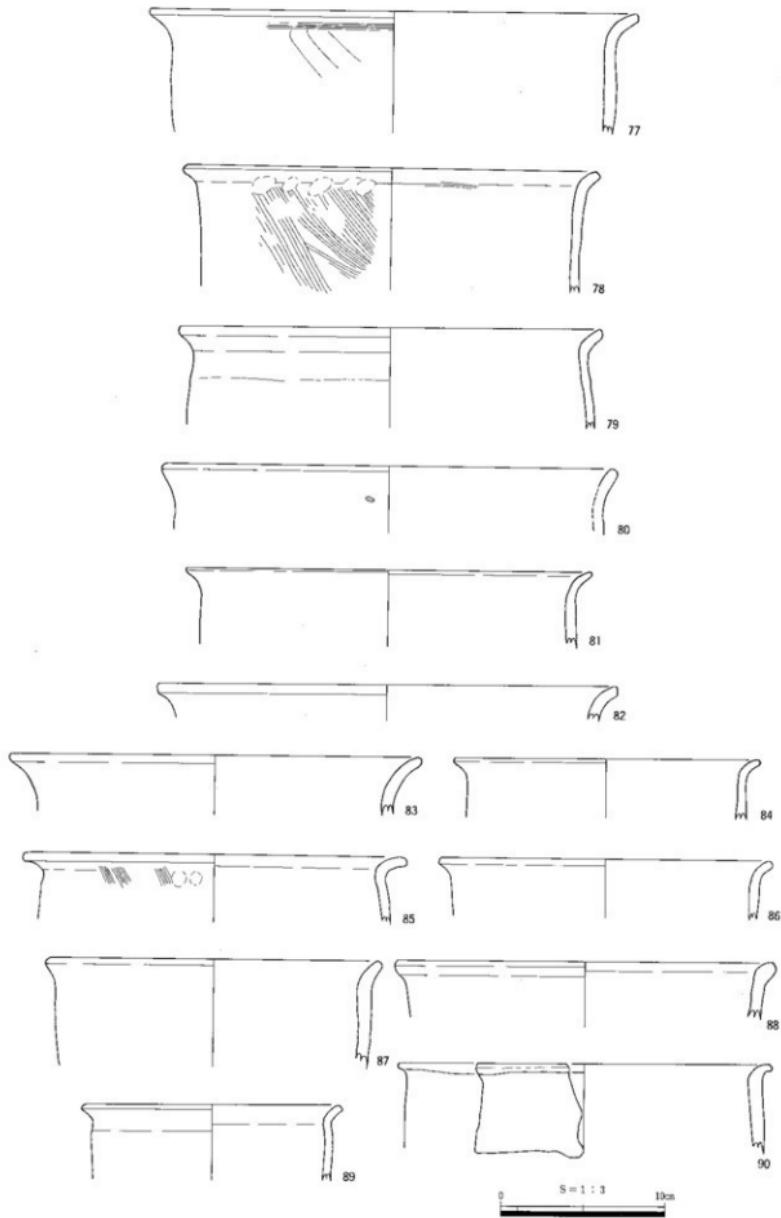
第62図 SD-04断面図



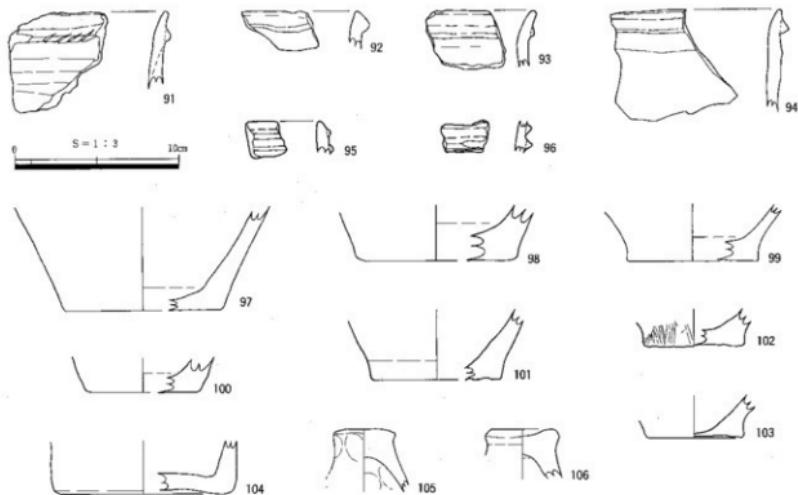
第63図 SD-04出土遺物1



第64図 SD-04出土遺物2



第65図 SD-04出土遺物3



第66図 SD-04出土遺物4

ていることが確認された。しかし、シルトと粗砂の互層のため、SD-04が掘り込まれている面を、明瞭に分層するにはいたらず、面的に捉えることはできなかった。そこで、第9層上面の第2造構面調査終了後、SD-04が検出できる高さまで掘り下げ、この検出面を第3造構面とした。SD-04以外には、杭列等が検出された。また、第3造構面からは、ほとんど遺物は出土しておらず、橋(W10)以外の遺物はSD-04を埋める粗砂中からの出土である。

SD-04 (第55・62・63・64・65・66・67・68・69・70・71図)

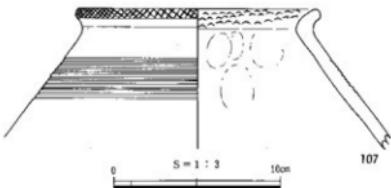
A-1～B-10区にかけて、調査区内を北東～南西に横切るように位置する。規模は幅約5m、深さ約2mを測り、今回の調査では、約40mを検出した。ほぼ真上には、第2造構面で検出したSD-03が位置する。

当造構は、断面逆台形を呈し、直線的に延びることから、人工的な水路と考えられる。底面から約1mの高さには、両壁に水による浸食の痕が残る。おそらく、最高時には、この高さまで、水位があったものと推定される。両壁面には、水による浸食以外に、足跡状の小穴が無数にある¹⁾。

また、埋土は全て粗砂で、この粗砂を分層することはできなかった(巻頭図版3)。おそらく、大規模な洪水災害により、一時にして埋没したものと考えられる。粗砂中に多量の遺物が含まれておらず、弥生時代前期～後期中葉までの土器が混在する状況で出土している。その内、主体を占めるのは弥生時代中期中葉～後期中葉の土器である。本造構が、弥生時代前期の包含層・第13層を掘り込んでいることから、前期の土器も比較的多く認められる。いずれの遺物も磨滅が著しい。

さらに、本造構を埋める粗砂は、川砂で、法勝寺川の砂礫構成と一致する(第5章第1節参照)。このことから、弥生時代後期に、法勝寺川の大規模な氾濫があったものと考えられる。また、第3造構面下層、上層(第9層・洪水堆積)中の粗砂も、法勝寺川の砂で、弥生時代中期～後期にかけて、度重なる法勝寺川の氾濫があったことが窺われる。この弥生時代中期～後期の土器を含む法勝寺川の砂は、現米子市街地に広く分布している。

SD-04は、第5次調査時のSD-04に連続し、第1次調査で河川と報告されている造構にも連続する一連のものと思われる。また、調査区の北東方向へも直線的に延びていくことが現水田下で確認されている(第5



第67図 SD-04出土遺物5

章第1節参照)。

第63図～第71図がSD-04出土の遺物である。第63・64・65図は弥生時代前期の土器で、59～61は壺形土器、62は無頸壺、63は浅鉢、64は高杯の脚部、65～90は壺形土器である。いずれも磨滅しており、調整が判らなくなっているものが多いが、壺形土器には、刷毛目の残るものがある。壺形土器のうち、59、60は口頭部の境に低い段が形成される。65～71は口縁端部に刻目が施された壺で、刻目が端部全面に施されるものと、下端に施されるものとがある。70は脚部上半に一条の沈線、71は二条の沈線が施される。72～90は口縁端部に刻目の施されない壺形土器で、72は屈曲部に一条の沈線、73、75は脚部上半に一条の沈線、74は三条の沈線が施される。76は口縁端部を欠損するが、脚部上半に二条の沈線が施される。88は口縁部がやや肥厚し、如意形と言うより逆Lに近い形態を呈す。90は端部を折り返すように丸くおさめている点が、他の如意形口縁の壺形土器とは異なる。

第66図91～96は突帯文土器。91は口縁端部から下がったところに刻目突帯がめぐる。92は口縁端部に接して無刻目突帯、93、94は口縁端部から下がったところに無刻目突帯が付く。95、96は二条の平行する無刻目突帯が付く。第67図97～104は弥生時代前期の土器の底部で、突帯文土器の底部を含んでいる可能性もある。105、106は壺形土器の摘み部と思われる。

第67図107は、口縁部外面に斜格子文、内面には三段にわたって千鳥状に三角形の刺突文、脚部上半には多条ヘラ描沈線が施される。梅描文でない点を考慮すると前中期業に位置づけられる。

第68・69図は弥生時代中期中葉～後葉の土器である。第68図108～117は壺形土器で、108、109、113、114は中期中葉、110～112、115～117は中期後葉と思われる。118、119は無頸壺で、前者が中期中葉、後者が後葉か。120～123は高杯形土器、120、121は中期中葉、122、123は中期後葉である。124は中期後葉の壺か無頸壺の高台と思われる。125～143は壺形土器。125～127、134～139は中期中葉、140、141は中葉終わり頃から後葉と思われる。128～133、142、143は後葉の土器である。

第70図144～155は弥生時代後期前業～中葉の土器である。144、145は壺形土器で、145は球胴形を呈し、脚部上半に波状文が描かれ、横位置に把手が付くようである。146～153は壺、154、155は高杯の脚部である。第70図156～163は底部片で、中期中葉～後期中葉のものである。

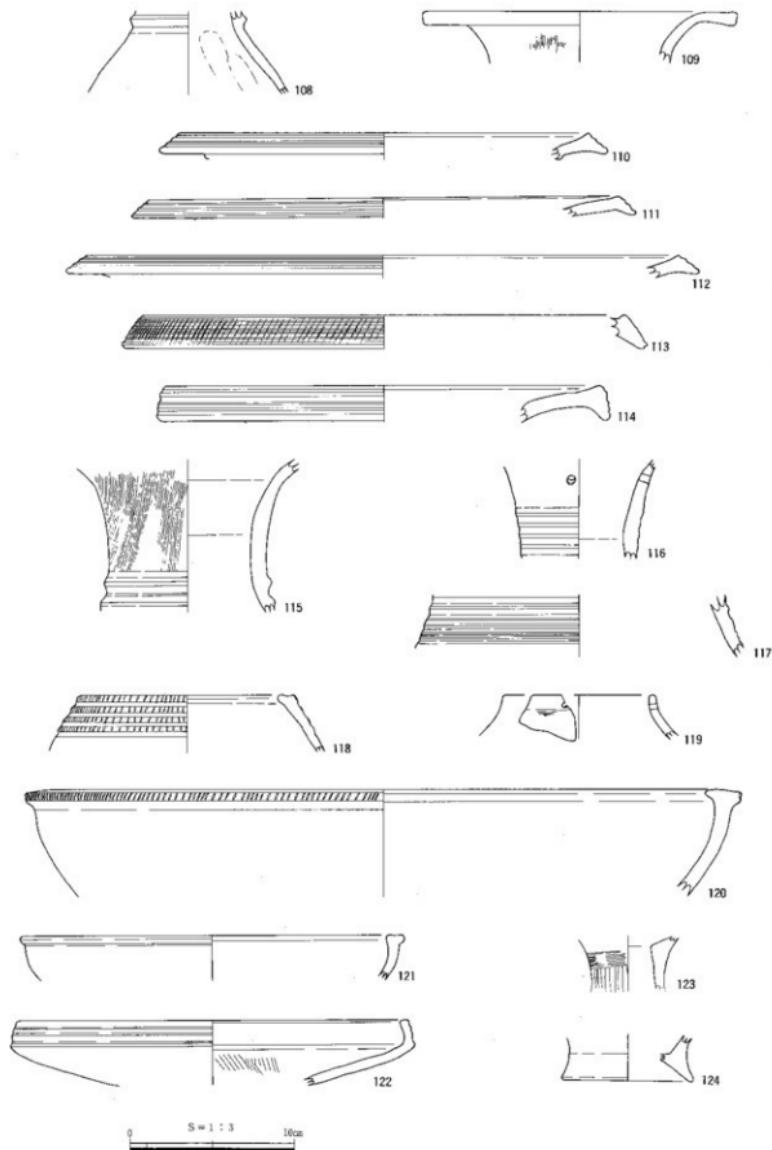
SD-04内には、木片や流木も多量に認められたが、加工の施された木製品としては、唯一、権(第71図W9)が出土したにすぎず、比較的多くの木製品を包含する第2造構面、SD-03とは対称的である。また、第71図S7、S8の石鑿、S9の磨製石斧の刃部が出土した。

杭列 SX-01 SX-02 (第55・72図)

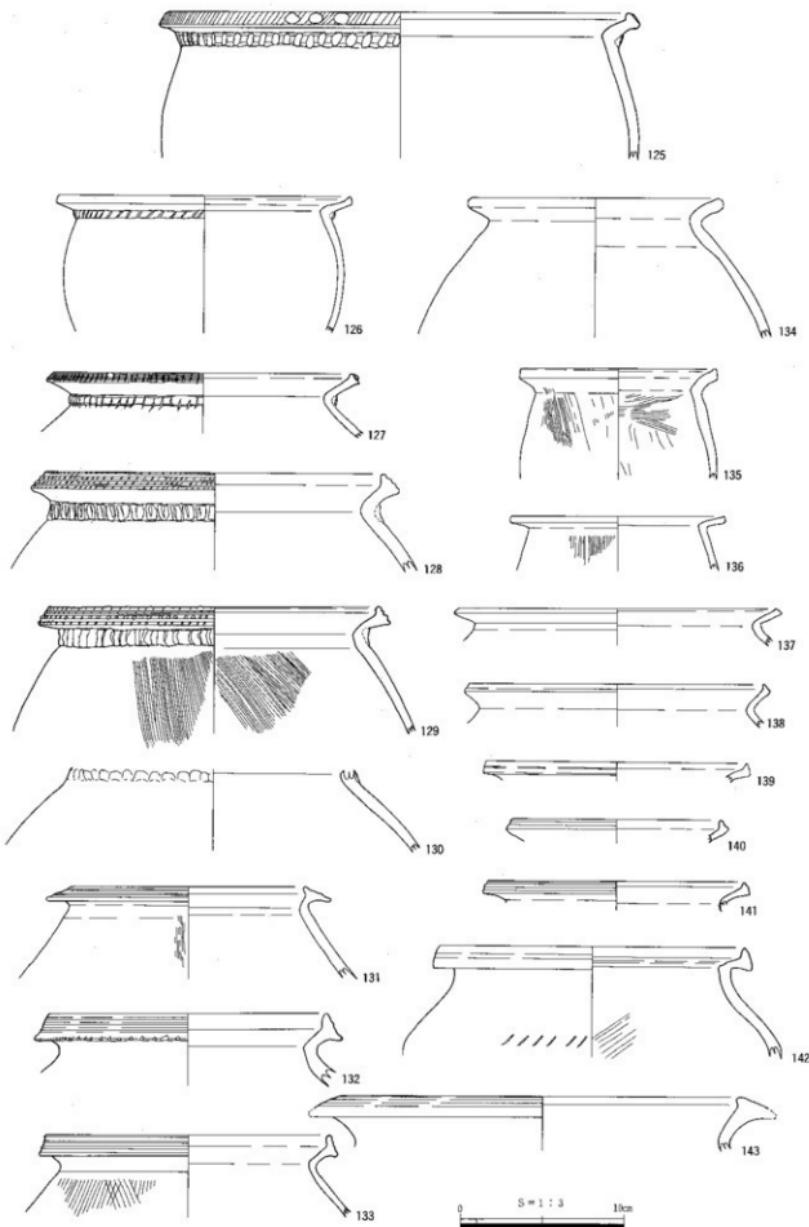
B-11～14区にかけて、SD-04に沿うようにほぼ一直線に並ぶ杭列を検出した。遺存状況は悪く、痕跡を確認したにとどまるものも多い。

B-7区に位置するSX-01は、杭列に伴うものと思われる。もしくは杭列のうち、遺存状況が良好な部分を考えることもできる。横木がわたしてあり、そこからSD-04に向かって斜めに杭が打ち込まれている。

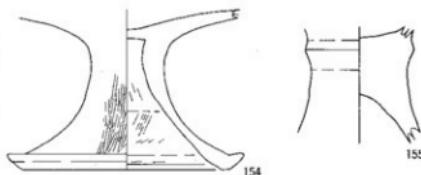
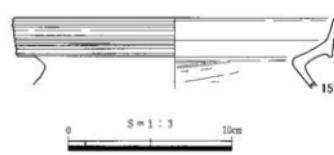
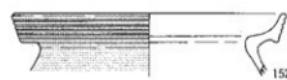
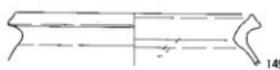
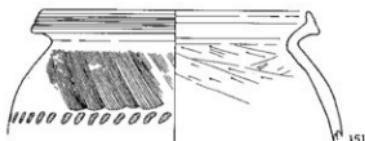
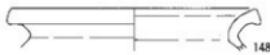
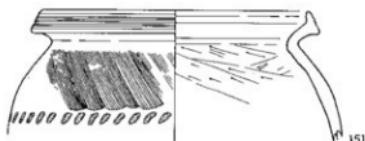
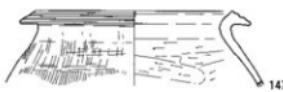
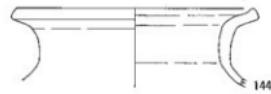
SX-02は、B-13区に位置する遺構で、杭列に関連するものと推測される。数本の横木が渡してあり、そこから東に向かって斜めに杭が打ち込まれている。この点ではSX-01に類似する。しかし、約2m北西側



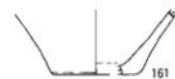
第68図 SD-04出土遺物 6



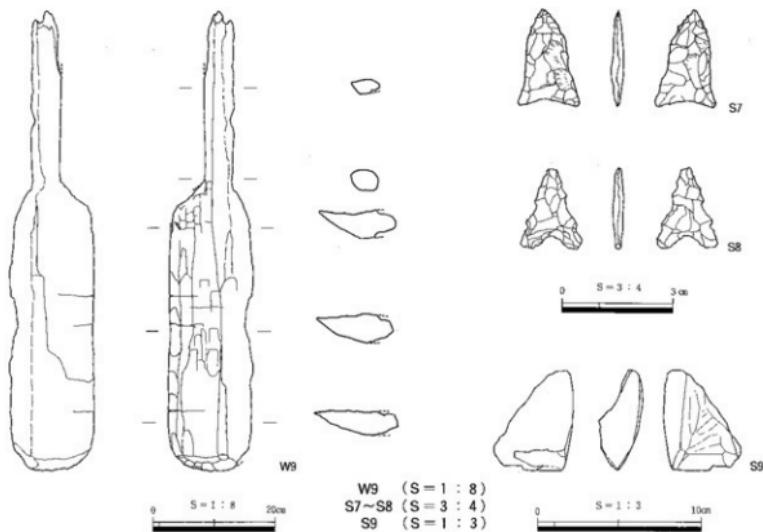
第69図 SD-04出土遺物7



155



第70図 SD-04出土遺物 8



第71図 SD-04出土遺物9

に2本の木材が横たわっており、これらも付随するものと考えると、本来、橋状の囲いが形成されていた可能性もある。

(濱田)

4. 遺構外出土の遺物

第12層出土遺物（第56図）

第4遺構面、水田1が上面に形成される第12層中から、第56図W6・7が出土した。W6は大型の木製品で、表面は炭化している。端部の一方は、鉤状に加工が施されている。もう一方については、破損している可能性もあるが、先端が尖る。建築材か。W7は板材で、全面に多数の加工痕が明瞭に残る。第13層上層であること、第4遺構面下からの出土であることから、弥生時代前期以降、弥生時代中期前半か。

(濱田)

第9-3層出土遺物（第60・61図）

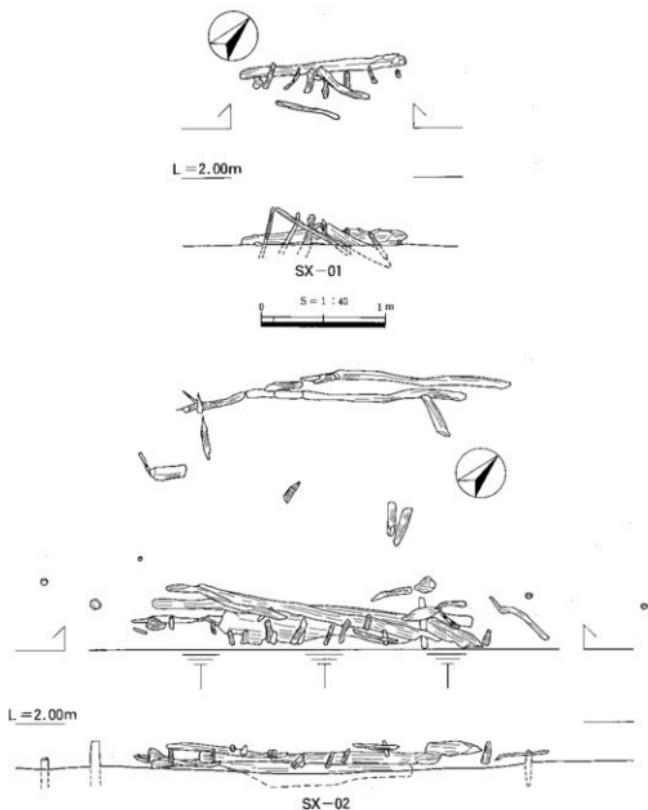
第4遺構面埋没後は、粗砂とシルト層が互層状に堆積していることから、破堤と越堤による洪水が頻繁にあったことが窺われる。第9層、洪水堆積層中、特にシルト層にはほとんど遺物は含まれていないが、破堤によって運ばれてきた粗砂中に、遺物が含まれている場合がある（第60図）。

第9-3層は、第3遺構面が形成された洪水堆積中の粗砂層で、北西-南東に方向に帶状に広がる。この中に弥生時代前期から中期後葉の遺物が包含されていた。かなりローリングを受けており、磨滅したものばかりである。図化できたのは、第61図の5点である。55は中期後葉の壺形土器。56は中期中葉の壺形土器の口縁部か。57は中期後葉の壺形土器、58は中期後葉の高杯であろうか。S6は石包丁の破片である。

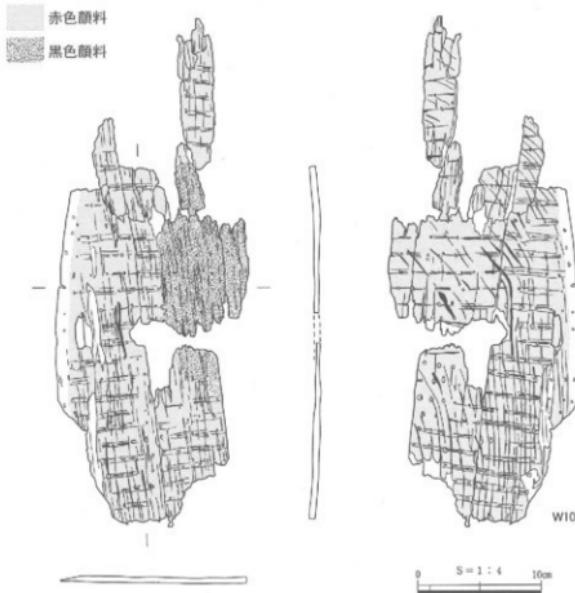
(濱田)

第3遺構面出土の遺物（第55・73図）

第3遺構面からは、木製の橋が出土した（第73図W10、巻頭図版1-1）。出土地点はB-14区で、見かけ上、SD-04とかなり離れているように思われるが、調査区外にSD-04が直線的に延びていることを想定すると、西に10m弱、離れているにすぎない（第55図）。粗砂層中で、自然木と絡み合い、押しつぶされた状態



第72図 SX-01・02



第73図 第3遺構面出土遺物

で出土した（巻頭図版1-2）。

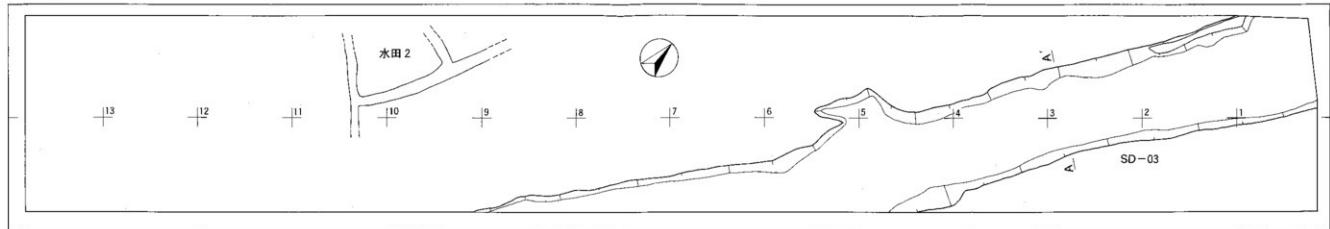
橋は、モミ材を用いた板材で、厚さは6ないし7mmと薄手である（第4章第11節参照）。残存長40.5cm、残存幅15cmを測り、縁辺部が遺存している。縁は直線ではなく、やや弧を描く。表裏とも、赤色顔料が薄く塗布され、一方には、中心と思われる位置に黒色顔料が円形に塗られる。赤色顔料は水銀朱、黒色顔料の成分は不明である（第4章第12節参照）。赤色顔料が薄く塗られている部分は、板目にあらわれた年輪が黒く浮き上がり文様効果となっている。

橋には、板目に直行するように約1cm間隔に小孔が規則的に並ぶ。補強のため、紐で綴じられていたと思われる、小孔間に紐の痕跡が残るが、紐は遺存していなかった（巻頭図版2-4）。また、縁辺部にも、縁に沿って小孔が並ぶ。縁辺部、幅約1cmには、全く顔料が付着しておらず、ここに皮革等が綴じ付けられていたものと思われる。

第3遺構面では、磨滅した弥生土器胴部片が数点出土した以外に、土器は出土していない。そのため、第3遺構面を掘り込むSD-04出土遺物を参考にするならば、第3遺構面の埋没時期は後期中葉と考えられる。しかし、SD-04粗砂層中の遺物は、時間幅をもっており、現位置を保つてはいない橋について直ちに後期中葉と考えることは難しい。SD-04では中期中葉～後葉の土器の出土量が多いことも考慮する必要があろう。

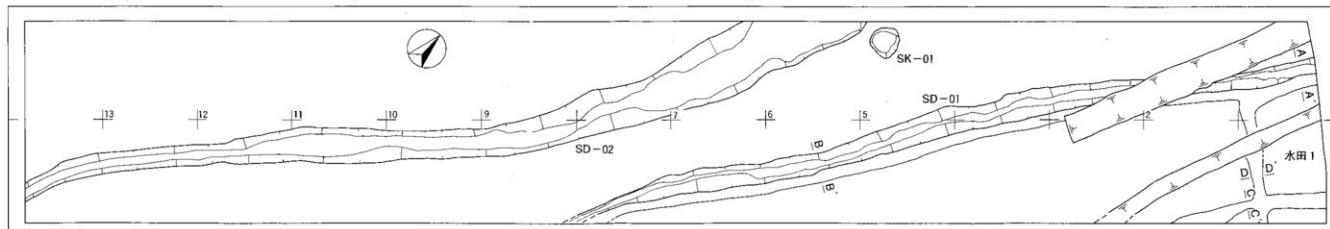
（濱田）

註 1) 地質学的には、水の浸食や小動物等の生痕で説明できないという指摘を受けた。

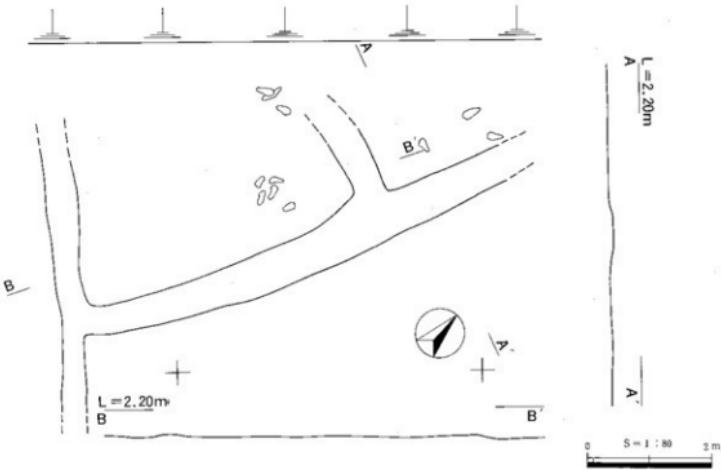


第74図 古墳時代～奈良時代・第2遺構面全体図

0 S = 1 : 200 10m



第75図 中近世・第1遺構面全体図



第76図 水田2

第6節 古墳時代～奈良時代（第2遺構面）の調査

1. 概要（第74図）

第5層を掘り下げた結果、第9層上面で水路と水田の一部を検出し、この検出面を第2遺構面とした。しかし、第2遺構面の時期を決定するために有効な遺物はほとんど出土していない。第5次調査の結果と合わせ考えると、当遺構面の最終的な埋没時期は8～9世紀と思われる。（佐伯）

2. 遺構と遺物

水田2（第74・76図）

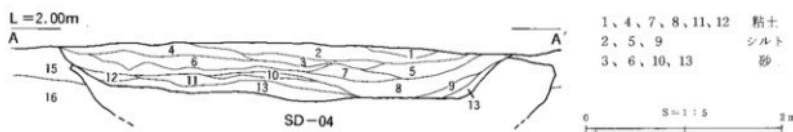
9区から11区において検出した。第5層を掘り下げ中に、F字状の畦畔状の高まりを平面で、さらにサブトレンチの断面でシルトと砂の互層に畦畔状の高まりを確認したため、深さ1cmごとに精査を繰り返し行ない検出したものである。また、水田面では、畦畔とともに数個の足跡を検出した。

畦畔の検出規模は、幅0.5m、高さは5～10cmで、南北に8m程度検出できた。しかし、稻株跡や、顕著な耕作痕は確認できなかった。時期は水田から直接遺物が出土しなかったため不明であるが、検出面から古墳時代から奈良時代に営まれたものと思われる。（佐伯）

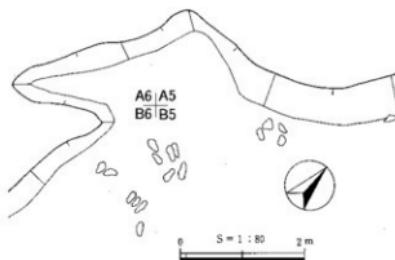
SD-03（第74・77・78・79・80・81図）

1区から9区において検出した水路である。第5次調査SD-03と一連の遺構である。第3遺構面のSD-04と重複する形で、幅5～6m、深さ0.6mを測る。遺構は第9層とSD-04の堆積砂を掘り込んで作られている。水路の堆積状況は全体的にシルトと粗砂が互層状に堆積する（第77図）。また、5、6区には西側壁面を掘り込んで浅瀬を作る地点があり、この底面から足跡を多数検出している（第78図）。

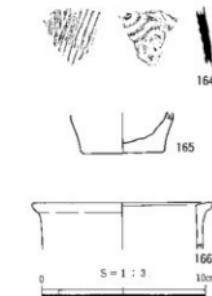
この水路内からはナスピ形着柄鉗、有頭状棒などの木器を多数検出している。遺物は、粗砂中から多く出土する傾向があった。第80図W11、W13～W15はナスピ形着柄鉗である。W12は鉗であろう。第81図W16、W17は有頭状棒、W18は板材、W19は鉗などの柄の未製品であろうか。W20～W23は杭である。また、木器の他には、第



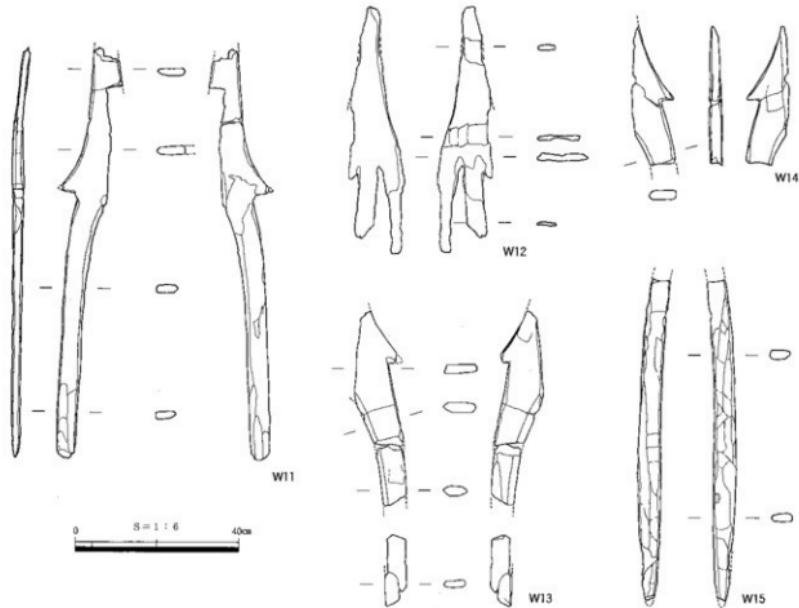
第77図 SD-03 土層断面図



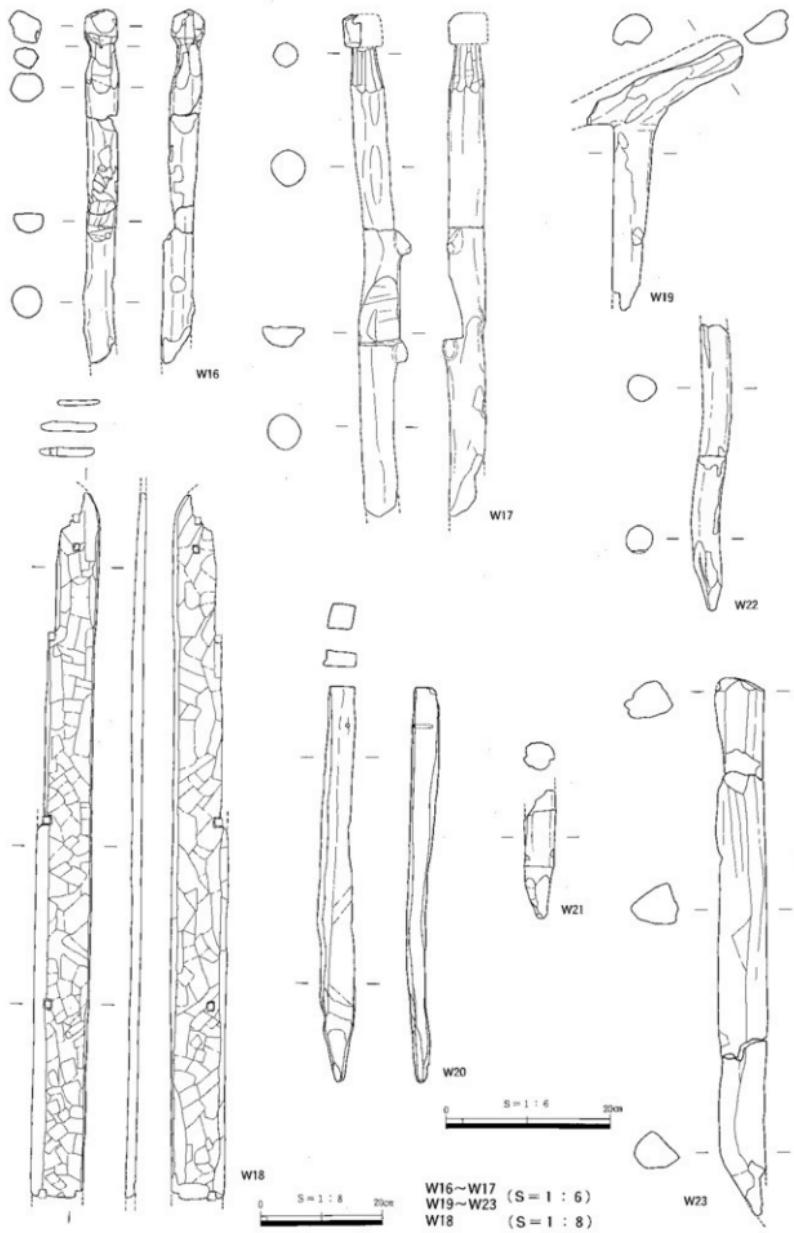
第78図 SD-03 足跡



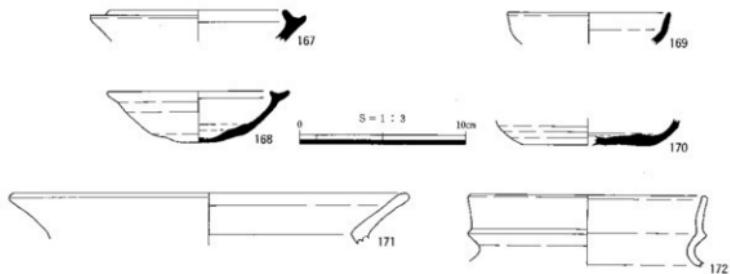
第79図 SD-03 出土遺物 1



第80図 SD-03 出土遺物 2



第81図 SD-03出土遺物3



第82図 第5-3層出土遺物

79図に示した土器小片が少量出土しているが、埋没時期を明確に示す遺物は出土していない。堆積状況から、古墳時代前期以降、数次にわたって埋没していった状況を窺うことができるが、5次調査の結果と考え合わせると8、9世紀までには完全に埋没していたものと思われる。

(佐伯)

3. 遺構外出土の遺物（第82図）

第2遺構面を埋める第5-3層からは、須恵器、土師器が少量出土している。第82図167-170は杯身で、第82図167・168は7世紀前葉から中葉、169、170は8世紀代であろう。171、172は土師器の壺口縁部片である。

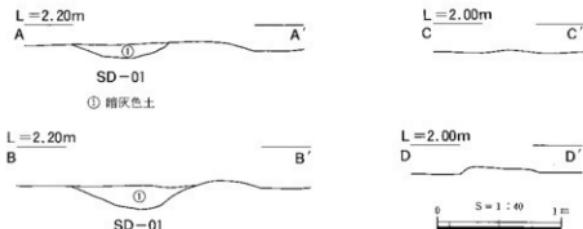
(佐伯)

第7節 中・近世（第1遺構面）の調査

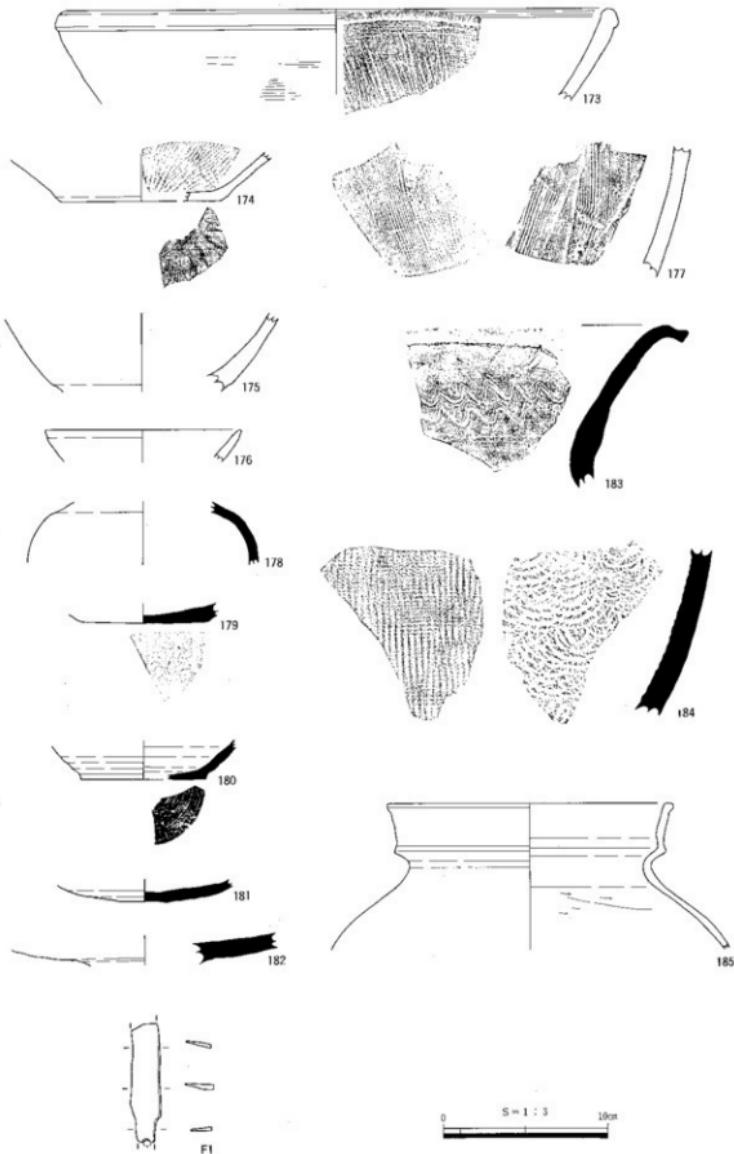
1. 概要

近代の水田床土を除去後、第5-3層上面で、水田および水路を検出した。この検出面を第1遺構面とする。第1遺構面以上は、調査区内周辺が造成されるまでの間、継続的に水田が営まれていた。さらに、造成以降は、暗渠排水溝などが設置されており、攪乱は第1遺構面までおよんでいる。また、第1遺構面の水田痕を横切る杭列が検出されたが、これは第5次調査時に確認された杭列（図版3-6）に連続するもので、明治以降の水田に併設された水路の痕跡である。

(濱田)



第83図 水田1 · SD-01断面図



第84図 水田1出土遺物



第85図 SD-01出土遺物

2. 遺構と遺物

水田1（第75・83・84図）

1区から9区にかけて北東～南西方向に走る2本の畦畔と、1区においてそれと直交する畦畔を第5～2層除去後、第5～3層上で検出した。西側の畦畔には水路SD-01が併設される。畦畔は幅0.5～1m、高さ5～10cmを測る。平行する2本の畦畔の間隔は6mで、比較的小区画の水田である。水田の土壤は耕作土、畦畔ともシルトがベースであり、全体的に強くグライ化していたが、下層にはマンガンや炭酸鉄の集積などはみられず、灌漑施設を備えた水田土壤としての特徴を欠いている。水田面から、瓦質の擂鉢（第84図173、174）、唐津焼の碗（175）、上師皿（176）、土師質の甕（177）、須恵器（178～184）、土師器の甕（185）、刀子（F1）等が出土した。時期については、水田面および水田1を埋める5～2層出土の遺物から、16～17世紀代には埋没していたものと考えられる。

（佐伯）

SD-01（第75・83・85図）

調査区の1区から9区の間をほぼ北東から南西方向に伸びる水路である。検出した規模は長さ約40m、幅約1m、深さ約0.2mである。一部近代の暗渠によって擾乱されている。断面形は緩やかなU字形を呈し、東岸部は水田1の畦畔を兼ねている。埋土は1層で、埋土中から土師器の甕（第85図186）が出土した。遺構が埋没した時期は、水田1から16世紀～17世紀代と思われる。

（佐伯）

SD-02（第75・86・87図）

調査区の6区から14区の間を北東から南西方向にやや蛇行しながら伸びる水路である。検出した規模は長さ約45m、幅約1～3m、深さ約0.2～0.3mである。断面はU字形を呈し、内部には砂、粘土、シルトが堆積していた。また底面には水路内を人間が歩行したことを示す足跡が多数残されていた。底面の足跡には粗砂が堆積しており、足跡の依存状況は良好であった。遺物は用途不明木器1点（第87図W24）と杭2点（W25、W26）が底面から出土した。築造年代、埋没年代とも時期を特定できる遺物がなく不明である。SD-01とは、同一遺構面で検出しておらず、ほぼ同時期と思われる。

（佐伯）

SK-01

A～5区の北西部に位置する。直径1.6m、深さ0.55mでは円形を呈する。明褐色土と、暗灰色粘土など4層が堆積していた。土坑内からの出土遺物は年代、性格とも不明であるが、SD-01・02と同一遺構面で検出しておらず、両水路とそれほど時期を違えるものではないと思われる。

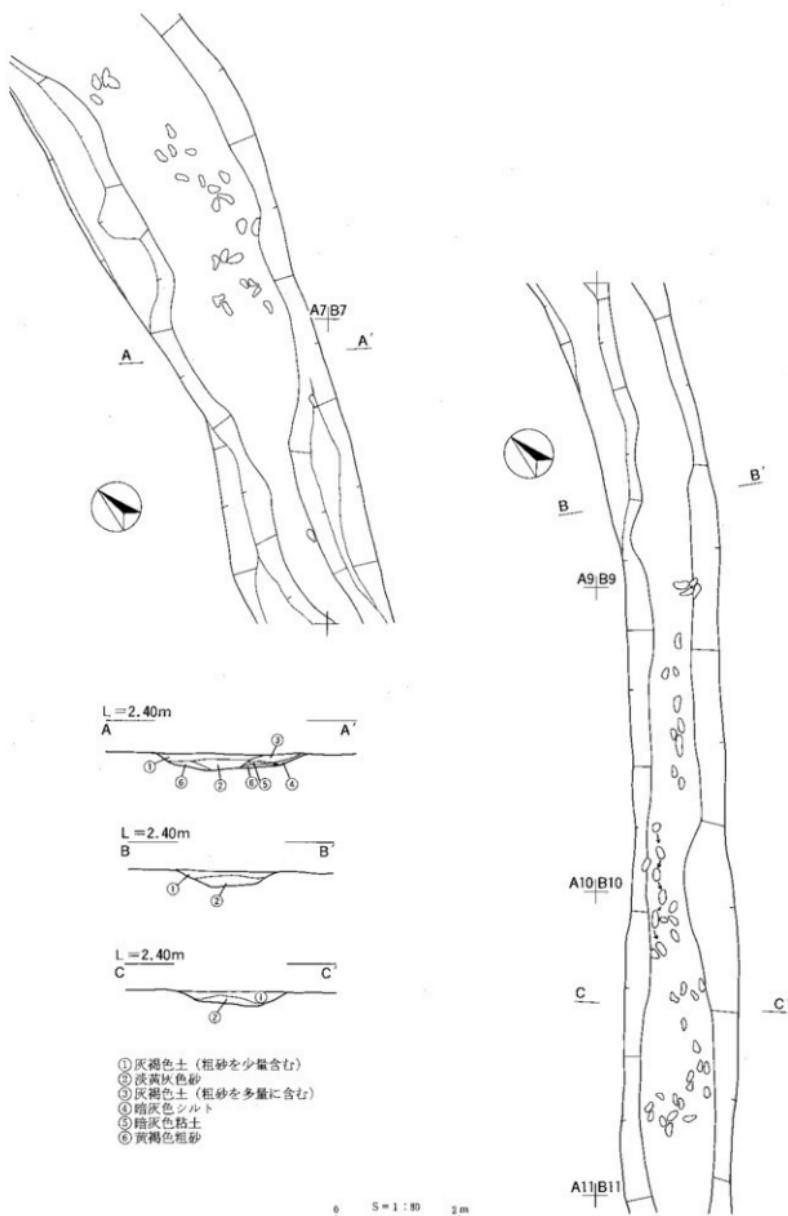
（佐伯）

3. 遺構外出土の遺物

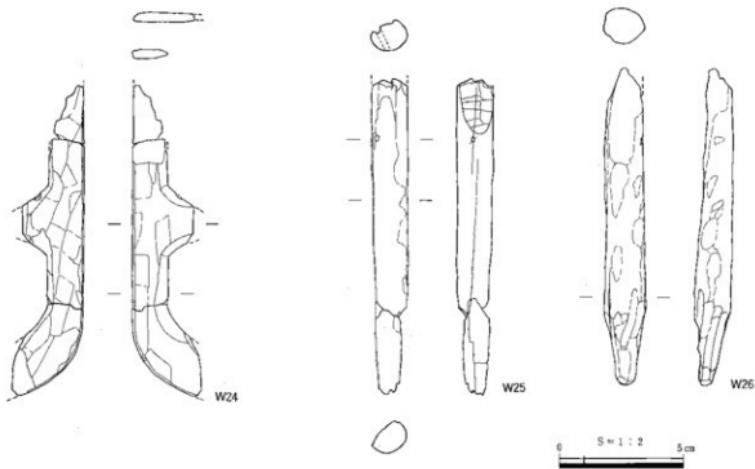
第5～2層出土の遺物（第89・90・91・92・93図）

水田1を埋める5～2層からは、古墳時代～中・近世に至る遺物が出土した。第89図187～202は須恵器である。187は6世紀中葉、192は7世紀中葉の杯蓋。188、189は6世紀後葉から7世紀初頭、190、191は7世紀前葉から中葉の杯身である。193～202は8世紀以降の須恵器で193が杯蓋、194～202は杯である。202は平面形が方形を呈すと思われ、管見の限り西伯耆に類例は認められない。203～205は土師器で、203・204が甕、205が高壺である。

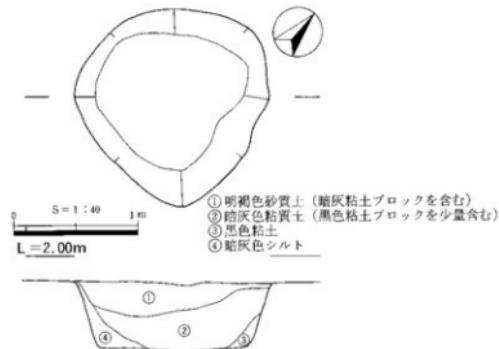
第90図206・207は天目茶碗で、胎土、焼成とも極めて良好である。時期は14～15世紀代か。208～218は瓦質土器の類である。208・209は甕で、208は外面部格子状叩き痕、内面に雑な刷毛目状の擦痕が認められる。209は外面部格子状叩き痕、内面ナデ調整。210は羽釜、211・212は鍋と思われる。212は口縁部内面に張り出しがあり、刷毛



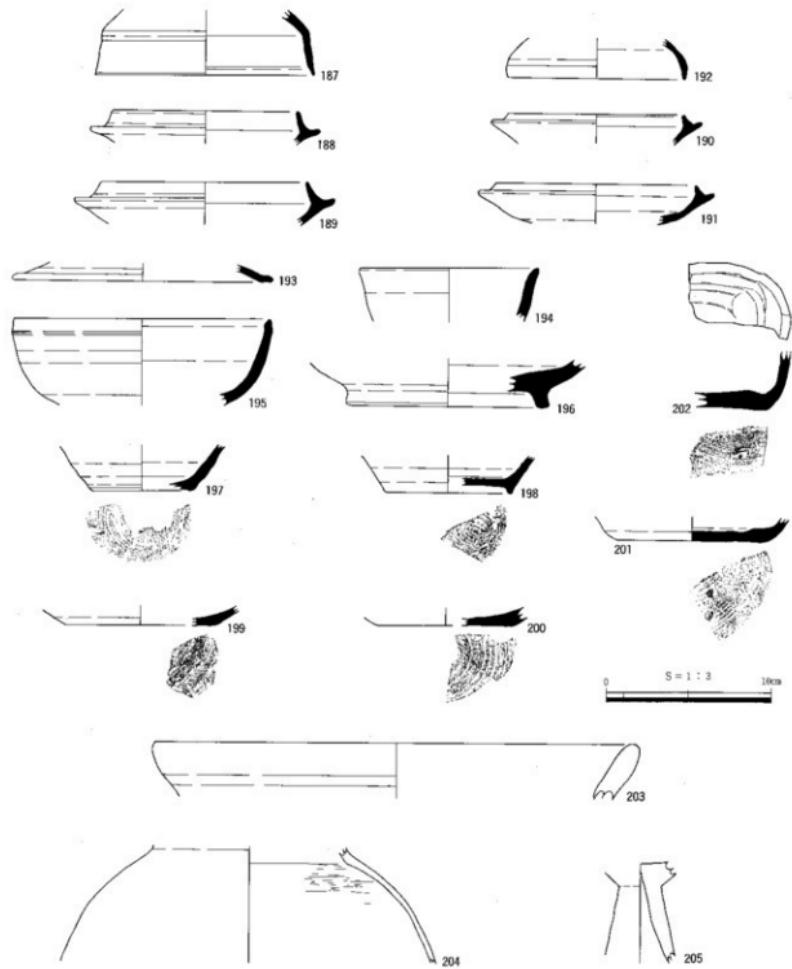
第86図 SD-02



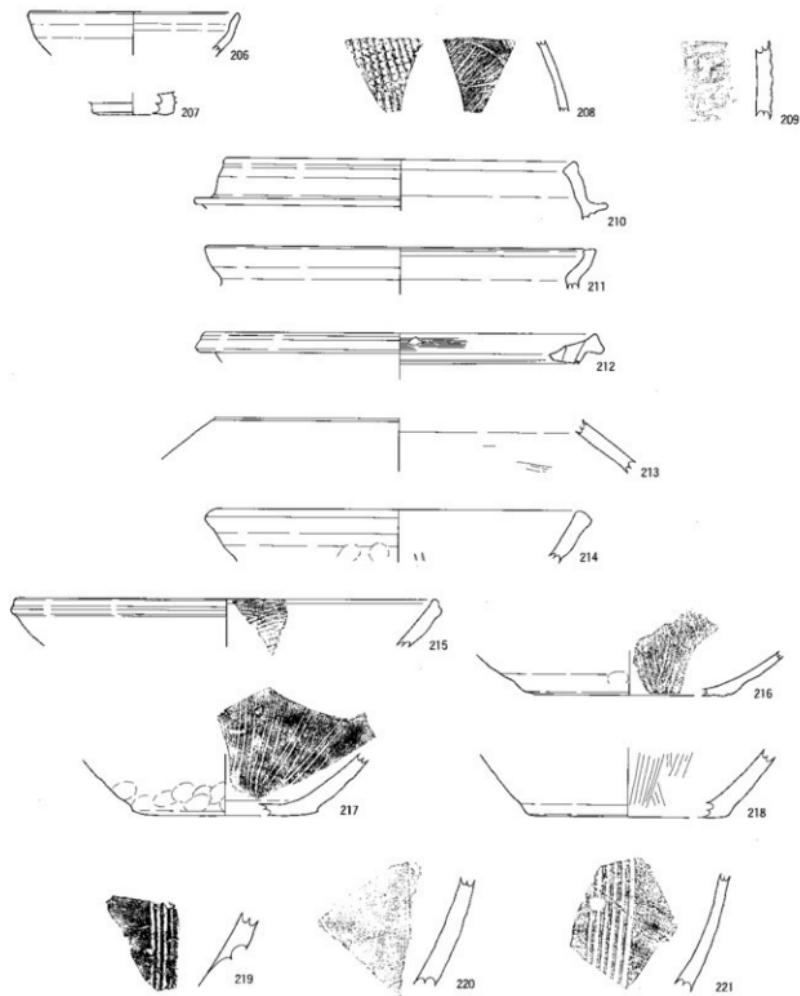
第87図 SD-02出土遺物



第88図 SK-01

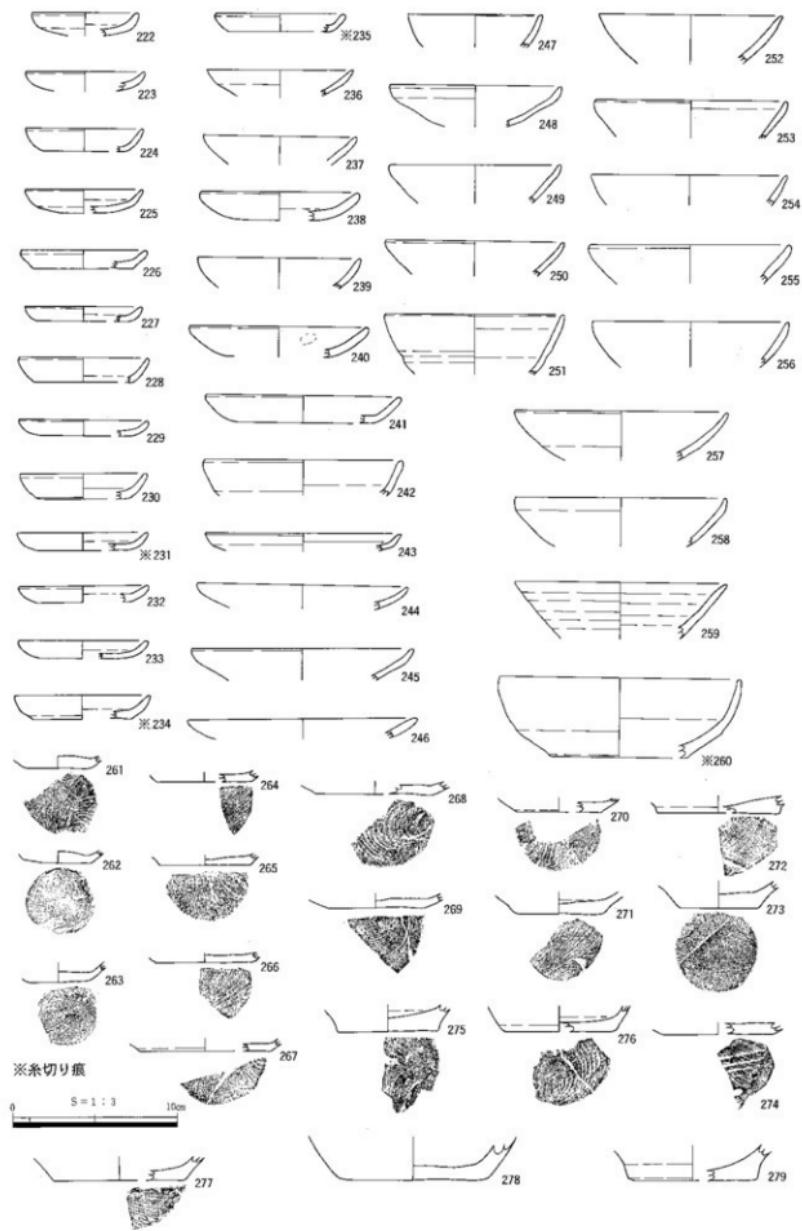


第89図 第5—2層出土遺物 1

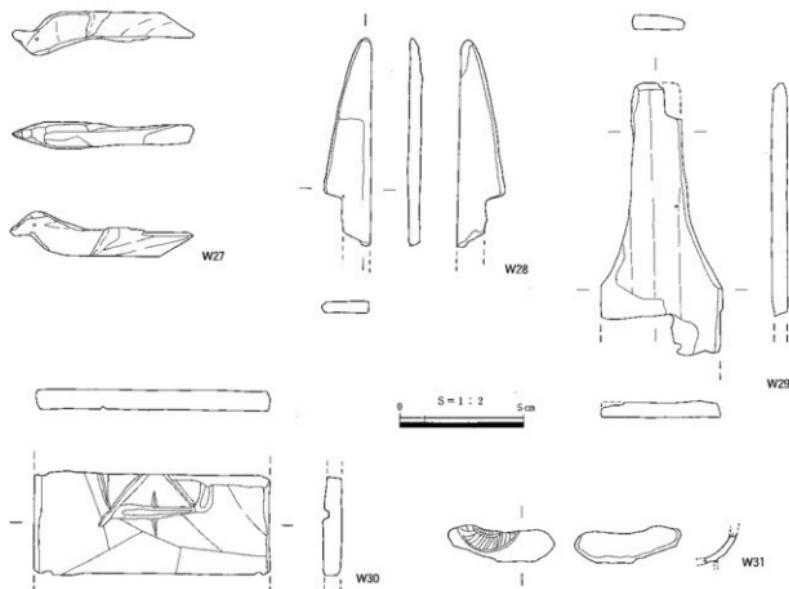


第90図 第5—2層出土遺物2

0 S = 1 : 3 10cm



第91図 第5—2層出土遺物 3



第92図 第5-2層出土遺物4

目調整が施され、孔が穿たれている。213は甕か壺の胴部片である。214~218は擂鉢で、口縁部はやや肥厚し、底面は指頭圧痕を残す。内面の鉗目は、3条の鉗目を等間隔に施するもの(217)と、多方向の鉗目が重複するものの(214~216、218)とに大別できる。219~221は備前焼の擂り鉢。胴部小片で時期は特定しがたいが、16世紀代か。尚、瓦質土器については、個々の時期を特定しかねるが、かなり時間幅をもつものと思われる。また、211の鍋形土器の口縁部は防長型の瓦質土器に似るが、基本的には、いずれも在地のものと考えられる。

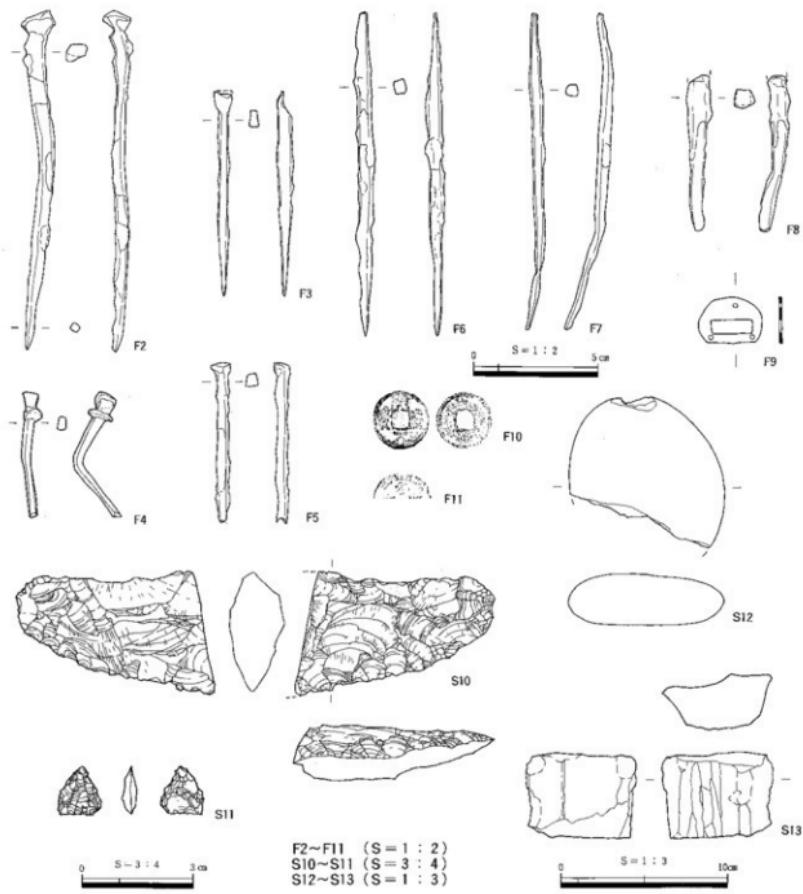
第91図は土師質土器である。形態は、浅い皿形、やや深い皿形、楕形等に大別できる。さらに、皿形については、底部から内湾気味に緩やかに立ち上がるるものと、鋭く屈曲し直線的に立ち上がるものがある。また、底部についてはナデ調整が施されるものと、静止糸切り痕、回転糸切り痕を残すものがある。273~274は、板状工具による段が残る。いずれも糸切り後に行われている。278、279は底部であるが、他に比べ厚い作りで、鉢形を呈すと思われる。

第92図は木製品で、W27は鳥形、W28は刀子(包丁)形木製品、W29、W30は不明木製品である。W30については文様もしくは文字のようなものが彫られている。W31は漆器で、内面黒漆塗り、外面には黒漆の下地に赤漆で文様を描いている。

第93図F2~F8は釘で、頭部が方形のもの、折り返しになっているものと、ないものに大別できる。F4は折り返された頭部の直下に環状のものが巻かれる。F9は止め金具のようなものか。F10・F11は銅銛で、かなり摩滅しているが、F10は開元通寶、F11は元という字が認められる。

第93図S10~S13は石器で、S10は削器、S11は石鎚、いずれも黒曜石である。S13は上面に溝状の加工が施されているが、用途は不明。S12は大型の石鎚で頂部を打ち欠く。

(濱田)



第93図 第5—2層出土遺物 5

第8節 小結

小結として、第5次調査、第6次調査各造構面の対応関係について記しておく。弥生時代前期の造構面は、第6次調査地点では確認できなかったことから、第5次調査第4造構面に対応する面は第6次調査にはない。逆に第5次調査では、弥生時代中期の造構面が検出できなかったことから、第6次調査第4造構面に対応する面を欠く。続く弥生時代後期以降は、両調査の第3造構面、第2造構面、第1造構面がそれぞれ対応関係にある。造構の対応関係としては、両調査におけるSD-04、SD-03がそれぞれ一連の造構である。

(濱田)

第9節 目久美遺跡第6次調査におけるプラント・オパール分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、ガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が植物の細胞内に蓄積したものであり、植物が枯死した後も微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール（植物珪酸体）分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出し、その組成や量を明らかにする方法であり、イネを中心とするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている。

目久美遺跡第6次調査の発掘調査では、弥生時代中期前半とされる水田跡が検出された。そこで、プラント・オパール分析を行い、同遺構における稻作の確認およびその他の層における稻作の可能性について検討を行うことにした。

2. 試 料

調査地点は、0ライン土層断面と10ライン土層断面の2地点である。分析試料は、0ライン土層断面では上位より暗灰色粘土と黄灰色細砂の互層（第9層）、黄灰色細砂（第11層）、暗灰色粘土（第12—1層）、黒色粘土（第13層）、暗灰色粘土（第14層）により、10ライン土層断面では上位より暗灰色粘土と黄灰色細砂の互層（第9—1層）、暗灰色粘土（第9—2層）、暗灰色粘土と黄灰色細砂の互層（第9—6層）、灰色粘土と灰色シルトの互層（第9—7層）、暗灰色粘土（第12層）、黒色粘土（第13層）、暗灰色粘土（第14—1層）、ややシルト質の暗灰色粘土（第14—2層）においてそれぞれ採取された。なお、水田遺構が検出されたのは12層上面である。

3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）」をもとに、次の手順を行った。

- 1) 試料土の絶乾（105°C・24時間）
- 2) 試料土約1gを秤量、ガラスピース添加（直径約40 μm 、約0.02g）
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散（300W・42KHz・10分間）
- 5) 沈底法による微粒子（20 μm 以下）除去、乾燥
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピース個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数值を試料1g中のプラント・オパール個数（試料1gあたりのガラスピース個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピースの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10—5g）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。各植物の換算係数は、イネは2.94、ヨシ属は8.40、ウシクサ族は1.24、ネザサ節型は0.48、クマザサ属型は0.75である。

4. 分析結果

同定されたプラント・オパールは、イネ、ヨシ属、ウシクサ族（ススキ属型）、ネザサ節型、クマザサ属型で

ある。これらの分類群について定量を行い、その結果を表、第94、95図に示した。なお、おもな分類群については図版20に顕微鏡写真を示した。

5. 考 察

(1) 稲作の可能性について

稲作跡（水田跡）の検証や探査を行うにあたっては、イネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、プラント・オパール密度にピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくく、密度が基準値に満たなくても稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。以上のことと基準として稲作の可能性について検討を行う。

0ラインでは、第11層、第12-1層、第13層においてイネが検出された。このうち第12-1層では、プラント・オパール密度が5,000個/g程度と高い値であり、明瞭なピークが認められる。したがって、本層については耕作層であった可能性が高いと判断される。第13層では密度は3,000個/g程度である。直上の第12-1層の影響も考えられなくはないが、比較的高い密度で検出されていることから本層も耕作層であった可能性が考えられる。第11層については密度が低いこと、土質が細砂であることなどから、ここで検出されたものは他所からの混入と考えるのが妥当であろう。

10ラインでは第9-1層、第9-2層、第12層、第13層よりイネが検出された。このうち水田遺構が検出された第12層では、プラント・オパール密度が5,000個/g前後の高い値であり、明らかにピークとなっている。したがって、本層は分析的にも耕作層であったと判断される。第13層については、本地点においても3,000個/g程度の密度で検出されていることから、0ライン同様耕作層跡の可能性が考えられる。第9-2層では密度は3,000個/g弱とやや低いものの、ピークとなっている。したがって、本層では当該地点もしくは近傍において稲作が行われていた可能性が考えられる。第9-1層については検出密度が1,000個/g未満と低いことから、他所からの混入と考えられる。

(2) プラント・オパール分析からみた植生・環境

0ライン、10ラインとともに第13層においてヨシ属が卓越している。直下の第14層では、ヨシ属は0ラインでは未検出、10ラインでも低い値であり、ここで植焉な植生の変化が認められる。このことから、第13層の堆積時は本遺跡一帯は湿地化し、ヨシ属の繁茂するイネ科植生であったと推定される。第13層が黒色を呈しているのは、ヨシ属をはじめこの湿地に生育していた植物の腐植分解に起因すると考えられる。なお、第13層からイネが検出し始めたことから、この湿地を開墾して水田稲作が開始されたと推定される。

6. ま と め

日久美遺跡第6次調査においてプラント・オパール分析を行い、稲作の検証ならびに稲作跡の探査を試みた。その結果、水田遺構が検出されていた10ラインの第12層では、イネのプラント・オパールが高い密度で検出されたことより、ここで稲作が行われていたことが分析的にも確認された。0ラインの第12-1層においてもイネのプラント・オパールが高い密度で検出されたことから、水田遺構が本地点まで広がっていたと推定される。その他では、第13層と第9-2層（10ライン）についても耕作層である可能性が認められた。

※参考文献

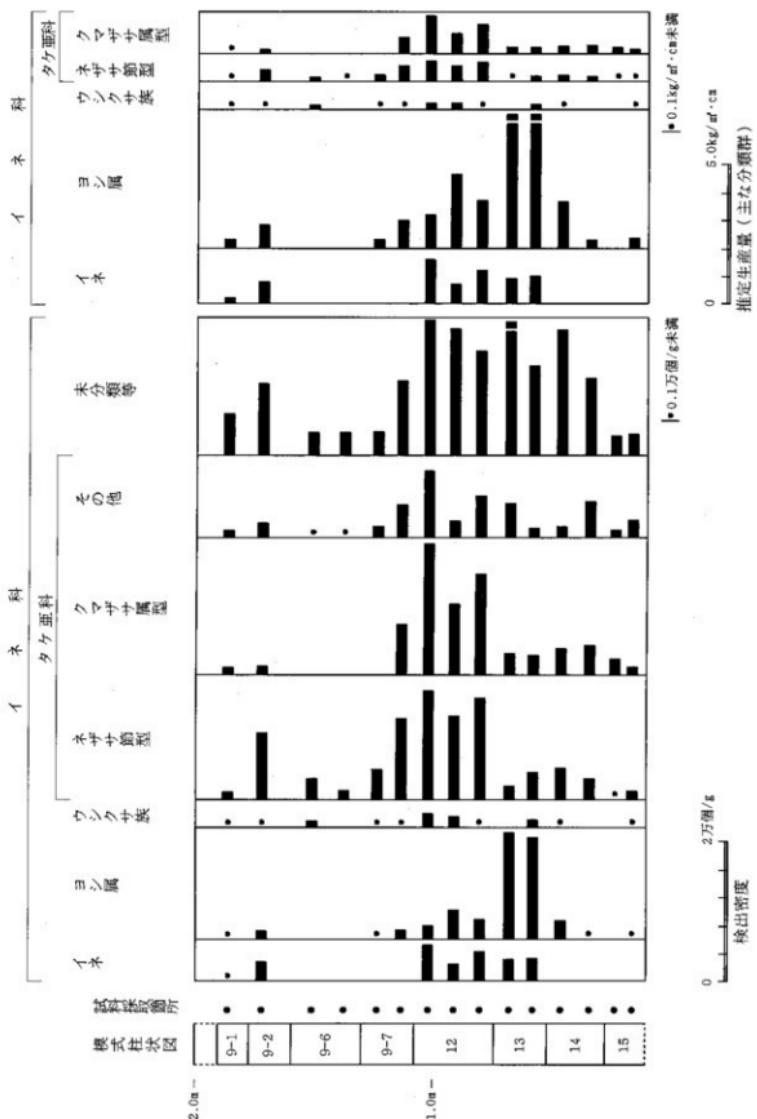
藤原宏志(1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-, 考古学と自然科学, 9: 15-29.

- 藤原宏志(1979) プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)—福岡・板付遺跡(夜臼式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(*O. sativa*L.)生産量の推定—, 考古学と自然科学, 12: 29-41.
- 藤原宏志・杉山真二(1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探査—, 考古学と自然科学, 17: 73-85.

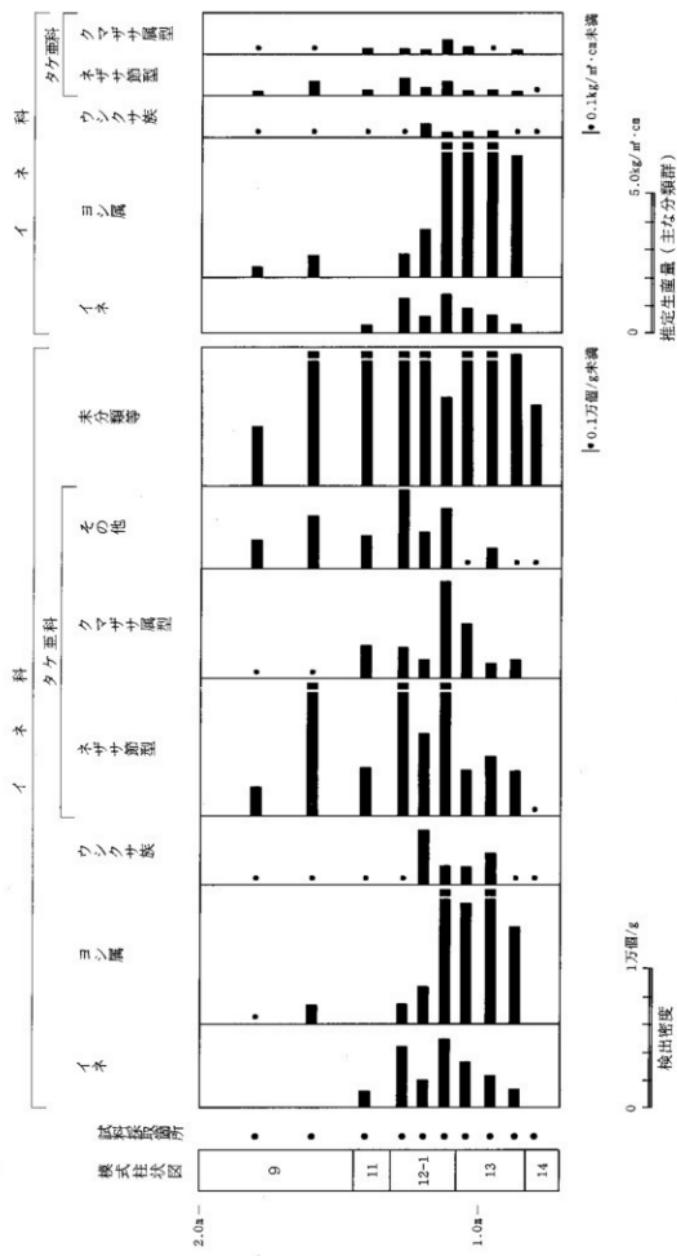
分類群	土層 試料	0ライン												1ライン																		
		9	11	12-1	13	14	9-1	9-2	9-6	9-7	12	13	14	9	10	11	12	13	14	15	9	10	11	12	13	14	15					
イネ科	1 3 5	7	8	9	10	11	12	14	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	11	6	7	7	7	7	7		
ヨシ属	7 13	12	44	20	50	33	22	13	6	28	6	14	6	16	6	16	20	42	28	156	144	26	6	7	7	7	7	7	7	7		
ウシクサ属 (ススキ属型)	7 6	6	7	40	14	13	22	6	5	6	7	10	6	5	6	5	20	18	7	11	6	7	7	7	7	7	7	7	7	7		
タケ属科	21 117	36	124	60	106	33	43	22	5	12	97	30	14	42	118	159	121	146	20	40	45	31	6	13	13	13	13	13	13	13		
ネササ属型	7 6	24	22	13	71	40	11	13	12	14	5	7	18	48	99	24	63	52	17	19	35	12	27	13	13	13	13	13	13	13		
クマザサ属型	21 39	24	58	27	43	7	16	6	5	12	21	5	7	18	48	99	24	63	52	17	19	35	12	27	13	13	13	13	13	13		
その他	42 104	115	139	153	64	160	129	95	59	61	101	35	36	36	108	189	182	153	254	132	182	116	30	33	33	33	33	33	33	33		
ホタルイ属	104 285	218	408	339	454	373	431	236	73	115	285	80	57	107	371	743	515	564	547	408	318	251	71	100	100	100	100	100	100	100		
おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m ²)																																
イネ	0.36	1.29	0.59	1.46	0.98	0.63	0.37	0.18	0.82	0.38	0.88	0.09	0.12	0.07	0.07	0.25	0.23	0.09	0.14	0.08	0.42	0.42	0.42	0.42	0.42	0.42	0.42	0.42	0.42	0.42		
ヨシ属	0.44 0.82	0.32	1.68	6.71	5.46	11.88	4.42	0.17	0.27	0.08	0.06	0.08	0.09	0.12	0.07	0.07	0.26	0.23	0.09	0.14	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08	
ウシクサ属 (ススキ属型)	0.09 0.08	0.08	0.69	0.50	0.18	0.17	0.27	0.08	0.06	0.08	0.09	0.09	0.12	0.14	0.07	0.07	0.26	0.23	0.09	0.14	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08	0.08	
ホササ属型	0.10 0.56	0.17	0.60	0.29	0.51	0.16	0.21	0.15	0.02	0.06	0.47	0.14	0.07	0.20	0.57	0.76	0.58	0.70	0.09	0.19	0.22	0.15	0.03	0.06	0.06	0.06	0.06	0.06	0.06	0.06	0.06	0.06
クマザサ属型	0.05 0.05	0.18	0.16	0.10	0.53	0.30	0.08	0.10	0.09	0.10	0.57	1.44	0.77	1.09	0.24	0.22	0.29	0.22	0.29	0.18	0.10	0.10	0.10	0.10	0.10	0.10	0.10	0.10	0.10	0.10		

※試料の収穫量を1.0と既定して算出。

表 田久美造跡 6 次調査のプランツ・オバール分析結果



第94図 Oラインのプランツ・オバール分析結果



第95図 10ラインのプラント・オバール分析結果

第10節 目久美遺跡第6次調査における種実同定

株式会社 古環境研究所

1. 試料について

試料は目久美遺跡第6次調査のA・B-11~14区第13層（黒色粘土層）から出土した種実類である。第13層は弥生時代前期の単純層で、花粉分析の結果では13層を境にイネ科花粉の出現率が急増している。

2. 方 法

試料を肉眼および実体顕微鏡で観察を行い、形態的特徴と現生標本との対比によって同定を行う。

3. 結 果

同定の結果、5種類の分類群が識別された。結果は同定レベルによって、種、亜属、属の階級と部位で表した。表1に分類群の和名、学名、部位、個数を示す。以下に同定された分類群とその特徴を記す（図版21）。

1) マツ属複維管束亜属 *Pinus subgen. Diploxylon* 種果、種子 マツ科

種果は、黒褐色で先端の尖る卵形を呈す。種鱗はくさび形で先端は不規則な5辺形で中央は臍がある。

種子は、黒褐色で一端が細くなる扁平な卵形を呈す。

2) オニグルミ *Juglans ailanthifolia Carr.* 核 クルミ科

茶褐色で円形～楕円形を呈し、一端がとがる。側面には縦に走る一本の縫合線がめぐる。表面全体に不規則な隆起があり、断面は円形である。

3) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus subgen. Cyclobalanopsis* 肝斗 ブナ科

果実の肝斗であり、黒褐色でゆるやかな椀状を呈し、輪状紋を有する。

4) コナラ属 *Quercus* 堅果 ブナ科

黒褐色で楕円形を呈し、一端につき部が残る。表面は平滑である。この分類群は肝斗が欠落し、属レベルの同定にとどまる。

5) ハクウンボク *Styrax obassia Sieb. et Zucc.* 核 エゴノキ科

黒褐色で楕円形を呈し、下端に臍がある。表面に3本の浅い溝と、低い稜がある。エゴノキより大型である。

4. 所 見

目久美遺跡第6次調査の第13層（黒色粘土層）から出土した種実類は、マツ属複維管束亜属、オニグルミ、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属、ハクウンボクであり、特にハクウンボクとオニグルミが多い。ハクウンボクは山地に普通に生育し、オニグルミは河辺や谷間、湿地に生育する。周囲は比較的樹木が多く生育していたとみなされ、堆積地（第13層）は湿潤であったと推定される。なお、オニグルミは食用になるため、投棄された残渣であることとも考えられる。

さて、同定された分類群はいずれも木本（樹木）ばかりであった。花粉分析の結果では、13層からイネ科花粉が急増しており、種実の結果とは一致していない。これについては、花粉に比べ種実は大型であるため移動しにくく現地性が高いこと、また、草本種実は1mm前後の小型が多く、検出されなかつたことなどが考えられる。

※参考文献

南木曉彦(1992) 低湿地遺跡の種実、月刊考古学ジャーナルNo355、ニューサイエンス社、p.18-22。

南木曉彦(1993) 葉・果実・種子、日本第四紀学会編、第四紀試料分析、東京大学出版会、p.276-283。

金原正明(1993) 花粉分析法による古環境復原、新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店、p.248-262。

第11節 目久美遺跡6次調査出土木製橋の樹種同定

株式会社 古環境研究所

1. 試料

試料は、木製橋（W10）1点である。

2. 方法

カミソリを用いて試料の新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。樹種同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

3. 結果

結果は表1に示し、以下に同定根拠となった特徴を記す。なお各断面の顕微鏡写真を示す（巻頭図版2-1）。

表1 目久美遺跡6次調査出土木製橋の樹種同定結果表

試 料	樹 種 (和名/学名)
木 製 橋	モミ属 <i>Abies</i>

モミ属 *Abies* マツ科

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的緩やかである。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で1分野に1～4個存在する。

放射柔細胞の壁が厚く、じゅず状末端壁を有する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質より、モミ属に同定される。モミ属は日本に5種が自生するが、ウラジロモミ、トドマツ、シラビソ、オオシラビソは亜寒帯に分布し、モミは温帯を中心に分布する。常緑高木で高さ45m、径1.5mに達する。材は保存性が低く軽軟である。

4. 所見

本試料は、分布域からみてモミ属の中のモミの可能性が高い。

参考文献

佐伯 浩・原田 浩（1985）針葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.20-48.

佐伯 浩・原田 浩（1985）広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.49-100.

島地 謙・伊東隆大（1988）日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、p.296

第12節 目久美遺跡第6次調査出土木製櫛の塗装技術について

株式会社 吉田生物研究所

1. はじめに

分析に供した遺物は、米子市出土の木製櫛の一部で、両面に赤色顔料が塗布され、片面の中央部は黒色であった。そこで、赤色顔料を塗彩した部分と黒色の部分について、再片を採取し、断面をエポキシ樹脂に包埋して研磨して薄片に仕上げ、顕微鏡観察した。

赤色顔料についてはエネルギー分散型蛍光X線分析装置（京都造形芸術大学・テクノス社製）による分析を行った。

2. 結果（巻頭図版2-2・3）

赤彩部分の顔料：赤色顔料部分から(Hg)水銀を検出した。したがって、赤色顔料は水銀朱と判断される。

赤色顔料の膠着剤：顕微鏡下では、膠着剤の塗膜断面を観察できず、赤色顔料の粒子のみが観察された。したがって、今回の調査では膠着剤については不明であった。

黒色部分の顔料：黒色部分を顕微鏡下で観察した結果、明瞭な塗膜は観察できず、黒色の微粒子が木材の細胞壁に付着しているのが認められた。黒色の微粒子の種類は不明。

黒色部分の膠着剤：明瞭な塗膜が観察できず、膠着剤は不明であった。既往の漆器の塗膜断面の観察結果と比較すると、黒色粒子の膠着剤は漆以外であった可能性がある。

日久美遺跡第6次調査 土器観察表

1. ここでは、縄文土器、弥生土器について観察を行った。
2. 法量については、口径、頸径、胴部径、底径、場合によっては脚部径を計測した。
3. 反転復元による推定値は()で示した。
4. 胎土、焼成については記号で、以下のように表記した。

胎土：密1 やや粗2 粗3 (砂粒の量 多く含む+ 含む土 少量含む-)

焼成：堅緻1 硬質2 良好3 やや軟質4 軟質5

遺物番号	種類 図版	出土地区 遺構	出土層位	法量(cm)	特徴	胎土 焼成	色調	備考
1	47 15	A-11	14	—	縄文土器。深鉢形部片。外面彫文LR、内面ナゲ調整。	1— 2	淡灰褐色	
2	47 15	A-13	14	—	縄文土器。深鉢口縁部片。外面は条痕の残るナデ、内面ケズリ後ナゲ調整。	1± 2	淡灰褐色	
3	47 15	A-13	14	—	縄文土器。深鉢口縁部片。内外面ともナゲ調整。	1± 2	淡灰褐色	
4	47 15	A-11	14	—	縄文土器。深鉢口縁部片。端部に接して突帯がめぐる。刻目浅いV字。内外面ナゲ。	2± 4	淡灰褐色	
5	49 16	B-1	13	口径 (21.0) 頸径 (18.5)	彌生土器。変形土器口縁部片。口部部界に段をもち、口縁端部は内收り。外面ナゲ。	2± 3	淡赤褐色	
6	49 16	A-10	13	胴部径 (24.0)	弥生土器。変形土器胴部片。頸部部界に低い段。外面ミガキ、内面ナゲ調整。	1± 3	淡黄褐色	
7	49	A-12	13	口径 (19.0)	弥生土器。変形土器口縁部片。内外面ナゲ調整。外面に保付着。	2± 3	淡褐色	
8	49 16	B-14	13	—	弥生土器。変形土器縁部片。内外面ナゲ調整。外面に木葉文と3条の沈線。	2± 3	暗黄褐色	
9	49 16	A-12	13	—	弥生土器。胴部片。変形土器か。2条の沈線と6条の山形文が施文される。	2+ 3	暗黄褐色	
10	49	A-13	13	—	弥生土器。浅鉢形部片。短くぼく字状に屈曲。内面ミガキ調整。外面に赤色風呂敷文。	1— 2	暗褐褐色	
11	49	B-13	13	口径 (14.0) 胴部径 (15.0)	深鉢口縁部片。粗裝で、外面ナゲ、内面ケズリ後ナゲ。4槽出の2や3と胎土が似る。縄文土器の可能性有り。	2— 2	灰褐色	
12	49 16	B-1	13	径 3.5	弥生土器。高环縁部片。4方向に2条の沈線。ナゲ調整。	2+ 3	灰褐色	
13	50 16	A-13	13	口径 (26.0) 頸径 (24.5)	弥生土器。変形口縁部片。端部全面に刻目、外面刷毛目、内面刷毛目後ナゲ調整。保付着。	2+ 3	暗黄褐色	
14	50	A-12	13	口径 (22.0) 頸径 (21.0)	弥生土器。変形土器口縁部片。内外面ナゲ調整。	2+ 3	暗黄褐色	
15	50 16	A-13	13	胴部径 (26.0)	弥生土器。変形土器胴部片。外縁接合による段と頭部毛工具状。外縁段を下に2段に切る。外面刷毛目、内面ナゲ調整。外面保付着。	3+ 3	暗黄褐色	
16	50 16	A-14	13	口径 (23.5) 頸径 (22.0)	弥生土器。変形土器口縁部片。頭部下に1条の沈線。口縁端部に刻目。外面ナゲ、内面刷毛目後ナゲ調整。外面に保付量に付着。	2+ 3	暗黄褐色	
17	50	A-13	13	胴部径 (24.0)	弥生土器。変形土器胴部片。頭部下に1条の沈線。外面ナゲ？ 内面刷毛目後ナゲ。外面保付量に付着。	2+ 3	淡褐色	
18	50 16	A-14	13	口径 (24.0) 頸径 (22.0) 胴部径 (23.0)	弥生土器。変形土器胴部片。口縁端部の下端に2条の沈線。その下二道継続刻文を2列置す。外面脚部刷毛目、口縁部ナゲ、内面ナゲ調整。外面に保付着。	2+ 3	淡褐色	
19	50 16	A-13	13	胴部径 (25.5)	弥生土器。変形土器胴部片。頭部下に4条の沈線。外ナゲ、内面刷毛目後ナゲ調整。外面保付着。	2± 3	淡褐色	
20	50	B-11	13	口径 (19.0) 頸径 (17.5)	弥生土器。変形土器片。4条の沈線と5条からなる山形文が施文されている。内外面ナゲ調整。外面に保付着。	2± 3	暗黄褐色	
21	50 16	A-11	13	—	弥生土器。変形土器胴部片。端部には接して断面下に2つの三角形を呈す無刻目突帯がめぐる。内外面ナゲ調整。外面保付着。	2± 3	暗黄褐色	
22	51 16	B-14	13	—	突帯文土器。変形土器。端部には接して断面下に2つの三角形を呈す無刻目突帯がめぐる。内外面ナゲ調整。外面保付着。	2+ 3	暗灰褐色	

遺物番号	博団 図版	出土地区 遺構	出土層位	法量 (cm)	特徴	胎土 焼成	色調	備考
23	51 16	B-11	13	—	突帯文土器。甕形土器。端部にはぼ接して断面三角形の無刻目突帯がめぐる。内外面ナデ調整。外面に煤付着。	2± 3	暗黄褐色	
24	51	A-13	13	—	突帯文土器。甕形土器。やや下がった位置に断面丸みのある三角形を呈す無刻目突帯がめぐる。外面に煤付着。	2+ 3	暗黄褐色	
25	51	B-13	13	—	突帯文土器。甕形土器。断面尖形の口縁端部からやや下がった位置に断面三角形の無刻目突帯がめぐる。内外面ナデ調整。	2+ 3	暗黄褐色	
26	51 16	A-2	13	—	突帯文土器。甕形土器。断面尖形の口縁端部から下がった位置にやや下がりの三角形を呈す無刻目突帯がめぐる。外面は粗い擦痕が残るナデ調整、内面ナデ調整で下半には指圧圧痕が残る。外面に煤付着。	1± 3	黄褐色	
27	51	A-10	13	—	突帯文土器。甕形土器。断面やや尖形の口縁端部から下がった位置に断面やや下がりの三角形を呈す無刻目突帯がめぐる。内外面ナデ調整。外面に煤付着。	2+ 3	暗黄褐色	
28	51	A-11	13	—	突帯文土器。甕形土器。断面やや尖形を呈す口縁端部から下がった位置に断面三角形の無刻目突帯がめぐる。外面粗い擦痕の残るナデ、内面ナデ調整。外面に煤付着。	2+ 3	暗黄褐色	
29	51 16	A-2	13	—	突帯文土器。甕形土器。断面やや尖形を呈す口縁端部から下がった位置に断面尖角形の無刻目突帯がめぐる。内外面ナデ調整。外面に煤付着。	2± 3	暗黄褐色	
30	51 16	A-12	13	—	突帯文土器。甕形土器。口縁部は丸くおさめる。端部から下がった位置に下さがりの三角形を呈す無刻目突帯がめぐる。外面粗い擦痕の残るナデ、内面ナデ調整。断面で内輪接合が確認できる。外面にはタール状の煤付着。	2± 3	黄褐色	
31	51	A-11	13	—	突帯文土器。甕形土器。口縁端部は丸くおさめる。端部から下がった位置にやや下がりの三角形を呈す無刻目突帯がめぐる。内外面ナデ調整。煤付着。	2+ 3	暗黄褐色	
32	51 16	B-13	13	—	突帯文土器。甕形土器。口縁端部を欠損。下がった位置に無刻目突帯がめぐる。外面粗い擦痕の残るナデ調整。外面ナデ。外面煤付着。	2± 3	暗黄褐色	
33	51	A-14	13	—	突帯文土器。甕形土器。口縁端部を欠損。下がった位置に無刻目突帯がめぐる。外面粗い擦痕の残るナデ調整。外面ナデ。外面煤付着。	2- 3	暗褐色	
34	51 16	A-13	13	—	突帯文土器。甕形土器。口縁端部に断面丸形の無刻目突帯がめぐる。内外面ナデ調整。	2+ 3	黄褐色	
35	51	A-1	13	—	粗製土器。口縫部片。内外面ナデ調整。	2-3	黄褐色	
36	51	A-10	13	—	粗製土器。口縫部片。外面擦痕の残るナデ、内面ナデ調整。	2± 3	暗褐色	
37	51 16	A-13	13	—	粗製土器。口縫部片。外面擦痕の残るナデ、内面ナデ調整。煤付着。	2± 3	暗褐色	
38	51	A-14	13	—	粗製土器。内外面ナデ調整。外面煤付着。	2± 3	暗褐色	
39	51	B-13	13	—	粗製土器。外面粗い擦痕の残るナデ、内面ナデ調整。外面煤付着。	2± 3	黄褐色	
40	51 16	B-13	13	—	粗製土器。外面粗い擦痕の残るナデ、内面ナデ調整。外面煤付着。	2± 3	黄褐色	
41	51	A-11	13	—	粗製土器。内外面ナデ。外面煤付着。	2± 3	暗褐色	
42	51	B-12	13	—	粗製土器。内外面ナデ。外面煤付着。	2± 3	暗褐色	
43	51	A-14	13	—	粗製土器。外面粗い擦痕の残るナデ、内面ナデ調整。外面煤付着。	2± 3	暗黄褐色	
44	51	B-14	13	—	粗製土器。内外面ナデ調整。口縫端面部凹。	2± 2	白灰色	
45	52	A-12 13	13	底径 (8.0)	甙生土器。底部片。内外面ナデ調整。	2+ 3	淡褐色	
46	52	B-11	13	底径 9.0	甙生土器。底部片。内外面ナデ調整。	2+ 3	淡褐色	

遺物番号	神奈 県版	出土地区 遺構	出土層位	法量 (cm)	特 徴	胎土 焼成	色 調	備 考
47	52	A-14	13	底径 (7.5)	弥生土器。底部片。内外面ナデ調整。	2+ 3	淡褐色	
48	52	A-1	13	底径 (9.5)	弥生土器。底部片。内外面ナデ調整。	2± 3	淡褐色	
49	52	B-14	13	底径 (5.0)	弥生土器。底部片。内外面ナデ調整。	2± 3	淡褐色	
50	52	A-13	13	底径 (9.0)	弥生土器。底部片。内外面ナデ調整。	2± 3	淡褐色	
51	52	A-10	13	底径 (9.5)	弥生土器。底部片。外曲線方向のミガキ状ナ マ、内面丁寧なナデ調整。	2± 3	淡褐色	
52	52	B-12	13	底径 (12.0)	弥生土器。底部片。外曲線毛目残る。内面ナ デ調整。	2+ 3	淡褐色	
53	52	B-11	13	底径 (14.0)	弥生土器。底部片。内外面ナデ調整。	2± 3	褐色	
54	52	B-1	13	底径 (11.5)	弥生土器。底部片。外曲線ナマ、内面ミガキ状 ナマ。底面に煤状の付着物有り。	2± 3	淡褐色	
55	61 18	B-13	9-3	口径 (22.0) 縁径 (19.0)	弥生土器。菱形土器口縁部片。口縁部に凹線 文を施す。側面外面は刷毛目、口縁部内面ナ マ、側面内面は刷毛目調整。	1± 2	黄灰褐色	
56	61	A-13	9-3	口径 (14.5) 頸径 (12.5)	弥生土器。菱形土器口縁部片。口縁端部が短 く立ち上がる。内面滴下にもナデ調整。	2± 2	淡灰褐色	
57	61	B-13	9-3	口径 (20.5)	弥生土器。菱形土器口縁部片。口縁部に3本 の凹線、端部下端には目が施される。	2± 2	淡褐色	
58	61	A-13	9-3	口径 (24.5)	弥生土器。高环い縁部片か。口縁部には凹線 が施される。	2± 2	淡褐色	
59	63 18	A-3 SD04	埋土	口径 (18.0) 頸径 (13.5)	弥生土器。菱形土器口縁部。外傾接合を利用 し口縁部界に段をつくる。群れが著しいため 調整は不明。ミガキナマ。	2+ 3	黄褐色	
60	63	B-5 SD04	埋土	口径 (14.5)	弥生土器。頭部片。群れが著しいが、口頭部 の段の確認できる。	2+ 3	淡黄褐色	
61	63	A-1 SD04	埋土	口径 (13.0)	弥生土器。口縁部片。端部に向かってやや肥 厚気味。内外面ナマ。	2± 3	黄褐色	
62	63	B-4 SD04	埋土	口径 (10.5)	弥生土器。無頸型。端部は丸くおさめる。調 整は不明。	1+ 2	明黄褐色	
63	63	A-1 SD04	埋土	口径 (15.5)	弥生土器。浅鉢。口縁部は肥厚気味に丸く おさめる。調整は不明。	2± 2	淡褐色	
64	63	A-3 SD04	埋土	縁部径 (5.0)	弥生土器。高环脚部と思われる。内外面ミガ キナマ。	2+ 2	灰褐色	
65	64	B-3 SD04	埋土	口径 (30.5) 縁径 (27.5)	弥生土器。菱形土器口縁部片。口縁端部は丸 くおさめる。刻目有り。磨滅により調整不明。	2+ 3	黄灰褐色	
66	64	B-6 SD04	埋土	口径 (26.0) 頸径 (23.5)	弥生土器。菱形土器口縁部片。口縁端部上を 強引に調整しており、端部がやや突出する。根 部には刻目が施される。外曲刷毛目。内側は ナマ。	2+ 3	黄灰褐色	
67	64	A-1 SD04	埋土	口径 (26.5) 頸径 (23.5)	弥生土器。菱形土器口縁部片。口縁端部はや や曲りあり氣味、刻目有り。調整不明。	2+ 3	黄灰褐色	
68	64	A-2 SD04	埋土	口径 (30.5) 頸径 (26.0)	弥生土器。菱形土器口縁部片。口縁端部は面 取りで気味に丸くおさめ、端部下半に刻目を施 す。調整不明。	2+ 3	淡褐色	
69	64	B-4 SD04	埋土	口径 (26.0) 底径 (23.5)	弥生土器。菱形土器口縁部片。口縁端部は丸 くおさめ、刻目を施す。調整不明。	2+ 3	橙褐色	
70	64	B-7 SD04	埋土	口径 (29.0) 底径 (17.5) 胸部径 (18.5)	弥生土器。菱形土器口縁部片。口縁端部は丸 くおさめ、刻目を施す。頭部下に1条の沈線、 内外面ナデ調整。	2+ 3	淡黄灰褐色	
71	64	A-2 SD04	埋土	口径 (27.5) 頸径 (25.5) 胸部径 (26.5)	弥生土器。菱形土器口縁部片。口縁端部は面 取り、刻目を施す。頭部下には2条の沈線、 調整は内外面ナデ調整。	2+ 3	黄灰褐色	
72	64 18	B-3 SD04	埋土	口径 (29.5) 頸径 (28.0)	弥生土器。菱形土器口縁部片。短く屈曲する 口縁部、底面部に1条の沈線が施される。外 面刷毛目、内側ナデ調整。	2+ 3	黄灰褐色	
73	64	B-5 SD04	埋土	頸径 (20.5) 胸部径 (21.0)	弥生土器。菱形土器頭部片。頭部下に、沈線 したく段がある。調整は不明。	2+ 3	灰褐色	
74	64	B-3 SD04	埋土	口径 (20.5) 頸径 (18.0)	弥生土器。菱形土器口縁部片。頭部直下に低 い段。調整は不明。	2+ 3	黄灰褐色	
75	64	B-3 SD04	埋土	口径 (24.5) 頸径 (23.0)	弥生土器。菱形土器口縁部片。頭部は丸くお さめる。頭部下に3条の沈線。調整不明。	2+ 3	黄灰褐色	

遺物番号	揮因 図版	出土地区 遺構	出土層位	法量 (cm)	特徴	胎土 焼成	色調	備考
76	64	B - 7 SD04	埋土	頭係 (15.0) 頭頂係 (15.5)	弥生土器。壺形土器口縁部片。頭部下に2条の 沈線。調整不明。	2 + 3	黄褐色	
77	65	B - 3 SD04	埋土	口係 (30.0) 頭係 (27.5)	弥生土器。壺形土器口縁部片。外面ナデ、内 面ナデ調整。	2 + 3	暗灰褐色	
78 18	65	B - 3 SD04	埋土	口係 (25.0) 頭係 (24.0)	弥生土器。壺形土器口縁部片。外面刷毛目、 面ナデ調整。	2 + 3	黄褐色	
79	65	A - 2 SD04	埋土	口係 (25.5) 頭係 (24.0)	弥生土器。壺形土器口縁部片。磨滅により調 整不明。	2 + 3	黄褐色	
80	65	A - 1 SD04	埋土	口係 (27.0) 頭係 (26.0)	弥生土器。壺形土器口縁部片。磨滅により調 整は不明だが、外側に視圧痕有り。	2 + 3	暗灰褐色	
81	65	A - 1 SD04	埋土	口係 (24.5) 頭係 (23.0)	弥生土器。壺形土器口縁部片。摩滅により調 整は不明。	2 + 3	灰褐色	
82	65	A - 1 SD04	埋土	口係 (28.0) 頭係 (26.0)	弥生土器。壺形土器口縁部片。摩滅により調 整は不明。	2 + 3	暗灰褐色	
83	65	B - 3 SD04	埋土	口係 (25.0) 頭係 (22.5)	弥生土器。壺形土器口縁部片。内外面ナデ調 整か。	2 + 3	灰褐色	
84	65	A - 3 SD04	埋土	口係 (18.5) 頭係 (17.0)	弥生土器。壺形土器口縁部片。摩滅により調 整不明。	2 + 3	暗灰褐色	
85	65	B - 5 SD04	埋土	口係 (23.5) 頭係 (21.0)	弥生土器。壺形土器口縁部片。外面刷毛目後 ナデ、内面ナデ調整。	2 + 3	灰褐色	
86	65	A - 1 SD04	埋土	口係 (20.5) 頭係 (19.0)	弥生土器。壺形土器口縁部片。摩滅により調 整不明。	2 + 3	暗灰褐色	
87	65	B - 5 SD04	埋土	口係 (20.5) 頭係 (19.5)	弥生土器。壺形土器口縁部片。摩滅により調 整不明。	2 + 3	灰褐色	
88	65	A - 1 SD04	埋土	口係 (23.5) 頭係 (22.0)	弥生土器。壺形土器口縁部片。摩滅により調 整不明。	2 + 3	暗灰褐色	
89	65	A - 2 SD04	埋土	口係 (16.0) 頭係 (14.5)	弥生土器。壺形土器口縁部片。摩滅により調 整不明。	2 + 3	明褐色	
90 18	65	B - 3 SD04	埋土	口係 (23.0) 頭係 (21.5)	弥生土器。壺形土器口縁部片。摩滅を丸く折 り曲げるようにおさめる。内外面ナデ調整。	2 + 3	明褐色	
91 18	66	B - 3 SD04	埋土	—	突帯文土器。壺形土器。やや外反気味の口縁 の下がった位置に刻目突帯が付く。刻目要切 り込むような跡。内外面粗いナデ調整。	2 ± 3	暗褐色	
92	66	B - 5 SD04	埋土	—	突帯文土器。壺形土器。口縁端部に接して断 面下さがりの三角形を呈す無刻目突帯がめぐ る。調整は不明。	2 ± 3	灰褐色	
93	66	A - 1 SD04	埋土	—	突帯文土器。壺形土器。やや外反気味の口縁 の下がった位置に無刻目突帯がめぐる。調整 は不明。	2 + 3	暗褐色	
94 18	66	A - 1 SD04	埋土	—	突帯文土器。壺形土器。口縁端部から下がつ た位置に無刻目突帯がめぐる。調整は不明。	2 + 3	黄褐色	
95	66	B - 4 SD04	埋土	—	突帯文土器。口縁部に2条の平行する無刻 目突帯がめぐる。調整は不明。	2 + 3	暗褐色	
96	66	B - 3 SD04	埋土	—	砂粒が多く含まれることから、弥生時代前期 の突帯文土器と想われる。平行する2条の無刻 目突帯がつる。調整は不明。	2 + 3	明黄褐色	
97	66	B - 5 SD04	埋土	底係 (10.0)	弥生土器。底部片。平底を呈す。内外面ナデ 調整。	2 + 3	明褐色	
98	66	A - 2 SD04	埋土	底係 (10.0)	弥生土器。底部片。平底を呈す。内外面ナデ 調整。	2 + 3	黄褐色	
99	66	A - 1 SD04	埋土	底係 (8.0)	弥生土器。底部片。平底を呈す。内外面ナデ 調整。	2 + 3	黄褐色	
100	66	A - 1 SD04	埋土	底係 (8.0)	弥生土器。底部片。平底を呈す。内外面ナデ 調整。	2 + 3	明褐色	
101	66	B - 3 SD04	埋土	底係 (8.0)	弥生土器。底部片。平底を呈す。内外面ナデ 調整。	2 + 3	灰褐色	
102	66	B - 3 SD04	埋土	底係 (6.0)	弥生土器。底部片。平底を呈す。外表面刷毛目、 内面ナデ調整。	2 + 3	灰褐色	
103	66	A - 2 SD04	埋土	底係 (6.0)	弥生土器。底部片。平底を呈す。内外面ナデ 調整。	2 + 3	黄褐色	
104	66	A - 3 SD04	埋土	底係 (11.0)	弥生土器。底部片。やや凹底を呈す。内外面 ナデ調整。	2 + 3	黄褐色	
105	66	A - 2 SD04	埋土	径 (4.0)	弥生土器。蓋つまみ部。外表面ナデ、内面粗い ナデが施されている。	2 + 3	暗褐色	
106	66	A - 2 SD04	埋土	径 (5.0)	弥生土器。蓋つまみ部。外表面ナデ、内面粗い ナデが施されている。	2 + 3	黄褐色	

遺物番号	種団 図版	出土地区 遺構	出土層位	法量 (cm)	特 徴	胎土 焼成	色 調	備考
107	67 18	A-2 SD04	埋土	口径 (15.0) 胴部厚 (27以上)	弥生土器。縦隔壁。口縁部外面に斜格子文、内面に三角形の追加刻文が3列千鳥状に施される。また、胴部状半には多条沈線。調整は不明。	2± 3	黄褐色	
108	68	A-1 SD04	埋土	頭径 (7.0) 胴部厚 (12以上)	弥生土器。壺形土器口縁部片。頸部に貼付突帯がめぐる。調整は不明。	1- 2	灰褐色	
109	68	B-5 SD04	埋土	口径 (24.0)	弥生土器。壺形土器口縁部片。調整は不明。	2± 2	灰褐色	
110	68	A-1 SD04	埋土	口径 (25.0)	弥生土器。壺形土器口縁部片。口縁部に3条の凹線、頸部に突起が施される。調整は不明。	3- 2	暗黄褐色	
111	68	B-3 SD04	埋土	口径 (28.5)	弥生土器。壺形土器口縁部片。口縁部に3条の凹線が施される。調整は不明。	3± 2	暗黄褐色	
112	68	A-1 SD04	埋土	口径 (36.0)	弥生土器。壺形土器口縁部片。口縁部に3条の凹線が施される。調整は不明。	3± 2	黄褐色	
113	68	A-2 SD04	埋土	口径 (29.5)	弥生土器。壺形土器口縁部片。口縁部に6条の凹線施文後、丸みを出す。調整は不明。	3- 2	暗褐色	
114	68	A-1 SD04	埋土	口径 (26.5)	弥生土器。壺形土器口縁部片。口縁部に4条の凹線が施される。調整は不明。	3± 2	暗灰褐色	
115	68	A-2 SD04	埋土	頭径 (11.0)	弥生土器。壺形土器頸部片。頸部に2条の貼付突帯がめぐる。外垂肩毛目、内面ナデ調整が施される。	1- 2	黄褐色	
116	68	B-4 SD04	埋土	頭部 (7.5)	弥生土器。壺形土器頸部片。頸部に4条の凹線と穿孔が施されている。調整は外面不明、内面は粗いナデ調整か。	2+ 2	暗灰褐色	
117	68	B-3 SD04	埋土	頭部 (20.0)	弥生土器。壺形土器頸部片。頸部に5条の凹線と穿孔が施されている。調整は外面不明、内面は粗いナデ調整か。	2± 2	暗褐色	
118	68	B-5 SD04	埋土	口径 (13.5)	弥生土器。無頭部口縁部片。口縁部両面が浅くくぼみ、口縁部には4条の凹線施文後に割目が施される。調整は不明。	2± 2	明褐色	
119	68	A-1 SD04	埋土	口径 (9.5)	弥生土器。無頭部口縁部片。口縁直下に穿孔が施される。内外面ナデ、特に、外垂口縫部を強しナデしている。	2- 2	淡灰褐色	
120	68	A-1 SD04	埋土	口径 (40.0)	弥生土器。高环口縁部片。口縁部は断面逆L字に近いT字状を呈す。調整は不明。	1- 2	灰褐色	
121	68	A-3 SD04	埋土	口径 (23.0)	弥生土器。高环口縁部片。口縁部は断面逆L字に近いT字状を呈す。調整は不明。	1- 2	灰褐色	
122	68	B-6 SD04	埋土	口径 (24.0) 胴部厚 (24.5)	弥生土器。高环口縁部片。口縁部に4条の凹線が施される。調整は外面不明、内面はミガキ調整。	2- 2	淡灰褐色	
123	68	A-1 SD04	埋土	脚径 (5.0)	弥生土器。高环脚部片。脚部上半に櫛縞文有り。調整は外面ミガキ、内面粗いナデ調整。	2- 2	灰褐色	
124	68	B-4 SD04	埋土	底径 (8.0)	弥生土器。壺なしし壺形土器の脚部か。調整は不明。	1- 2	灰褐色	
125	69	A-2 SD04	埋土	口径 (28.5) 頭径 (26.5)	弥生土器。壺形土器。口縁部には斜行する刻目と円錐の貼付文、頭部には刻目が施された貼付突帯がめぐる。調整は不明。	2± 2	暗褐色	
126	69	A-1 SD04	埋土	口径 (28.0) 頭径 (16.0) 胴部厚 (17.0)	弥生土器。壺形土器。頭部に刻目の施された貼付突帯がめぐる。調整は不明。	2± 2	暗褐色	
127	69	A-1 SD04	埋土	口径 (18.0) 頭径 (16.0)	弥生土器。壺形土器。口縁部には、ヘラによる刻み、指痕による跡み、円錐の貼付文が施される。また、頭部には刻目が施された貼付突帯がめぐる。調整は不明。	2- 2	暗褐色	
128	69	A-2 SD04	埋土	口径 (21.0) 頭径 (20.0)	弥生土器。壺形土器。頭部には刻目が施された貼付突帯がめぐる。調整は不明。	2- 2	淡褐色	
129	69	A-1 SD04	埋土	口径 (20.5) 頭径 (19.0)	弥生土器。壺形土器頸部片。頸部に刻目の施された貼付突帯がめぐる。調整は不明。	1- 2	淡褐色	
130	69	A-1 SD04	埋土	頭径 (18.0)	弥生土器。壺形土器頸部片。頭部には刻目が施される。外垂肩毛目、内面調整は不明。	2- 2	淡灰褐色	
131	69	B-4 SD04	埋土	口径 (14.5) 頭径 (14.5)	弥生土器。壺形土器。口縁部に3条の凹線が施される。外垂肩毛目、内面調整は不明。	2- 2	黄褐色	
132	69	B-3 SD04	埋土	口径 (17.0) 頭径 (16.0)	弥生土器。壺形土器。口縁部に3条の凹線と下端に刻目が施される。調整は内外面ともナデ調整か。	2- 2	黄褐色	

遺物番号	埋蔵 層級	出土地区 遺構	出土層位	法量 (cm)	特 徴	胎土 焼成	色 調	備 考
133	69	A - 1 SD04	埋土	口径 (17.5) 頸径 (15.5)	弥生土器。菱形土器。口縁部に3条の凹線が施される。外面部毛目、内面はナデ調整か。	1 - 2	明褐色	
134	69	A - 2 SD04	埋土	口径 (15.0) 頸径 (13.0) 胴部径 (21.5)	弥生土器。菱形土器。茎とすべきかもしない。調整は不明。	1 - 2	暗黃褐色	
135	69	A - 1 SD04	埋土	口径 (12.0) 頸径 (10.0) 胴部径 (12.0)	弥生土器。菱形土器。口縁部に1条の浅い凹線が施される。口縁部はナデ、胴部は内外面ともに肩毛目調整。	1 - 2	暗灰褐色	
136	69	B - 5 SD04	埋土	口径 (13.0) 頸径 (11.0)	弥生土器。菱形土器。口縁部はナデ、胴部は内外面肩毛目調整が施される。	1 - 2	灰褐色	
137	69	A - 1 SD04	埋土	口径 (19.5) 頸径 (17.5)	弥生土器。菱形土器。口縁部ナデ調整か。	2 - 3	暗黃褐色	
138	69	B - 10 SD04	埋土	口径 (18.5) 頸径 (16.5)	弥生土器。菱形土器。口縁部に1条の浅い凹線が施される。ナデ調整か。	1 ± 2	暗褐色	
139	69	A - 1 SD04	埋土	口径 (16.0) 頸径 (14.0)	弥生土器。菱形土器。口縁部に2条の浅い凹線が施される。ナデ調整か。	2 - 2	暗褐色	
140	69	A - 1 SD04	埋土	口径 (13.0) 頸径 (11.5)	弥生土器。菱形土器。口縁部に1条の浅い凹線が施される。ナデ調整か。	1 - 2	灰褐色	
141	69	A - 1 SD04	埋土	口径 (15.5) 頸径 (13.0)	弥生土器。菱形土器。口縁部に2条の凹線が施される。ナデ調整。外面に煤付着。	2 - 3	灰褐色	
142	69	A - 3 SD04	埋土	口径 (18.5) 頸径 (17.0) 胴部径 (23.0)	弥生土器。菱形土器。口縁部には1条の凹線が施される。肩毛目工具による連続刻突文が施される。調整は不明。	2 ± 2	黄褐色	
143	69	A - 1 SD04	埋土	口径 (25.0) 頸径 (23.0)	弥生土器。菱形土器。口縁部には本来凹線が施されていたと思われる。調整は不明。	2 + 3	黄褐色	
144	70	B - 7 SD04	埋土	口径 (14.5) 頸径 (11.0)	弥生土器。菱形土器。調整は不明。	2 + 2	暗灰褐色	
145	70 18	A - 1 SD04	埋土	頸径 胴部径 (11.0) (17.5)	弥生土器。菱形土器胴部片。櫛摺による波状文が施される。また、棒位置に波状把手が付く。外面部毛目、内面ケメリ調整。底部下半に煤付着。	2 ± 3	灰褐色	
146	70	A - 2 SD04	埋土	口径 (12.5) 頸径 (12.0)	弥生土器。菱形土器。口縁部には平行沈線が施される。胴部外面は肩毛目調整、内面は頸部直下までケメリ調整。	2 + 3	淡灰褐色	
147	70	B - 3 SD04	埋土	口径 (11.0) 頸径 (11.0)	弥生土器。菱形土器。口縁部に平行沈線が施される。外面部毛目調整、内面は頸部直下までケメリ。	2 - 3	黄褐色	
148	70	A - 1 SD04	埋土	口径 (20.0) 頸径 (17.0)	弥生土器。菱形土器。内面のケメリは頸部まで施されている。外面調整不明。	2 ± 2	暗褐色	
149	70	B - 3 SD04	埋土	口径 (19.5) 頸径 (18.5)	弥生土器。菱形土器。内面のケメリは頸部まで施されている。外面調整不明。	2 ± 2	暗褐色	
150	70	A - 1 SD04	埋土	口径 (20.0) 頸径 (16.0)	弥生土器。菱形土器。茎とすべきか。口縁部には平行沈線が施される。口縁部内外面ともナデ、内面は頸部直下までケメリが施されている。	2 ± 2	灰褐色	
151	70	A - 1 A - 3 SD04	埋土	口径 (16.5) 頸径 (15.0) 胴部径 (20.5)	弥生土器。菱形土器。口縁部には平行沈線が施される。胴部外面は肩毛目調整、内面は頸部までケメリが認められる。胴部外面上に施された通続刻文は肩毛目工具によるものか。	2 ± 2	暗灰褐色	
152	70	B - 6 SD04	埋土	口径 (16.5) 頸径 (13.5)	弥生土器。菱形土器。口縁部には平行沈線が施される。内面部頸径までケメリが施される。また、外面部は赤色顔料が施されている。	1 - 2	赤色 (淡灰褐色)	
153	70	B - 4 SD04	埋土	口径 (20.0) 頸径 (16.0)	弥生土器。菱形土器。口縁部には平行沈線が施される。内面部頸径までケメリが施される。また、外面部には煤付着。	2 ± 3	淡灰褐色	
154	70 18	A - 1 SD04	埋土	脚部径 (5.0)	弥生土器。高杯土器脚部。外面は継方向の丁寧なミガキ、内面下半は横方向、上半は継方向のケメリ長いナデが施されている。	1 - 2	暗褐色	
155	70	A - 2 SD04	埋土	脚部径 (6.0)	弥生土器。高杯脚部。脚部界に突唇状の盛り上がりがある。調整は不明。	2 ± 4	明褐色	
156	70	A - 1 SD04	埋土	底径 (6.5)	弥生土器。底部片。外面部継方向ミカキ、内面ナデ調整。	1 - 2	暗灰褐色	
157	70	A - 2 SD04	埋土	底径 (6.0)	弥生土器。底部片。外面部継方向ミカキ、内面ナデ調整。	1 - 2	暗灰褐色	
158	70	B - 3 SD04	埋土	底径 (6.5)	弥生土器。底部片。外面部継方向ミカキ、内面ナデ調整。	1 - 2	暗灰褐色	
159	70	A - 2 SD04	埋土	底径 (7.0)	弥生土器。底部片。調整不明。	1 - 2	暗灰褐色	

遺物番号	種類 図版	出土地区 遺構	出土層位	法量(cm)	特徴	胎土 焼成	色調	備考
160	70	A-3 SD04	埋土	底径 5.0	弥生土器。底部片。外面縦方向ミガキ、内面ナデ調整か。	1± 2	暗灰褐色	
161	70	A-1 SD04	埋土	底径 (5.5)	弥生土器。底部片。調整不明。	1± 2	暗灰褐色	
162	70	B-7 SD04	埋土	底径 (6.0)	弥生土器。底部片。調整不明。	1± 2	暗黄褐色	
163	70	A-2 SD04	埋土	底径 (11.0)	弥生土器。底部片。調整不明。内面に茎が付着。	2± 3	黄褐色	

目久美遺跡第6次調査石器一覧表

打製石斧一覧表

(単位はcm、g、カッコ内は現存値を示す)

遺物番号	種類 図版	出土地区 遺構	出土層位	形態	石 材	長さ	幅	厚さ	重さ
S 4	52	B-1	弥生前期	穂形	玄武岩	(16.8)	11.9	3.4	(540)
S 5	52	A-14	弥生前期	不明形	サスカイト?	(6.7)	6.8	2.0	(100)

石鏃一覧表

(単位はcm、g、カッコ内は現存値を示す)

遺物番号	種類 図版	出土地区 遺構	出土層位	形態	石 材	長さ	幅	厚さ	重さ
S 7	71	A-3 SD04	埋土中	凹基	ガラス質流紋岩	2.2	1.6	0.3	0.8
S 8	71	B-3 SD04	埋土中	凹基	ガラス質流紋岩	2.7	1.7	0.3	1.2
S 11	93	— SD04	第5-2 層	平基	黒曜石	1.3	1.2	0.4	0.4

石器・石製品一覧表

(単位はcm、g、カッコ内は現存値を示す)

遺物番号	種類 図版	出土地区 遺構	出土層位	形態	石 材	長さ	幅	厚さ	重さ
S 1	47 15	A-14	第14層	敲石	黒雲母角閃石安山石	12.3	8.6	5.2	700
S 2	47 15	B-14	第14層	敲石	黒雲母角閃石安山石	8.7	8.4	4.1	387
S 3	45 15	B-13	第14層	石皿	熔結凝灰岩	(9.4)	6.1	2.4	(198)
S 6	61 18	B-13	第9-3 層	石包丁	硬質砂岩	(3.3)	5.0	0.5	(14.2)
S 9	71	B-5 SD04	埋土中	磨製石斧	硬質砂岩	(6.7)	(4.7)	(2.7)	(65)
S 10	93	A-3	第5-2 層	削器	黒曜石	(5.5)	3.4	1.5	(21.9)
S 12	93	B-1	第5-2 層	石錐	輝石安山岩	(9.2)	9.5	3.2	(358)
S 13	93	A-6	第5-2 層	不明	流紋岩	(5.2)	6.7	3.0 2.5	(160)

目久美遺跡第6次調査木製品観察表

遺物番号	坪区番号	出土地区	出土遺構	出土層位	器種・種類	最大長	最大幅	最大厚	特 許	備考
W1	53	B-14	—	第13層	ヤス	12.1cm	1.2cm	0.7cm	完存。矢柄が装着された状態で樹皮を巻き付けてある。刃部は茎を鋸く削り尖らす。刃先は4方向より削り尖らす。	モミ
W2	53	A-9	—	第13層	ヤス	13.5cm	0.8cm	0.8cm	完存。刃部は細く削り尖らす。茎はより細く削り出す。	モミ
W3	53	B-13	—	第13層	ヤス	18.4cm	0.8cm	0.6cm	完存。両端を鋸く削り尖らす。	モミ
W4	53	A-14	—	第13層	不明	27.5cm	2.6cm	1.0cm	上部欠損。両面に加工痕残る。先端部やや圓平か削り尖らす。	サカキ
W5	53	A-14	—	第13層	板材	33.3cm	8.2cm	1.4cm	端部欠損。両面に加工痕残る。一部削成を受けた痕跡有り。	スギ
W6	56	B-13	—	第12層	不 明	239cm	9.5cm	7.0cm	完形。先端部は鋸り尖る。もう一方は鉤状に加工が施されている。表面は焼成を受け炭化。	シイ
W7	56	A-11	—	第12層	板材	95.7cm	11.3cm	0.9cm	端部欠損。両面に加工痕が男爵に残る。	クロベ
W8	59	B-3	第4水田面	第12層	不 明	19.8cm	5.8cm	1.5cm	半分欠損。橢円形の板材。	スギ
W9	71	B-6	SD04	埋土	楕	75.5cm	13.5cm	5.0cm	柄部、本体側縁の一部欠損。断面は半円形状を呈する。一部に加工痕をとどめる。	アカガシ
W10	73	B-14	第4遺構面		楕	cm	cm	cm	本文参照。	モミ
W11	80	B-5	SD03	埋土	ナスピ形着柄櫛	50.9cm	5.8cm	1.6cm	大半欠損。加工痕有り。	アカガシ
W12	80	B-5	SD03	埋土	火鐵	32cm	6.2cm	1.0cm	大半欠損。柄部2ヶ所が摩滅。着柄腐か。	アカガシ
W13	80	AB-3	SD03	埋土	ナスピ形着柄櫛	32.2cm	4.7cm	1.3cm	大半欠損。3つに分割し接合不可能。加工痕有り。	アカガシ
W14	80	B-7	SD03	埋土	ナスピ形着柄櫛	17.7cm	4.5cm	1.6cm	大半欠損。加工痕有り。	アカガシ
W15	80	B-4	SD03	埋土	ナスピ形着柄櫛	39.4cm	2.8cm	1.2cm	上部欠損。刃部。両面に加工痕を残す。	アカガシ
W16	81	B-7	SD03	埋土	有頭状櫛	43.6cm	4.1cm	4.0cm	端部欠損。片端は有頭に加工する。中程を1ヶ所削りこむ。	シイ
W17	81	B-5	SD03	埋土	有頭状櫛	62.0cm	6.0cm	5.1cm	端部欠損。片端部有頭に加工する。中程を1ヶ所削りこむ。	サカキ
W18	81	B-4	SD03	埋土	板材	116cm	9.3cm	1.7cm	端部欠損。方形孔6ヶ所有り。両面に加工痕の跡痕に残る。	スギ
W19	81	B-7	SD03	埋土	柄状木製品	36.0cm	6.0cm	5.8cm	片面欠損。先端部に切断加工痕有り。斧柄未成品か。	シャキソボ
W20	81	A-1	SD03	埋土	杭	49.0cm	4.4cm	3.3cm	ほぼ完形。角丸。上部に鉄釘遺存。先端は4方向より削り削る。	クリ
W21	81	AB-3	SD03	埋土	杭	15.7cm	3.8cm	3.3cm	上部欠損。表皮が残る。先端部は4方向より削り尖らす。	サクラ
W22	81	A-1,2	SD03	埋土	杭	35.3cm	3.5cm	3.3cm	上部欠損。先端は3方向より削り尖らす。	シイ
W23	81	B-6	SD03	埋土	杭	66.7cm	6.0cm	5.2cm	先端部欠損。角丸。断面三角形を呈する。上端部切削加工痕有り。	アカガシ
W24	87	A-7	SD02	最下層	不明	38.0cm	7.5cm	1.2cm	両端部、突出部とも欠損。板状を呈し、突出側は刀のよう後を持つ。	アカガシ
W25	87	B-10	SD02	最下層	杭	38.9cm	4.4cm	4.4cm	両端部の一部を欠損。先端部は1方向から削る。	ハイノキ
W26	87	B-10	SD02	最下層	杭	39.2cm	5.0cm	4.4cm	上部欠損。先端部を削り尖らす。	ハイノキ
W27	92	A-6	—	第5-2層	鳥形	7.4cm	1.1cm	1.8cm	一部欠損。木片を削り出し、頭部、くらぼし、羽、尾を表現する。頭部に加工痕が明瞭に残る。	スギ
W28	92	A-6	—	第5-2層	刀子形	8.5cm	1.9cm	0.5cm	柄部欠損。板材を刀子状に加工する。	スギ
W29	92	B-5,6	—	第5-3層	不明	11.2cm	4.9cm	0.7cm	下部欠損。板材の両側面を2方向から削りしめじ状に加工する。	ヒノキ
W30	92	A-6	—	第5-2層	不明	9.7cm	2.1cm	0.8cm	両端部欠損。板材に切り込みを入れ線跡を施す。3ヶ所に穿孔有り。一部表面が焼成痕有り。	アヌナロ
W31	92	B-11,12	—	第5-2層	旗器純	4.3cm	1.3cm	0.2cm	大半欠損。内面は漆、外面は黒漆塗布後、赤漆で紋様を描く。	ケヤキ

第5章 考察

第1節 目久美遺跡の地質学的検討

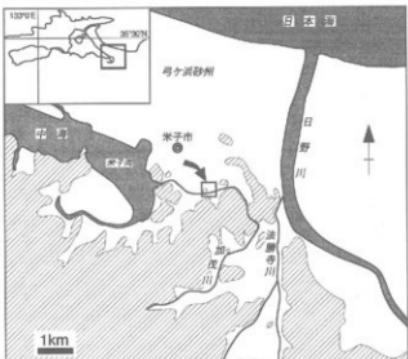
徳岡 隆夫^{*}・中村 唯史^{**}・藤原 真由美^{*}

* (島根大学総合理工学部地球資源環境学教室)

** (島根大学汽水域研究センター客員研究員)

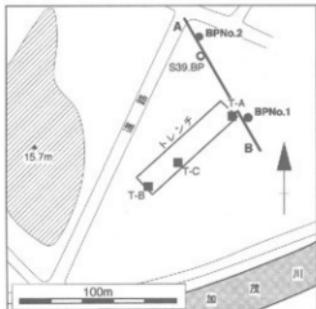
1.はじめに

米子市目久美遺跡は、山陰地域を代表する低湿地遺跡のひとつとして知られ、いまから1万年前以降の完新世の環境変遷と人類活動とのかかわりを明らかにできる遺跡として、以前から注目されてきた。この遺跡の付近は純文時代以降に弓ヶ浜砂州の成長とともに現在の中海のあたりが海から潟湖へと変化していくなかでその付け根のところに位置し、人類の活動が盛んになっていったところである。¹⁴C大西郁夫島根大学教授は目久美遺跡の第1次発掘調査に参加し、遺跡の花粉学的研究から稲作が弥生時代にはじまること、またこの地帯での現世にいたる詳しい花粉分帶を明らかにした(大西1986)。以来、この研究は山陰地域の花粉層序の標準とされ、多くの考古遺跡での花粉分帶や稲作の始まりを明らかにする上での指標とされてきたものである(大西ほか、1990)。しかしながら、その後、中海宍道湖とその周辺地域で6300年前を示すアカホヤ火山灰が各地で発見され(中村ほか、1996)、¹⁴C年代が各地で多く報告されるようになったことから、大西教授による花粉分帶に詳しい年代の目盛を入れて再検討する必要が起きてきていた(たとえば渡辺・会下、1997)。このような状況にあるなかで、平成9年度の発掘調査にあたって地質学的な検討についての依頼を受け、調査に参加・協力することになった次第である。なお、花粉分析をはじめとする室内作業については平成9年度の島根大学理学部地質学科の卒業研究として藤原真由美が各専門家の指導を受けて行ったものである。その中心的なテーマである花粉分析については渡辺正巳氏(川崎地質株式会社、島根大学汽水域研究センター客員研究員)の指導のもとに行なわれた。また、炭素、窒素、イオウ分析については三瓶良和氏(島根大学総合理工学部助教授)、貝類遺骸については高安克巳氏(島根大学汽水域研究センター教授)の指導のもとに行なわれた。調査した項目は、発掘調査トレンチにおける堆積層の検討、ボーリングによる採取コアの検討、およびそれらの試料についての花粉分析、地球化学的分析



第1図 調査地域

四角い囲み部分は第2図の範囲を示す。斜線部は山地・丘陵



第2図 調査トレンチとボーリングの位置

黒丸は今回行ったボーリング地点。白丸は既存のボーリング地点。黒四角はトレンチ内での試料採取地点を示す。A-Bは第5図の断面図測線位置を示す。

(炭素・窒素・イオウ), 貝類遺骸の分析, 火山灰分析である。また, 弥生時代の大規模な溝状遺構の広がりを確認するためにスウェーデン式サウンディングを行った。これらの結果について以下に述べる。また, レンチの堆積層については島根大学総合理工学部助教授の中山勝博氏に検討していただいた。その結果については本報告書の次節に別稿として報告されている。

2. 調査概要

(1) 遺跡周辺の地形と地質

日久美遺跡は、鳥取県西部の米子市内にあり、日野川三角州から弓ヶ浜砂州へ連続する沖積低地の南縁部に位置する(第1, 2図)。本遺跡の東方約1.2kmに北西方向へ伸びる尾根があり、日野川および法勝寺川はそのさらに東側を流下し、日本海に注いでいる。この尾根によって、本遺跡付近はこれらの河川の三角州および沿岸砂州の堆積物が直接は届きにくい場所となっている。このような地形的条件が本遺跡をはじめとして池ノ内遺跡、陰田遺跡などの低湿地遺跡が数多く存在する理由である。本遺跡周辺の丘陵は新第三紀中新世の流紋岩類(米子流紋岩)からなり、その南方の山地には古第三紀の花崗岩類と、一部に新第三紀鮮新世の玄武岩が分布している。

(2) 遺跡調査トレンチの地質層序

調査トレンチ(第2図)内の地層はほぼ水平な分布を示す(第3図)。各層の特徴を地表からの深さごとに区分して以下に示す。考古学的記述についてもあわせて示す。

0~1.2m: 表土および現代の盛土からなる。

1.2m~1.8m: 暗灰色泥層で、中・近世の水田耕作土からなる。

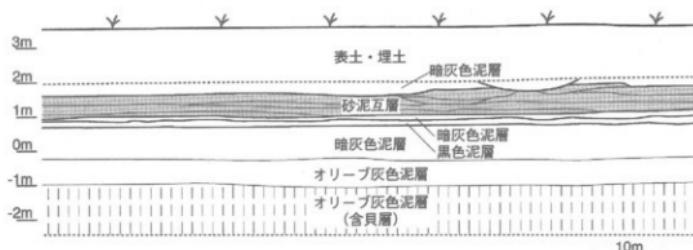
1.8m~2.9m: 暗灰色泥層と黃灰色砂層からなる斜交層理が発達する砂泥互層。砂層は中~細粒砂を主体とする。淡水の堆積物中に自生する藍青石(vivianite)がよく含まれている。包含される遺物から、堆積時期は弥生時代中期後半~後期前半(約1900~1800年前)と推定されている。

2.9m~3.0m: 暗灰色泥層からなる。弥生時代前期の水田土壤と考えられている。

3.0m~3.2m: 黒色泥層からなる。包含される遺物から堆積時期は弥生時代前期(2300~2100年前)と推定されている。

3.2m~4.0m: 有機質に富む暗灰色泥層からなる。アシなどの水生植物の茎や葉の組織が多く含まれおり、湿地の堆積物と判断できる。有機質はこの層準の上部で多く、下方では漸移的に少なくなる。

4.0m~6.5m(掘削下限): オリーブ灰色泥層からなる。深さ4.6mを境に、これより下位では貝類遺骸が多く含まれる。これより上位では含まれていない。含貝殻層には径20cm程度の縛が点在する。これらについては6章で述べる。



第3図 調査トレンチの地層スケッチ

(3) ポーリングによる地質層序

トレンチ調査との比較およびトレンチ調査以深の沖積層の分布と特徴、基盤の状況を把握するためにポーリング調査を2地点で行い、得られた試料を観察、分析した。また、既存のポーリング資料（S39BP、第2図）についても検討を加えた。

ポーリングはシマダ技術コンサルタントに依頼して、調査トレンチに隣接した2地点で行った（第2図）。シンウォールサンプラーによって不搅乱試料を連続的に採取した。第4図に柱状図を示し、以下に層序を深度ごとに記載する。

BPNo. 1 (掘削長8.0m 孔口標高3.7m)

0m～1.1m： 盛土。

1.1m～1.4m：灰褐色の砂質泥層で、細礫が若干含まれる。盛土以前の旧耕作土。

1.4m～1.6m：暗灰色の泥と黄灰色の細粒砂の互層。トレンチの砂泥互層に対比できる。

1.6m～2.1m：黒色の泥層。トレンチの黒色泥層（弥生時代前期包含層）に対比できる。

2.1m～2.4m：細礫と粗粒砂を主体とする砂礫層。

2.4m～2.5m：褐灰色の泥層。

2.5m～2.9m：(コア欠損のため不明)

2.9m～4.4m：暗褐灰～褐灰色の砂質泥層で、植物片を多く含む。

4.4m～7.1m：明褐灰色の砂質泥層。

深さ4.4mを境に上下の地層は不整合関係にある。これより上位が完新統、下位が更新統である。不整合面の直下は旧土壤が存在し、そこには上位層から掘り込まれた甲殻類の巣穴の跡が認められる。

7.1m以深： 強風化してマサ状となった花崗岩。

BPNo. 2 (掘削長23.7m, 孔口標高3.6m)

0m～1.2m： 盛土。

1.2m～1.9m：灰褐色の礫混じり砂質シルト。盛土がなされる以前の旧耕作土。

1.9m～3.0m：黄灰色砂礫。

3.0m～3.4m：灰褐色の泥層。本層の下部は有機質に富み、植物片を多く含む。

3.4m～4.1m：暗灰色の砂質泥と黄灰色の細粒砂の互層。

4.1m～9.8m：オリーブ灰色泥層。深さ5.2mを境として下位は貝化石を多く含み、上位は貝化石含まない。下部付近はやや砂分である。

9.8mを境として上下の地層は不整合関係にあり、これより上位は完新統、下位は更新統である。

9.8m～10.6m： 明灰色の泥層。含水比が低く、粘性が高い。

10.6m～11.2m： 黒褐色の有機質泥層。

11.2m～12.1m：白色軽石を主体とする火山灰層。三瓶本次軽石に対比される。

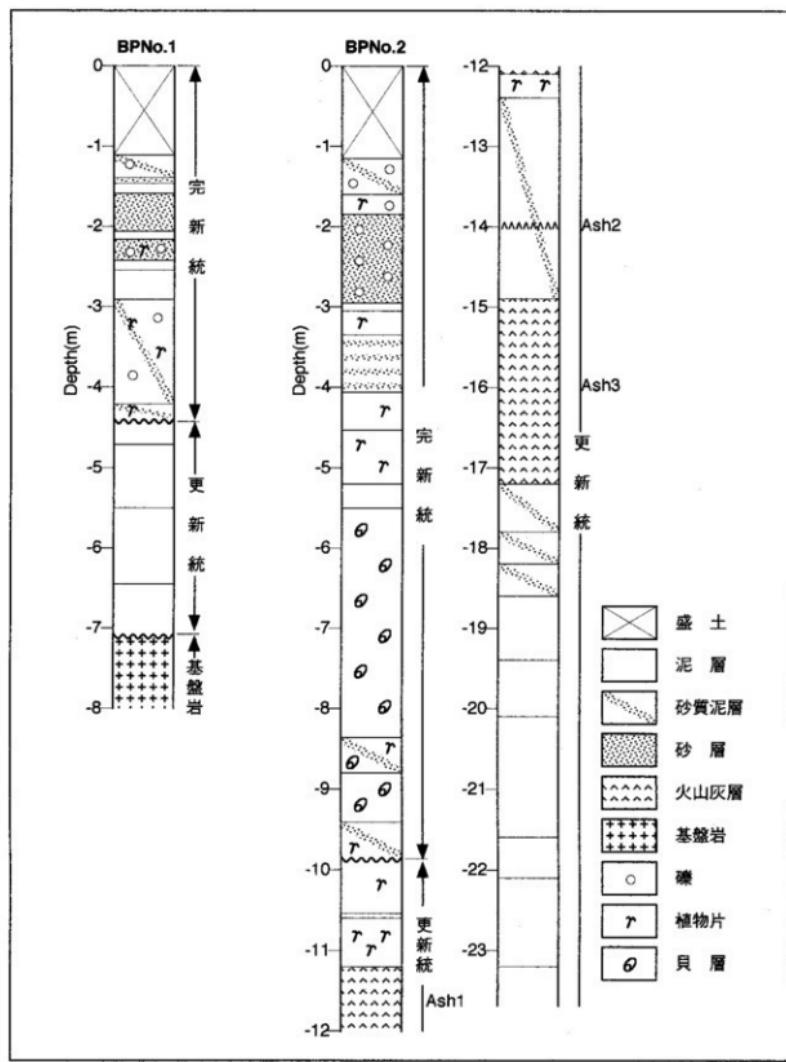
12.1m～14.9m： 黒褐色の有機質泥層。

14.9m～17.2m：白色軽石を主体とする火山灰層。大山松江軽石に対比される。

18.6m～23.7m：灰色の礫混じり泥層。赤色風化層を挟む。

遺跡および周辺地域の地下断面

2つのポーリングおよび既存のポーリング資料（建設省計画局・鳥取県・鳥根県、1967）とトレンチの層序に



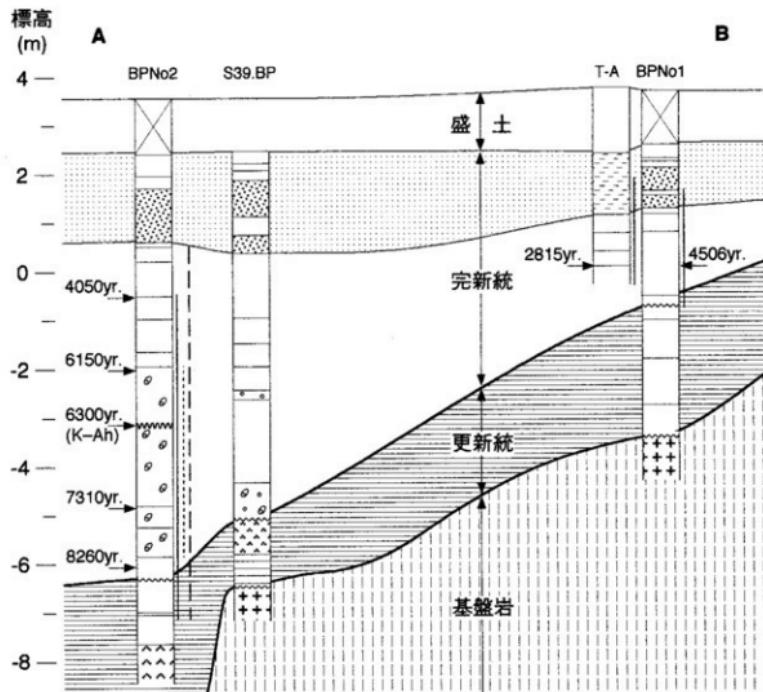
第4図 ボーリング柱状図

基づいた本調査地の地下地質断面を第5図に示す。本調査地では、花崗岩からなる基盤が南東（第5図ではB側）から北西（A側）へ低くなり、BP No. 2の地点では基盤の深度は標高-20m以深に達する。この基盤地形に更新統が重なり、同様に南東から北西に低くなる埋没地形を構成する。その上に完新統が重なっている。完新統は基本的に下部が泥層、上部が砂～砂泥互層からなる。本調査地の西側には基盤岩（流紋岩）からなる独立丘陵があることから、完新統によって覆われた埋没谷がトレンチと独立丘陵の間に存在するとみられる。

3. 遺跡および周辺地域の堆積層の地質学的検討

(1) アカホヤ火山灰層

火山灰層は地層对比や、堆積年代の推定を行うための鍵層として有効である。アカホヤ火山灰は6300年前に九州南方の鬼界火山（カルデラ）の噴火に伴って噴出した火山灰で、西日本を中心に広く分布する広域火山灰である（町田・新井、1978）。この火山灰の降灰時期は完新世の最温暖期にあたり、繩文海進の最高潮期とはほぼ同時期であることから、古環境を検討する上で重要な鍵層である。山陰地域では低湿地遺跡堆積層や沖積低地のボーリング試料で厚さ2cm以下の地層として認められる（中村ほか、1996）。アカホヤ火山灰は大部分が火山ガラスからなり、ガラスの形態はバブル型が多く、ガラスの色調は褐色を帯びることを特徴とする。



第5図 地下地質断面図

柱状図の右に付した実線は花粉分析、点線は貝遺体分析、破線はCNS元素分析を行った層準を示している。

本遺跡でアカホヤ火山灰は調査トレンチとボーリングでは水中堆積の一次的な地層としては認められないが、BP No. 2 でその中にアカホヤ火山灰の降灰層準を決定するために次のような検討を行った。

完新統泥層について有機分を分解した泥試料を厚さ 5 cm 毎に 250 メッシュのふるい上で水洗し、その残渣について双眼実体顕微鏡で観察した。その結果、殆どの層準では残渣中の火山ガラス量は 20% 未満であるが、G L - 9.7 m, G L - 6.7 m では 30% ~ 40% 含まれていることが明らかになった。火山ガラスの色調は、G L - 9.7 m に含まれるもののは無色透明で、G L - 6.7 m に含まれものは褐色を帯びるものが多い。

次に、それぞれの層準に含まれる火山ガラスを抽出し、島根大学汽水域研究センター設置の JEOL8800M 型 EPMA によって化学組成を分析した。G L - 9.7 m は 11 片、G L - 6.7 m は 9 片の火山ガラスについて分析した（第 1 表）。それぞれの層準に含まれる火山ガラスの化学組成は、G L - 9.7 m は後期更新世の始良 Tn 火山灰（2.2 ~ 2.5 万年前）と一致し、G L - 6.7 m はアカホヤ火山灰と一致する。したがって、G L - 6.7 m がアカホヤ火山灰の降灰層準と判定できる。G L - 9.7 m に含まれる始良 Tn 火山灰の火山ガラスは、後期更新世に陸上に降灰した火山灰が再堆積したものと考えられる。

更新統中の火山灰層：BP No. 2 では更新統中に 3 枚の火山灰層（Ash 1, Ash 2, Ash 3）が挟まれている。これらの火山灰層は以下の特徴を持つ。

Ash 1 : G L - 11.2 ~ -12.1 m に挟まる。層厚 0.9 m, ϕ 5 ~ 2 mm の白色軽石を主体とする火山灰層である。斑晶鉱物は黒雲母、石英、磁鐵鉱、カミングトン閃石を含む。黒雲母は風化してヒル石化したものが多い。この火山灰層は約 7 万年前に降灰した三瓶本次軽石に対比できる。

Ash 2 : G L - 14 m に挟まる。層厚 1.5 cm。極細粒砂サイズの粒子を主体として、筋状に発泡した軽石型火山ガラスと斑晶鉱物を含む。斑晶鉱物は角閃石、斜方輝石、磁鐵鉱、黒雲母、石英を含む。

Ash 3 : G L - 14.9 ~ -17.2 m に挟まる。層厚 2.3 m, ϕ 7 ~ 2 mm の白色軽石を主体とする火山灰層である。斑晶鉱物は、カミングトン閃石を多く含むことを特徴として、角閃石、黒雲母、斜方輝石、斜長石を含む。斜長石はしばしばカミングトン閃石を包有する。この火山灰層は 10 万年以上前に降灰した大山松江軽石に対比できる。

（2）貝類遺骸

BP No. 2 およびトレンチ（T-C）で採取した試料中に含まれる貝の種類を第 6 図および図版 22, 23 に示す。なお貝の鑑定は島根大学汽水域研究センターの高安克己教授の指導により行ったものである。

サルボウ *Scapharca subcrenata* (Lischke)

イボウミニナ *Batillaria zonalis* (Bruguire)

カワアイガイ *Cerithideopsis djadjiensis* (Martin)

ヒメシラトリガイ *Macoma incongrua* (v.Martens)

ミクリガイ *Siphonalia* sp.

ヤマトシジミ *Corbicula japonica* Prime

ハイガイ *Tegillarca granosa* Schenck et Reinhart

ツメタガイ *Neverita didyma* (Roding)

貝類遺骸群集の区分

貝類の構成種から、BP No. 2 について 4 つの群集に区分した。各群集の特徴を以下に述べる。

1 群集：-5.5 m ~ -6.4 m では、内湾の湧奥部に棲息する *Scapharca subcrenata* が優勢し *Macoma incongrua*, *Siphonalia* sp. を伴う。T-C はこの群集に対比できる。また、T-C では比較的暖かい環境を示す *Neavarita (Glassaulax) didyma* が産出している。

2 群集：*Cerithideopsis djadjiensis* や *Macoma incongrua* が優占的に産出する。

第1表 火山ガラスの化学組成

EPMA	6.7m	SD	9.7m	SD	K-Ah	SD	AT	SD
	mean	$\sigma(n-1)$	mean	$\sigma(n-1)$	mean	$\sigma(n-1)$	mean	$\sigma(n-1)$
wt(%)	n=11		n=9				n=11	
SiO ₂	78.12	0.23	74.66	0.14	74.84	0.78	78.41	0.41
TiO ₂	0.14	0.03	0.51	0.03	0.54	0.06	0.13	0.02
Al ₂ O ₃	12.32	0.14	13.01	0.09	13.05	0.29	12.23	0.17
FeO*	1.17	0.14	2.37	0.08	2.5	0.21	1.23	0.04
MnO	0.04	0.03	0.1	0.05	0.06	0.03	0.04	0.02
MgO	0.12	0.03	0.45	0.03	0.51	0.07	0.14	0.01
CaO	1.07	0.11	1.96	0.05	2.09	0.19	1.09	0.03
Na ₂ O	3.63	0.11	4.09	0.14	3.62	0.28	3.36	0.28
K ₂ O	3.4	0.25	2.84	0.12	2.8	0.12	3.36	0.13
Total	100		100		100		100	
Alkali	7.03		6.93		6.42		6.72	

第2表 ¹⁴C年代測定値一覧

試料番号	採取地点	分析試料	測定値(yr.B.P.)	測定番号
C1 (A-a)	T-A	木片	2885+115-114	SUJ-222
C2 (1-03-16)	BPNo.1	木片	4506+178-175	SUJ-223
C3 (ME620308)	BPNo.2	腐植土	4050±50	Beta-111107
C4 (ME620512)	BPNo.2	貝(イカミカ)	6150±60	Beta-111108
C5 (ME620811)	BPNo.2	貝(ヤマトシジミ)	7310±50	Beta-111109
C6 (ME620917)	BPNo.2	腐植土	8260±50	Beta-111110

3群集：低鹹水域に棲息する *Corbicula japonica* が優勢する。

4群集：内湾部の砂泥質に棲息する *Cerithideopsis djadaria* が優勢し、*Siphonalia SP.*などを伴う。

貝類遺骸群集の示す環境変化

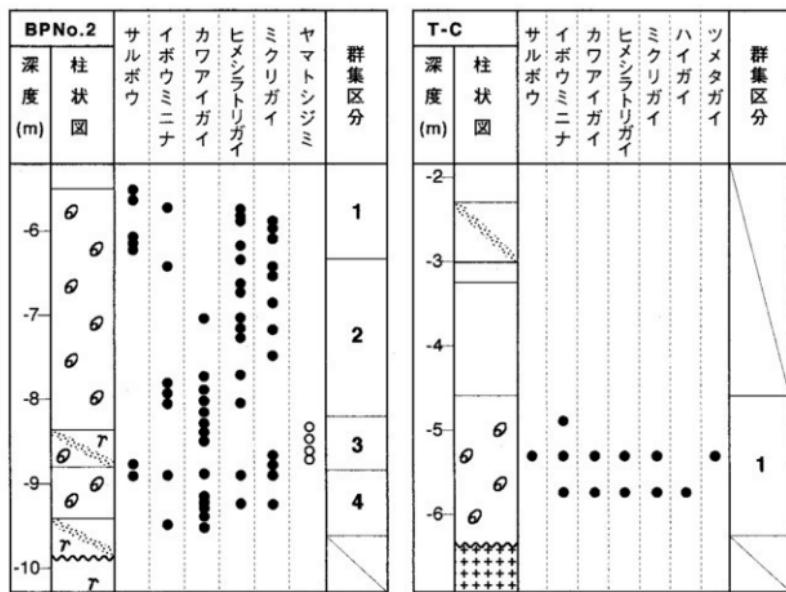
貝類が生息していた水域の古環境変化は次のように推定される。

4群集は内湾の湾奥部の環境を示す。その上位の3群集では低鹹水域に変化したと考えられ、その後、再び内湾の湾奥部の環境（2群集）に変化した。1群集では、最も内湾の湾奥部の環境に変化しており、この段階で調査地点の海域が最も広がったと推定される。

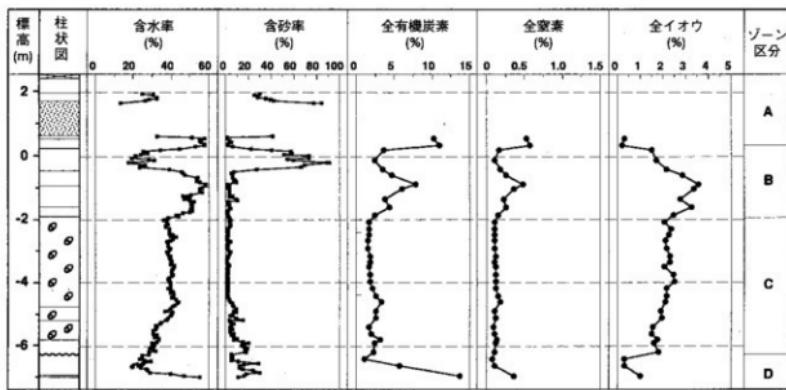
トレンチでは掘削下限まで1群集であるが、ここでは温暖な環境に生息する *Tegillarca granosa* が多産する。*Tegillarca granosa* は現在の有明海などに生息する種で、1群集が生息していたときは、現在より温暖な海域環境であったと推定される。

(3) ¹⁴C年代測定

トレンチ（T-A）、BP No. 1、BP No. 2から採取した貝化石や木片などの6試料について、鳥根大学汽水



第6図 BP No. 2 および T-C の貝化石構成種



第7図 BP No. 2 の含水比、含砂率、CNS 測定結果

域研究センターと㈱地質科学研究所に依頼し、¹⁴C年代を測定した。測定方法はシンチレーションカウンタによるβ-線計数法（島根大学汽水域研究センター）と加速器質量分析（㈱地質科学研究所）である。測定結果を第2表に示す。

(4) ポーリングコアBP No. 2の地球化学分析

BP No. 2について、含水率、含砂率、全有機炭素（TOC）、全窒素（TN）、全硫黄（TS）の分析を行った。結果を第7図に示す。それぞれの値の変化傾向に基づき、BP No. 2をA、B、C、Dの4帯に区分した。以下に堆積層の特徴とともに、これらの分析結果から推定される堆積環境について述べる。

A帯（深さ1.2~3.4m）

砂疊層と泥層からなる。泥層の部分（深さ3.0~3.4m）についてみると、含水率は高く、含砂率は低い。TOCは大変高い値を示し、TNも高いことから、水生植物が茂るような湿地の環境が推定できる。海水流入の有無を示す指標となるTSは低い値を示すことから、淡水環境で堆積した地層と考えられる。

B帯（深さ3.4~5.5m）

泥層からなる。このゾーンの上部では含砂率が急に高くなっている、それに対応して含水率は低くなっている。TOC、TNとともに高い値を示し、植物片などの有機質の流入や、水中での基礎生産量が高かったと推定できる。TSは大変高い値を示すことから、海水の流入があるが、底層水の交換はよくない環境で堆積した地層と推定される。

C帯（深さ5.5~9.8m）

泥層からなり、内湾生の貝類遺骸を含む。内湾生の貝を含むことと、TSが高い値を示すことは調和的である。含砂率は下部付近で若干高いが、全体として低く、含水率はやや高い値を示す。TOC、TNはこのゾーンではあまり変化がなく一定であり、内湾の環境が安定的に続いたと推定される。

D帯（深さ9.8~10.6m）

更新統の泥層である。明灰色の泥層部分では含水率が低く、含砂率は若干高い値を示す。TOC、TNはやや低い値を示す。TSは低い値を示し、淡水環境で堆積した地層と推定される。黒褐色の有機質泥層では含水率が高く、TOC、TNも高い値を示す。TSは上位の明灰色泥層よりやや高いが、ゾーンB、Cに比べると低く、海水流入があったとは考えにくいことから、有機物濃度が高いことによってイオウが固定される量が多くなったことを示すと考えられる。この有機質泥層は三瓶木次鉱石を挟んで厚く堆積しており、同火山灰層が降灰した時期にこの地点に淡水の湿地が形成されていたと推定される。

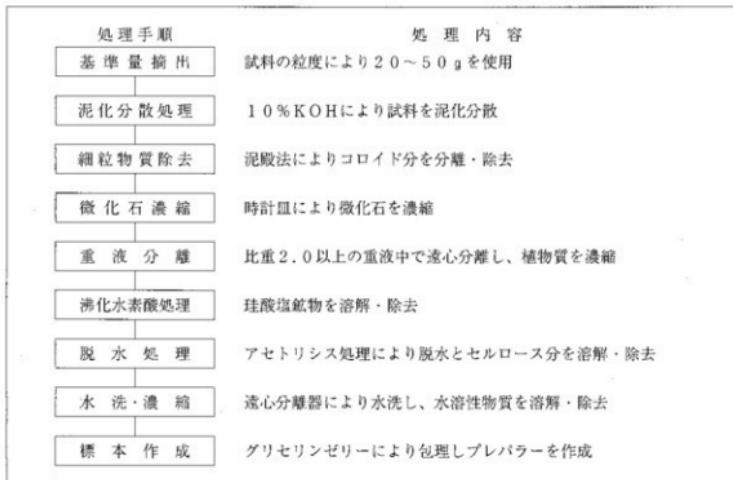
4. ポーリングコアおよびトレンチの堆積層の花粉分析

ポーリングBP No. 1（10試料）およびBP No. 2（21試料）、トレンチA（11試料）の試料について花粉分析を行った。分析法と鑑定は川崎地質株式会社の渡辺正巳氏の指導により藤原が行った。また、花粉分帯についても同氏の指導によるものである。試料の処理は第8図のフローにしたがって行い、1試料につき3枚のプレパラートを作成した。生物顕微鏡400倍で検鏡し、計測は木本花粉の合計が200個になるまで行った（図版25、26）。

花粉分析結果を第9~11図の花粉ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムは各々のタクサを木本花粉総数を基數とした百分率で示した。ただし、トレンチAの試料番A-1、A-3では、花粉化石の含有量が少なく、木本花粉の同定数は200個体に達していない。BP No. 1、BP No. 2は、すべての試料において十分な花粉化石を得ることができた。

(1) トレンチAの花粉分析

花粉組成の特徴より、次の5花粉帯が識別できる。以下に各花粉帯の特徴を示す。なお、花粉組成変化を時系列に沿って述べるために、花粉帯の記載は下位から順に行う。BP No. 1、BP No. 2についても同様である。



第8図 花粉分析処理フロー

A-V带（試料番号A-16, A-19）：シノキ属-マテバシイ属、アカガシ属が優勢で、コナラ属、クマシデ属-アサダ属、マツ属（複雑管束亞属）、ムクノキ属-エノキ属、ニレ属-ケヤキ属などを伴う。特にシノキ属-マテバシイ属は、本帶前半で50%を越える高率を示す。

A-IV带（試料番号A-14）：前帶と大きな違いではなく、シノキ属-マテバシイ属が優勢であるが、本帶からマキ属が出現し始める。

A-III带（試料番号A-11, A-12）：アカガシ属が前帶に引き続き優勢であり、モミ属、スギ属が本帶から増え始める。他の木本花粉は上位に向かって減少する。

A-II带（試料番号A-9）：木本花粉では、ハンノキ属が42%まで急増する。草本花粉では、イネ科、カヤツリグサ科が増え始める。

A-I带（試料番号A-1, A-3, A-5, A-6, A-7）：アカガシ属が前帶に引き続き優勢で、ハンノキ属は上位に向かって減少し、スギ属は上位に向かって増加する。また、ツガ属が出現する。草本花粉では、カヤツリグサ科、イネ科、ヨモギ属がさらに増加し、他の草本花粉も出現し始める。

(2) ポーリングコアBP No. 1の花粉分析

花粉組成の特徴より次の3花粉帯が識別できる。以下に各花粉帯の特徴を示す。

BP 1-Ⅲ带（試料番号T-1-03-02, T-1-03-07, T-1-03-13, T-1-03-17, T-1-04-04, T-1-04-08）：シノキ属-マテバシイ属が卓越し、アカガシ属、マツ（複雑管束亞属）、クマシデ属-アサダ属、クリ属、コナラ属、ムクノキ属-エノキ属、ニレ属-ケヤキ属などを伴う。

BP 1-II带（試料番号T-1-02-09, T-1-02-11）：シノキ属-マテバシイ属が減少し、ハンノキ属、スギ属が増加し始める。また、草本花粉ではイネ科が増え始める。

BP 1-I带（試料番号T-1-02-02, T-1-02-03）：スギ属、ハンノキ属がさらに増加し、アカガシ属が減少する。草本花粉では、イネ科が増加し、他の草本花粉も出現し始める。

(3) ポーリングコアBP No. 2の花粉分析

花粉組成の特徴より次の6花粉帯が識別できる。以下に各花粉帯の特徴を示す。

BP 2-VI带（試料番号T-2-10-17, T-2-10-11, T-2-10-06：ハンノキ属が60%以上の高率で出現し、コナラ亜属、スギ属、マツ属（複雑管束亞属）、ハシバミ属を伴う。また、トウヒ属、マツ属（単雑管束亞属）がわずかではあるが出現し、ツガ属が上位に向かって増加傾向を示す。

草本花粉ではキク亜科、ヨモギ亜科が多出する。

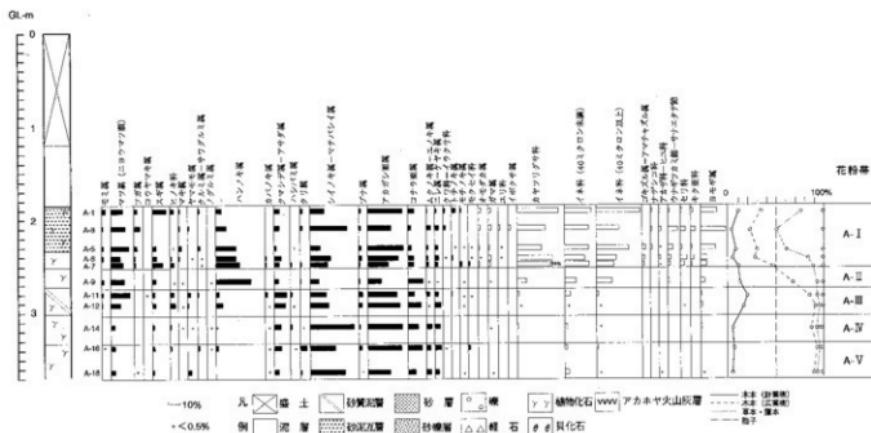
BP 2-V带（試料番号T-2-10-02）：アカメガシワ属が急激に増加し、それに伴ってコナラ亜属、マツ属（複雑管束亞属）も増加する。前帶で高率を示したハンノキ属は本帶から急激に減少する。また、クマシデ属-アサダ属、ブナ属、アカガシ亜属、ムクノキ属-エノキ属が本帶から本格的に出現はじめる。

BP 2-IV带（試料番号T-2-08-10, T-2-08-14, T-2-09-04, T-2-09-08, T-2-09-12, T-2-09-14）：コナラ亜属が前帶と同様に高率を示し、ムクノキ属-エノキ属が急増する。前帶より本格的に出現し始めたクマシデ属-アサダ属、ブナ属、アカガシ亜属も増加し始める。それとは反対に、アカメガシワ属は急減する。また、これまで出現していたトウヒ属が本帶の上位より全く出現しなくなる。草本花粉では、イネ科(<40)が前帶に比べて増加する。

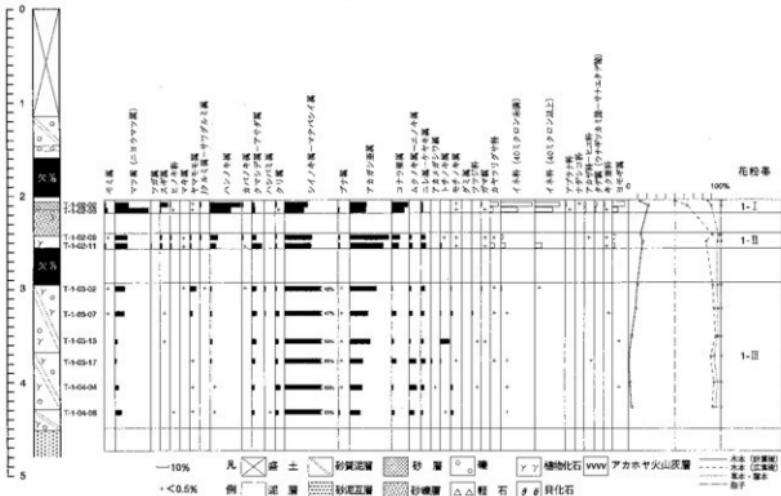
BP 2-III带（試料番号T-2-06-17, T-2-07-07, T-2-07-16, T-2-08-05）：アカガシ亜属がさらに増加し、ムクノキ属-エノキ属、ハンノキ属が前帶に比べて減少する。また、シイノキ属-マテバシイ属が本帶中間から増加し始める。マキ属もわずかではあるが出現する。草本花粉は前帶に比べて出現種類が減少する。

BP 2-II带（T-2-04-16, T-2-05-05, T-2-05-10, T-2-05-18, T-2-06-03, T-2-06-08）：シイノキ属-マテバシイ属が急増し、クマシデ属-アサダ属が減少する。また、わずかではあるが前帶と同様マキ属が出現する。他の木本花粉は前帶とほとんど変わらない。草本花粉では、イネ科(<40)が上位に向かって減少する。

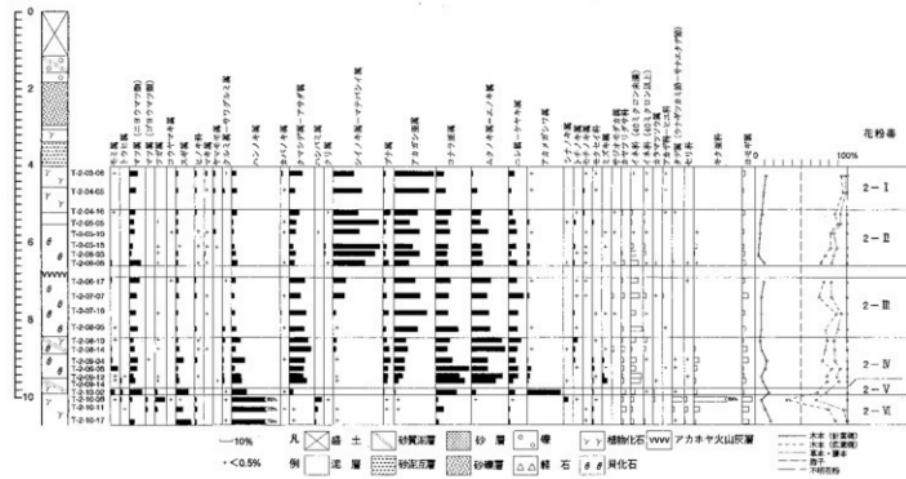
BP 2-I带（T-2-04-05, T-2-03-06）：アカガシ亜属が増加しコナラ亜属、シイノキ属-マテバシイ属、ブナ属、ムクノキ属-エノキ属が減少する。また、マキ属が再び出現し始める。また、草本花粉は前帶に比べて減少する。



第9図 トレンチAの花粉ダイアグラム



第10図 BP No. 1の花粉ダイアグラム



第11図 BP No. 2の花粉ダイアグラム

(4) ボーリングコアBP No. 1, ボーリングコアNo. 2およびトレンチAの各花粉帯の対比

これらについての花粉分析結果と大西(1986)の結果から、それぞれの花粉区分を対比し、日久美遺跡全体の花粉帯を第12図のように設定した。これを中海・宍道湖地域での花粉帯と対比すると次のようになる。

宍道湖周辺地域の完新世花粉分析帯は、湖底ボーリングであるSB 1が基準となっている。上位からイネ科花粉帯、カシ-シイ花粉帯、マツ・モミ花粉帯、ブナ・ツガ花粉帯ムクノキ・エノキ花粉帯の5帯にわけられ、これがさらに14の亜帯に細分されている(大西ほか, 1990)。そこで日久美遺跡での花粉帯をSB 1のそれと比較

すると以下のような対比が可能である。

M-1带：SB 1で特徴的なマツの増加、カシなどの減少がみとめられないがスギ属が増加することからイネ科花粉帯スギ亜帯に対比される。

M-2带：マキ属が増加傾向を示し、カシ類が高率を示すことからカシーシイ花粉帯のマキ亜帯に対比される。

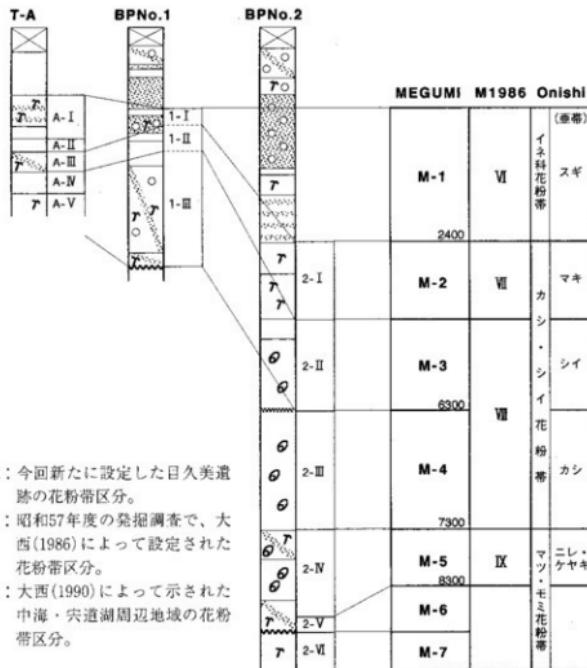
M-3带：マツの減少は認められないがシイ類が高率を示すので、カシーシイ花粉帯シイ亜帯に対比される。

M-4带：マツ類の増加、マキ属のピークは認められないが、カシ類が高率で出現することからカシーシイ花粉帯のカシ亜帯に対比される。

M-5带：下位に比べツガ属やモミ属を急に含まなくなることから、SB 1のマツモミ花粉帯のニレケヤキ亜帯に対比される。

以上のように、花粉組成の変化傾向から、日久美遺跡の花粉帯とSB 1の花粉帯を対比することができる。花粉組成について詳細に検討すると、両者には若干の違いが認められる。特に日久美遺跡ではSB 1に比べて、マツ属、マキ属、ツガ属の出現率が低いという特徴がある。このような違いの理由は次のように考えられる。日久美遺跡は丘陵にごく近い地点であり、大きな流入河川もないことから、ここでの花粉組成は遺跡周辺の局地的な植生を強く反映していると考えられる。一方、SB 1は陸地から少なくとも2km以上離れた地点で、広い集水面積をもつ斐伊川が流入する水域であることから、中国山地を含めた広範な植生を反映していると考えられる。

また、今回はいくつかの¹⁴C年代が得られ、アカホヤの層準も明らかになったことから、花粉帯の年代を示す



MEGUMI：今回新たに設定した日久美遺跡の花粉帯区分。

M1986：昭和57年度の発掘調査で、大西(1986)によって設定された花粉帯区分。

Onishi：大西(1990)によって示された中海・宍道湖周辺地域の花粉帯区分。

第12図 花粉帯区分とその対比

資料が得られた。第12図に今回の結果から推定されるいくつかの花粉帯境界の年代を示している。しかし、BP 2ではアカホヤ層準についてみると、BP 2ではカシ・シイ花粉帯のシイ亞帯とカシ亞帯の境界にあたるのに対して、SB 1や大田渡根湖のO H94（中村ほか、1997）ではカシ亞帯の下部にあたり、若干のずれがある。したがって、花粉境界の年代値についてはさらに検討の必要がある。

5. 目久美遺跡および周辺地域の古地理の復元と古植生変遷

目久美遺跡堆積層の地質的検討から推定される過去1万年間の古地理変遷を6業の古地理図（第13図）に示し、以下にそれぞれの段階の環境と花粉分析から推定される古植生を述べる。なお、古地理図では今回の調査範囲よりずっと広い範囲を示しているが、以下に述べる古環境は特にことわりがない場合、今回の調査範囲内の状況である。なお、これらのうちのいくつかをこれまでになされている中海穴道湖周辺地域全体の古地理復元図とともに巻頭図版に示している。また、中海穴道湖周辺の縄文～弥生時代の低湿地遺跡を中心とした遺跡分布を第14図に示す。

10000年前（縄文時代草創期）

最終氷期が終焉した1万年前は、海面が標高-30~-40m付近にあった。調査地域は湿地を好むハンノキ類が分布する陸域で、周辺の丘陵にはツガ属、マツ属（単維管束亞属）などの冷温帯林が分布していた。その後、調査地域には水辺に生えるアカメガシワが茂るようになる。

8300年前（縄文時代早期中葉）

1万年前以降、気候が急速に温暖化したのに伴って海面が上昇し、海岸線が陸側へ移動する海進現象が生じた（縄文海進）。海進によって調査地域には8300年前頃に陸域から海域（内湾）に変化し、内湾の貝類が生息するようになった。古地理図は、弓ヶ浜砂州の原形となる砂州が、半島状に沖側へつきだした尾根や現地表下に埋没している基盤岩や段丘の高まりを足掛かりに、海進の初期の段階から形成され始めたという推定で描いている。

調査地域に形成された内湾に流入する河川沿いにはエノキ・ムクノキ、ニレ・ケヤキを要素とする河畔林が存在した。また、周辺の丘陵には、コナラ、クマシデ等の暖温帯中二次林の落葉樹林が存在していた。

7300年前（縄文時代早期後葉）

海進によって形成された内湾はこの頃、一時的な海面の小低下ないし停滞による海退によって低地分化した。その後再び海進に転じ、高塩分の内湾へ変化した。

調査地周辺の丘陵にはアカガシ亞属を要素とする照葉樹林が分布していた。

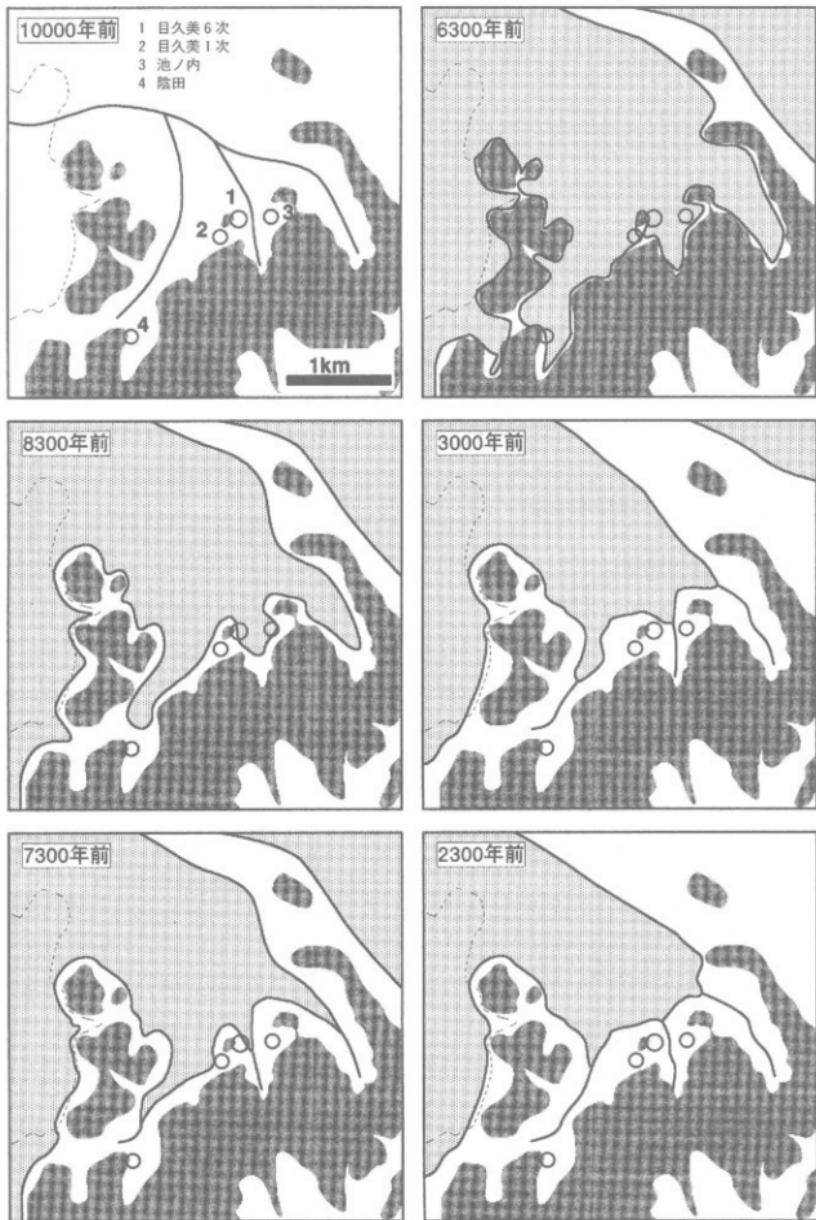
6300年前（縄文時代前期初頭）

内湾には現在の中海より温暖な環境（有明海程度）に分布するハイガイが生息していた。サンゴが付着したアカニシヒナクイムシに穿孔された材の存在は外洋の影響が直接及んでいたことを示す（図版24）。陰田遺跡では縄文時代前期初頭の汀線が標高-1~0mに確認されている（建設省中国地方建設局倉吉工事事務所・米子市教育委員会、1984）。この頃から5000年前頃にかけて海進は最も進み、海面の高さは標高1m程度の最高位に達した。その後は海退に転じ、調査地域の内湾はやや閉鎖的な環境に変化していった。

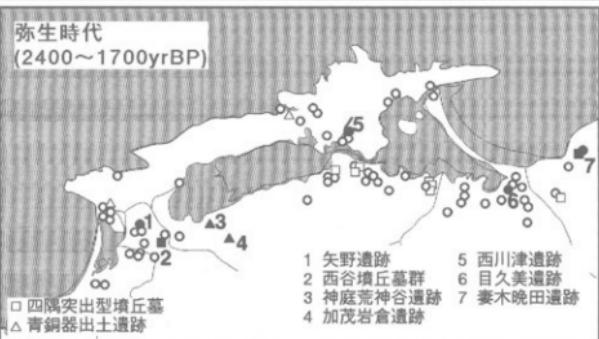
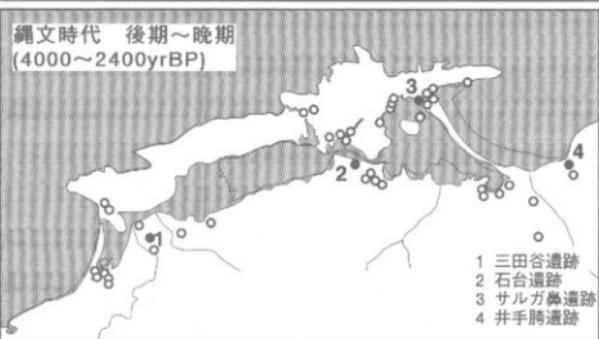
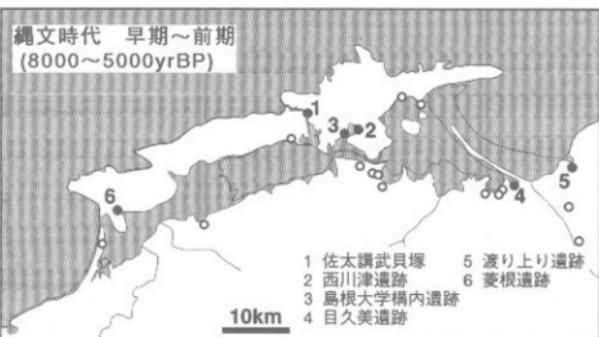
周辺の丘陵には温暖な気候を示す、シイ類を主とする照葉樹林が分布し、流入河川沿いには依然としてエノキ・ムクノキ、ニレ・ケヤキを要素とする河畔林が存在した。

3000年前（縄文時代晚期）

海退が進み、調査地域は内湾から湿地へ変化していった。拡大した湿地にはスギ属、ハンノキ属が分布するようになり、周辺の丘陵にはカシ類やシイ類の照葉樹林が分布していた。



第13図 目久美遺跡周辺の古地理の変遷



第14図 中海宍道湖周辺の低湿地遺跡を中心とした遺跡の分布

繩文海進で拡大した海域の汀線付近に立地する遺跡としはては、目久美遺跡をはじめ、淀江町渡り上り遺跡（中村ほか, 1997）などがある。これらの遺跡では、漁具などの海域での生業活動を示す遺物が数多く発見されている。繩文海進以降は沖積平野が形成され、そこに遺跡が進出するようになる。弥生時代になると沖積平野の遺跡数は飛躍的に増大した。

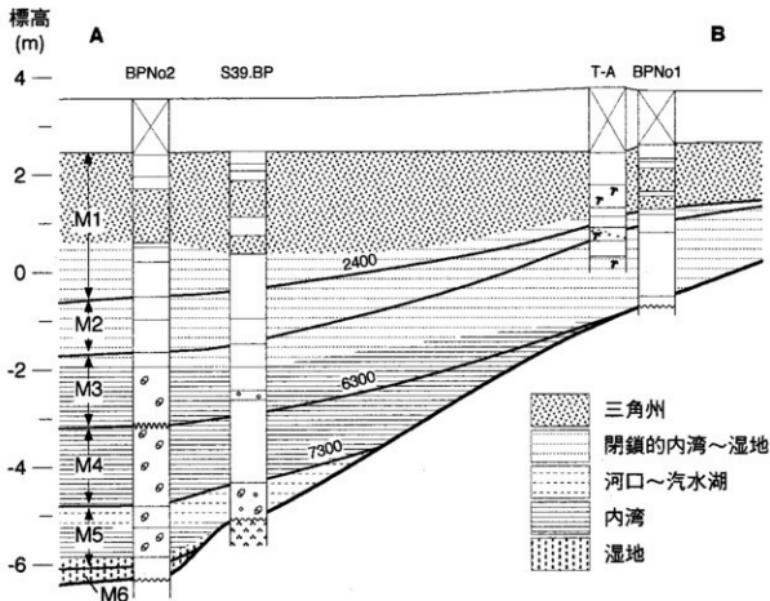
(Tokuoka et al., 1998による。竹広原図。説明は日本語に改変)

2300年前（弥生時代前期）

調査地域は完全に陸域となった。昭和57、58年度の目久美遺跡の調査では、弥生時代前期の水田が確認されている（米子市教育委員会・鳥取県河川課、1986）。今回の調査ではプランクトン分析の結果から、弥生時代前期の層準が水田として利用されていた可能性があることが指摘されている（本報告中100~105）。花粉分析では、この層準でイネ科花粉が増加しはじめるものの、量的にそれほど多くないため、この地点が水田として利用されていたかどうかという判断はつきにくい。弥生時代中～後期になると、今回の調査地には大規模な溝状造構が造られ、沖積低地の積極的な開発が行われるようになったと推定される。周辺の丘陵はカシ類やシイ類を主とする照葉樹林が分布しているが、自然林が伐採された後に二次林を構成するアカマツも増加し、人類の活動の影響が拡大したことがうかがわれる。

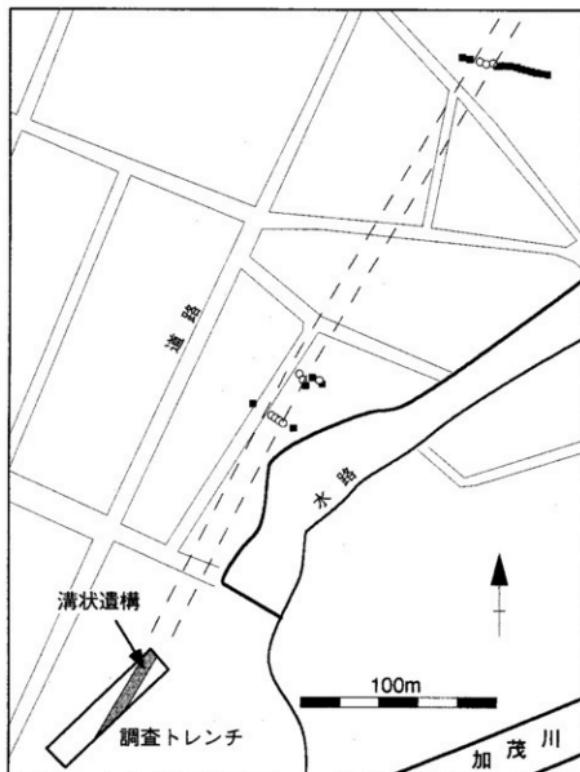
6. 貝類遺骸を含む泥層中の岩塊についての検討

オリーブ灰色泥層下部（貝殻層）に含まれる礫は、径20cm程度のもので、粒径が比較的揃っている。礫の形態は角礫～亜角礫で、礫種は本調査地周辺に分布する流紋岩を主体として、大山火山噴出物の石英安山岩も含まれる。前述のように、オリーブ灰色泥層は含まれる貝化石種から内湾の堆積物と考えられる。泥が堆積する静かな内湾底に、大きな礫が水流や波浪によってもたらされるということは通常はあり得ない。約20cmもの礫がもたらされるような水流があるならば、泥はその場には堆積し得えない。土石流によって礫がもたらされた可能性は堆積相から否定される。さらに、大山火山に起源する石英安山岩の礫が本調査地に自然水流によってもたらされることはあり得ない。周辺の山地から転がり落ちた可能性は貝殻層の堆積した当時の占土地形を復元すると可能性



第15図 堆積環境および花粉帯区分にもとづく地質断面図

は薄い。また、流紋岩のブロックにはいくつかの種類があるので、近くの山地から転がり落ちたことはありえない。したがって、これらの礫は人為的に運ばれたものであることは確実である。さらにブロックが新鮮な表面をもっていること、およびブロックが含貝層にのみ産出することも、このことを支持している。このような礫が含貝層にのみ含まれていることは、礫が海中へ落とされた理由を推定する手掛かりになるように思われる。例えば、追い込み漁法で海に礫を投じたり、舟を安定させるために積み込んでいた礫を捨てたりしたという可能性も考えられよう。



第16図 サウンディング位置と溝状遺構の分布推定範囲
溝状遺構の分布推定範囲を破線で示している。白丸は地表2m付近に砂層の分布が確認できた地点。黒四角は砂層が分布していない地点。

7. 溝状遺構を埋積する砂層についての検討

別項（および巻頭図版）で記述されているように、平成9年度の発掘調査では大規模な溝状遺構（幅約6m、深さ約2m）が検出された。この遺構は逆台形の断面形態を持ち、南北方向に直線的に伸びる。その形状から自然流路ではないことが明らかで、用水路や運河、環濠などの目的で構築されたものと推定される。溝の内壁には一定のレベルに若干オーバーハングした侵食痕が残り、その部分に水面があったとみられる。また、オーバーハング部の下方には、足跡とみられる凹みが多数認められている。これらは遺構構築時に残された足跡の可能性がある。

遺構内は細礫を含んだ粗粒砂層で充填されている。この砂層には斜交層理が発達していて、短期間のうちに（おそらく1回の洪水で）堆積したものとみられる。遺構内から出土した土器から、遺構の構築は弥生時代中期後半以降、埋積は弥生時代後期前半と考えられている。したがって遺構を充填する砂はその後の洪水によってもたらされたものである。

● 遺構を充填する砂の岩石鉱物組成からみた洪水流路の検討

遺構を充填する砂は径2mm以上の細礫を多く含む極粗粒～粗粒砂で、ほとんどが花崗岩に由来する石英や長石、および花崗岩の岩片からなり。その他の岩片を殆ど含まないという特徴を持つ。日久美遺跡南方の低丘陵は第三紀の流紋岩類からなっており、砂層が周辺の低丘陵から流れ出る小河川の氾濫によってもたらされたものではないことは明らかである。そこで、さらに南方の山地から流れ出る日野川、法勝寺川、加茂川の現河床に分布する砂層について観察した結果、次の特徴を持つことが明らかになった（図版27）。

日野川：花崗岩質の砂を主体とし、大山火山の噴出物である石英安山岩片を含む。細礫以上の粗粒なものについては、石英安山岩片が多い。

法勝寺川：花崗岩質の砂を主体とし、他の岩片は殆ど含まれない。

加茂川：花崗岩質の砂と流紋岩質岩片からなる。

このような特徴から、溝状遺構を埋積する砂層は、法勝寺川の洪水でもたらされたものであると判断される。第1図に示すように、日久美遺跡は法勝寺川の流路とは尾根で隔てられた所にあり、通常は法勝寺川からの堆積物は供給されない。しかし、豪雨時には、法勝寺川と日野川の合流点付近で滲水し、現在の加茂川が流れている丘陵の鞍部を越えて日久美遺跡側へ流出するという形態の洪水が、近世までしばしば発生していた。溝状遺構を埋積した弥生時代後期の洪水も、そのようにしてもたらされたものであったと判断される。

8. スウェーデン式サウンディングによる溝状遺構の広がりについての検討

今回検出されたものと同規模の溝状遺構は、昭和61年度の日久美遺跡の発掘調査でも検出されている（米子市教育委員会、1986）。今回のもとの関係は不明であるが、これらの溝状遺構は規模がかなり大きなもので、広い範囲にわたる大規模な遺構である可能性がある。また、水路として機能していたものならば、河川から水を引き入れていたと推定されるが、現在の加茂川は近世に人工的に開削されたものであり、旧加茂川まではかなりの距離がある。旧加茂川から水を引き入れていたものならば、弥生時代後期に相当高度な灌漑、あるいは治水事業が行われていたことになり、この遺構の分布の確認は重要な意味を持つものと思われる。そこで、溝状遺構の分布を予察的に検討するために、スウェーデン式サウンディングによる地盤調査を行った。

スウェーデン式サウンディングはロッドの先に錐（コーン）を取り付け、100kgの荷重をかけて回転させながら地盤に貫入させて、その貫入抵抗から地盤の絞まり具合や、地質構成を判断する土質試験の一一種である。溝状遺構は泥層または砂泥互層から掘り込まれて、粗粒砂によって充填されていることから、この方法によって分布が確認できる可能性がある。

溝状遺構が北方へ直線的に伸びていると推定し、また作業の可能な場所を考慮して、第15図に示した地点で調査を行った。その結果、現地表下約2mに、4～8mの幅をもって粗粒砂層が分布していることが明らかになっ

た。この砂層が、溝状遺構を充填する砂層に連続するものであるならば、調査トレンチから少なくとも200m北方までは直線的に溝状遺構が存在していることになる。この調査によって、溝状遺構は加茂川の流下する自然地形を巧妙に利用した水利施設であった可能性が高い。しかしながら、今回のこの砂層は発掘地点の溝状遺構を充填している砂層と直接連続するかどうかは、調査地点が離れていることから、断言はできない。今後の詳しい調査で確認されることを期待したい。

9.まとめ

目久美遺跡第6次調査に伴って、地質的手法によって古地理・古植生について検討した。その結果、次のことが明らかになった。

- 本調査地は6000～5000年前の繩文海進高頂期には温暖な内湾の環境にあった。
- 繩文海進期の堆積層に含まれる多数の螺から、内湾で漁業などが行われていたと推定できる。
- 3000年前頃から湿地～陸地へ変化して、そこは弥生時代になると大規模な水路を作るなどして、土地利用がされるようになつた。
- 目久美遺跡と中海・宍道湖地域との花粉帯が対比され、同時に目久美遺跡周辺の局地的な植生分布が明らかになつた。

◆引用文献

- 赤澤秀則・竹広文明, 1992(編) : 佐太講武具塚発掘調査報告書2, 鳥取県教育委員会,
- 会下和宏, 1997(編) : 鳥根大学構内遺跡第1次調査(橋編手地区1), 鳥根大学埋蔵文化財調査研究報告書第1号, 鳥根大学埋蔵文化財調査研究センター,
- 会下和宏, 1998(編) : 鳥根大学構内遺跡第3次調査(深町地区1), 鳥根大学埋蔵文化財調査研究報告書第2号, 鳥根大学埋蔵文化財調査研究センター,
- 建設省計画局・鳥取県・鳥根県, 1967 : 中海臨海地帯の地盤。都市地盤調査報告書, 15.
- 建設省中國地方建設局倉吉工事事務所・米子市教育委員会, 1984 : 除田——一般国道9号米子バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——。
- 町田 洋・新井房夫, 1978 : 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰, 第四紀研究, 17, 143-163.
- 中村唯史・徳岡隆夫, 1996 : 穴道湖ボーリングS B 1から発見されたアカホヤ火山灰と完新世の古地理変遷についての再検討。鳥根大学地球資源環境学研究報告, 15, 35-40.
- 中村唯史・徳岡隆夫・大西郁夫・高安克巳・竹広文明・会下和宏・西尾克己・渡邊正巳, 1996 : 鳥根県東部地域の完新世環境変遷と低湿地遺跡。LAGUNA (汽水域研究), 3, 9-11.
- 中村唯史・徳岡隆夫・赤木三郎・岩田文章, 1997 : 淀江平野の地下地質と淀江湖の復元。LAGUNA (汽水域研究), 4, 59-68.
- 中村唯史・様川頼久・張 発勝・廣 錠樹・徳岡隆夫, 1997 : 波根湖の堆積層と古環境変遷。波根湖の研究。鳥根大学汽水域研究センター特別報告, 3号, 3-19.
- 大西郁夫, 1985 : 中海・宍道湖湖底およびその周辺地域の最上部完新統の花粉分析。鳥根大学地質学研究報告, 4, 115-126.
- 大西郁夫, 1986 : 米子市目久美遺跡の花粉分析, 加茂川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書。
- 大西郁夫, 1993 : 中海・宍道湖周辺地域における過去2000年間の花粉分带と植生変化。地質学論集, 39, 33-39.
- Takehiro, f., Tokuoka, T. and Takayasu, K., 1997 : A study on the history of the human activities around the coastal lakes. In Abstracts of International Conference on ancient lakes-their biological and cultural diversities-, Organizing Committee of ICAL '97, Kusatsu, 194p.
- Tokuoka, T., Takayasu, K., Kunii, H., Takehiro, f. and Sampei, Y., 1998 : Improving lagoonal environments for future generations-a case study of Lakes Nakaura and Shinji, Japan. LAGUNA (汽水域研究), 5, I-X.
- 内田律雄, 1988, 1989(編) : 朝潮川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書IV, V (藩崎地区2, 3), 鳥根県上木部河川課・鳥根県教育委員会。
- 小原貴樹ほか, 1986 : 池ノ内遺跡——加茂川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——, 米子市教育委員会。
- 小原貴樹ほか, 1986 : 日久美遺跡——加茂川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——, 米子市教育委員会。
- 米子市教育文化事業団, 1995 : 日久美遺跡IV - 米子市教育文化事業団文化財報告書。
- 渡邊正巳・会下和宏, 1997 : 鳥根大学構内遺跡第1次発掘調査における花粉分析。山陰地域研究, 13, 41-48.

第2節 米子市目久美遺跡にみられる弥生時代の堆積物の堆積環境

中山 勝博（鳥根大学総合理工学部 地球資源環境学教室）

目久美遺跡には、縄文時代以降の堆積物が広く観察できる。その中でも12層から9層に区分されている弥生時代の堆積物については、瀬戸内海をともなった河川後背湿地での堆積物であるといえる。

一般に、河川後背湿地は、洪水（増水）時の（越堤）洪水堆積物や破堤堆積物によって埋積が進む（Miall, 1992など）。（越堤）洪水堆積物は、主に粒子間の内部摩擦や粒子エントレイン速度（粒子が流体中に被運搬されるための流体速度）の違いなどにより、粒子が流体中で粒径による分離を起こし、砂泥互層、あるいは、砂から泥への正級化層や泥から砂への逆級化層を形成する。破堤堆積物は、越堤洪水堆積物よりも粗粒のベッドロードによって構成される。また、両者ともに間欠的な堆積作用であるため、堆積物中には昆虫などによる生痕や植物根が認められる。一方、河川後背湿地には、河道放棄による三日月湖を代表とした瀬戸内海も認められるが、そこでは、浮遊・沈降型の泥質堆積物が堆積する。場合によっては、その泥質堆積物には藍鉄鉱の認められることもある。

ここで1997年11月7日現在での目久美遺跡では、弥生時代の堆積物について次の観察ができた。9層は砂泥互層と、砂と泥の級化層からなり、植物根の発達が認められる（第1図、第2図）。そこでは、直径1cm弱で管状の生痕も認められた。砂層は極細粒～中粒砂からなり、砂にはリップルからデューンの低領域ベッドフォームの累重による斜交葉理・層理が認められた。ただし、遺跡の中央やや東側で小プロック状に掘り残した部分には、侵食面を介して中粒～粗粒砂層の挟みが認められた。これは、中粒～粗粒砂層が破堤堆積物、それ以外は（越堤）洪水堆積物であることを示している。ちなみに、極細粒～中粒砂層に認められるリップル葉理のフォアセット面は、N76°E～N70°Wのはば東西方向の走向で、北傾斜15～24度を示すので、洪水は遺跡の南方から北へ向かって流れたと判断できる。

さらに、遺跡南縁から約15m北東側で見られる北西～南東方向の切面の観察により、12層と9層との関係については次のことが言える。すなわち、大まかに言って9層は12層の上位に整合に重なるが、一部では、9層の砂泥互層がフォアセット状に傾斜した先に指交関係で12層の泥質堆積物に漸移する（第1図）。12層は泥質堆積物ではあるが、そこには極細粒～中粒砂で厚さ1～2mm程度の莢層も挟まれる。さらに12層には藍鉄鉱も認められた。このことは、12層が、後背湿地を流下した洪水流が、瀬戸内海に入りほとんどの粗粒部を瀬戸内海の縁辺部に残し、細粒部を浮遊・沈降様式で瀬戸内海中央に堆積させた結果形成されたものであることを示している。おそらく、ここでの北西～南東方向の切面に見られるフォアセット状に傾斜した砂泥互層は、洪水流が瀬戸内海に入る所で形成されたマイクロデルタ地形の構成物とみられる。ちなみに、フォアセット面はN68°E～N72°Eで20°N～28°Nを示し、瀬戸内海南部から北方に向かって成長したことを示しており、先の洪水の流向方向と矛盾しない。

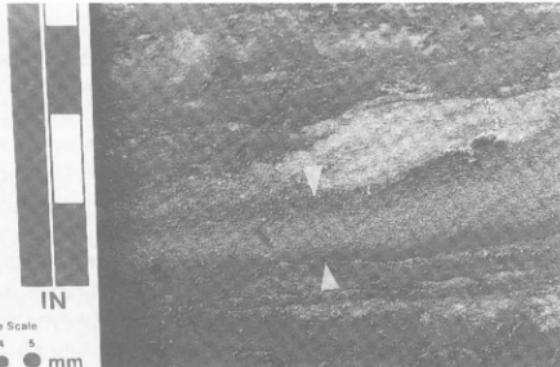
以上から、米子市目久美遺跡にみられる弥生時代の堆積物（12層～9層）は、瀬戸内海を伴った河川後背地という堆積環境で堆積したといえる。なお、瀬戸内海は、遺跡内で今回観察した北西～南東方向の切面での12層から推定できるものであるが、マイクロデルタとみられるフォアセット状の部分も、12層自体も数十cm以下の厚さであり、瀬戸内海が遺跡全体に広がっていたかどうかは不明である。さらに、泥質の12層が大まかに言って9層の下位に存在し、破堤堆積物とみられる中粒～粗粒砂層は9層の中でもより上位（9層の上部）に見られるとすると、瀬戸内海を有していた河川後背湿地が、河道の近接にしたがって（越堤）洪水堆積物がより頻繁に到達するようになって、その埋積で瀬戸内海は消滅し、ついには破堤堆積物に覆われたという堆積過程も考えられうる。

※文献

Miall, A. D. (1992) Alluvial deposits. In: Facies Models response to sea-level change. Walker, R. G. and James, N. P. (eds.), 119-142.



第1図 目久美遺跡の南縁から約15m北東側の北西—南東方向の切面の写真。写真中の番号は各層の番号を示す。9—7層中は、砂泥互層からなる。Rの部分は、砂層の一部が流れ出し切面に顯著に現われた植物根。Fはフォアセット状に累重した砂泥互層。このフォアセット状に累重した砂泥互層の北西側では急激に泥質卓越となり一部12層に側方漸移する。



第2図 逆級化層。写真は第1図の9—7層中のもの。(越堤)洪水の流体の中で、砂と泥粒子が明瞭に分離し、砂泥互層を形成する場合もあるが、写真のように上方に逆級化となる場合もある。逆級化は、洪水流体中で、泥粒子の内部摩擦が少ないため、砂粒子よりも泥が先に堆積したと考えられている。

第3節 目久美遺跡における縄文時代晩期末から弥生時代前期の土器について —県内資料との比較から—

1. はじめに

鳥取県下の縄文時代晩期末から弥生時代前期の土器については、一括資料が少なく、その様相は曖昧である。そのうち弥生時代前期の土器については、段から削出突帯、そして貼付突帯という変化を前提にした清水真一氏による編年がある¹⁾。一方、突帯文土器についてはほとんど体系的な整理がなされていない。このような状況下で、長瀬高浜遺跡、イキス遺跡の突帯文土器が弥生前期土器に伴うものであるとした上井珠美氏の指摘は重要である²⁾。

日久美遺跡第5次、第6次調査では、包含層中から、いわゆる遠賀川系土器と突帯文土器が出土した。遺構内出土の一括資料ではないが、包含層出土資料としては良好で、ほぼ弥生時代前期中葉の土器の在り方を把握できるものと思われる。ここでは、突帯文土器を中心検討をすすめ、特に、前期土器に伴う突帯文土器の型式的特徴を抽出し³⁾、さらに、当該地域の特性について簡単にまとめたい。

2. 目久美遺跡第5次・6次調査出土資料について

a 第5次調査出土資料

i. 器種構成

弥生時代前期の包含層から出土した土器には、遠賀川系土器と突帯文土器、そして粗製土器がある。個体数を口縁部片から算出すると、総個体数139点のうち、遠賀川系土器12点（9%）、突帯文土器・粗製土器127点（91%）である。遠賀川系土器の内訳は、壺4点（3%）、甕5点（3.5%）、鉢・浅鉢2点（1.5%）、高杯1点（1%）、突帯文土器は壺7点（5%）、甕94点（67.5%）、その他7点（5%）、粗製土器が19点（13.5%）である。

ii. 遠賀川系土器

壺（第3章第11図2～5）

胴部まで復元できるものではなく、頭部まで判るもののが僅かあるにすぎない。いずれも中型品で、口頭部が判るものについては、いずれも口頭部界は段による区画（2、3）で、3については、沈線で区画した後、下側をやや低めているように思われる。第5次調査出土の壺には、削出突帯は認められない。また、文様が施されたものや彩色されたものも確認できなかった。

甕（第3章第11図9～13）

壺同様、胴部下位まで復元できるものは皆無である。形態は、おそらく倒錐形を呈すものと思われ、口縁部はいずれも如意形におさまる。調整はナデ調整が主で、刷毛目が施されたり、刷毛目後ナデ調整がされるものがある。断面で接合痕が認められるものについては、外傾接合である。9、10は口縁端部に刻目が施される。また、10は頭部に2条の沈線、11は低い段が形成されている。胴部上半に山形文や刺突文等の文様が施されたものは確認できなかった。

鉢・浅鉢（第3章第11図6、7）

同じく全形を復元できるものはない。6の口縁部は如意形を呈す。7は肩部で屈曲する形態を呈す。

高杯（第3章第11図8）

脚部と思われるものが1点出土した。薄い作りで、比較的小型と思われる。

iii. 突帯文土器

甕

刻目の有無で、刻目突帯文土器と無刻目突帯文土器に大別し、さらに突帯の数で一条突帯と二条突帯に分けることができる。しかし、二条突帯と思われる土器片は1点（第12図38）しか認められないため、ここでは一条突

帶文土器をあつかう。また、全形が窺える資料は少なく、口縁部を中心に分類する。口縁部の形態は、口縁端部の形状と突帯の位置から、次のように細分される。

器面調整については、外側調整には粗い擦痕の残るナデ調整(図版16-26参照)、ナデ調整が主体を占め、二枚貝条痕が少量認められる。内面については、ナデ調整が丁寧に施される場合が多いが、希に二枚貝条痕が認められる。また、調整が丁寧なため断面に接合痕が明瞭に残るものは少ないが、外傾接合は1点も確認できなかった。

刻目突帯文土器I類 (第3章第12図14~21)

口縁端部から下がった位置に突帯がつく。口縁端部は丸くおさめられたり、やや尖形を呈す。刻目はD字、O字、V字等が施される。

刻目突帯文土器II類 (第3章第12図22~29)

口縁端部に接するか、やや下がった位置に突帯がつく。口縁の調整と突帯の貼り付けが同時処理される類である。22や28は比較的のしっかりとしたD字やV字状の刻目、その他は、V字状に浅く刻まれる。

刻目突帯文土器III類 (第3章第12図30~36)

口縁端部から下がった位置に突帯がつき、口縁部は内面を強くナデるものがあり、やや外反気味である。ヘラ状工具で、V字に加え、突帯を斜めに軽く切り込んだような刻目がある。

刻目突帯文土器IV類 (第3章第12図37)

III類よりもさらに下がった位置に突帯がつく。小O字状の刻目が施される。

無刻目突帯文土器I類 (第3章第13図39~55)

口縁端部の調整と突帯の貼り付けが同時に処理され、口縁端部に接するか、やや下がって突帯がつくもの。突帯の断面形は下さがり三角形を呈すものが多い。

無刻目突帯文土器II類 (第3章第14図56~89)

口縁端部より突帯の幅ひとつほど下がった位置に突帯がつくもの。突帯の断面形には、三角形や下さがりの三角形がある。

無刻目突帯文土器III類 (第3章第15図90~100)

口縁端部より突帯の幅ひとつほど下がった位置に突帯がつく点ではII類と同様であるが、口縁部が緩やかに外反もしくは屈曲するもの。突帯の断面形は三角形、下さがりの三角形に加え、扁平な三角形も認められる。

無刻目突帯文土器IV類 (第3章第1類101~107)

口縁端部より突帯の幅ひとつ以上下がった位置に突帯がつくものを一括した。突帯の断面形は三角形が主体となる。

壺

小片ばかりではあるが、壺形を呈すと思われるものが7点認められる。肩部まで残るものはない。壺としたものの中にも、本来は壺形を呈す土器片が含まれている可能性は否定できない⁴¹。壺は器形から2大別できる。また、突帯の位置からさらに細分可能である。

壺Ia類 (第3章第15図108)

外反気味の口縁で、おそらく肩の張る胴部につながると思われる類。口縁端部に接して突帯がつくものをIa類とした。

壺Ib類 (第3章第15図109~112)

外反気味の口縁で、おそらく肩の張る胴部につながると思われる類。口縁端部から下がった位置に突帯がつくものをIb類とした。

壺II類 (第3章第15図113、114)

外反する口縁が内傾気味にたちあがる類。

その他 (第3章第16図115~121)

先の分類に当てはまらないものを一括した。遠賀川系土器との折衷形(119)、貼付円盤文のつく異形の突帯文

土器（118）、面取りした口縁端部をもつ突帯文土器（117）等がある。116は遠賀川系土器（如意形口縁）との折衷と考えられる。

iii. 粗製土器（第3章第17図122～125、第3章第18図126～139）

無文の粗製土器が遠賀川系土器や突帯文土器とともに出土している。深鉢ないし鉢形を呈すと思われる土器である。器面調整などは、突帯文土器と共通する部分が多く、外面調整には擦痕の残るナデ調整が多用されている。内面はナデ調整されるものが多い。大型（122～125）と中・小型（126～139）に大別できる。接合痕の観察できるものについては内傾接合のようである。基本的な作りは突帯文土器と共通する。

b 第6次調査出土資料

i. 器種構成

弥生時代前期の包含層（第13層）から出土した土器には、遠賀川系土器と突帯文土器、そして粗製土器がある。個体数を口縁部片から算出すると総個体数は39点で、遠賀川系土器16点（41%）、突帯文土器、粗製土器23点（59%）である。遠賀川系土器の内訳は、壺5点（13%）、甕9点（23%）、高坏1点（2.5%）、浅鉢1点（2.5%）ということになる。突帯文土器は壺1点（2.5%）、甕12（31%）。さらに粗製の甕や鉢が10点（25.5%）である。

ii. 遠賀川系土器

壺（第4章第49図5～9）

5についてては口頭部界に、6は頸胴部界に段が施される。8には木葉文、9には山形文が描かれている。

甕（第4章第50図13～21）

いずれも形態は倒鐘形を呈すと思われ、口縁部は如意形におさまるものばかりである。口縁端部に刻目があるものとないものがある。口径約19cm～26cmほどの中型品が主体を占める。頸胴部に段が施される15、1条沈線の16、17、2条の沈線と沈線間に刺突が施される18、4条沈線の19、さらに刺突文が加わる25、山形文が施される21がある。刷毛目調整とナデ調整、さらに刷毛目を施した後、ナデ調整を行っているものもある。断面で接合痕の確認ができるものについては外傾接合である。

高坏（第4章第49図12）

脚部が出土している。脚部は太く丸い棒状で、縱方向にひかれた2本沈線が脚部の4方向に施されている。

浅鉢（第4章第49図10）

口縁部が屈曲し逆字字形を呈す浅鉢が1点、これには赤色顔料が塗布されている。⁵⁾

iii. 突帯文土器

すべてが無刻目突帯文土器である。調整は、粗い擦痕の残るナデ調整、ナデ調整が主体的である。第5次調査でみられた二枚貝条痕は認められない。断面に接合痕が明瞭に観察できるものは少ないが、外傾接合は確認できない。

甕

無刻目突帯I類（第4章第51図22、23）

口縁端部に接して断面下さがりの三角形ないし、断面三角形の突帯がつく類。

無刻目突帯文土器II類（第4章第51図24～33）

口縁端部から突帯の幅ひとつ分程度下がった位置に突帯がつく類。突帯の断面形は三角形が主体を占める。

壺I類（第4章第51図34）

34がこれにあたる。口縁端部にほぼ接して断面丸形の突帯がめぐる。

iii. 粗製土器（第4章第51図35～44）

甕ないし鉢形を呈すと思われる土器である。器面調整などは、突帯文土器と共通する部分が多く、外面調整には擦痕の残るナデ調整が多用されている。内面はナデ調整されるものが多い。大型品は認められない。

c 小結

以上、第5次調査、第6次調査で弥生時代前期の堆積層から出土した土器を概観した。小結として、それらの時間的な位置づけについて若干整理しておきたい。ただ、資料の多数を占める突帯文土器については、次に県内資料との比較から検討していきたい。ここでは、両調査で出土した遠賀川系土器についてみておく。

両調査で出土した遠賀川系土器は、口頭部、頭脳部界に段をもつ壺の存在、壺には数条の沈線が頭脳部下にひかれたものがあるなど、土器の形態的な特徴から大枠で前期中葉に比定できる資料である。しかし、これらの出土状況は、2次堆積であり、これらをもって一括資料とするには問題があろう。型式的にある程度のまとまりを看取できるが、消極的な立場をとり、やや時間幅をもつ可能性を前提に話をすめる。

近年、岡山県内では、南溝手遺跡、窪木遺跡などの一連の調査により、いっぽう前期土器の様相が明らかになってきた。特に、豊富な遺構一括資料は、遺構の切り合い関係により、型式学的見地から推定されてきた変遷を立証することを可能としている⁶⁾。そこで、南溝手・窪木縄年を参考に目久美遺跡第5次・6次調査出土資料を比較してみたい。

第5次調査出土資料は、口頭部界に段ないし沈線條の段をもつ壺、頭脳部下に段をもつ壺に、2条の沈線が施された壺が伴っている状況である。これは南溝手・窪木Ⅱa期に相当すると考えられる。一方第6次調査出土資料は、口頭部界、頭脳部界に段をもつ壺と、段、1~4条の沈線、刺突紋が施された壺という内容である。第5次調査と比較すると、こちらの方が時間幅をもっていると思われ、南溝手・窪木縄年ではⅢ期に近い内容といえる。第6次調査では、削出突帯は出土していないが、西に約十数m離れた第4次調査地点には削出突帯も含まれている。第6次調査の堆積は第4次調査地点から延びる堆積で一連のものである。このように、両調査を比較すると、両調査、両地点の間には、若干の時間差が認められ、第6次調査の方が第4章第50図19や20のような新相を示す資料を含んでいる。次に県内の突帯文土器資料を整理し、目久美遺跡の突帯文土器の時間的位置について検討し、遠賀川系土器と突帯文土器の在り方について考えてみたい。

2. 県下の突帯文土器（第1図）

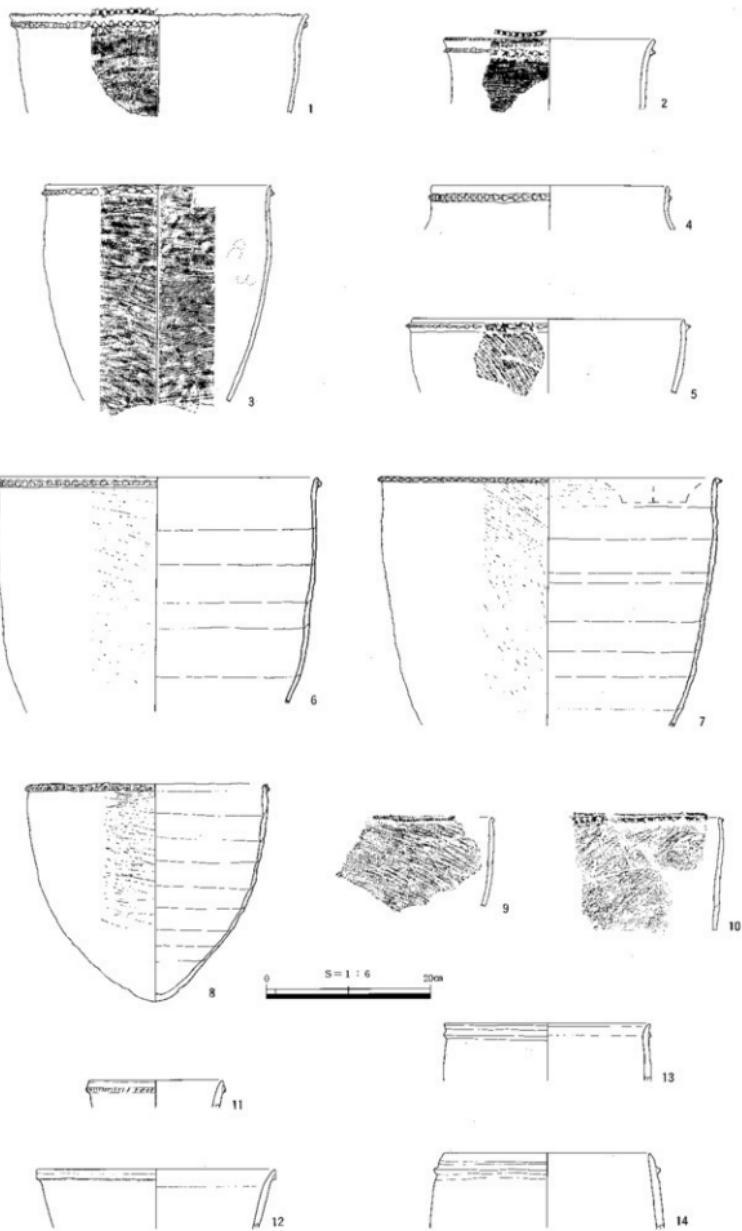
近年、中部瀬戸内地方や近畿地方では、資料の増加に伴い、既存の縄年の細分が進められている。鳥取県下でも、発掘調査の増加より比較的良好な資料が徐々に蓄積されてきており、周辺地域の成果⁷⁾を参考にすることで、県下の突帯文土器の変遷を大枠としてたどることも可能と思われる。ここでは、遺跡・遺構単位で資料をとりあげ、各土器群の時間的な位置づけを考える。しかし、壺と浅鉢のセット関係を窺うことのできる一括資料ではなく、深鉢にても全形を復元できる資料は依然少ない。以下、壺の口縁部にみられる属性から⁸⁾、当該地域の突帯文土器を4期に大別し概略したい。

[突帯文Ⅰ期]

近畿地方の滋賀里Ⅳ式、中部瀬戸内の前池式に相当する段階である。Ⅰ期のまとまった資料は少ない。あえてあげるならば桂見遺跡自然河川01出土資料である⁹⁾。土器の特徴は、口縁端部は面取りされ、さらに刻目が施される。刻目突帯が口縁端部から下がった位置にめぐる。また、刻目はD字やO字状にしっかりと施される。器形は第1図1や2のように緩やかに湾曲する。調整は二枚貝条痕が主体を占める。また、晩期中葉から継続する砲弾形の粗製深鉢が伴う。

[突帯文Ⅱ期]

近畿地方の船橋式、中部瀬戸内の沢田式に相当する段階である。一括性の認められる資料はないが、桂見遺跡包含層資料にⅡ期相当の資料が含まれている¹⁰⁾。砂州上の堆積に包含されていた資料で、一括性にはやや難がある。このうち、Ⅰ期、Ⅲ期に相当する資料を差引くことで抽出できるのが、以下の特徴をもつ一群である。特徴は、口縁端部はほとんど面取りされず、刻目も施されない。刻目突帯が口縁端部から下がった位置にめぐり、刻目はD字やO字であるが、Ⅰ期にくらべるとやや軽く施されたものが多いように思われる（第1図3、4）。器面の調整は、粗い擦痕の残るナデ調整が主体的になり、この段階から砲弾形の突帯文深鉢があらわれる（第1図5）。



第1図 鳥取県内出土の突帯文土器

周辺地域では、二条突帯文土器が出現する段階であるが、鳥取県下では、桂見遺跡包含層資料に客体的なものが1点あるにすぎない。この他に、西伯郡淀江町井出跨遺跡¹¹⁾にも当該期の資料が認められる。

[突帯文Ⅲ期]

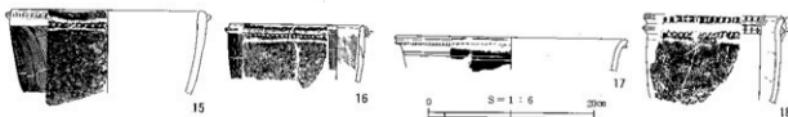
近畿地方の長原式に相当する段階である。古見遺跡出土資料が当該期に相当し、包含層出土ながら一括りの認められる良好な資料である¹²⁾。古海遺跡資料では、口縁端部の調整と突帯の貼りつけが同時に処理されるようになる(第1図6~10)。D字やO字状の刻みも、さらに浅く小さくなり、V字状の刻目が増加する(6~8, 10)。また、無刻目突帯が認められるようになる(9)。器面の調整は、粗い擦痕の残るナデ調整が主体的である。器形は泡弾型の深鉢が主体を占めるようになる。近畿地方の長原式では、二条突帯が主流となるが、鳥取県下では、二条突帯文土器は1%以下である。また、古海遺跡に二条突帯は認められなかった。この他に、西伯郡溝口町三部野遺跡¹³⁾、岸本町下ノ原遺跡¹⁴⁾に当該期の資料が認められる。

[弥生時代前期]

かつて、土井珠美氏が検討した長瀬高浜遺跡、イキス遺跡の突帯文土器が当該期に相当する。突帯文系土器でもいうべきか。長瀬高浜遺跡の場合、突帯文系土器の多くが包含層からの出土であり、遠賀川系土器をみても時間幅をもつ。包含層出土の遠賀川系土器は南溝手・窪木Ⅱ~Ⅲ期に相当する。イキス遺跡の遠賀川系土器は南溝手・窪木Ⅱ期を中心とした資料群と考えられ、長瀬高浜遺跡とともに大枠では前期中葉に相当する。

一方、突帯文系土器の形態的特徴にみる両遺跡の違いは著しい。長瀬高浜遺跡では、如意形口縁との折衷形や砲弾型で肥厚気味の口縁に突帯がめぐるもののが主体的に認められる。刻目突帯も多く認められ、器面調整にも刷毛目工具が用いられている場合がある(第2図)。イキス遺跡では、無刻目突帯文土器が卓越し98%を占める。目久美遺跡資料でみた無刻目突帯文土器I~IV類が認められる(第1図11~14)。

仮にこれらを長瀬高浜タイプ、イキスタイプと仮称しておく。前者は遠賀川系土器の影響を強く受けた土器で、後者は突帯文土器Ⅲ期から系譜のたどれる一群である¹⁵⁾。そして、長瀬高浜遺跡では後者がほとんど認められないし、イキス遺跡では前者が認められない。小稿では、これ以上、この問題を検討する余裕がないが、当該地域における弥生文化成立期における集落像を考えるうえで2つの突帯文系土器は興味深い事例である。



第2図 鳥取県内出土の突帯文土器2

4. 目久美遺跡出土突帯文土器の時間的位置

先に、第5次調査、第6次調査で出土した突帯文土器を刻目の有無で大別し、さらにそれぞれをI~IV類に4組分した。ここでは、分類した各類の時間的位置についてまとめておく。

先ず、刻目突帯文土器I・II類は縄文時代晩期後葉に位置づけられる。刻目突帯文土器I類にみる口縁端部から下がった位置に突帯がつくという特徴は突帯文Ⅱ期に一般的な様相である。刻目突帯文土器II類は口縁端部の調整と突帯の貼り付けが同時に処理されていることから突帯文Ⅲ期に位置づけられる。ただし、ここで示したのは型式学的にみた時間的前後関係であって、目久美遺跡では刻目突帯文土器I・II類が時間的に分離できるものか否かはわからない。

刻目突帯文土器III・IV類については、II類よりも型式学的には後出の一群である。口縁端部から下がった位置に突帯がつくことを重視するならば、突帯文Ⅱ期とⅢ期の過渡的な段階と考えることもできる。しかし、II・III

期の資料が混在する桂見遺跡包含層資料やⅢ期の単純資料である古海遺跡出土資料にこれらが認められないことから、Ⅱ～Ⅲ期の過渡的な土器を考えるよりも、Ⅲ期よりも後出的な土器と考え方が妥当である。

無刻目突帯文土器については、イキス遺跡の状況を参考にすると、そのほとんどが弥生時代前期中葉のものと考えられる。ただし、Ⅲ期・古海遺跡の段階で既に無刻目突帯が出現しており、口縁縛部に接して突帯がめぐる無刻目突帯文土器Ⅰ類については、突帯文Ⅲ期にまでさかのばるものもあるだろう。一方、無刻目突帯文土器Ⅱ～Ⅳ類については、そのほとんどが弥生時代前期に位置づけられる。

また、遠賀川系土器で見る限り目久美遺跡第5次・6次調査で出土した資料には、若干の時間差が認められる。これは、包含層内における偶然の産物ではなく、地点を異にした出土状況に由来する型式差と考えている¹⁶⁾。それでは、これらに伴うと思われる突帯文系土器についても時間的前後関係が看取できるのだろうか。

ここでは、縄文時代晩期末にまでさかのばる可能性のある刻目突帯文土器Ⅰ・Ⅱ類は除き、第5次調査と第6次調査とを比較した場合、以下の点に差異が見いだせる。第6次調査資料には刻目突帯文土器が含まれないこと、無刻目突帯文Ⅲ・Ⅳ類がみとめられないことである。このような差を、特に刻目突帯の有無を時間差と考えるならば、遠賀川系土器で第5次と第6次資料に時間差が認められたように、無刻目突帯が主体的な第6次調査資料の方が一見、新相を示しているかのように思われる。

しかし、第6次調査地点は第5次調査地点よりも山裾から離れた場所で、第5次調査に比べて同じ2次堆積であっても条件が悪い。また、資料の数量的な問題もある。そこで、第6次調査に近接し、より山裾に位置し、包含層を一連の流れで捉えることのできる第4次調査の資料を含め、資料を比較してみたい。

第4次調査では、削出突帯の施された壺なども出土しており、時間幅をもつ中でも第5次調査よりも新しい様相を呈している。しかし、第4次調査で出土した突帯文系土器の内訳は、第6次調査資料ほど無刻目突帯が主体的でないどころか、無刻目突帯文土器の増加を重視するのであれば、第4次調査のほうが刻目突帯文の比率は大きいのである。つまり、遠賀川系土器に認められる差ほどに、突帯文系土器からは時間的前後関係を読みとることはできない。このことについては、今後、遺構内一括資料をもって検討すべき課題であろう。

5. 突帯文系土器と遠賀川系土器

鳥取県下における晩期末から弥生時代前期にかけての突帯文土器に特徴的なのは、突帯に刻目を施さない無刻目突帯文土器が増加することである。Ⅲ期の古海遺跡、弥生時代前期のイキス遺跡の突帯文土器を焼について比較した場合、古海遺跡18%に対し、イキス遺跡は98%を無刻目突帯文土器が占める。古海遺跡からイキス遺跡の突帯文土器という変遷の連続性については、なお資料の増加をまって慎重に検討する必要性がある。しかし、無刻目突帯文土器の増加に着目するならば、弥生文化の受容およびその定着により、在地土器（突帯文土器）に現れた変化は劇的である。そして、弥生文化との接触により成立した無刻目突帯文土器は、既に弥生土器であり、突帯文系土器という方が妥当かもしれない¹⁷⁾。以下、弥生前期の器種組成に含まれる突帯文土器を突帯文系土器と称す。

第1表 突帯文土器（變形土器）における刻目突帯の比率

遺 跡 名	刻 目	無刻目	総点数
古 海 遺 跡	8 2 %	1 8 %	5 0 点
イ キ ス 遺 跡	2 %	9 8 %	5 7 点
目 久 美 5 次	1 1 %	8 9 %	9 4 点
目 久 美 6 次	0 %	1 0 0 %	1 3 点
目 久 美 4 次	3 7 %	6 3 %	2 4 点

目久美遺跡の場合、刻目突帯文土器Ⅲ・Ⅳ類、無刻目突帯文土器Ⅰ～Ⅳ類について弥生前期の遠賀川系土器に伴う可能性を指摘した。この場合、刻目突帯文土器と無刻目突帯文土器の比率は、第5次調査で刻目11%、無刻目89%、第6次調査で無刻目100%となる¹⁸⁾。ほぼ同時期と考えられるイキス遺跡での突帯文系土器の在り方と大差ない。一方、長瀬タイプの土器は両調査でもほとんど出土していない。如意形口縁との折衷形の第16闇119や口縁端部を面取りする117をわずかに長瀬タイプとしてあげができる程度である。この点でも、イキス遺跡との共通性が指摘できる。

また、目久美遺跡の突帯文系土器と遠賀川系土器を製作技法で比較してみたい。接合痕が観察できるものから判断すると、遠賀川系土器が外傾接合であるのに対し、突帯文系土器は内傾接合を基本とする。調整においては、遠賀川系土器は刷毛目なしナデを基本とするが、突帯文系土器は粗い擦痕の残るナデまたはナデ調整を基本とする。このように、製作技法上の共通点はほとんど見いだせない。これに対し、長瀬高浜遺跡の突帯文土器には刷毛目、外傾接合が認められる。

そして、イキスタイルの突帯文土器を有する遺跡は、目久美第5次・6次調査に限らず、島根県北講武氏元遺跡¹⁹⁾でもイキス・目久美同様の突帯文系土器が半数を占めている。このような状況こそが、突帯文土器から系譜のたどれるイキスタイルの突帯文系土器を有する遺跡における特徴であり、山陰地方の地域色のひとつと考えることができる。そして、突帯文系土器に繩文的な伝統を色濃く残す遺跡と、長瀬高浜遺跡のように刷毛目調整を取り入れた突帯文系土器が遠賀川系土器に伴う遺跡の存在は、山陰地方における弥生文化の受容を考えるうえで興味深い。

ところで、突帯文系土器はいつ頃まで土器組成の中に認められるのだろうか。貼付突帯や多条沈線、口縁逆し字形の甕が出現する前期後葉になると、西伯耆では小規模な環濠集落が認められるようになる。西伯郡淀江町今津岸の上遺跡、西伯町清水谷遺跡等の環濠内からは、前期後葉の土器が多量に出土している。しかし、これらに伴う突帯文系土器は報告されていない。のことから、前期後葉には突帯文系土器は当該地域から姿を消すことが想定できる。

また、目久美遺跡第5次・6次調査では、遠賀川系土器や突帯文系土器に伴って粗製土器が出土している。晩期中葉などにみられる深鉢形上器と考えることもできるが、器形的に異なるし、晩期中葉に比定できるような浅鉢なども認められない。また、土器の調整などが、突帯文系土器と共通することから、粗製土器についても弥生時代前期中葉における繩文系土器のバリエーションとして理解したい。

6. おわりに

鳥取県下のまとまった弥生前期の資料として現状で古く位置づけることのできるは、長瀬高浜遺跡SI71、SI156、イキス遺跡、目久美遺跡第5次調査資料等である。これらに先行する資料群について島根県に目を移すと、山陰最古の弥生前期土器として古くより知られる遺跡に島根県大社町原山遺跡がある。出雲原山式土器として借定される一群は、板付I式に相当する古相を示すものを含むという。仮に、この一群を古くみるなら、中部瀬戸内では、岡山県津島遺跡とほぼ併行関係にある。そして、これらは、小稿で設定した突帯文Ⅲ期と併行関係にあるだろう。

中部瀬戸内では長原式に併行する段階の突帯文土器は認められていない。しかし、島根県東部では、原山遺跡と同時に、突帯文Ⅲ期の土器を使用する遺跡が存在する²⁰⁾。そして、興味深いのは、原山遺跡出土資料には、これまで突帯文土器が報告されていないことである。今後の資料の増加を待つ必要があるが、このことを現状で積極的に評価するなら、原山遺跡は在地の要素をほとんどない外來的要素の強い遺跡で、山陰地方において早い段階に点的に存在した弥生集落であることを示しているのかもしれない。

また、長瀬高浜遺跡とイキス・目久美遺跡のような異なる系統の突帯文系土器の存在を考慮するなら、山陰地方東部における出現期の弥生集落に、異なる社会的背景が存在したことを想定することも可能である。しかし、土器にあらわれた一側面を強調するだけで説明できる問題ではなく、今後、遺物・遺構も含め多角的な検討を積

み重ねていかねばならない。

山陰地方における縄文時代晩期から弥生時代前期にかかる問題の多くは未整理の状態である。また、鳥取県下においては前期弥生土器の編年について見直しの時期にきているように思われる。個々の資料がどこに位置づけられるかではなく、遺構単位もしくは遺跡単位のまとまりとして資料を見直す必要があろう。小篠では、目久美遺跡出土資料を中心に鳥取県下の資料について私見を述べたが、今後は、鳥取、島根という枠にとらわれるのでなく、山陰という地域で広く当該期の問題を検討していくなければならないことを痛感する。

最後になりますが、資料の実見にさいし、赤沢秀則氏、谷口恭子氏、杉村和祐氏、根鈴輝雄氏のお世話になりました。また、平川誠氏には古海遺跡について御教示いただきました。記して感謝申し上げます。 (演田)

- 1) 清水真一 1992 「因幡・伯耆」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社
- 2) 野島珠美 1983 「第Ⅲ章遺物第1節遺構外出土の縄文土器・弥生土器」『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅳ』鳥取県教育文化財団
- 3) 土井珠美 1989 「6. 弥生時代の遺物」『北面遺跡群イキス遺跡発掘調査報告書』倉吉市教育委員会
- 3) 弥生土器と突帯文土器の共伴という問題を考えるとき、弥生化した突帯文土器を弥生土器と共伴したとして扱うのは不適当である。中村健二1993「近畿地方における凸帯文土器資料の現状」「突帯土器から条痕文土器へ—伊勢湾周辺地域における縄文文化の解体と弥生文化の始まりー」。そのためにも、鳥取県下では突帯文土器單純期の様相を把握するとともに、弥生化した突帯文土器を理解する必要がある。
- 4) 一方では、不正形な甕を壺と誤認している可能性もある。
- 5) ここでは、縄文土器の可能性がある第4章第49図11をのぞいた。
- 6) 久保恵里子 1997 「第3節 弥生時代前期の土器について」『塙木遺跡Ⅰ 岡山県立大学建設に伴う発掘Ⅲ』岡山県教育委員会
- 7) 家根祥多 1981 「近畿地方の土器」『縄文時代の研究』4 雄山閣
- 平井 聰 1988 「岡山における縄文晚期突出帯文土器の様相」「古代吉備」第10集
- 8) 本節では、家根祥多氏が近畿地方の突帯文土器研究で示した型式学的変遷を大筋での基本とする。
- 9) 牧本哲輝はか 1996 『桂見遺跡－八ヶ削地区・堤谷東地区・堤谷西地区－』鳥取教育文化財団
- 10) 9同じ
- 11) 太田正康はか 1993 『井手跡遺跡』鳥取県教育文化財団
- 12) 平川誠 1981 『古海遺跡発掘調査概報』鳥取市教育委員会
- 13) 益田見はか 1990 『三部野遺跡発掘調査報告書』溝口町教育委員会
- 14) 赤見高好 1997 『岸本下ノ原遺跡発掘調査報告書』岸本町教育委員会
- 15) 突帯文Ⅲ期の土器からイキスタイルの間に1型式程度のヒアタスが存在しているものと思われる。しかし、皿型イキスタイルの間に越敷山遺跡群土坑資料を介在させることで、ヒアタスが少しばかり埋まるものと考えている。このような突帯文土器の変遷については別の機会にあらためて整理を試みたい。
- 16) 本来、第5次調査地東側には小丘陵があったことが過去の航空写真などに記録されている。集落が丘陵および丘陵裾部等の微高地に営まれていたであろうことは想像に難くない。第5次、6次における弥生土器は、同じ黒色粘土層から出土しているが、ここに包含されている遺物は、第5次調査地点ではかつてあった小丘陵付近からの2次堆積、第6次調査地点では独立小丘陵足尾山側からの2次堆積を中心としていると思われる。のことから、両調査地点の出土遺物に時間差が認められることも、偶然ではなく、地点差として理解したい。

- 17) 無刻目突帯文に限るわけではないことを断っておく。刻目突帯文土器であっても、刻目突帯文土器Ⅱ類・Ⅲ類については突帯文系土器と考える。今後、調査時における出土状況をいかに把握するかも重要である。
- 18) ここでは縄文時代晩期・突帯文Ⅱ・Ⅲ期にさかのばる可能性のある刻目突帯文土器Ⅰ・Ⅱ類を除いている。
- 19) 赤沢秀則 1989 「講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書4 北説武氏元遺跡」鹿島町教育委員会
- 20) 島根県東部では、松江市石台遺跡、タテチョウ遺跡、西川津遺跡などで突帯文Ⅲ期の資料が出土している。また、石台遺跡では、突帯文Ⅲ期の土坑から、耕作痕のある土器片が出土している。この土坑内一括資料には、遠賀川系土器は報告されていない。つまり、在地の突帯文土器を使用する集団においても、突帯文Ⅲ期には既に稻作が開始されていた可能性は十分に考えられる。

おわりに

2年間、ご支援いただいた多くの方々に、御礼を申し上げます。未熟な調査、拙い報告ではありますが、ここに調査報告書をまとめることができましたのは、多くの方々に支えられてきたからにほかなりません。

実のところ、調査を始めてから、それ以前にまして、しだいに低湿地遺跡を調査することの難しさを感じ始めました。洪水堆積をみて、なんと複雑な堆積だろうと戸惑う日々が続きました。幸運にも、徳岡隆夫先生をはじめとする自然科学関係の諸先生方からご協力を得て、目標としていた縄文層までの調査を何とか終えることができました。低地の遺跡調査において、地質学的検討から得ることのできる事実がいかに多いことか。その重要性を痛感しました。

そして、井上貴央先生には、ご多忙のところ、動物遺存体、石材について御教示していただきました。にもかかわらず、調査員の力量不足から、今回の報告では、目久美遺跡を考える上で重要な石器、石材について、十分な報告、検討を加えることができませんでした。この問題につきましては、今後の課題とさせていただくことをご容赦願えれば幸いです。

明記させていただかなければならぬ方は、幾多もいらっしゃいますが、紙面の都合によるご無礼を平にご容赦願います。また、最後になりますが、暑い夏、寒い冬にも発掘作業に従事してくださった作業員の方々、無理な注文も冗談ひとつで引き受けてくださった整理員の方々に感謝申し上げます。

1998年3月麗日



1 調査区全景（北東から）



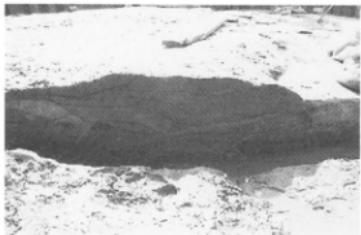
2 SD-04 (南西から)



3 SD-08 (北から)

第5次調査 1

図版2



1 水田1畦畔土層断面



2 組合せ平鎌出土状況



3 なすび形着柄出土状況



4 SD-02 掘出状況（北東から）



5 SD-03 掘出状況（南から）



6 SD-03 木製品出土状況（南西から）



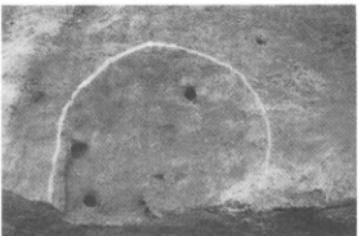
7 SD-03 木製品出土状況（南西から）



8 SD-03 木製品出土状況（北から）



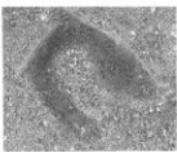
9 SD-03 木製品出土状況（北西から）



1 SK-01 (北から)



2 第2遺構面作業風景



3 足跡



4 足跡



6 近現代・用水路



5 近現代・井戸

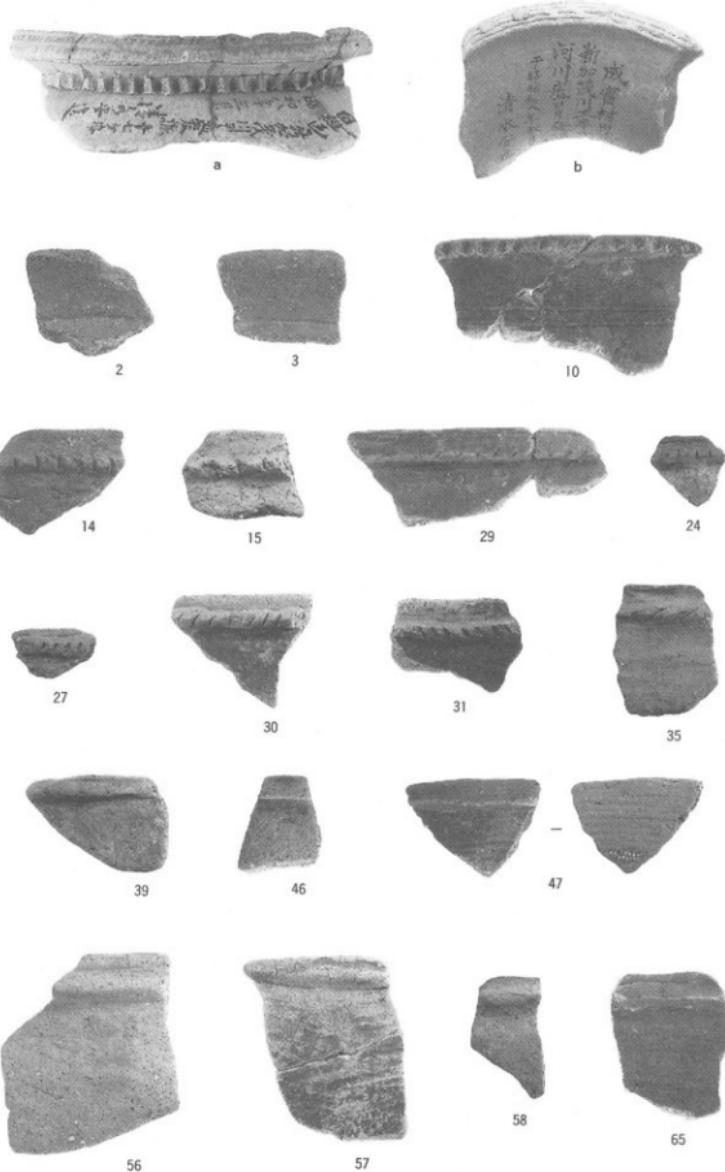


7 近現代・用水路

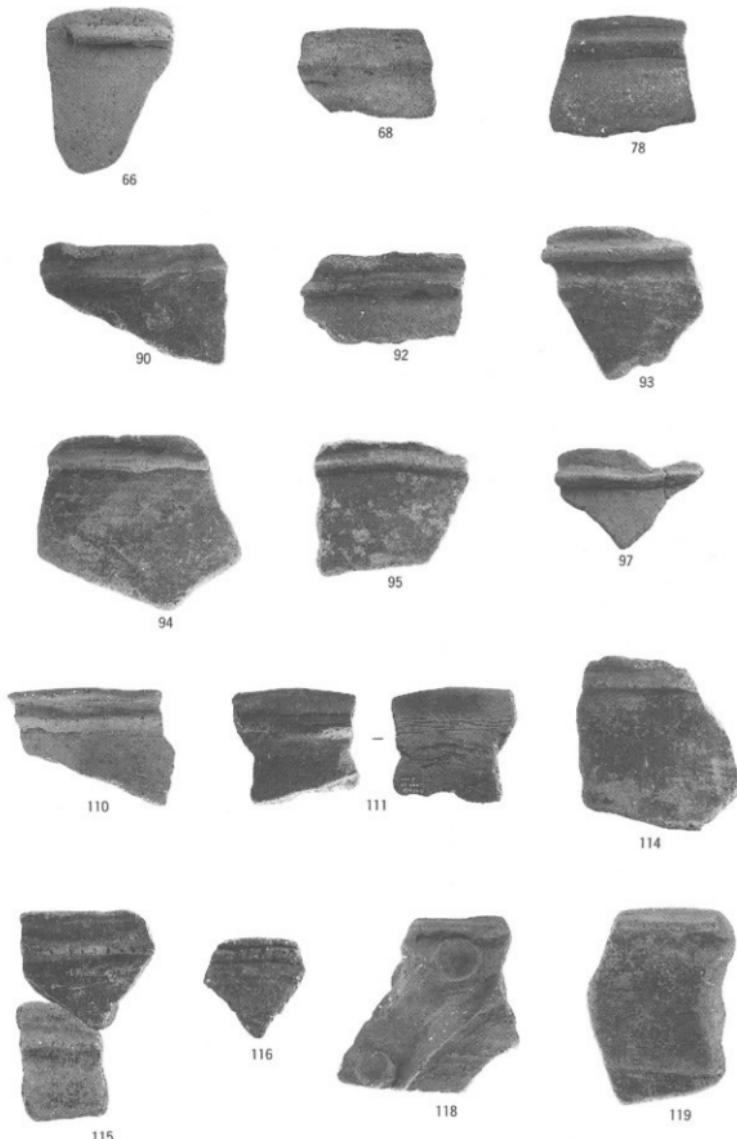


8 調査前 (南西から)

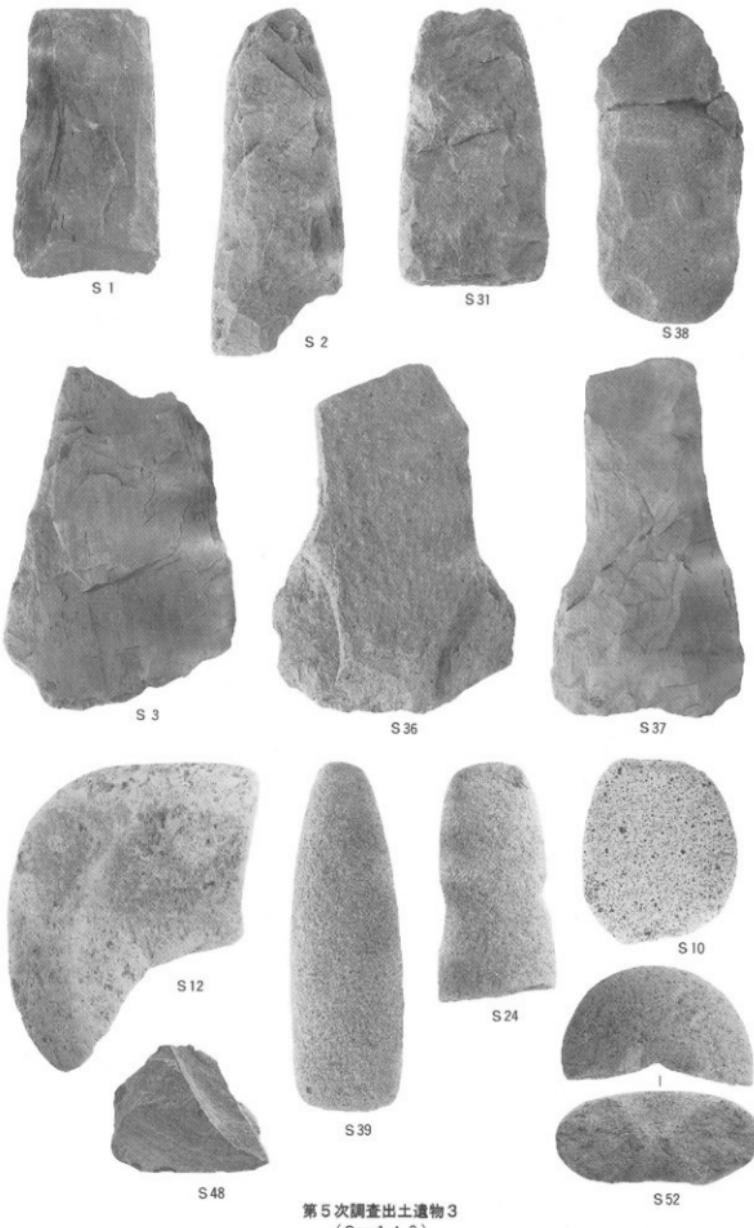
図版 4



第5次調査出土遺物 1
(S = 1 : 2)



第5次調査出土遺物2
(S=1:2)



第 5 次調査出土遺物 3
(S = 1 : 2)



第5次調査出土遺物4
(S=1:4)



122



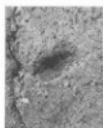
123



125



126



モミ痕模大写真



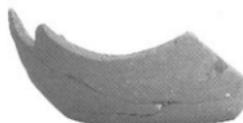
134



I



208



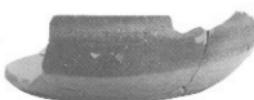
I



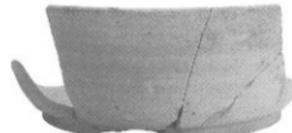
223



248



267



284

第5次調査出土遺物5

(122・123・125 S=1:4、その他 S=1:2)



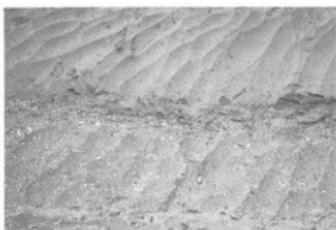
1 調査地と足尾山（北東から）



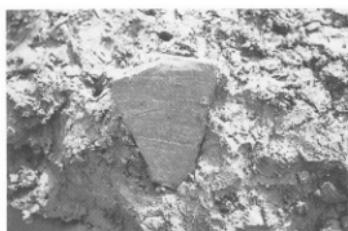
2 山裾に広がる住宅地（北から）



3 縄文層（海成層）発掘状況（北東から）



4 自然貝層



5 縄文層、縄文土器（2）出土状況



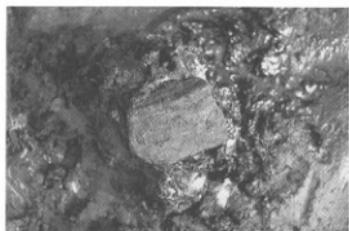
6 堀り下げ作業風景



7 弥生時代前期層（第13層）遺物出土状況



8 第13層ヤス（W 1）出土状況



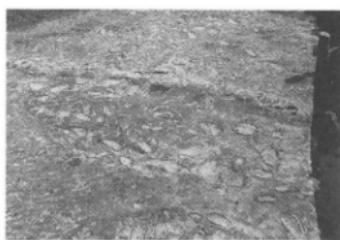
1 第13層出土突帯文土器 (25)



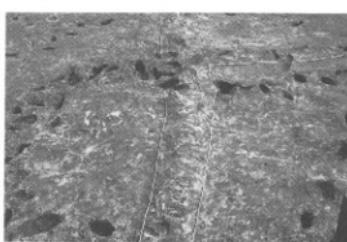
2 第13層出土遠賀川系土器 (6)



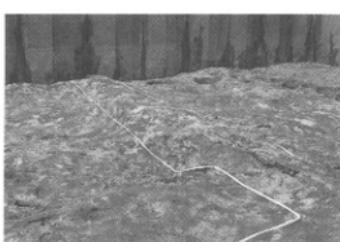
3 第12層出土木製品(W 6)出土状況



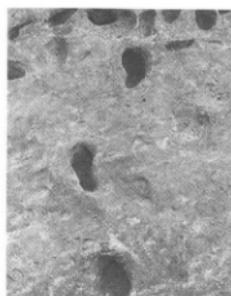
4 水田3棟出状況 (北西から)



5 水田3・畦畔と足跡 (南西から)



6 水田3・畦畔 (北東から)



7 水田3・足跡 (南西から)



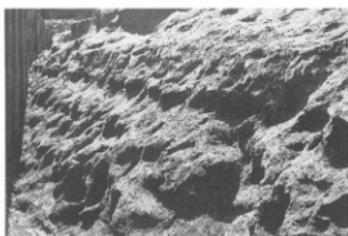
8 水田3・畦畔土層断面 (北東から)



1 SD-04 検出状況（北東から）



2 SD-04 全景（北東から）



3 SD-04 西壁（東から）



5 SD-04 完振状況（南から）



4 SD-04 東壁（西から）



7 SD-04 内土器(W9)
出土状況（東から）



6 SD-04 内遺物出土状況（東から）



8 SD-04 内土器(154)
出土状況（東から）



1 SD-01 (南から)



3 坑列 (北から)



2 SX-02 (南西から)



4 水田2 (東から)



6 SD-03検出状況 (北東から)



5 水田2内足跡



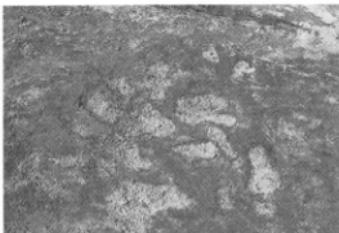
7 SD-03完掘状況 (北東から)



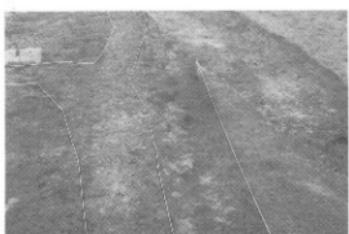
8 SD-03木製品(W18)出土状況 (東から)



1 SD-03 内足跡検出状況（東から）



2 SD-03 内足跡検出状況（東から）



3 水田1・畦畔とSD-01（北東から）



4 SD-01（南から）



5 SD-02 検出状況（南から）



6 SD-02 完掘出状況（南から）



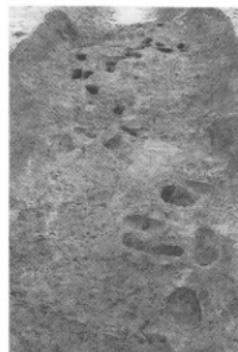
7 SD-02 土層断面（北から）



8 SD-02 木製品（W24）出土状況



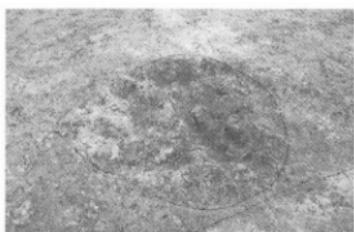
1 SD-02 足跡検出状況（北から）



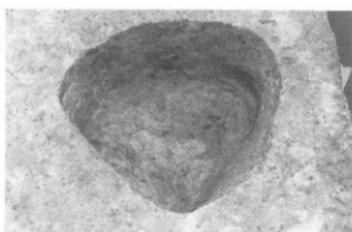
2 SD-02 足跡検出状況（北から）



3 SD-02 足跡



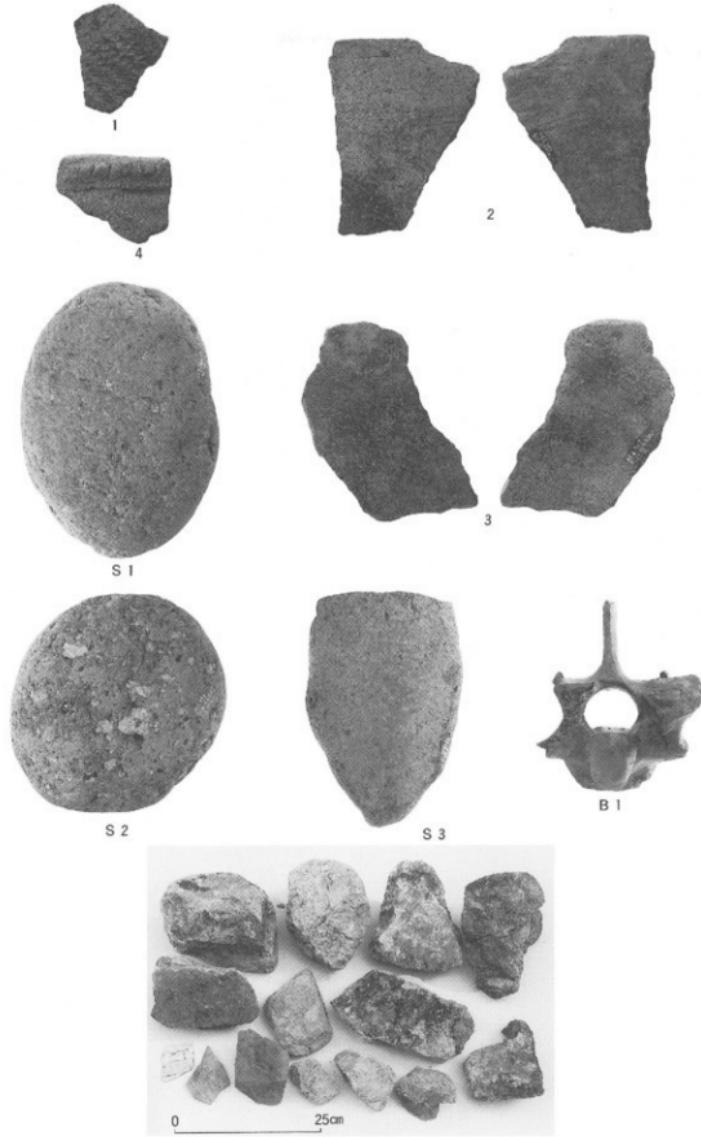
4 SK-01 検出状況（東から）



5 SK-01 検出状況（東から）



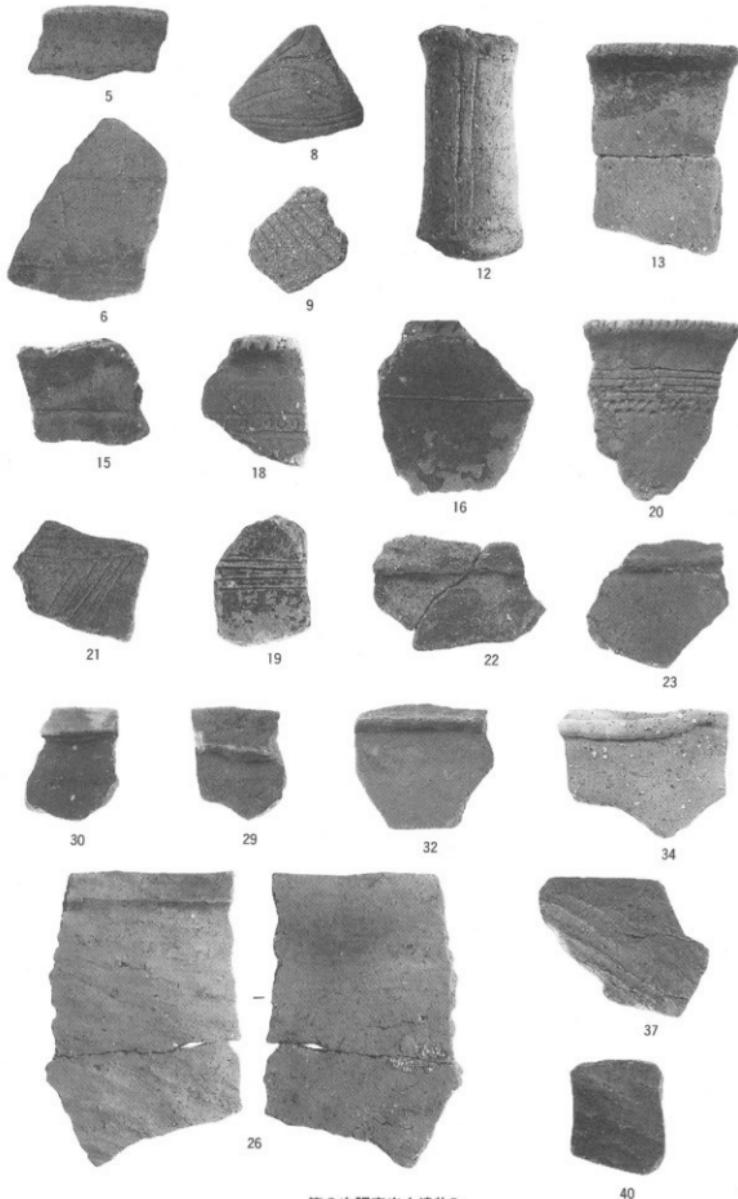
発掘調査参加者



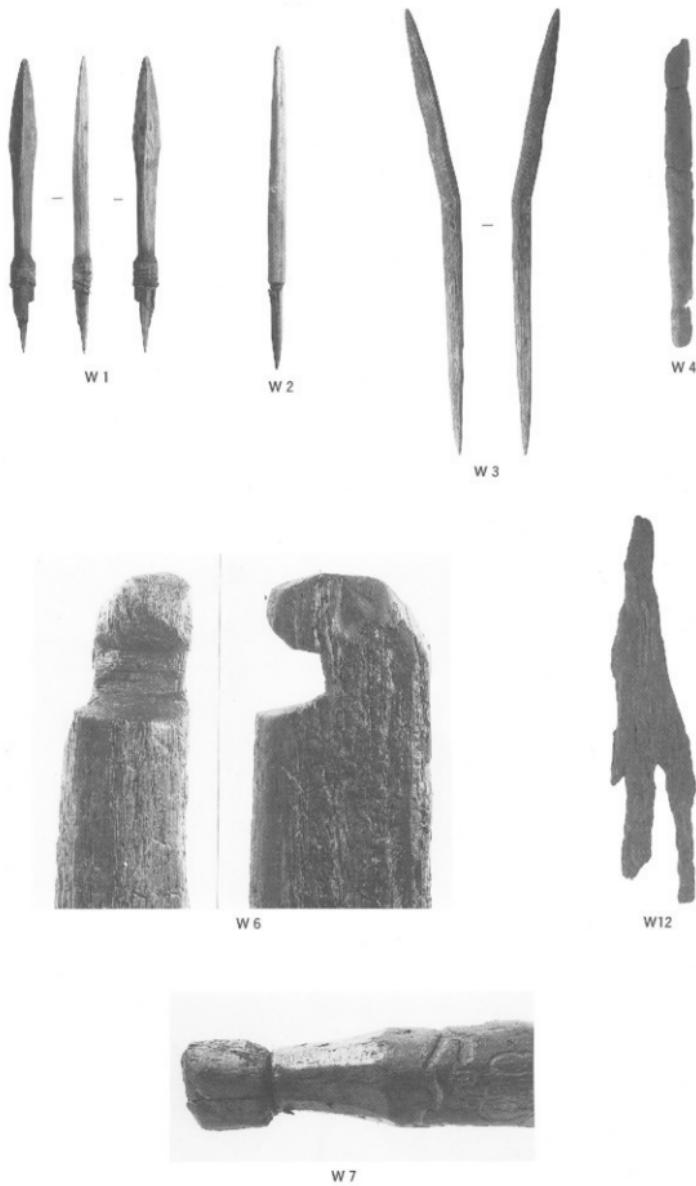
第14層 貝層上面出土の礫

第6次調査出土遺物1
(1~4、S1~S3、B1 S=1:2)

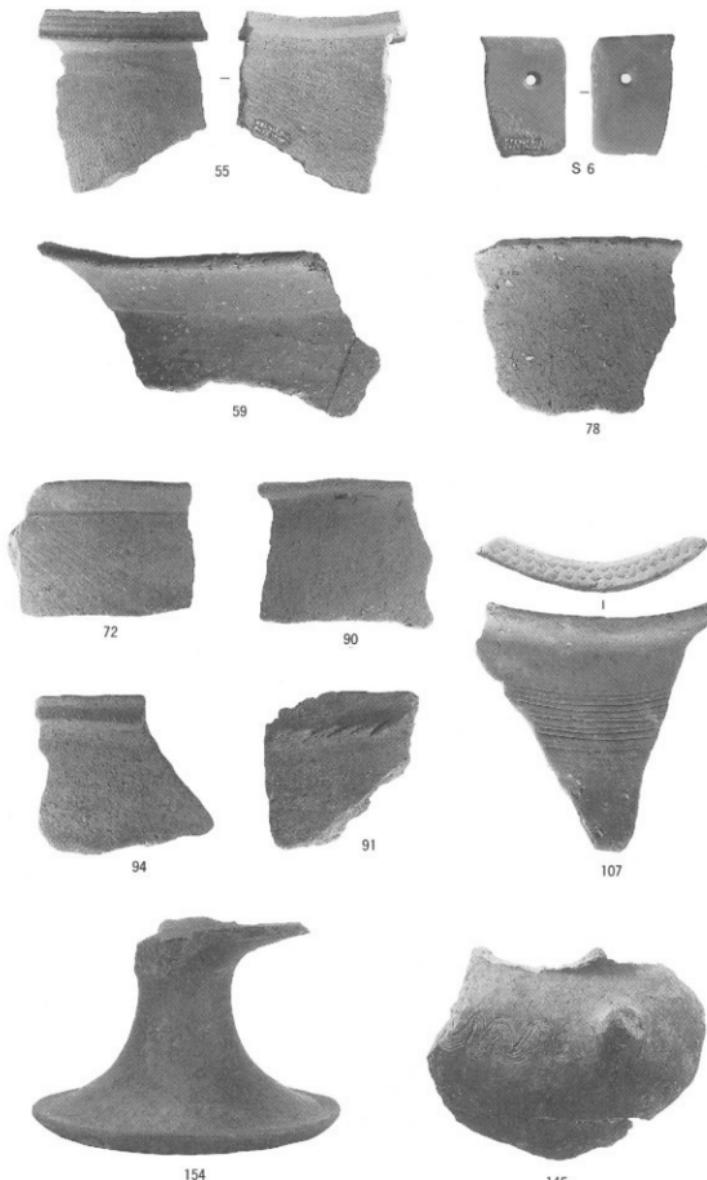
図版16



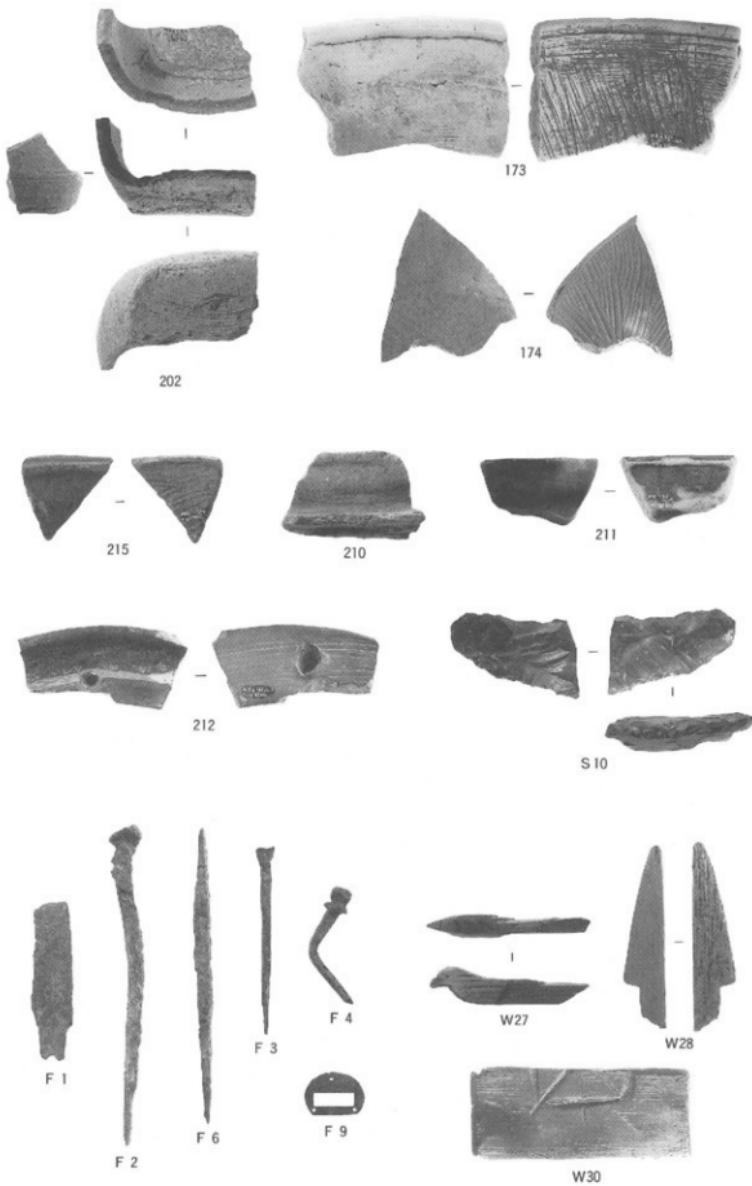
第6次調査出土遺物2
(S=1:2)



第6次調査出土遺物3
(W12 S=1:4、その他 S=1:2)

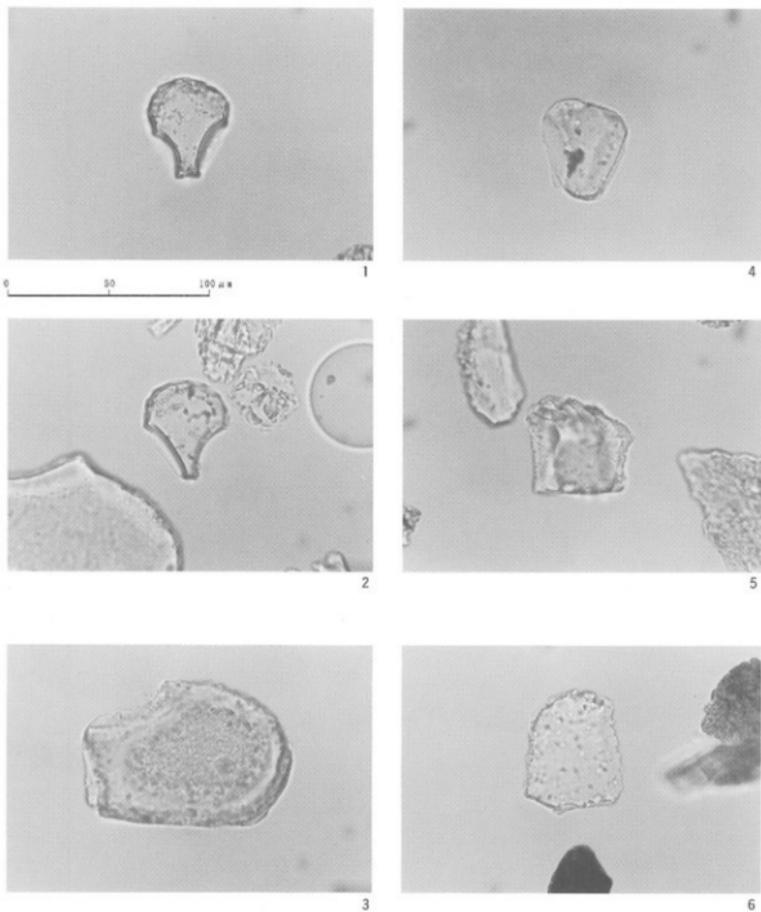


第6次調査出土遺物4
(S=1:2)

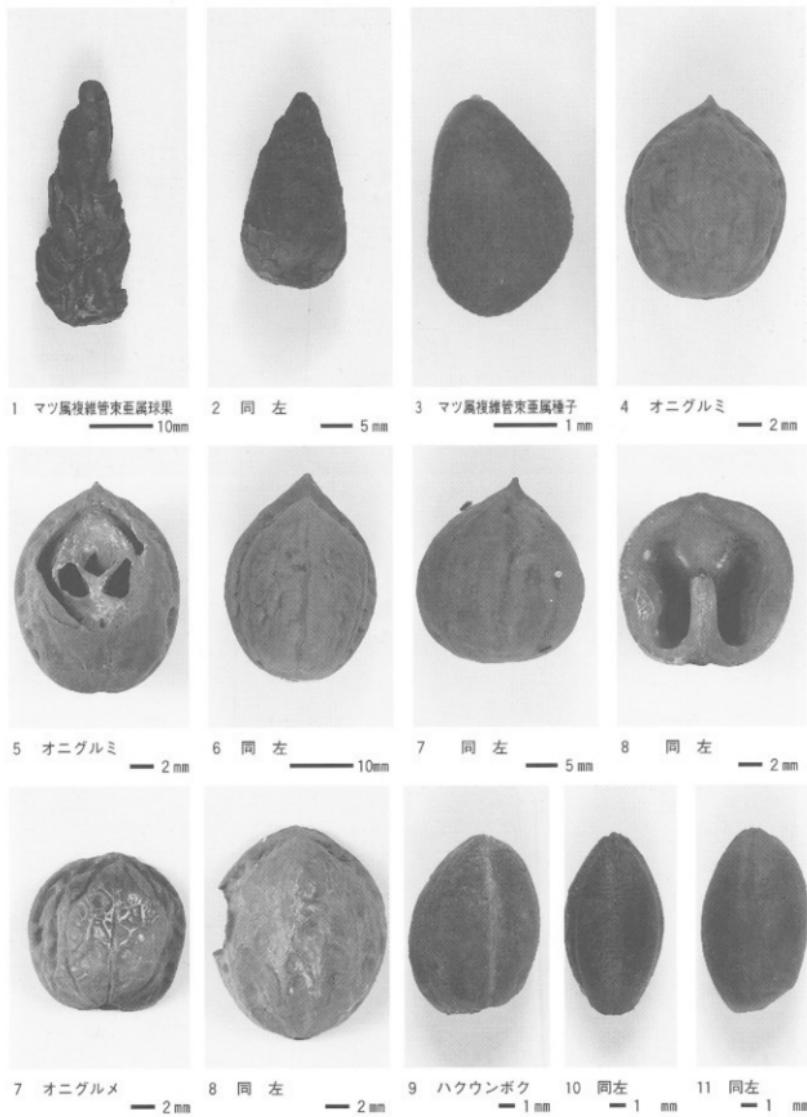


第6次調査出土遺物5
(S=1:2)

図版20



No	分類詳	地點
1	イネ科	B-1 12-1層
2	イネ科	B-10 13層
3	ヨシ属	B-10 13層
4	ウシクサ族 (ススキ属)	B-1 12-1層
5	タケ亜科 (ネザサ属)	B-1 11層
6	タケ亜科 (クマザサ属型)	B-10 12層

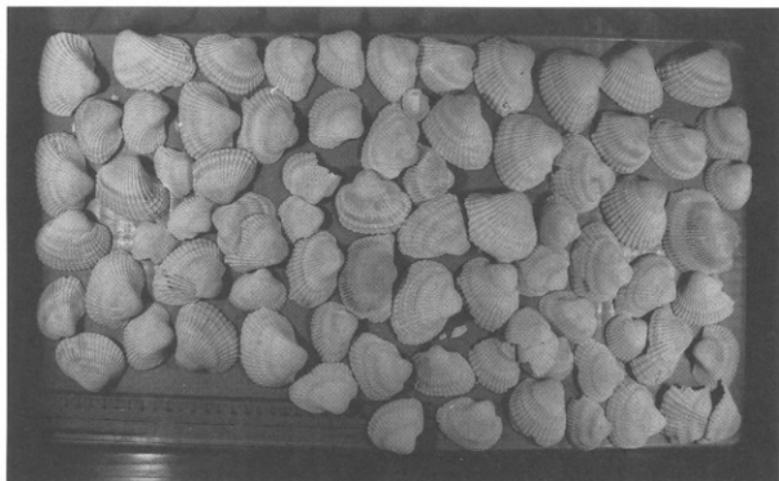


第6次調査出土種実写真



ハイガイ *Tegillarca granosa*

1

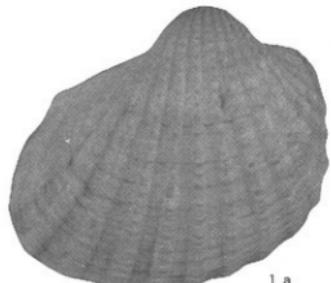
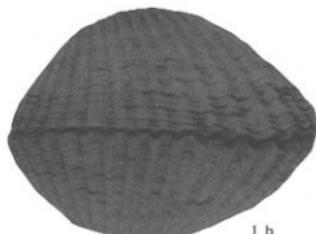
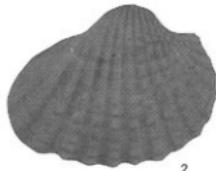
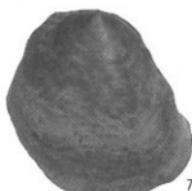


サルボウ *Scapharca subcrenata*

2



第6次調査 第14層から産出したハイガイ(上)とサルボウ(下)

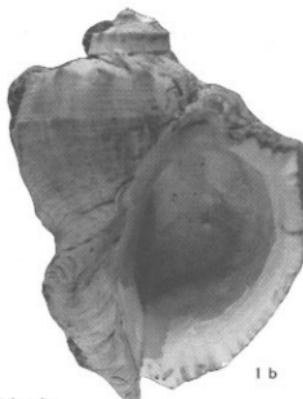
ハイガイ *Tegillarca granosa*ハイガイ *Tegillarca granosa*ハイガイ *Tegillarca granosa*サルボウ *Scapharca subcrenata*アサリ
Puditapes philippinarumヒメシラトリガイ
Macoma incongruaヒメシラトリガイ
Macoma incongruaナミマガシワガイ
Anomia chinensis

0 2 cm

イボウミニナ
Batillaria zonalisツメタガイ
Neuritella(Glassaud) ax/didymaミクリガイの
一種
Siphonalia sp.



1 a



1 b

サンゴの付着したアカニシ
Rapana uenosa



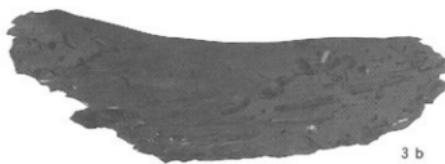
2

アカニシ *Rapana uenosa*



3 a

フナクイムシの棲管 *Teredo sp.*

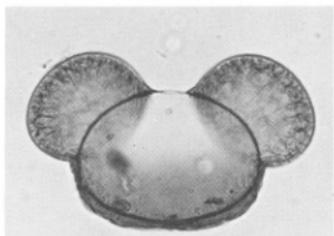


3 b

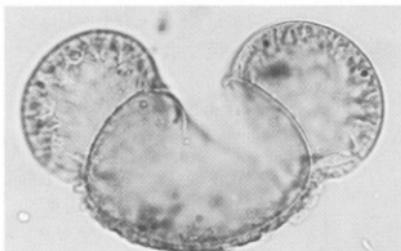
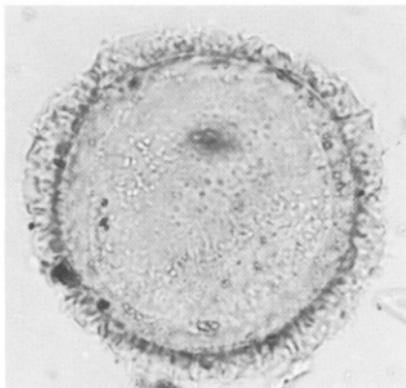
フナクイムシの棲管 *Teredo sp.*

0 5 cm

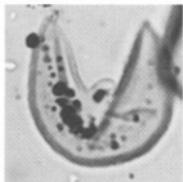
第6次調査 第14層から産出したサンゴが付着したアカニシ(1a、1b)、アカニシ(2)
およびフナクイムシの生痕が残る材(3a、3b)

1 モミ属 *Abies*.

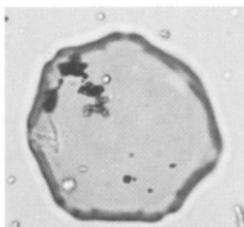
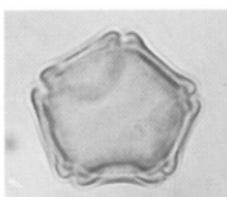
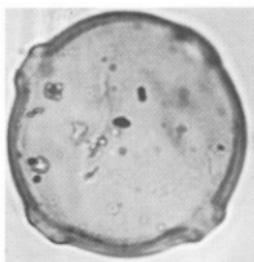
×380

2 マツ属 (複維管束亞属) *Pinus*(*Diploxylon*). ×7603 ツガ属 *Tsuga*.

×760

4 スギ属 *Cryptomeria*.

×760

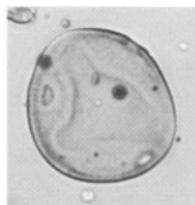
5 クルミ属—サワグルミ属
Juglans—Pterocarya. ×7606 ハンノキ属 *Alnus*, ×11007 クマシデ属—アサダ属
Carpinus—Ostrya, ×1100



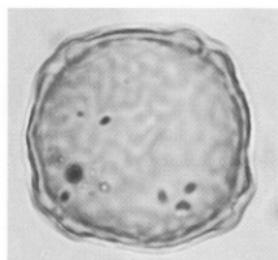
1 シイノキ属—マテバシイ属
Castanopsis—Parania,
X1100



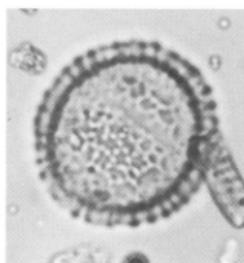
2 ブナ属 *Fagus*, X1100



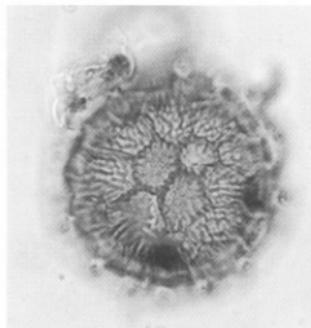
3 ムクノキ属—エノキ属
Aphananthe—Celtis,
X760



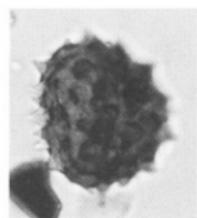
4 ニレ属—ケヤキ属
Ulmus—Zelkova,
X1100



5 モクセイ科 *Oleaceae*, X1100



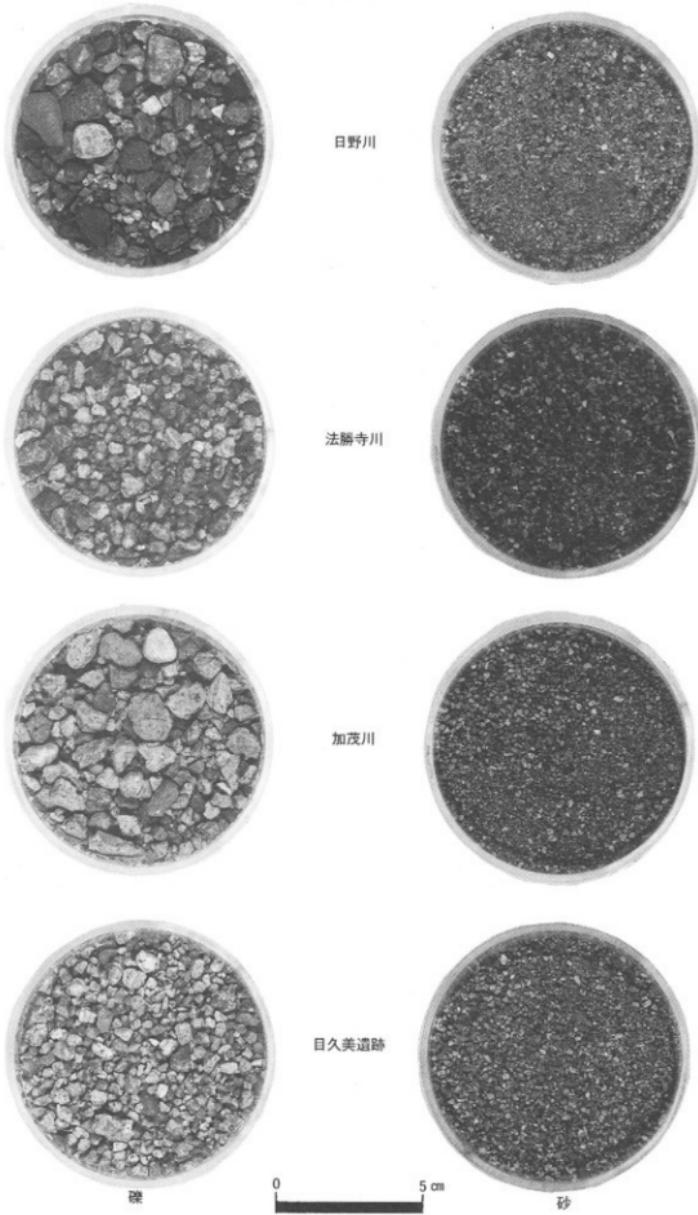
6 タデ属 *Persicaria*, X760



7 キク亜科
Carduoideae X760



8 ヨモギ属 *Artemisia*,
X1100



第6次調査 溝状遺構を埋積する砂と日野川、法勝寺川、加茂川の現河床の砂との比較

報告書抄録

ふりがな	めぐみいせき V・VI							
書名	目久美遺跡 V・VI							
副書名	都市計画道路車尾日久美町線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	(財)米子市教育文化事業団発掘調査報告書							
シリーズ番号	25							
編著者名	濱田竜彦 平木裕子 佐伯純也							
編集機関	(財)米子市教育文化事業団埋蔵文化財調査室							
所在地	〒683-0822 鳥取県米子市中町20 TEL(0859)22-7209							
発行年月日	1998年3月31日							
所在遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
目久美遺跡	鳥取県米子市 目久美町	31202	2-13	35°25'14"	133°21'10"	199609 199702 199704 199711	758m ² 840m ²	道路建設 に伴う 事前調査
所在遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項
目久美遺跡	集落跡	縄文時代 近世	水路、土坑、水田ほか			縄文土器、弥生土器、 土師器、須恵器、石器、 木器、鉄器、銅鏡ほか		

(財)米子市教育文化事業団文化財発掘調査報告書 25

目久美遺跡 V・VI

1998年3月

編集・発行 財團法人米子市教育文化事業団

〒683-0822 烏取県米子市中町20

印 刷 (有)米子プリント社